
死者たちは暁の空に舞う

神無森 皓

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

死者たちは暁の空に舞う

【Nコード】

N9426Q

【作者名】

神無森 皓

【あらすじ】

この世に蘇らされた（もと）白骨死体、レイト。彼を蘇らせたのは幼女の外見をした死霊術師ティアだった。「もとの白骨死体に戻りたい？」と半ば脅される形で、彼女の旅に同行することになったレイトだが、彼女には様々な秘密があり……

ちびっこ死霊術師と、生前の記憶を失った死者が向かう旅の果てにあるものは？

あちこち黒かったりグロかったりする感じのファンタジーです。

プロローグ（前書き）

開幕早々ですが、ちょっとグロめの描写が含まれております。そういうものが苦手な方はお気をつけ下さい。

ブローグ

そこにあつたのは、一体の死体だった。

肉も皮膚も完全にこそげ落ち、人相もわからなくなった白骨死体だ。うつすら黄色みを帯びた灰色の骨が、黒々とした土の上に人の形に並べられている。

しかし、それはただの死体ではなかった。

——より正確に表現するのであれば、ある一時を境にただの死体ではなくなった。

土の上に丁寧に並べられた骨が、それ自体意志を持ったかのようにずるりと互いを引き寄せる。

骨と骨とを引き寄せているのは、半透明の結合組織だ。

正確な角度で骨同士が接合すると、それは白く固まって軟骨と腱になる。

そこから爆発的な勢いで広がり、骨の表面を覆ったのは神経と血管。同時に肋骨の奥に臓器が形成され、腹膜と筋肉がそれらをやりわらかく包みこむ。

筋肉の間から這い出た血管と神経は細かく枝分かれし、身体の表面を覆っていく。むき出しの血管の上に、さらに広がる皮下組織。その上に真皮と表皮が形成され、ようやく死体の変化は止まる。

すでに、それは『白骨』死体とは呼べなくなっていたが――

冷たい土の上に横たわっているのは、息をしていないこと以外は生きている人間とほとんど変わらない姿の男性だった。

年齢は二十代半ばほどか――均整の取れた身体つきと、引き締まった男性的な顔立ち。

首筋に軽くかかる長さの髪は、周囲の土とほとんど同化して見える漆黒。

仰向けに横たわった男性の身体には傷一つなく、その様子はただ眠っているだけのようにも見えた。

その身体の奥で、止まっていた心臓がかすかに脈動を刻む。

最初は弱々しい動きだったが、次第に強く正確なリズムでそれは稼働を始める。同時に全身の血管に血液が送り出され、皮膚が艶と血色を取り戻す。

かすかに開かれた男性の唇に、小さく息が吸い込まれ――

「……！」

次の瞬間、男性は目を見開いた。

その目に映ったのは、一面塗り潰したかのような闇だった。

反射的に起き上がりかけて、男性は自分が布一枚身にまとっていない素裸であることを知る。

不審に思ったが、それ以上に無防備に横たわっていることへの抵抗感が強かった。

あたりに気を配りながら、ゆっくりと身を起こす。手探りで自分

の身体の上に、十分な空間があることを確かめながら起きあがり、彼は自分の身体に異常がないかをあらためて確認した。

どこにも怪我をしていないことはわかる。手足にも不自由なところはなく、拘束されている様子もおかしな痺れもない。

あえて問題を挙げるなら、むきだしの肌をちくちくと刺す冷気くらいだろうか。

意識するとよけいに寒さが強く感じられ、男性はぶるりと身を震わせる。

なにか着るものはないか——そう思って、周囲を手で探ろうとした時だった。

「まだ、あまり動かないほうがいい」

声と同時に、ばさりと布らしきものがその身体にかけられる。

「きちんと復元したつもりだけど、たった今よみがえったばかりだからね。もしかしたら動いたはずみで手足の一本くらい落ちるかもしれない」

その声に操られるかのように、男性はびたりと動きを止めたきり身じろぎ一つしない。

いや——できなかった。

指示に従ったわけでも、脅しめいた台詞に恐れをなしたわけでもなく、ただ純粹な驚きによって次の行動に移れなかったのである。

闇の中から聞こえる声が、ほのかに笑みの気配をまとう。

「……おはよう。気分はどう？」

その声は、まだ声変わりもしていない幼い子供の声だったのだ。
同時にそれが、彼がこの世によみがえって始めて耳にした人間の
声でもあった。

ブローグ（後書き）

のっけからグロくて申し訳ありません（この程度はまだまだ、という方もいらっしゃるでしょうか？）

ちよこつと長めのお話になる予定ですが、よろしければ最後までお付き合い下さい。

1 - 1 二人の旅の始まり

「……くそ」

頭上高く生い茂った木々の葉を、レイトはうんざりした表情で眺めやった。

梢の隙間から差し込む陽光が目眩しい。幾重にも重なりあっている枝だが、意外と隙間は多いものらしい。

もつとも、隙間の原因は自分が歩いているこの道である。

木を伐採して作った道の上に、当然ながら枝を伸ばす木の幹はない。周囲の木々が枝を伸ばしてはいるが、馬車でも楽に通行できるくらいの道幅があるため、どうしても頭上の枝の密度が薄くなるのは避けられない。

しかも時刻は正午まであとわずか。太陽は天頂部近くにでんと鎮座して、最も遮蔽物の少ない方向から容赦なく光を浴びせかける。

（……せめてもう半分も身軽で、坂の傾斜もゆるかったら）

「遅いぞ、レイト！」

やや先を進む影が、ふり向きざまに冷酷な言葉を投げつける。

レイトの口から洩れたのは、返事ではなくため息だった。彼の気分を重くしているのは肩に食い込む巨大な荷物でも、ただなら続く坂道でもなく——その両方の原因と言ってもよい目の前の人物であ

る。

進むとはいっても、自分の足ではない。

見上げるような黒馬の背にまたがって——というよりもちょこんと腰かけて——悠々と山道を進んでいる。

「さくさく歩かないと置いていくぞ！ 昼飯までに追いつくことができなかったらペナルティー付き。飯の材料は全部その中に入ってるんだから！」

「あのなあ……」

頬のあたりを引きつらせ、レイトは馬上の人物を睨み返した。

「こんなもん背負って、ひよいひよい歩けるもんかよ。だいたい歩くって速度かよ、これが？ これは歩くじゃなくて、走るって言うんだよ一般的には。言葉くらい正確に使いやがれてんだ」

「歩くで合ってるんだ、ここは」

レイトの抗議を、相手は平然とした口調で切って捨てる。

「どう見たって、ガットは並足で歩いているじゃないか」

「馬と人間のペースを一緒くたにするんじゃないやねえっ！」

「怒鳴る元気があるってことは、まだ大丈夫だな。じゃあもうちょっとペースを上げるとしようか——今日中に山越えしてしまいたいし」

「おいこらっ、お前っ！」

「——お前、じゃないだろう」

ひととレイトに視線を据えて、相手は馬を止める。

巨大な馬の背中にいるためますます小さく見える——七歳くらいの少女である。

ちんまりとした身体を黒い毛織物の長衣に包み、余っている服の袖や襟元を紐で結んで無理矢理身体に合わせている。

その上に羽織っているのは、フードのついた生成色のマント。

非常に地味な色合いの衣装だったが、その印象を一変させるものがマントの肩口に散らばっていた。

磨き上げた銅のような、鮮やかな赤金色の髪である。

癖のない髪の長さは、肩を少し越すくらいだろうか。ふつくらとした薔薇色の頬に珊瑚色の唇。今はまだ幼さばかりが目につくが、将来的にはかなりの美女になるだろうことが予想ではなくほぼ確信できる顔立ちだ。

「人を呼ぶ時には『おい』でも『お前』でもなく、きちんと名前を呼ぶものだといったい何回注意させれば気が済むんだ？ 実は人の話全然聞いていないんじゃないのか？」

馬鹿にしたような光を浮かべる淡い紫色の瞳を、レイトは黒に近い紫色の瞳で睨みつける。

「んなこと、どうでも——」

「いいわけがないだろう。礼儀知らずと話をするほど私は暇じゃない。学習能力の片鱗もない馬鹿ならなおさらだ。そんな疲れる真似できるか」

言い捨てて、さっさと馬を進めようとする少女の背中を、レイトはぎりぎりど歯がみをして見やる。

疲れてるのはこっちだ、という呟きは言葉にはならなかった。

大人一人分の体重に相当する荷物を他人に背負わせて、自分は平然と馬の背に揺られて旅をする神経の持ち主になにを言ったところで無駄と理解していたのである。

拳を握りしめて、遠ざかる背中を見つめること十数秒。

「……おい、ティア」

「『おい』は余計だ——で、なんだ？」

くるりとふり向いた少女は、鋭く指摘したあと屈託のない笑みを浮かべた。

その落差にやや戸惑ったものの、レイトは背負った荷物を指差して抗議することは忘れなかった。

「なにつて、お前な——こんな大荷物を人に背負わせておいて、遅いだのなんだの文句をつけんじゃねえよ！　だいたいこんなもん、その馬に背負わせりゃいいだろうが。なんのために馬がいるんだ？」

「もちろん、私が乗るために」

「お前みたいなちゃんまいガキに、荷物の二つ三つ追加したところでたいした負担にやならねえだろうが！　負担になるってならお前が下りて歩きゃいいだろう！」

「ちゃんまい言うな、雑用係」

細い眉をわずかに持ち上げて、少女は言い放つ。

「それに、たった七歳の子供にこんな山道を歩かせるつもりか？　信じられない極悪非道ぶりだな。まともな人間の吐く台詞じゃない——つて、そういえばとくにお前は死んでいたんだっけな。人並みの台詞も吐けなくて当然か」

「……極悪非道なのはどっちだ」

呻くようなレイトの言葉を、少女は極めてあっさりと無視した。

「そもそも一番の問題は、私が歩いたら行動速度がた落ちになるってことだ。この歩幅ではお前が一步で進むところを二歩も三歩もかけて歩くことになる。効率が悪いってことくらい少し考えたらわかるだろう？」

遠慮なく叩きつけられる言葉に、レイトはもはや言い返す気力もなくなつただ深いため息を吐くばかりだった。

言い返しても無駄であることは、最初からわかりきっている。
口も頭もよく回る上に、この相手は最強の切り札まで手にしているのだ。

（くそ……どうしてこんなことに）
ずり落ちた荷物を軽く揺すって背負い直しながら、レイトは事ここに至るまでの経緯に思いをはせる。

それは、ほんの半日ほど前。あの闇の中で聞いた声から始まった。

1 - 1 二人の旅の始まり（後書き）

キリのいいところまで、と思ったらちょっと短くなりすぎました（汗）

次からはもうちょっと長くなると思います。

1 - 2 闇の中の一人と一体（前書き）

ちよつと時系列がわかりにくいかも（汗） プロローグの直後、
1
話の前の場面になります。

1 - 2 闇の中の一人と一体

「……な」

喉を震わせる自分の声を、彼は他人のもののように聞いた。

半ば反射的に身がまえた彼の脳裏を、いくつかの疑問と想像がよぎっていく。聞こえてきたのが幼い子供の声であったことに、彼は驚きと強い不審の念を感じていた。

（いったい、どうしてこんなところに子供が……？）

そう考えた直後、彼は愕然とする。

『こんなところ』がどこなのか、まったく思い出すことができなかったのである。

そればかりか、自分がなぜここにいるのか——そもそも自分が何者なのかさえ思い出すことができなかった。

（そ……んな、馬鹿な）

闇の中に存在する誰かのことも忘れ、彼は必死で記憶を探った。

どんな小さなことでもいい。なにか一つでも思い出すことができれば、そこから記憶がよみがえってくるはずだ。

しかし、どんなに考えても記憶の断片一つ出てくることはなかった。

冷水を浴びたような気分の彼の耳に、くすくすと忍び笑う声が入ったのはその次の瞬間だった。

「なんだ、なにがおかしい!？」

八つ当たりを含んだ声が、周囲に反響してわんと響く。

その響きから、ここがさほど広い空間ではないことがわかった。
しかしそれに留意する余裕は今の彼にはなかった。

闇の中から、先程のものと同じ澄んだ声が聞こえてきたためだ。

「どうやら懸命に頭を回転させている最中のようなだが、少しこちらの話を聞いてはみないか？　それで疑問の半分はカタがつくと思うんだが」

「お前……何者だ？」

低く脅しつけるような声にも、相手が怯む様子はなかった。

わずかな間のあと、闇の一部がふっと赤く染まる。

それが火種の光だと気づいたのは、手燭に入った光が周囲を照らし出した瞬間だった。

ごく小さく絞った光は、闇のほんの一部を退散させたにすぎなかった。しかし、暗闇に慣れた目には突き刺さるように眩しく感じられた。

彼は目を細めて、手燭を持った人物を見やる。

最初に目に入ったのは、わずかな光を反射してきらきらと輝く赤金色の髪。闇に浮かぶ白い顔の造作を見て取ったのは、そのあとだ。

「……………」

想像していた以上に若い——というよりも幼い姿に彼は言葉を失った。

まだ十歳にもなっていないだろう。身体に合っていない長衣を身につけたその子供は、夜明けの空に浮かぶ雲のような薄紫色の瞳で

彼を見返している。

その瞳にのぞく精神の色は、見た目通りの子供のものはあきらかに違うものだった。

「……そうだな。まず自己紹介といこうか」

ふつと不敵な笑みを口元にひらめかせて、その子供は堂々とした口調で告げた。

「私はティア。正式にはティア・レーヴェ・モンドステーンという——呼ぶ時はティアでかまわない。少々長すぎるからな」

「……たいそうな名前だな」

「別に、自分でつけた名前じゃない」

肩をすくめる仕草も、幼い容姿にはひどく不釣り合いだった。

「第一、これでも一応省略しているんだぞ。フルネームだったらもつと長い——もっともそちらは人前で名乗ることはないがな」

「………？」

「それより、そちらのことはなんと呼んだらいい？ 言いたくないのなら別にかまわないが、だったら適当な名前を付けてしまっぞ」
クロとかハチとか、と妙に楽しげに名前の候補を列挙する子供——
「おそらく女兒だろう——」から、彼は思わず視線を逸らした。

「……わかんねえ」

「え？」

「わかんねえって言ってるんだよ。まったく思い出せない。自分がどこの誰で、どうしてこんなところにいるのかも——お前が知って

るんだつたら教えて欲しいくらいだぜ」

ふてくされたように言う彼の瞳の奥には、期待と不安をないまぜにしたような光がのぞいていた。

その瞳を見つめ返して、少女は口元に軽く笑みを浮かべた。

「そちらの素性……か。悪いが、私もそんなものはまったく知らない」

「……ああ？」

発言内容を深く考えるよりも先に、『そんなもの』呼ばわりされたことに対して、彼は剣呑な表情で声をあげる。

少女は怯える様子もなく、むしろ楽しみに言葉を重ねた。

「そこらへんで適当に拾ってきただけだからな。身元がわかるようなものは近くに残っていなかったし、墓石もなかったし」

「……墓石？」

「ああ。事故か病気が、はたまた賊の襲撃にでも遭ったのか——道から少し離れたところに埋まっていたんだ。まわりには雑草が生い茂っていて、見つけるのはともかく掘り返すのはけっこう大変だったんだぞ」

「埋まってた？」

不穏な単語の連発に、彼の表情が不審げな色を浮かべる。

そこには隠しきれない不安の色もにじんでいたが、少女はそれに気づかぬように、平然と言葉を返した。

「ああ完全に。見事な白骨死体と化していたぞ。衣類も荷物もまったく見当たらなかったから埋められて十年や二十は軽く経っていたんじゃないか？ まあ、荷物を全部奪われた上に身ぐるみ剥がれて埋められたって可能性も低くはないだろうが」

「ちよ、ちよつと待て」

彼は片手を上げて、とうとうと流れる水のような少女の言葉をさえぎった。

「それじゃまるで……俺が死んでいたみたいじゃないか」

「ああ」

恐る恐る彼が口にした言葉を、少女はあっさりと肯定する。

「みたいじゃなく、死んでいたんだ完全に。さっきも言っただろう

——『よみがえった』ばかりだって」

「な……」

「ついさっきまで、そりやもうきれいな白骨死体だったんだ。そのまま標本にして飾っておきたいくらい——信じられないのなら、手でも足でももとに戻してやろうか？」

「い……いいいいいらんっ！」

慌てて首を振る彼を見て、少女はあははと声をあげて笑った。

それはいつそ腹が立つほどに、晴れやかな笑い声だった。

「冗談だ。そんなこと、やったこともないしな。どうしても言うなら挑戦してやってもいいが——せっかく今回、これだけきれいに復元することができたのに、もとに戻らなくなったりしたらもったいないしな」

ほっと安堵の息をつきかけてから、少女の言葉が意味するところに気づいて彼は相手の顔を穴が開くほどに見つめた。

「まさか……お前」

「お前じゃない。さっき名乗っただろう？」

その言葉は、愕然とした表情の彼の耳には届かなかった。

「俺が死んでいるってのが本当なら……俺をよみがえらせたのは、もしかして……」

「ああ」

彼の言わんとすることを、少女はすぐに察したようだった。

心底恐ろしげな表情を浮かべた彼の顔を、少女は悪戯っぽい瞳で

見返して言った。

「そうだ、私だ」

半ば予想していた答えではあったが、彼の口が開いたままふさがらなくなる。

呆然とするのを通りこして、ほとんど虚脱したような表情だった。少女はそれ以上説明しようとはせず、にこにこ笑って彼の顔を見つめている。

しばらくの間、意味もなく口を開閉させてから、彼はふいに別人のように目つきを鋭くして少女を見やった。

「……お前、いったい何者だ？」

「自己紹介ならさつきすませたばかりだが？」

「そうじゃない。俺が聞いているのはお前が……」

彼の言葉を、少女は苦笑のにじむ顔つきでさえぎった。

「名前を言えば、普通はそれだけでわかってもらえるのだから。しかし記憶喪失では仕方ないか……どうりでずいぶんと反応が鈍いと思った」

「……………」

げんそうな顔になった彼に、少女は笑みの片鱗も残らない眼差しを向けた。

そこには奇妙に大人びた、風格さえ感じさせる表情が宿っていた。

「私はモンドステーン一族のティア。代々死霊術士を生業とする一族の中でも、最古の歴史を誇る一族の出身だ。こう見えても腕は

一流だから、その身体がいきなり崩れ落ちるんじゃないかなんて心配はしなくてもいい」

言いながら片目を閉じると、近寄りがたい雰囲気拭ったように消える。

「ついでに言うておくが、死霊術士っていうのは生命と精神を操る魔術の使い手のことを指して言う。その身体を復元したのも死霊術だ——死体を媒介にして、この世界に記録されている肉体の情報を引き出して再構築したんだ」

「情報……再構築……？」

耳慣れぬ単語を、口元を曲げるようにして彼は発音する。

同時に胸に手を当てたのは、半ば無意識の動作だった。もとは死体だったと言われてもまるで実感がなかったが、怪しげな術で復元されたと聞かされてなお不安を覚えずにいられるほど肝は据わっていない。

（しかし……体温も脈拍もあるのに。本当にこれが死んだ人間の身体かよ……？）

内心で呟いた瞬間、胸に当てた手のひらの下にくつきりと浮かび上がる、奇妙な紋様が彼の目に入った。

鮮やかな真紅のそれは、まるで血で描いたようにも見える。

「それが、私とお前との契約の証だ」

いぶかしげに眉を寄せる彼に、少女は薄い笑みを口元に浮かべて言い放った。

1 - 2 闇の中の一人と一体（後書き）

読みやすいように分割してますが、もうちょっと長めに区切っても大丈夫でしょうか……？

誤字脱字には気をつけていますが、お気づきの際にはご一報下さい。

1 - 3 契約の紋章

少女の声にも気づかず、彼は胸の紋様を凝視する。

薄い褐色の皮膚に広がる紋様はあざのようにも見えたが、それに
してはあまりにも不自然に整いすぎていた。

息づくような血の色の線で描かれた、文字とも図形ともつかない
精緻な紋様。

胸の中心から、完璧な左右対称で描かれたがなにを意味するもの
なのか、記憶のない彼にはまるで見当がつかなかった。しかし頭の
片隅でちらりと、仮に記憶があつたとしてもそれは理解できないの
ではないかと思った。

「……契約？」

少女の言葉にようやく気づいたのは、その十数秒後である。

「そんなもん、した覚えは……」

「だろうな。一方的な契約だったから」

「なんだと……！？」

あっけらかんと告げる少女に、彼の声音が怒気を帯びたものに変
わる。

「だが、契約は契約だ。お前の肉体と魂は、もう私との契約を受け
入れてしまっている。今ここにお前が存在しているのがなよりの
証拠だ」

「そんな、馬鹿な話が……！」

言いかけた、彼の言葉が半ばで途切れた。

胸の中央に、ちりつと火を近づけたような軽い痛みが走ったのだ。

ぎくりとして視線を下げた彼が見たのは、紋様が溶けた鉄のような鮮やかな朱に輝いている様子だった。

「な……！」

「お前がこの世に存在している以上、私との契約には従わなくてはならない。今のお前の身体は、契約を介して私の魔力に支えられているんだから」

「け、契約って……」

なにをさせるつもりだ、と続けようとした彼の機先を制するように少女は言った。

「たいしたことじゃない。私の護衛と保護者がわり——なにしろこの見た目だから、一人じゃ宿にも泊まれないんだ。どっちが保護されているかは別として、大人の同行者が一人必要なんだよ」

あと、荷物運びとか買い物なんかも——と続ける少女に、彼は疑り深そうなまなざしを向ける。

「……本当に、それだけか？」

「他になにかあるのか？」

「その程度のことだったら、わざわざ死人をよみがえらせたりしなくても……そのへんで適当な人間を雇えば済む話だろう？ まさかお前、金持っていないのか？」

「それこそ、まさかだ」

少女は口元に、皮肉げな笑みを浮かべた。

「十分な資金も持たずに旅に出るほど、私は慌て者でも剛胆でもないぞ」

「だったら……」

「あのな、たった一人で旅をしている七歳の子供に、なんの下心もなしに雇われてくれる奇特な人間がどれほどいると思う？ そんな希少生物をわざわざ探し出して雇うよりも、死者一人よみがえらせたほうがよほど手間がかからないだろう？」

「……七歳？ お前が？」

「そう見えないか？」

「いや……見えるが、しかし……」

彼が口ごもったのは、見た目はともかくとして目の前の少女の自身が、年齢相応のものとはとても思えなかったためだ。

その内心を読み取ったかのように、少女は肩をすくめてみせた。

「子供に見えないというのなら、いつそ楽なんだがな。親切なお役人から人買い証人までもてもてで、いやんどうしよう、ティア困っちゃうって状態なんだ」

「その言い方を止める頼むから」

妙に平坦な口調で言ってから、彼は口元をへの字に曲げた。

「……で、俺が嫌だって言ったらどうするんだ？」

「え？」

きょとんと目を丸くする少女に、彼は棘のある口調で言い放つ。

「そんなのは全部そっちの都合じゃねえか。俺がお前の言いなりにならなけりゃいけない理由がどこにある？ 契約だかなんだが知らねえが、一方的に押しつけられてたまるか。だいたい俺が死人だったなんて証拠がどこに……」

そう口にした瞬間、彼の身体がぐんと重くなった。

上体を起こした姿勢のまま、彼は塗り固められたように指一本動かさなくなる。筋肉が弾力を失っていくのが、全身の血流が滞っていくのが、酸素不足で視界がかげっていく中はつきりと感じられた。

「だから言っただろう。お前の肉体は私との契約によって維持されている——その契約に背くような行為を行えば、契約の破棄と見なされてお前の肉体を維持している魔力が断たれる。そうなれば、お前は死体に逆戻りだ。私の魔力なしには、お前は一瞬たりともこの世には存在してられないのだからな」

厚い壁を隔てたような遠さで、少女の声が聞こえてくる。

「それとも、今ここで選ぶか？ もとの白骨死体に今すぐ戻るか、それとも黙って契約に従うか——お前自身の口で、契約を破棄する旨を宣言すれば即契約は白紙に戻る。お前はもとの死体に戻って地下で好きなだけ休むといい」

いや、埋め戻すのも面倒だからそのへんにでも蹴り転がしておくか、と少女は面白くもなさそうに呟く。

（冗談じゃねえ、死ぬのなんかごめんだ！ 契約でもなんでも従うから……！）

急激に失われていく全身の感覚に戦慄しながら、不自由な口を動かして彼は懸命にその意志を言葉にする。

「……わ、かった。したがう……」

途端に、かげっていた視界がふつと晴れるのがわかった。

全身に感覚が戻り、彼は自由に身体が動かせるようになったことに気づく。ほっとする彼の目に、満足そうな微笑を浮かべた少女の顔が映った。

「よかった」

その笑みは、純粹に彼の無事を喜んでいるようにも見えた。

反射的に投げつけかけた怒声が、しぼんだように消えたのはそのためだ。困惑と怒りを半々にのぞかせた顔で、彼はなにか口にしかける。

それより早く、細い指を唇に当てて少女が言葉を放った。

「となると、名前がいるな。まさか名無しのナー助と呼ぶわけにもいかないだろうし——あ、いや意外といけるか？」

「やめろそれは」

苦情が多いな、と唇を尖らせながら少女は腕組みをする。

「白骨死体の白骨太郎——は長いか。じゃあ……デイレイトっていうのはどうだ？ 真夜中に目覚めたから、『デイ・レイト』」

「……ナー助に比べればいくらかマシだな」

「それも悪くはないと思うんだがな。だが、だったら決まりだ——デイレイト」

確かめるようにその名を呼んでから、ふと納得がいけないといった表情になって少女は首をかしげた。

「なんだか据わりが悪いな……略してレイトってことにしておくか」

「お前、なにを勝手に……！」

「言いやすい名前のほうがいいだろう。別にお前の本当の名前って

わけでもないんだし」

「そりゃそうだが……」

「じゃあ、そういうことで——よろしくな、レイト」

にこりと邪気のない笑みを浮かべる少女を見上げて、レイトと名付けられたもと死人はおうと力のない声を返す。

そっけない声には、ほんのわずかだが照れくさそうな響きが混ざっていた。

「それじゃ、これを着てついてこい」

頭の上に乱暴に投げつけられた布の塊が、ひとまとめにされた男物の衣服であることにレイトは一瞬遅れて気がつく。

「私は死体が服を着ていようといまいと気にならないんだがな——さっきまで肉もついてない完全な丸裸を拝んでいたわけだし。だが人前に出るのに、裸の男性を連れて歩くわけにもいかないだろう？

間違いない変質者としてとっ捕まることになる——お前が」

「……………」

無然とした顔つきで衣類を取り上げると、レイトは後ろを向いた少女に顔を向けることなく黙々とそれらを身につけ始めた。

1 - 3 契約の紋章（後書き）

お約束の「死にたくなかったら協力しろ」です（笑） 言ってることが凶悪な割に命じているのが「保護者になれ」だったりするあたりアンバランス。

そこまでのやりとりを思い出し、レイトは深々とため息をついた。あれから一昼夜が過ぎているが、出会いの時の最悪の印象は拭われるどころか、さらに悪化の一途をたどっている。

（人使いも口も荒いし、なにかといえば手や足が出てくるし……おまけになんだ、あの杖は。ほとんど凶器じゃねえか）

ティアが常にたずさえている、彼女の身長ほどもある金属の杖である。

細かな彫刻をほどこされた杖はずっしりと重く、まともに一撃を食らえば頭蓋骨陥没はまぬがれまい。

（あんなクソ重たい杖ぶんぶんふり回しやがって……子供の力か、あれが？ しかも人が死んでると思って、手加減もせずにぶん殴りやがるし）

その事実については、もはや疑いをはさむ余地はなかった。

なにしろあの場所——あとで小さな洞窟であったことがわかった——で目覚めてから、空腹や眠気を感じるということがまるでなかったのである。

どれほど動こうとも疲れは溜まらず、汗を掻くことも尿意を催すこともない。

それによって、ようやく彼は自分が死人であるという事実を少し

ずつではあったものの、認め始めていた。

(……ちつとも嬉しくはないけどもよ)

再び吐息を洩らすレイトの横で、ティアは昼食の準備を始めている。

山道から少し奥に分け入った場所にある、小さな泉の淵だった。岩の隙間に湧いた水を水袋に満たしてから、彼女はおもむろに岩に腰を下ろして荷物の中から食料の包みを取り出したのである。

固く焼いたパンに香草と木の実のペーストを塗りつけると、ティアは味の染みたとところから少しずつかじり始める。

「……どうした？」

食事の手を止めて、ティアは尋ねた。

「飯がまずくなるから、横で湿っぱいたため息なんかつく——ああ、言っておくがお前の分はないからな。無駄な荷物は持たない主義なんだ」

「無駄ってなんだよ、無駄って……」

げんなりと言い返してから、レイトは胸に浮かんだ疑問を口にする。

「つつか、俺は飯を食べるのか？ この身体で？」

「生命活動のレベルを上げれば、消化吸収は可能だ。わざわざそんな面倒なことはしないけどな——普通の人間に近づくという以上の利点がないし、お前の分の食料まで用意しないといけなくなる。魔力で維持する今の状態のほうが経済的にも魔術的にもずっとロスが少ない」

「そうかよ」

力なく吐いた言葉は、三度目のため息にも近かった。

それを見やって、ティアは口の中のものを呑みこむとパンとペー
ストの包みを置いて、荷物の中に手を入れた。
取り出したのは、真鍮製の予備のカップだ。

「……ほら」

カップを湧水で軽くすすぎ、水筒の煮出し茶を注いで差し出すテ
ィアを、レイトは信じられないものを見るような表情で見やった。
鼻先にカップを突きつけられ、恐々とした手つきで彼はそれを受
け取る。

「けど、水分補給くらいならたいした負担にならないからいいだろ
う。一滴の水分も取らなかつたら、そのうちカラカラに干からびた
ミイラになってしまいそうだし」

にこりと微笑みかけるティアに、レイトはと言い返すべきか迷
いながらカップを口に運ぶ。

「……返事は？」

「ありがとう……よ」

途端に飛んだ厳しい指摘に、レイトは不承不承といった様子で言
葉を返した。

内心、どうしてこうもうるさいのだろうとぼやきながらだ。

どういたしまして、と完璧な作法を守って告げるティアの笑顔を
横目に、レイトは手にしたカップを口元へと運んだ。

一口含むと、深みのある味と香りが口の中いっぱいに広がる。

明瞭な感覚に、これが本当に死んだ人間の身体なのかと疑わしく
思いながら、レイトはカップの中の茶を一息に飲み干した。

「……なあ」

空になったカップをティアに返ししながら、レイトはどこか遠慮がちに声を投げた。

「お前、死霊術士とかって言うてたけど……死霊術士だったら誰にでも、こんなに簡単に死体をよみがえらせたりすることができるのか？」

「まさか」

口元に笑みを含ませたまま、ティアはあっさりと否定してのけた。
「誰にでもできるような苦労はない。たいていはいかにも死体でございって感じの動く死者を作り出すのが精一杯だ」

「だったら、どうしてお前……」

いかにも嫌そうに、自分の身体を見下ろしてレイトは尋ねる。

「こんな真似ができるんだ？」

「言っただろう、腕は一流だって」

堂々と胸を張って答えるティアに、レイトは疑わしげな目を向けた。

「七歳の子供が、か？」

「いわゆる天賦の才能というやつだな。モンドステイーンの世界史始まって以来の天才児と呼ばれてるんだ」

「嘘つけ——いくつなんだ、本当は？」

「なに？」

「死人をよみがえらせるような非常識な力の持ち主だったら、自分の年齢を操作することくらいいけないんじゃないのか？」

切り込むようなまなざしを、ティアは表情一つ変えることなく受け止める。

一瞬の間のあと、その口元がふっとゆるめられた。

「七歳なのは本当だ。別に年齢をごまかしてなんかいない。少なくとも、この身体が生まれてから七年しか経っていないことは間違いない——中身のほうもそうかと聞かれると、難しいところだが」

「……中身？」

「げんそうな声をあげるレイトに、ティアはびしりと指を突きつけて言った。

「そんなことより、お前、まさか白骨死体のままよみがえりたかつたわけじゃないんだろう？　だったら素直に、私の腕が一流だったことに感謝したらどうなんだ？」

「そうは言うがな……」

「まあ、掘り返したばかりの土まみれの白骨死体だの、中途半端に復元したぐっちゃぐちゃの腐乱死体だのと一緒に歩くのは私も遠慮したいがな。第一そんなもんと一緒に歩いていたら、また死霊術士の評判が悪くなる——というか、子供が怪物に襲われてると思った親切な人間が、お前を退治しにきかねない」

「……………」

その光景がレイトにもたやすく想像でき、彼はげんなりした表情で黙りこむ。

ティアはそんな彼にかまわず食事を終え、カップを軽く水で濯ぐと食料の包みと一緒に荷物の中へと戻した。

岩から下りて、黒馬のもとに向かう彼女のあとに荷物だけが残される。

顔をしかめてその荷物を背負うと、レイトはゆっくりとした足取りで黒馬に歩み寄っていった。

ティアは鎧をつかんで、懸命に馬の背中によじ登ろうとしている。身長の高さに加え、ずるずるとした長衣を着こんでいるためうまく登れず、じたばたともがいているティアの様子を見かねてレイトは手を貸してやった。

「ほらよ」

長衣の背中をつかんで持ち上げ、鞍の上にひょいと下ろす。

驚いたような薄紫の瞳に見つめ返されて、レイトはやや居心地の悪い思いを味わった。直後、その瞳に浮かんだのは混じり気のない笑みの表情だった。

「ありがとう、レイト」

「……おう」

そっぽを向いたまま答えるレイトを見て、ティアはくすりと笑みを深めただけでなにも言おうとはしなかった。

すぐに彼女は馬を歩み出させ、そのあとに荷物を背負ったレイトが続いた。

馬の歩みはゆっくりとしたものだったが、人間の足でついて行くとなるとかなりの早足にならざるを得ない。

荷物を揺らして進みながら、レイトはふと気になって尋ねた。

「そっぴや、俺たちは今どこに向かっているんだ？」

「サマンレール……って言っても、今のお前には通じないんだったか。ここから五日ほど南に歩いたところにある街だ」

「……サマンレール」

口の中で、確かめるようにレイトは呟く。

記憶を探っても、その名前に該当するものは思い当たらなかった。すでに半分予想済みだったため、さほど落胆することもなく彼は指先でこめかみを掻く。

その様子をティアは、妙に表情のない瞳で見つめて言った。

「——場合によっては、記憶が戻るかもしれないぞ」

「あ？」

「よく知っていたものや場所を見たら、そこから記憶がよみがえってくるかもしれない。人間の精神の持つ情報量ってやつは膨大だ。完全に消えたように思えても、記憶の断片はどこに残っている——それを手がかりに、全体の記憶がよみがえってくる可能性もまったくのゼロというわけじゃない」

「そう……なのか？」

「可能性の話だな」

語る内容に比べて、いやにその口調が固いことにレイトは気づく。不審そうに眉を寄せる彼を見て、ティアは少しだけ表情をやわらげてみせた。

「そういうわけだから、記憶のことはあまり気にしないほうがいい。運が良ければ戻るし悪ければ戻らない——そのくらいに思っておくんだな」

「……他人事だと思いやがって」

「あいにく、私にとっては完全な他人事だ」

朗らかに言い切って、ティアは前を向く。

その顔に先ほどまでのなにかを押し殺したような表情はなく、レイトは見間違いだったかと内心首をかしげた。

そんな彼の視線を振り切るように、ティアは馬の歩みを早める。

抗議の声をあげながらレイトは駆け出し、ちらりとその胸をよぎった疑問はあとかたもなく消え去った。

その耳に届いたのは、軽やかに響く馬蹄の音と少女の笑い声だった。

1 - 4 出発（後書き）

ここまでで第一章です。もともとネット用に書いた小説ではないので、若干描写がくどいかもしれませんがご勘弁を（汗）
手を入れ始めたら、また徹底的に書き直すことになりそうだし……

2 - 1 舊の薔薇と婚約者

窓の下で、今年始めての白春花が一輪花を咲かせていた。

淡い紅の花びらを、幾重にも重ねた可憐な花だ。春の初めから盛夏まで人の目を楽しませ、長春花の異名でも知られるその花を男は愛おしげに見つめる。

他にいくらかでも華美な花がある中、それが一番目立つ場所にあるのには理由があった。

ほとんど純白に見えるくらい、うつすらとした紅を含んだその花は、彼の最愛の女性が最も好む花でもあったのだ。

男の口元が、いかにも幸せそうにゆるむ。

脳裏に浮かぶ女性の姿は、可憐な花の印象からはほど遠いものだった。美しくないわけではなく、むしろその逆——凜とした端正な容姿には、もっと鮮やかな色合いの大輪の花こそがふさわしいように思える。

だから、彼女がこの花を好むと知った時は意外な思いを禁じ得なかった。

しかしすぐに、その思いは彼女に対する愛おしさに変わった。それはこの小さな花が、彼女の心の奥の優しさを象徴しているように思えたためだった。

そう——めったに人に見せることのない、心の奥深くに隠した優しさを。

「……………」

その時、風に乗って届いた切れ切れの音が彼の注意を引いた。

おそらく使用人のものだろう、妙に慌てた声だ。普段はそんなものを気に留めなどしなかったが、部分的に聞き取れた単語がそれを無視することを許さなかった。

会話に耳を澄ませ、おおよその事態を把握すると彼は窓枠を飛び越えて中庭に下りる。

花を踏み荒らさないように注意しながら、彼は中庭を突っ切って対角線上にある建物へ向かう。

庭を囲む回廊から建物に上がり、彼はその場にいた使用人の一人を捕まえた。

「どうした？」

問いの言葉に、まだ若い下女は安堵とためらいの混ざる声を返した。

「それが……お客様がおいでだと」

彼は下女をうながして、客人の人相風体を詳しく聞き出す。

思い描いていた人物のそれと、答えが一致することがわかった瞬間、彼の顔に浮かんだのはこらえがたい喜びの表情だった。

「……おい」

通された部屋を居心地悪そうに眺め回し、レイトは口を開いた。すぐ後ろのソファでは、ティアがきわめて平然と茶のカップを口元に運んでいる。着ていたマントは脱いで預け、長衣のみの姿だ。

「ティア……」

「なんだ？」

きちんと名前を使って呼びかければ、打てば響くように答えが返ってくる。

レイトは内心その徹底ぶりに呆れながら、周囲をおもんばかるように低めた声をティアへと投げた。

「なんだって、お前……」

この部屋で、落着いて茶など飲んでいられる彼女の神経が、レイトには正直理解しがたかった。

見るからに、金がかけられているとわかる部屋だったのである。

ゆつたりと高い天井に、曇りのない硝子のはめこまれた大きな窓。いたるところに艶のある上質な木材がふんだんに使われ、床には美しい模様の織りこまれた毛足の長い絨毯が敷かれている。

その価値を正確にはかるのは、記憶のない現在のレイトには不可能だったが。

しかし、これまで街の宿屋などで見てきた部屋に比べると、材質も細工も桁違いに上であることだけはわかった。

「……本当に、お前いったい何者なんだ？」

うるんげな視線を、ティアの顔へと向けてレイトは言った。

「こんな屋敷に住んでる人間と、知り合いだなんて想像もしてなかったぞ」

ある種失礼とも言えるその発言をティアはとがめようとはせず、ほうと言いたげな光を瞳にのぞかせた。

「わかるのか？ 金がかかってるって」

「見ればわかるだろう、普通」

「記憶もない普通の人間には、そんな判別はつかんと思うのだから」

——もしかしてお前、もとは泥棒だったんじゃないか？」

面白がるようなその言葉に、レイトは顔をしかめる。

「なんで俺が泥棒なんだ？」

「目利きといえはそれぐらいしかないだろうが。商人にはとても見えないうし、職人という雰囲気でもないし——となると、あとは泥棒くらいだろう？」

「お前な……」

むっとした表情のまま、レイトは負けずに言い返す。

「そっちこそ、実はこの屋敷の主人の弱みを握っているとかいうんじゃないだろうな？ 尋常じゃねえぞ、この待遇の良さは」

「お前もたいがい失礼な奴だな」

言葉の割に、ティアはさほど気分を害したようには見えなかった。

その顔から視線を外して、レイトはここへ来た時のやり取りを思い出す。最初は門前で馬を止めたティアを見ても、ここが目的地だとはまるで思いもしなかったのだ。

ティアが馬を下りて、すたすたと門衛に近づいていっても道でも尋ねるつもりだろうかと思わなかった。

そのため彼女の前で、門が開かれた時にはぽかんと口を開ける羽目となった。

（しかも、そのあとがまた……）

ごく当然のように門衛の一人に馬を預け、正面玄関へと向かったティアのあとを慌てて追いかけたのだが——

どういふことが尋ねるより先に、玄関先で顔を合わせた使用人らしき女性が目をむいて『ティア様！？』と声をあげるのを目撃したのである。

「いったい、この主人とはお前、どういう知り合いなんだ？ ただの客が来たって反応じゃねえだろうが」

茶のカップを手にしたまま、ティアはわずかに視線をさまよわせた。

「まあ、知り合いというか……ここは、私の親戚の家なんだ」

「親戚？ お前のか？」

普通他人の親戚は親戚とは言わないだろうが、と苦笑するティアの姿をレイトは思わずじろじろと眺める。

立派な布張りのソファに腰かけているのが申し訳ないような、埃まみれの粗末な長衣。

よく見れば仕立てはきちんとしているが、サイズが合っていないため遠目には布袋でもかぶっているように見える。

とても、こんな屋敷をかまえる親戚がいるとは思えない姿だ。

不信感もあらわに、レイトが口を開こうとしたその瞬間、部屋の扉が前触れもなく——ほとんど叩き壊そうとするかのような勢いで開かれた。

「——ティア！」

飛び込んできたその声は、扉が開く音よりさらに大きかった。

反射的に身がまえるレイトの横を、突風のように一人の若い男が駆け抜けていく。叩きつけるような風を頬に感じたあと、レイトはぎこちない動きでふり返った。

そこにいたのは、明るい金色の髪の青年だった。

すらりと背が高く、整った容姿がいかにも好青年といった印象を

与える。歳はレイトといくつも変わらない——少なくとも外見上は——ように見えた。二十代の前半から半ばといったところだろう。

「よかった、無事に戻ってきてくれて……置き手紙だけ残して、いきなりいなくなったりするから心配したんだよ。連絡もないし、また君の身になにかあったんじゃないだろうかと思って……」

「すまない、イアン」

すぐ前で膝をつき、目線を合わせて告げる青年にティアは困ったような笑みを浮かべて応えた。

「でも、私のことなら心配いらないと前にも言っただろう？ 私のことをどうこうできるような腕前の死霊術士なんて、そうそういるもんじゃない——というか、むしろいるなら出てきて欲しいくらいだ」

「……ティア」

地平線近くの空のような、淡い水色の瞳をうるませて青年は首を振った。

「君の気持ちはわかるけど……無茶な真似はしないで欲しい。確かに術の腕で君に勝てる人間はそうはいないかもしれないけど、今の君は七歳の女の子でもあるんだよ？ どんな技量があったとしても、その身体で大の大人と渡り合うのはあまりにも危険だ」

「わかってる。だから、こうやって用心棒だって連れているじゃないか」

ティアの言葉と視線が指し示すものを悟って、青年はすぐかたわらに立っているレイトへと顔を向ける。

途端に、その目つきが鋭いものとなった。あふれんばかりの笑みが消え、いかにも不審そうな表情に取って代わられる。

わずかに眉を寄せ、彼はふと気づいたようにティアへと視線を戻

した。

「ティア、もしかして……」

「ああ。彼は、私がよみがえらせた死者だ。時間をかけなかった割には、けっこううまくできただろう？」

「そうだね……たいしたものだ」

ティアへと向けた微笑みはやわらかかったが、その目がレイトに向けられるのと同時にあとかたもなくその表情は消え去った。

値踏みするように見つめるその目を、レイトは陰のある目で睨み返して言った。

「動く死者がそんなに珍しいのか？」

ぎよっとしたように目を見開いた青年を、やや胸のすく思いでレイトは見返す。

「ティア……？」

「ああ、そうだった。イアン、彼には意志があるからそのつもりで接するように——彼の名前はレイト。レイト、この人は私の従弟でイアン・ウィーデル・エルフォンベイン——一応彼も死霊術士だから、動いている死者は別に珍しくはないと思うぞ」

紹介を受けたばかりの男性二名は、互いに非友好的な視線を交わし合う。

その険悪な空気に気づかないように、ティアは平然と言葉を続けた。

「エルフォンベインも死霊術士の一族なんだ。もとは私と同じ一族だったんだが、数百年前に血統が分かれてその際に姓も変わった。他にもそうやって枝分かれしていった一族はあるんだが、その中では一番血が近いんじゃないかな。けっこう頻繁に婚姻を結んでいるし——私の父もエルフォンベインの出身なんだ」

「一つ言い忘れてるんじゃないか？」

熱っばいまなざしをティアへと注ぎ、青年——イアンははつきりと言った。

「君の婚約者も、エルフォンベインの出身であることを」

「こ……婚約者？」

「なにを言ってるんだ」

あぜんとした声をあげるレイトをよそに、ティアはむしろ苦笑に近い表情をのぞかせて言い返した。

「何年前の話だ、それは……とづくに無効になってるはずだぞ」

「父上はそんなことはまったく考えていない——もちろん僕もだ。」

十年やそこら待つことくらい、僕にとつてはなんともない。君にはそれだけの価値があるんだ」

「あ……と、そういえば、その叔父上なんだが」

真摯な視線と言葉から逃れるように、ティアはいささか不器用に話題を変えた。

「仕事で出かけているのか？ 今日珍しく在宅していないようだが」

「ああ。デールエイのシウラス候の屋敷に招かれている。ちょっと、継承の件でもめているらしくてね」

「……なるほど」

少しほっとしたような顔つきで、ティアはレイトへと視線を向けると彼のために説明を加えた。

「叔父上はこのあたりの国の貴族や、大店の商人に顧客を持っているんだ。死霊術士には死んだ人間の魂を呼び出して、話をさせるという術も使えるからな。そっちの技で生計を立てている一族のほうは今が多い——さすがに、王宮にまで出入りすることができるのは

エルフォンベインをおいて他にはいないが。羽振りがいいわけがわかるだろう?」

「ああ……どうりで」

深くうなずいて、レイトは室内に無遠慮な視線を注ぐ。

半分はイアンに対しての嫌がらせを含んだ行為だったが、部屋の立派さに納得がいったのも事実だった。

イアンは不愉快さをありありと顔にのぞかせてその姿を見ていたが、ティアが口にした言葉が彼の表情を一変させた。

「すまないが、叔父上が戻ってくるまで滞在させてもらってもいいか? それほど長くはかからないだろう?」

「あ……ああ、もちろんだとも!」

輝かんばかりの笑みを浮かべて、イアンは何度もうなずいた。

「父上が戻ってくるまでと言わず、何日でも好きなだけいてくれるといい。今となつてはここが君の家みたいなものなんだからね!」

「いや……それほど長く厄介になる気はないんだが」

「夕食には、君の好きな鳥料理を作らせるとしよう。香味野菜を添えて、果物のソースで食べるのが気に入らったろう?」

「ああ……じゃなくて、少し人の話を」

「食後には蜜漬けの林檎のパイと、マロウのお茶を……そうだ、庭の白春花が今年一番の花をつけたんだ。あとで一緒に見に行こう」

「……どういう趣味してやがるんだ?」

ぼそりとレイトが呟いた言葉は、ティアの小さな手を取って実に嬉しそうに話を続けるイアンの耳にはかすりもしないようだった。

「ああ、そうだ——イリスにも、君が戻ってきたことを早く教えてやらないと。君が出て行ってしまってから、すっかりふさぎ込んで部屋にこもりがちになってね。きっと、まだ君が帰ってきたことに気づいていないはずだ」

「ああ……そうしてやってくれ」

しっかりと手を握られたまま、固い笑顔でティアは言葉を返す。

イアンは深くうなずくと、ようやく彼女の手を解放して立ち上がった。その目がふつと細められ、彼は身を屈めるとティアの額に軽く口付けた。

「すっかり言うのを忘れていたけど……おかえり、ティア」

「……ただいま」

ティアが返した言葉には、仕方ないとも言いたげな苦笑の響きが宿っていた。

にこりとイアンは笑い、部屋を出て行く。

あとには瞳に笑みを残したティアと、なんとも奇妙な表情で沈黙しているレイトの二人だけが残された。

2・1 薔の薔薇と婚約者（後書き）

新章開幕です。

長春花というのは、ロサ・キネンシスという中国原産の薔薇の別名。これを書いていた頃、薔薇の名前を調べることがあってつい使ってしまった。でも名前だけで、実在する薔薇とは無関係だと思っ
て下さい（汗）

2 - 2 ティアの事情

「……なんなんだ、あれは？」

静まりかえった部屋の中、レイトは入口のほうを見やっただけ、呆れたとも単純な疑問ともつかない言葉を発した。

対するティアの顔には、もう笑みは残っていなかった。

「言っただけだ、私の従弟だと——幼馴染みでもあるが」

「ただの幼馴染みって様子じゃなかったぜ」

飛び込んできた時の勢いを思い出し、レイトはやや目をすがる。ティアはその視線から逃れようとするかのようにあさっての方向を向き、わざとらしく肩をすくめた。

「私にとっては、ただの幼馴染みなんだけども……向こうが婚約者のなんなのと、一方的に盛り上がっているだけで」

「その婚約者ってのも、いったいなんなんだよ？」

「昔の約束だ。それも親同士がちょっとした茶飲み話程度に口に出していたことで、具体的な話はなにも……とっくに立ち消えになっていると思ったぞ」

「どうやら向こうは、そんなことまったく思っちゃいないようだがな」

「……ちょっと思いこみが強いんだ、あいつは。頭はそれほど悪くないんだが、思いこんだら一直線というか——他のことがいっさい目に入らなくなるというか。まったく、十歳以上歳の離れた相手に本気で求婚するなんてな。はたから見えていたら、幼女趣味の変態と

しか思えないだろうに」

まったくその通りだ、とレイトは口に出しかけて止める。

かわりに口にしたのは、当面の自分たちの予定に関する問いだった。

「……で、しばらくここにいいのか？」

「ああ」

答えてから、ティアは自分自身に確認するように言葉を続けた。

「荷物も補充しておきたいし、叔父上に確認したいこともある——
が、まず一番に説教を食らうのは覚悟しておいたほうがいいだろうな。屋敷で大人しくしているように言われていたのに、黙って抜け出して半年近く音信不通だったからなあ」

「それは心配するだろう、普通」

思わず真顔で言い返してから、ふと疑念を覚えたような顔つきになつてレイトは問いの言葉を口にした。

「そう言えば、どうしてお前一人で旅なんてしているんだ？　ここにいれば、なんの不自由もないだろうに」

レイトの問いに、ティアは一瞬だけ視線をさまよわせてから答えた。

「……捜し物をしているんだ」

「捜し物？」

「ああ。物というか……人でもあるんだけどな。ある人間と、そいつが持っているはずのものを探しているのさ」

奥歯にものはさまったような言い方に、レイトは知らず眉を寄せる。

「なんだ、そりゃ？」

わずかにためらうような間のあと、伏せていた目を上げてティアは答えた。その顔には表情を選びあぐねたような、不透明な笑みが浮かんでいた。

「宝物、だ」

「……は？」

「モンドステーンには、代々伝わる宝物があつてな。レーザーという名前の、見た目はこのくらいの丸く磨いた玻璃玉に見えるんだが」

ティアは親指と人差し指で輪を作り、レイトに示してみせる。

「これがまた厄介な力を持っていてな。使いによっては、国の一つや二つ余裕で引つ繰り返せるときている」

「な……！」

「それが七年前から、行方不明になっているんでな——放っておくのも物騒な話だから、次期族長の責任で私が探しに出ているというわけだ」

「次期……族長？ お前がか？」

「そうとも。後継者の指名を受けた中では、ダントツの最年少記録保持者だぞ」

「いや、そりゃそうだろうけども……けどそれなら、なおのことどうして？ 他の奴に探しに行かせりゃ済むことだろうが？」

「……『他の人』がいるんだったらな」

口元に笑みを浮かべたまま、ティアは瞳をわずかにかげらせた。その表情に、レイトは胸騒ぎめいたものを覚えたが、すでに口に出してしまった言葉は取り消すことができなかった。

「七年前、ラゼールが行方不明になった時に、モンドステイーンの一族が住んでいた村は正体不明の獣の大群に襲われて——私を除いたすべての者が死んだんだ」

「……………」

「たった一人で族長を名乗るのもおかしい話だが、モンドステイーンの長はすべての死霊術師の長でもある——その座を空席のままにしておくわけにもいかないからな」

内心を読ませない瞳で、ティアはレイトを見つめ返す。

「村を襲ったのは、はるか昔にあらかた狩り尽くされたはずの魔獣だった。今では、人の住まない荒野や山の中にも行かない限り、まず遭遇することのない代物だ。おそらくどこかに封印されていた魔獣の肉体の一部を使って、誰かがよみがえらせた使役だろうが……だとしたら、そいつのところにラゼールはあるはずだ」

他に村を襲う理由などないのだからな、とティアは淡々と語る。

死霊術師やその家族が暮らしているという以外は、とりたてて変わったところもない小さな村だった。周辺には他の村もなく、そこまで強い恨みを買うほどの人とかかわりは持っていなかった。

「私は、モンドステイーンのただ一人の生き残りとして、絶対にラゼールを取り戻さなくてはならない——他の一族の力でもなんでも利用してな。そのためには、次期族長の肩書きが必要不可欠だ

つたというのも理由の一つだ」

「……そうか」

他にどう言っていいいかわからず、レイトはそれだけを返す。

沈痛な表情を浮かべた顔をティアは黙って見上げ、ちよいちよいと手招きすると素直に身を屈めたレイトの額をぺちんと音を立てて叩いた。

「な……っ！」

「しけた顔をするな。別にお前の親類縁者が皆殺しにあつたわけでもあるまいし。それにもう七年も前の話だ」

「そりゃ、そうだろうけど……」

「第一 ラゼール を取り戻すまでは、おちおち悲しんでもいられないさ。もし悪用でもされたらと思うとな」

「げんそうな顔のレイトの前で、ティアは険しい光を瞳にのぞかせて言う。」

「ラゼール というのは、七百年以上前に死霊術師の開祖となるレキシア・コルムスが太古の神殿で発見した知識の宝珠だ。現在の死霊術のもととなった、すべての呪文とその構成式がそこには収められているんだ。それだけじゃない—— ラゼール には、それを持つ人間の魔力を何倍にも増幅させる力もある」

ティアの眉間に、くつきりとした皺が刻み込まれる。

「宝珠の知識と合わせれば、何百何千という死者をよみがえらせて不死身の軍勢を作ること、生きている人間の寿命を限りなく長く伸ばすこともできる。他にも危険な術はたくさんあるんだ—— ラゼール に収められていた術の大半が、危険すぎて一般の術師には伝授できないものばかりなんだからな」

「……てことは」

ティアの言葉を理解するのとともに、レイトの顔に浮かぶ表情も険しくなっていた。

「そう。放っておけばどれだけの騒ぎになることか……七年間もの間、なにも起きてないことのほうが不思議なくらいだ。もつとも、そんな派手な騒ぎが起きていれば、こちらも ラゼール を探すのにここまで苦労しなくても良かったのだろうが」

あながち冗談でもなさそうな口調で、ため息とともにティアは物騒な台詞を吐く。

おいおい、と眉を寄せるレイトに目を向けようとせず、彼女は己自身に言い聞かせるようにはつきりと言葉を口にした。

「とにかく——第二のレキシア・コルムスの誕生なんて事態を、みすみす見逃すわけにはいかない。なによりも ラゼール の回収が優先だ。死んだ者たちには悪いが、今はそれ以上のことなど考えている余裕がない」

「レキシア・コルムスって……さっき言っていた開祖の名前じゃ？」

「ああ、そうだ」

奇妙な顔をするレイトに、ティアは表情を動かさずに言った。

「ラゼール から得た知識をもとに、現在の死霊術の基礎を作り上げた我々死霊術師の開祖——だが、晩年は完全に ラゼール の力の虜となつて暴虐の限りを尽くしたため、彼の身内と弟子が力を合わせて彼を殺したんだ——その子孫が、私たち現在の死霊術師ということになる」

「……そう、か」

淡々とした声音に、妙な迫力めいたものを感じてレイトは硬い表情でうなずく。

ティアはその顔をいやに深い眼差しで見つめてから、ふっと興味

を失ったように視線を手元に移して言った。

「そういうわけで、目下の最重要課題は七年前の事件の犯人とラゼールを見つけ出すことだな。各一族に通達を出してそれらしい術師を探しているところだが……修行途中で逃げ出してそのまま行方不明になる者などもいるから、ちよつと難航している。そのあと自力で術を会得して、あまり大つぴらに言えないような仕事を引き受けたり、他の人間に術を教えたりするはぐれ術師って連中がけっこういるんだ」

テーブルの上に置いたカップを取り上げ、すっかり温くなった茶を一口含んでティアは続ける。

「あとは魔獣のセンだが——魔獣というのはこの世界の理とは異なるところに存在する、一種の疑似生命だ。どこか他の世界から紛れ込んできたとも言われるが、正確なところは誰にもわからない——わかつているのは、それが通常のやり方では決して殺せないということだけだ」

「……殺せない？」

「肉体の活動が止まっても、そのうちにまた復活する。だから、たいていの場合は特殊な封印をほどこした上で、死骸の上に神殿とか祠とか——時には城を建ててしまったりするわけだ。特に力の強い魔獣の場合はな。七年前に村を襲った魔獣も、おそらくそうやって封印されていたもののはずだ。あんな魔獣が自由にそこらを歩き回っていたなら、それが私たちの耳に入っていないわけがない」

魔獣の大半はひどく凶暴で、人間を見ると見さかいなく襲いかかってくるという。

そんな危険な獣が野放しになっていたなら、必ずどこかで人が襲われて大騒ぎになっていたはずだとティアは言った。

「けど魔獣の封印は、すべて嚴重に監視されている——強大な力を持つものならなおさらに。封印を破って、魔獣の死骸を持ち出した人間がいたなら、おそらく事件として記録に残っているはずだ。もしも、封印を管理している側の人間に協力者がいたなら話は別だが——その可能性も一応考えて、調査してもらっている」

「そうか……」

まだ半分呑み込めていない顔つきながら、レイトは素直にうなずきを返す。

その鼻先に、ティアは指を突きつけた。

「だから、この人間とよけいな悶着を起こさないように。さっきの態度を見ていたら、まるきり喧嘩を売っているようにしか思えなかったぞ。子供じゃあるまいし、片っ端から突っかかっていくような真似はするな」

「別に、突っかかりたりなんか……」

「あれだけ露骨にガン飛ばしておいてなにを言う。叔父上が戻ってくるまでの間、ここで世話になるんだから——あんまり居心地は良くないかもしれないが、短気は起こさないように心しておけ」

「へいへい……」

投げやりに返事をしながら、レイトは先程イアンが見せた表情を思い出していた。

まるで道具でも見やるような、関心のない目つき——それが崩れたのは、レイトが自分から彼に話しかけた時だけだった。

（そういえば、妙に驚いていたな……）

奇妙な違和感を感じたが、レイトは深くは考えなかった。

数日間同じ屋根の下で生活することになるとはいえ、できるだけ顔を合わせないようにしておけばすむことだ。

そのため、レイトはティアの言葉の意味には気づかなかった。

それに気づいたのは数時間後、屋敷の他の者たちと顔を合わせてからのことであった。

2・2 ティアの事情（後書き）

長台詞ばかりで申し訳ありません（汗） ティアはけっこう喋るキャラなので、黙って放っておいたらかなり喋ります。

……言いたくないことはしっかり黙秘しますけどね（あと関係ない話でごまかすことも）。

2 - 3 月下の遭遇

回廊の床を、青ざめた月の光が照らしている。

そこにくつきりと影を落とすのは、飾りのない幾本もの柱。横たわる闇の深さが、光に照らされる床の白さをなお強調する。

白と黒の境界線を、汚れた革靴が無造作に横切った。

影そのものが人影と化したようなその人物は、黒の上下を身にまとったレイトだった。

真新しいその衣服は、部屋に用意してあったものだ。小汚い格好で屋敷の中をうろつくなど暗に言われたようで、多少むかつ腹が立ったものの、服に罪はないと思い直して大人しく着替えた次第だった。

靴までは気が回らなかったようだが、それほど傷んでいるわけではないので問題はないだろう。泥を落とさずにいるのは、レイトのささやかな意地である。

「に、しても……」

広々とした庭を、やや呆れた思いでレイトは眺めやった。

小さな家が一軒入ってしまうような広さの庭だが、隅々まで手入れが行き届いている。深夜に近いこの時刻、人気がないのは当たり前だが、それにもかかわらずあちこちにしつらえられたランプが明

々と光を放っている。

そのランプ自体、硝子の覆いのついた手の込んだ細工の品物だ。庭でこれなのだから、邸内がさらに贅沢に整えられているのはむしろ当然だった。

決して派手ではないが、見るからに高価とわかる調度品の数々。床は廊下にいたるまで厚手の絨毯が敷き詰められ、すべての部屋の窓に薄い透かし編みと、刺繍入りの二種類のカーテンがかけられている。

（本当にもうかっているらしいな……）

皮肉に満ちた呟きを、レイトは胸の内側で洩らした。

それは、この屋敷の人々の彼に対する態度にも向けられたものだった。

見慣れない人間に対し、使用人と思われる男女が警戒の目を向けるのは別に奇妙なことではない。レイトもそれについてはなんとも思わなかった。

しかし、それ以外の人々——特にティアと同じような、黒の長衣を身につけた者たちがレイトを見る目つきは、明らかに人間を見るものではなかった。

確かに、一度死んでよみがえった自分は、正確には人間とはいえないだろうが——

（……まるで、ものでも見るような目で見やがって）

そのくせ、レイトが自分の意志で動いていることがわかった、ぎよつとしたような顔で目をそらすのだ。

（つたく……）

レイトにも部屋を用意するよう、ティアが言い出した時のことを彼は思い出す。

頼まれたイアンは、最初なにを言っているのかわからないという顔つきでティアを見返し、やがて口に出した言葉はこのようなものだった。

『そんなものに、部屋を用意する必要なんかないだろう？』

見下したり、嘲ったりといった口調ですらなかった。ごく当たり前のことを言うような口調と表情に、レイトは怒りを覚えるよりも先に呆気にとられたのだった。

ティアが頑として部屋を用意するよう要求していなかったら、レイトは間違いなく床で寝起きすることになっていただろう。

用意された部屋も、寝台が一つおいてあるだけの殺風景なものだったが、隙間風などがないぶん道中何度か泊まった宿の部屋よりは上等と言えた。ティアに用意された部屋からも、それほど離れてはいない。

ティアが夕食のあと部屋に引き下がると、レイトも自分に与えられた部屋でぼんやりと時間をつぶし、邸内が寝静まった頃合いを見計らって部屋を抜け出したのだった。

どうしてそんな行動に出たのか、自分でも理由はわからなかった。しかし邸内を歩いているうちに、無意識にその構造や警備態勢に目を配っている自分に気づき、それが自分のしたかったことだとレイトは悟った。

（どうやら、記憶をなくす前の俺はずいぶん用心深い男だったらしいな）

よく考えてみると、最初にあの洞窟で目が覚めた時も、きわめて慎重に身体を動かしていた気がする。

以前の自分は、ティアの言うように泥棒とまではいなくても、あまり世間に顔向けできるような職業ではなかったのかもしれない。

そんなことを考えながら、もとの部屋へと足向けようとした時だった。

「きゃっ！」

廊下の角から出てきた人物と、レイトの身体がまともにぶつかった。

深夜で人が少ないこともあって、油断していたのだろう。レイトはたたらを踏んだものの、すぐに体勢を立て直して相手の様子へと目をやる。

相手はやや早足で歩いていたらしく、ぶつかった勢いで後方へと跳ね飛ばされていた。

レイトとの、体格の差もあっただろう——床の上にへたりこんでいたのは、十代後半と見られる華奢な身体つきの少女だったのだ。転倒したはずみで取り落としたのだろう、数冊の本がその周囲に散らばっている。

「悪い、大丈夫か？」

少女に向かって手をさしのべながら、レイトは声をかけた。

はっとしたように少女が顔を上げ、同時にレイトはその顔から視線を離せなくなった。

「ご、ごめんなさい」

怯えたように答える少女は、一言で言っていたいへんな美少女だったのだ。

二つに分けて編んだ長い髪は、朝の陽光のようなごく淡い金。廊下のわずかな照明にも映える白い肌に、絶妙なバランスで配された繊細な目鼻立ち。軽く見開かれた瞳は吸い込まれそうな深い空色で、長い睫毛がその中に影を落としている。

惜しむらくは、これだけの美少女にもかかわらず着ているのは丈の短い灰色の上着に、すとした紺色のズボンという地味な服装だということだった。

それでも、折れそうに細い手足首や、それとは対照的に豊かな胸元や腰の線ははっきり見て取れる。

ぽかんとしたように自分を見つめるレイトを、少女はまばたきもせずに妙にまっすぐなまなざしで見つめ返した。

その視線を受けて、レイトはようやく我に返った。

「あ……」

とはいえ、今度は少女のほうでレイトから視線を動かさず、レイトはきまり悪い思いでその顔を見つめる。

「……な、なにか？」

どきまぎしながらそう言うと、少女の顔があつと赤く染まった。

レイトに負けないほどうろたえた様子で、彼女はあたふたとそのへんの床に手を伸ばしながら言った。

「あ、あ、あの……」う、ごめんなさい！　ぶしつけにじろじろ見てしまつて！」

「え？　いや……」

少女の慌てぶりに困惑しながら、レイトは答える。

「それは別にいいんだけどな、こんな顔でもよければ好きなだけ見てて……第一そんなお互い様だろ？」

「はい？ いえ、あの……そんなことはないです。それに、ぶつかったのだって私がちゃんと前を見ていなかったせいですから」

「仕方ねえだろ、それだって。こんだけ暗いんだから」

それでも、この屋敷の中は深夜にも関わらず、よそに比べれば過分ほどの照明が各所に点されているのである。

うなだれた少女の前にレイトは膝をつき、散らばった本を拾い集めてやった。

「ほらよ」

差し出した本を受け取ろうと、出しかけた手を少女は止めた。

その手を軽く羽織った上着の内懷に入れ、ごそごそと探ったあとほっとしたような顔でそこからなにか取り出す。

それは、丸く磨いた二つのレンズを金属の枠でつないだ器具だった。

「あ……」

取り出した器具を顔にかけた少女を見て、やっとレイトは彼女の正体に思い当たった。

「あんた、確か……」

「ああ、やつぱり」

少女もレンズ越しにレイトの顔を見て、納得したような声を出す。

「あのイアンとかいう奴の妹……だったな。名前はええと、なんて言ったか……」

「イリスです」

レンズで隠されていない口元に、ほのかな笑みが浮かぶ。

「イリス・ミューゲル・エルフォンベイン。あなたはティア姉——ティア様と一緒にいらした方でしたよね？」

「方なんて呼ばれるような、立派なモンじゃねえけどな」

苦笑と自嘲の混ざる笑みを、レイトは顔に浮かべる。

その態度に、イリスは少しだけ寂しそうな表情を瞳にのぞかせた。それはレイトの言葉が、なにに起因しているのか察するがゆえの表情だとわかった。

彼女の反応に、レイトはやや調子が狂ったような気分で視線をそらす。

夕食の時に一応紹介されていたにもかかわらず、すぐに彼女だと気づくことができなかったのは、その顔にかけた視力矯正のための器具のためだった。

ひどい近視で、眼鏡というその器具がなければ、ものの輪郭を見て取ることすら満足にできないらしい。夕食の席でかけていたその眼鏡がなかったため——というより、眼鏡の印象があまりにも強すぎて——素顔の彼女を見ても、そうと気づけなかったのだ。

彼女がレイトの顔を即座に判別することができなかったのも、眼鏡をかけていなかったのが理由だろう。おそらく慣れた家の中で、眼鏡がなくてもさほど支障がなかったため外していたのだろうが——

「すみません」

表情を曇らせたまま、イリスは重ねた本を受け取った。

一冊一冊の厚さがかなりあるため、男性のレイトの腕にもずしりと重いそれを、落とさないようしっかりと両腕で抱えて彼女は立ち上がる。

——その途中で、身体のバランスを崩して彼女はよろめいた。反射的に手をつきかけて、抱えていた本がばさばさと床に落ちる。

それに氣を取られて無防備に転倒しそうになったイリスの腕を、レイトが素早くつかんで身体を支えた。

「……大丈夫か？」

少々呆れてレイトが言うと、イリスは再び顔を真っ赤にした。

「あ、ありがとうございます。どうもすみません……」

「謝るか礼を言うのか、どちらか一つに統一したほうがいいんじゃないのか？」

「ご、ごめんなさい！」

「……謝ることにしたってんなら、まあ別にかまわないけどな」

苦笑を浮かべながら、レイトは床に落ちた本をもう一度拾い集めて、自力でまっすぐに立ったイリスに手渡す。

「ほら、今度は落とすなよ」

「はい、すみません。ありがとうございます……」

言いかけて、イリスは思わずというように口元を手で押さえる。

その手から本が音を立てて床に滑り落ち、もはや笑うしかない気分ではレイトは泣き出しそんな顔のイリスを見やった。

2 - 3 月下の遭遇（後書き）

眼鏡っ娘登場です。眼鏡っ娘でしかもドジっ娘とはどこまで頑張ってたんだ過去の自分、と思うんですが、文章のせいにかまったく萌えがありません（苦笑）

なんなんだろう、この地味さ加減は……

2 - 4 ティアの事情 2

「取って食ったりしねえから、まず落ち着けよ。とりあえず、深呼吸でもして」

「は、はい……」

言われるままに、イリスは胸に手を当てて深い呼吸を繰り返す。

「……少し、落ち着いたかもしれないような気分です」

「そいつはなによりだ」

手で押さえた胸元の豊かさに思わず視線が釘付けとなり、レイトはやや上の空といった口調で答えた。

同時に、彼はイリスに対して感じていた違和感の正体に気づいた。この屋敷の者たちが自分に向ける視線と、彼女が自分に向ける視線は明らかに異なった種類のものだったのだ。

そこには見知らぬ相手に対する気後れと、ほのかな好奇心——理由はわからないが好意めいたものさえのぞいている。

（俺が死人だってことは、この娘も知ってるはずなんだが……まさか忘れてるってことはないかな？）

内心で危ぶみながら、レイトはあらためて名乗りを上げた。

「俺は——知っていると思うが、レイトだ。あのクソガキにそう名付けられちゃってな」

「ク……」

イリスはわずかに目を見はってから、たしなめるような口調で言った。

「そんな言い方しないでください。ところで——名付けられたというのは？」

「あ？ ああ…… よみがえった時に、記憶がまるごと消えちまったんだよ。で、呼ぶのに不便だからってあのガキ、こじつけみたいな理由で適当に人の名前を決めやがった。もしかしたら記憶が戻るかもなんてことも言ってたが、全然戻る気配なんてないじゃねえか」
顔をしかめるレイトを、イリスはまじまじと見返してやがて深いため息をついた。

「……ティア姉様って、やっぱりすごいわ」

「は？」

「そう言われなければ、よみがえった死者だなんてとても思えませんが。死霊術師としての訓練を受けた者なら、目の前にいるのが生者なのか死者なのか一目でわかります。なのにあなたは…… 私たちでもよほど注意して見ないと、どちらなのか判断できない。ここまで見事な術を使える術師は、世界中探したって何人もいないはずですよ」

「いや…… そうじゃなくて」
熱のこもったイリスの長広舌を、レイトは手をかざしてさえぎった。

「そこじゃなくて、その前…… 『姉様』 って呼んでただろう？ あんた、あのイアンって奴の妹なんじゃ？」

いや、ティアが奴と結婚したら確かに妹ということになるだろうが…… とレイトは首をかしげながら呟く。

それを聞くイリスの顔が、みるみるうちに赤くなった。

「……ごめんなさい、癖なんです」

蚊の鳴くような声で、彼女は答えた。

「小さい頃から、ずっとそう呼んでいたものですから……ティア姉——ティア様には実の妹のように可愛がってもらいましたし、兄様との婚約が決まった時は、これで本当に私の姉様になってくれるのだと思って、嬉しくて……今になってもつい、その頃と同じように呼んでしまうんです」

「ああ、そう……」

視線をそらして言うてから、レイトはふと真剣なまなざしをイリスへと向けた。

「……なあ、ちょっと聞いていいか？」

「はい？」

「ティアの奴……あいつ、本当はいくつなんだ？」

質問の意味が理解できないといった瞳で、イリスはレイトを見返した。

「あんたも、あんたの兄貴もずいぶん年上の相手に対するようにあいつに接してるだろ？ 見たままの子供じゃないってことは、もう薄々わかってるけどな……まさか百歳を超えてるなんてことはないよな？」

「まさか」

驚いたような顔で否定してから、イリスは後ろめたそうな表情になった。

「あの……そういうことは、ご本人の口からお聞きになったほうがいいんじゃないですか？ こんなふうに、陰で他の人に聞いたりせずに……」

「たぶん、聞いたら頭蓋骨が粉々になるほど殴られるぜ」

苦笑と情けなさが半々に入り混じる表情で言つて、レイトは内緒話をするようにぐつと声を低める。

「参考までに知つときただけだ。本人には死んだつて言わねえよ——ま、実際のところとつくに俺は死んでゐるらしいけどな」

悪戯っぽく片目を閉じてみせるレイトに、つられたようにイリスは頬をゆるめる。

わずかな間のあと、彼女はレイトの耳元に唇を寄せるようにして言つた。

「……今年で、二十五になれます」

「二十五？」

思つたより上であることに驚き、レイトはやや声を高くする。

（俺より年上なのか、もしかしたら……？）

「はい。肉体は七歳だそうです」

「……いつたいどうして？ まさか、自然に成長が止まつたとか……？」

「いえ……」

言葉を濁して、イリスはうかがうような目つきでレイトを見やつた。

「やはり、こんな話……やめておきましょう？ ご自分のいないところで、こんな話してるのをティア姉様が知つたらきつと気を悪くされます。やっぱりご本人にお聞きになつたほうが……」

「聞いても答えてくれそうにないから、他の人間に聞いてんだ」
むくれたような顔つきで、レイトは言う。

「旅の目的だつて、今日初めて聞いたくらいだぜ。そのために人をよみがえらせたくせに——あんたから聞いたつてことは、絶対言わねえよ。もしも知っているなら……話しちゃくれないか？」

イリスはしばらくの間、身じろぎもせずにレイトの顔を見返す。そこになにを見いだしたのか、やがて彼女は私も詳しくは知らないのですが、と前置きして話を始めた。

「七年前のことは、ご存知ですか？」

「ああ……ティアから聞いた」

「あの時、村にいたモンドステイン一族はみな殺されました。生き残ったのは、ティア姉様ただ一人——でも、姉様もまったく無事だったというわけではなかったんです。村を襲った魔獣と戦い、命を失いかねないほどの重傷を負った姉様は……気がついた時には、生まれたばかりの赤ん坊になっていたというんです」

「……赤ん坊？」

「ええ。その理由は、姉様にもわからないんだそうです。魔獣と戦ってひどい怪我をしたところまでは覚えているのだけど、そこで意識を失って——再び意識をとりもどした時には、赤ん坊の身体になってどことも知れぬ山の中で声を限りに泣いていた、と」

語られる事実のあまりの重さに、レイトは思わず声を失う。

イリスはそんな彼の顔を、曇りのない空色の瞳で見返して言葉を続けた。

「事件の時、私はまだ十歳になったばかりの子供で……だから、これはあとで知ったことなんです。当時、父や他の術師たちは村でなにが起きたのか知ろうとして、亡くなった人たちの魂を呼び出したのだそうです。でもほとんどの人は、突然現れた魔獣に襲われた

ということしか語らず、唯一詳しいことを知っていそうな族長の魂は、何度呼びかけても召還には応じなかった――と」

胸の前で組んだ両手を、イリスはぎゅっと握りしめた。

「魂さえも消滅してしまっただのか、それとも召還に応えられない理由がなにか他にあったのか……どちらにせよ、私たちにはもうその時のことを知る手だては残されていません」

「……そうか」

どうにか、その一言だけをレイトは返す。

「あ……ありがとうな、色々話してくれて」

「い、いいえ」

沈んでいたイリスの顔に、再びさつと朱の色が差した。

「そんな……お礼を言われるほどのことじゃありません。このくらい、この屋敷にいる者でしたら誰でも知っていますし」

「こうやって、まともに話をしてくれる人間自体ここでは貴重なんだよ」

苦いものを含んだレイトの声に、イリスは目を伏せてすみません、と言った。

「いや、別にあんたが謝るようなことじゃあ……」

「死霊術師にとって、死者は使役するためのただの道具なんです。そう教えられていますから――そのほうが生きている人間にとって都合もいいです。だからほとんどの場合、意志や人格を持った状態で死者をよみがえらせるようなこともしません。よけいな手間もかかりますし……レイトさんみたいに、はっきりとした意志を持った死者をよみがえらせようと思ったら、普通なら準備に一年くらい

かかります」

「……ティアの奴は、片手間にできたようなことを言ってたぞ」

思わずぼそりと言うと、イリスはほのかな微笑を浮かべて、だからティア姉様はすごいんです、と答えた。

「私は死霊術師としては半人前で……死者をただの道具と思うことにも、正直言つてかなりの抵抗があります。目の前で動いて喋っている相手を、単なる人の形をした道具と思うのは……父様や兄様にも、それでよく叱られます。私のそれは、人形や愛用の道具に思入れを持つ気持ちと変わらないのだと」

「……」

レイトはわずかに眉を寄せてイリスの顔を見つめ、やがてふっと口元の力を抜いて声を放った。

「だったら、半人前ばんざいつて気分だな、俺は」

「……え？」

「この屋敷に来てから、ここまで人間らしい扱いを受けたのは初めてだぜ？　だったら、あんたが半人前だったことに俺は感謝したいね。それでできれば、ずっと半人前のままでいてくれよ。技術の面じゃなくて、気持ちの上ですつと——な」

ぱちぱちと大きな目をまばたかせ、イリスはレイトの顔を凝視する。

少し格好をつけすぎたかと、内心レイトは照れくさい思いでその視線を受け止めたが、イリスはそれには気づかぬ様子でにっこりと笑った。

分厚い眼鏡越しでも、思わず見とれそうになるほど魅力的な笑みだった。

「ありがとう、レイトさん」

その笑みに目を奪われたまま、レイトはおう、と答えかけて慌てて首を振った。

「いや、礼を言うのは俺だろ」

「いいえ——それから、ティア姉様のことをよろしくお願いしますね。言葉や態度はちよつと乱暴かもしれませんが、本当はとても優しい方なんです」

「……ちよつとか、あれが？」

真顔でそう呟いてから、レイトはイリスに心配すんな、と笑顔を見せた。

「あいつの性格はともかく、俺の命を握っているのはあいつらしいからな。見捨てたりはしないさ——それに、中身はどうあれ子供の姿をした奴が泣いたり、傷ついたりするのを見るのは俺も好きじゃない。しっかり守ってやるから安心しろ」

「はい！」

うなずいたイリスの顔に浮かんだ笑みは、これまで見せた中で一番明るいものだった。

知らず口元の笑みを深めながら、レイトは足下に散らばった本を拾い集める。

今度はイリスに渡そうとせず、重ねた本をしっかりとその腕に抱えたままレイトは彼女へと顔を向けた。

「あ……あの、本」

「あんたが持つと、何回落つことすかわからないからな。部屋まで運んでやるよ」

「え？ いえ……悪いです、そんな」

「なに、打ち明け話の礼だ——それに」

イリスを見やる目に、レイトはどこか情けなさそうな——やや芝居がかった悪戯っ気も感じられる笑みをのぞかせた。

「実を言うと、戻る道がわからなくて困っていたところなんだ。部屋まで送る代わりに、ティアの部屋がどっちのほうだったか教えてくれないか？」

2 - 4 ティアの事情 2 (後書き)

やる気のないタイトルですみません。なんかぴったりくるのが思いつかなかったもので…… (汗)
いっそ数字だけで、タイトルつけない方がよかったかも……

2 - 5 封印の神殿

屋敷の主人であるモルト・フェーン・エルフォンベインが帰宅したのは、ティアたちが逗留を始めて三日目のことだった。

ティアの予想通り、まず最初に長々とした説教の洗礼を受ける。勝手に屋敷を抜け出し、ろくに連絡も取らなかったことについてはティアも多少の後ろめたさを感じていたらしく、大人しく説教に耳を傾けていた。

しかし、その口が発した一つの言葉がティアの表情を一変させた。

「……封印の神殿？ ラクシアに？」

「ええ」

首肯するモルト・フェーンは四十代半ばのいかにも切れ者といった男性だった。

よく手入れされた茶色の髪と、同色の髭が年齢相応の落ち着きと威厳とを感じさせる。物静かなたたずまいは学者めいた、いかにも線の細そうな印象も与えたが、淡い色合いの碧眼にのぞく光は異様なくらいに強かった。

その瞳を恐れげもなく見返して、ティアは勢い込んで言った。

「どんな魔獣が封印されていたかわかる？」

「いえ、そこまでは……本格的な調査はこれからですので」

「神殿つてことは、ディニス神殿と関わりがあるのかな？ それとも別系統の？」

「今はまだ……その存在が明らかになったというだけで、詳しいことはなにも。おそらくディニス神殿とは無関係のものと思われますが——形式がはるかに古い年代のものなので。今は使われておらず、廃墟同然になっっているのだそうです」

「キナ臭いな」

ティアは表情を動かさずに、端的な感想を口にした。

「魔獣の封印を有する神殿が、管理もされず廃墟同然になっているなんて。ちよつと普通じゃ考えられない——何者かの意図が関与しているともいうのなら別だけど」

「その可能性も考えられますが……」

控えめな口調で、モルトは異議を述べた。

「ラクシアには、はつきりしているものだけでも大小含め千以上の封印があります。偶然管理の手をこぼれ落ちたものが、一つもないとは言い切れないでしょう。もちろん、あらゆる可能性を考慮した上で、調査に乗り出すべきだとは思いますが……」

「まあ、そうだな」

自らの意見に固執することなく、ティアはあっさりとうなずく。

「調査してみないことには、なにも言えん。そのあたりは他の封印となにも変わらないか——ただ、ラクシアという点が少し引つかかる。確かあそこの皇帝は、もうかなりの高齢だったはずだ」

「ええ……八十を越えているはずですよ。まだ健勝ではあるのですが」

「はぐれ死霊術師あたりに、不老不死すらも可能にする　レーザーの存在を知らされてうっかりその気になった……なんてことも、ないと言い切れん。まだまだ自身の強大な権力を、手放す気などないだろうからな」

切れそうな笑みをその顔に浮かべて、ティアは言葉を放つ。
テーブル越しに向かい合った少女の、幼い顔と不釣り合いな笑み
と言葉にモルトはぎよっとしたような表情をのぞかせた。

「とにかく、まずは調査からだ」

叔父のそんな表情にかまうことなく、ティアは今にも席を立ちそ
うな素振りと言った。

「見つかった封印の神殿が、どこかの記録に残っていないか調べて
——ああ、ラクシアに行ったほうが早いな。記録をこちらに送って
もらうより、直接行ったほうが正確な記録が手に入るだろうし……
ラクシアの王宮の情報も集めないと」

「……ティア様」

低い声に、奇妙な凄みを漂わせてモルトは呼びかけた。

「まさかとは思いますが……ご自分で、ラクシアに乗り込まれるお
つもりですか？」

「だって人手不足だろう？」

いかにも子供らしい、無邪気な笑みを浮かべてティアは答えたが、
モルトは当然そんなものにはごまかされなかった。

「なにをおっしゃいます。ご自分の今の姿を忘れたのですか？ モ
ンドステインの次期族長であろうと、あなたの肉体が七歳の子供
であることに変わりはないのですよ？ 第一そのような子供が死霊
術師として訪れても、すんなり信用する人間などおりません」

「意外と信用されそうな気もするがな。死霊術師なら肉体の年齢を
操作することくらい、朝飯前だと思われるんじゃないのか？」

「ティア様！」

首を縮めて怒鳴り声をやり過ごしてから、ティアはその顔に浮かんでいた悪戯っ子そのままの笑みを消した。

「危険だということはわかっている——もしラクシアの上層部に、七年前の件に関わりを持つ者がいたとしたら、モンドステイーンの生き残りである私を黙って帰すようなことはしないだろうから」「それがわかっていながら、なぜ……」

「だが——他の誰が行ったところで、それは変わらないはずだ」

鋭く貫くような光を、ティアは瞳にのぞかせた。

「だったら、私が調査に出向いたほうがいい——下手をすれば、この人手が足りない時に貴重な人材をあたたら失うことになりかねん」

「我々にとつて、あなたを失う以上の損失はないのですぞ！」

「それでも、私が一番無事に戻ってこられる確率が高いはずだ。というか、私が戻れなくなるようなところなら、他の誰を向かわせたところで無駄だろう」

「ティ……」

「これは、次期族長としての命令だ」

なおも言いすぎるうとするモルトに、ティアはきっぱりと言い放った。

「そんなところに回す人手があるなら、他のところに回してくれ。まだラクシアが本命と決まったわけでもないのだから。無駄足に終わる可能性だってある——その時に備えて他の国についても、できる限り情報を集めておいてくれ」

火花が散るような二人のやりとりを、少し後ろに立ってレイトは眺めていた。

部屋には他に、モルトの後ろに難しい顔をして立っているイアン
の姿がある。彼はつい先程まで、言葉を尽くしてティアに思いとど
まるよう説得を続けていたのだった。

やがて、モルトは頭を振ってため息混じりの声を発した。

「こうなると……私としては、ラクシアが事件とはまったく関わり
を持っていないことを願うしかありません」

「私の願いは逆だがな——あそこが黒幕なら、これで一気にカタを
つけることができる」

眉を上げたモルトが再び大声を出すよりも早く、ティアは舌を出
して冗談だ、と笑った。

「冗談にもほどが……」

「大丈夫だ。確証を得たら大人しく退いて、援軍が到着するのを待
つさ。私にだってそのくらいの分別はある」

そう願いたいものですな、と渋面で言ってから、モルトは案じる
ような光を瞳にのぞかせてティアの顔を見た。

「どうしてもラクシアへ行かれるつもりなのでしたら……せめて、
護衛だけでもお連れになっただけませんか？ そのような死者
一人連れただけでは、あまりに不用心です。最近では、街道も色々
と物騒だと聞きますし……」

「なに、心配ないさ」

手を振って、ティアはあっさりと申し出を断った。

「大人数でぞろぞろ歩いていたほうが、目についてよほど危ないと思
うぞ。ここに来るまで、危ないと思うようなことはなに一つなか
ったんだし……」

「それは単純に、運が良かったというだけのことでしょ。運の存在
を否定するつもりはありませんが、運にすべてをゆだねてしまう

のは愚か者の所行です。あなたはもつとご自分の身を大切にすべきです」

あどけないといってもいい少女の顔をその目に映し、モルトは苦みと自嘲の入り混ざる複雑な口調で言った。

「我々はそれほどまでに頼りないですか？ なにかも、自分一人で背負い込もうとするのはおやめ下さい——七年前のことで、あなたを責める者は誰一人おりません。あなたが全力を尽くしたことを我々は知っています。先程のあなたの言葉ではありませんが、他の誰があの場合にいたとしても、村を守ることはかなわなかったでしょう」

唇を引き結んだまま、ティアは答えない。

「死霊術師として、あなたにかなう者はありません——それは事実です。ですが、我々はそれでもあなたの力になりたいのです。あなたがモンドステインの長となる人物だからではなく……それが人として正しいことだと思うから。年少者に対し年長者が、手を差し伸べたいと思うのはそれほど奇妙なことでしょうか？ ましてその相手が、年端もゆかぬ幼子の姿をしているとあっては」

真摯に告げる叔父の姿を、ティアは感情を表に出さない瞳で見やっ

つた。
やがて彼女は、困ったような笑みを口元に浮かべて言った。

「ありがとう、叔父上」

モルトの顔に喜色がのぞいたが、彼が口を開くよりも早くティアは言葉を続けた。

「だが、護衛の件はお断りする。そうでなくても人手が足りていないのに、私のところに腕の立つ人間が集められれば、そのぶん他のところで守りが手薄になる。昨今は物騒だというならなおさら——戦力を偏らせるようなことはしてほしくない」

大きすぎる椅子の背に身を寄りかからせ、ティアは叔父の顔を見上げた。

「私なら大丈夫だ。術を使えば護衛はいくらでも調達できるのだし、レイトだって見た目ほど頼りないわけじゃない——だろ？」

突然視線と声とを投げかけられ、レイトはうなずくべきかどうか迷う。

出会ってから初めて誉め言葉らしきものをかけられたためでもあったが、同時に向けられたモルトの突き刺すような視線のためでもあった。

表情をこわばらせたままのレイトにはかまわず、ティアは話を切り上げようとするかのように強い語調で言った。

「とにかく、叔父上にはなによりまず増援の手配をお願いしたい。連絡員の手配もな——向こうに着いたら、すぐ連絡する」

なおも食い下がろうとしていたモルトが、その語調に圧されるように沈黙する。

どこか悄然とした叔父の様子を見やって、ティアは瞳に浮かぶ光をほんの少しだけやわらげた。

「私が出向くのは調査のためであって、別にラクシアに喧嘩を売りに行くわけじゃない。無茶なことはいさ。私だって自分の命が一番大切なんだ。自分の手に余ると判断したら、さっさと引き上げてくる」

ティアの顔をたっぷり十秒は見つめたあとで、モルトは深々とため息をついてそう願います、とだけ言った。

言葉とは裏腹に、まるで信じていないのがわかる口調だった。

2 - 5 封印の神殿（後書き）

ダンディな中年と7歳児の打々発止。

2 - 6 ラクシアへ

「じゃあ、あとは頼んだぞ」

翌朝早くに、ティアとレイトはエルフォンベインの屋敷を出て行った。

モルトは外せぬ用事があるということで、前日の夜遅くに屋敷を出ていた。そのため、二人の見送りに来たのはイアンとイリスの兄妹のみだった。

「本当に気をつけて……なにかあったらすぐ連絡してくれ。できることなら、僕も一緒に行きたいくらいだけど」

「いや、気にするな」

しっかりと手を握りしめて言うイアンに、ティアはやや引きつった笑みを返す。

「仕事では仕方がないしな。それより、こっちの記録の照合をよろしく頼む」

「ああ」

イリスはレイトに向かって、お願いしますと深々と頭を下げていた。

「……わかったよ、任せておけ」

「はい」

控えめな笑みを浮かべたイリスは、分厚い眼鏡をかけていなかったこともあって咲いたばかりの花のように美しかった。

思わずぼうつとなりかけたところを、背後からティアが杖の一撃で正気に戻して二人は屋敷を離れる。

しばらく歩いたあとで、馬上からティアはぼそりと声を投げた。

「……イリスと、なにかあったのか？」

「はあ？」

「ずいぶん親しげにしていただろう？ 屋敷でも……親しくなるよ
うななにかがあったとしたか思えんのだが」

レイトはぼかんとした様子でティアの顔を見返してから、その口
元ににやりと意味ありげな笑みを浮かべた。

「気になるのか？」

「当たり前だ」

間髪入れず返された答えに、レイトはやや意外そうな表情を見せる。

「イリスは美人だし、スタイルも頭も性格も申し分ない。お前がの
ぼせるのは勝手だが、妙な気を起こしてみろ——よみがえってきた
ことを後悔するような目にあわせてやるからな。イリスは私にとつ
て、実の妹も同然なんだから」

その声にまぎれもない本気の響きを感じ取って、レイトは内心で
冷や汗をにじませた。

「死霊術師としての腕も悪くはないんだが、気持ちが悪すぎるの
が最大の欠点だな……それに、押しに弱くて強く出られると逆らえ
ない傾向もある。困ったことに、そこに付け入ろうとするタチの悪

い男が多くな」

冷やかな目を向けられ、レイトはぎくりと身をすくませる。
しばらく視線をさまよわせたあとで、彼はティアの顔を見ないまま観念したように口を開いた。

「……どうしてわかったんだよ？」

「昨日の朝からイリスの様子がおかしかったからな。無理に聞き出そうとは思わなかったが、だいたいの予想はついていた。基本的に善良だからな、あまり隠し事には向いていないんだ、あの子は」

そうかよ、と半分ふて腐れたような表情で言うレイトに、ティアは肩をすくめて言葉を投げやる。

「聞いてしまったものは仕方がない……が、今度同じような真似をしたら、脳天に風穴を開けてやる。そうすれば少しは、その腐った頭の風通しもよくなるだろう」

「おい……」

「イリスを巻き込んだりして——ものすごく後ろめたそうな顔をしていたんだぞ。少しは反省してもらわないとな」

言うなり、ティアは馬の背中にくりつけられていた荷物を外し、ぽんぽんとレイトに向かって放り投げた。

「ちょ、おいっ！」

「落とすなよ。一つでも落としたら、荷物の量を追加するぞ」

「ちよっと待てっ！」

非情な声に慌てふためきながら、レイトは突如として降ってきた

荷物を両手を伸ばして受け止めた。

決して小さくはない荷物が、レイトの腕に一つ二つと積み重なる。ずしりとかかる荷重に耐えながら、最後に放り投げられた包みをレイトは落ちる寸前で口にくわえた。

「ほう、たいしたものだ。大道芸人も顔負けだな」

「……お前なあ」

くわえた包みを首を振って荷物の再頂部に放りあげ、レイトは唸るような声をあげる。

「一つくらいは落とすかと思ったんだがな。荷物の追加はなしか——残念だ」

「これ以上、なにを追加する気だったんだよ……」

馬の背中にあつた荷物は、すべてレイトの腕に移動している。

げんなりとした顔のレイトに目をやって、ティアは思案するように首をかしげた。

「そうだな……荷物は全部持たせてしまったし、その辺の石でも足腰の鍛錬にもなつて一石二鳥だろう」

「冗談じゃねえ……」

第一、鍛えたって筋力がついたりするわけじゃねえだろう、とレイトはぼやく。

「そう思うんなら、今後は行動に気をつけることだな——聞きたいことがあるなら、直接私に聞けばすむことだろうが」

「聞いたって、素直に話さないくせに……」

「話すさ——気が向いたらな」

「それを、素直に話さないって言うんだよ」

反論の声をあげるレイトに、ティアはふふつと軽く笑って馬の腹を蹴る。

「——おいっ！」

非難めいた叫びに、ティアはちらとも目をやろつとはしなかった。速度を上げた黒馬のあとを、レイトは腕に荷物を抱えた不自由な体勢のまま、よろめくような足取りで追いかけていった。

2 - 6 ラクシアへ（後書き）

二章終了です。説明チックな会話文ばかりで申し訳ありません。
次はちょっとアクションが入る予定。

3 - 1 野党との遭遇

風を切って飛来する、一羽の影があつた。

黒褐色の翼を持つその鳥は、俗に月夜鳩と呼ばれる。風切り羽に一枚だけ、染め残したような白い羽があるのと、月さえ明るければ夜も飛べる特性のためだった。

今は昼間の空を横切って、鳩は目的地へと一直線に飛んでいく。

下方に広がる町並みの中に、その目的地はあつた。町外れの丘にぼつりと建っている、小綺麗な邸宅だ。

開かれた二階の窓辺に、羽音を立てて鳩が舞い降りる。

それを待っていたかのように、すつと差し出された手があつた。ゆつたりとした長衣の袖から出ているのは、節の立った男の手だ。窓枠に降り立った鳩の足から、男は小さな金属の円筒を外す。その中から丸められた紙片を取り出すと、広げてさつと目を通し男は口元に薄い笑みを浮かべた。

「……やはり、来るか」

呟く声は、その顔に浮かぶ笑みとは裏腹に凍えるほど冷たかった。紙片から視線を上げると、男は窓枠に留まったままの鳩へと手を伸ばした。鳩は慣れた様子で、差し出された男の腕に自分から近づき――

紙片を握り潰した手が、その首をつかんで容赦なくへし折った。

抵抗するようにばたついた両翼が、多量の羽毛をまき散らしたあと力を失ってだらりと垂れ下がる。

絶命した鳩の首をつかんだまま、男は反対の手を宙に差し伸べた。男にしては細い指には、いくつかの指輪がはまっている。その中でも人差し指にはめられた、大ぶりの指輪が特に目を引いた。

黒に近い紫色の石をはめこんだ、銀の指輪である。

丸く磨かれた石の大きさは親指の爪ほどもあり、炯々としたどこか不穏な光をまとっている。雷光の背景の空を思わせる色だった。

その指輪をはめた指で、男は宙に模様にも似た文字を描き出した。うつすらと光を帯びて宙に留まる文字は、一般的に用いられているものとは形も用途もまったく異なる。

形と音韻、その両方に魔力を宿したそれは『呪文』と呼ばれるものだった。

十六行からなる呪文を完成させると、男はぶら下げた鳩の死体の胸に指輪をはめた手を近づけた。

空中の文字が光を強めていくのと同時に、鳩の胸に血で描いたような文様が浮かび上がる。それは鳩の首をぐるりと一周したところで、強い朱色の輝きを放って黒褐色の羽毛の上に定着する。

最初からそこだけ別の色の羽であつたかのように、くつきりと浮
かんだその文様の色は鮮やかな真紅――

男はその完成を見届けもせず、手にした鳩の死骸を無造作に窓
の外へと放った。

生命なき肉の塊と化した鳩は、石のように墜落していく――と思
われた次の瞬間、その羽が力強くはばたいて空へと舞い上がった。
くちばしの端から血を滴らせたまま、鳩は大きく円を描いて部屋
へと戻ってくる。

「そのほうが早く飛べよう――行って伝えてくるといい。私はあの
城で待っている、と。用意を整えて、彼女がたどり着くのを待つて
いる」

笑みを浮かべた唇が、告げる言葉の内容を鳩は聞き取りにくい声
で繰り返す。

声帯の作りが、人間の言葉を話すようにはできていないためだっ
た。それでもなんとか聞き取れる範囲であることを確認して、男は
満足そうにうなづく。

放たれた矢のように飛び立っていく鳩を、男は窓辺に立ったまま、
その姿が完全に見えなくなるまで見送った。

なだらかな起伏の連なる草原の真ん中に、ティアとレイトの姿があった。

前後に伸びる道の幅は狭く、枯れ上がった草原にいまにも埋もれそうに見える。夕闇も迫るこの時刻、道の上には見渡す限り一人の姿もない。

傾いた陽射しに目を細めながら、レイトは今夜はここで野宿確定だな、などとぼんやり考えていた。

——そのため、近づく不穏な気配に気づくのが遅れた。

「あ……」

「遅い」

言葉の割に緊張感のない表情で、ティアがびしりと指摘する。

「悪い。けど、これ……」

「すっかり前も後ろも囲まれているぞ」

言ってから、ティアはなぜかわしげにため息をついた。

「まったく、見る目のない連中はこれだから嫌なんだ。私とお前の組み合わせを見れば、金になる獲物でないことくらい一目でわかるだろうに。なにをどう見たら、私たちが金を持っているように見えるんだ？」

見るからに立派な黒馬と、少なくとも見た目は申し分のない幼女のティアを売り払えばそれなりに金になるのでは、とレイトは内心

思ったが口には出さなかった。

「どうする？」

「さて、どうしようか」

かわりに問いかけると、ティアは首をかしげて呑気な声を返す。
レイトが眉を寄せたのは、挟み撃ちにあうという状況の深刻さがわかっていないように見えるその態度のためだった。

前後の敵に同時に襲いかかられば、防戦一方になるのは目に見えている。

そうなる前に、どちらか一方に先制攻撃をかけて突破をはかるのが、この場合最も有効だと考えたのだ。ティアへの問いかけもその意図を含んだものだったが、彼女はレイトの想像もつかない行動に出た。

すなわち、その場で馬を止めたのである。

「おい——！？」

「足止めを頼むぞ」

ひらひらと手を振ってから、ティアはその手を宙に滑らせる。

「三分間保ったら、誉めてやる」

一瞬の停滞もなく宙を滑る指先から、淡く光る複雑な紋様が生み出される。

それが自分の胸にあるものとよく似ていることに、レイトは一瞬遅れて気づいた。

だが、それについて話している余裕はなさそうだった。まばらに

生えた枯草を踏んで、十数人の男たちが二人を取り囲むように姿を現したのである。

「よう、あんたら兄妹か？」

髭面の下卑た笑みを浮かべて、大柄な男がそう声をかけてきた。

「馬を止めたのは正解だ。大人しくしてりや命までは取らねえ——少なくとも、妹のほうだけはな。まずは、その腰のものを捨てろ」

優位を確信してか、周囲の男たちの顔にも同様の笑みがある。

着ている衣服は粗末なものだったが、いかにも屈強な身体つきの男たちだ。その手には山刀や手斧などといった、物騒な代物が握られている。

「ありったけの荷物と金、それから着ているものを脱いでここに置きな。おかしな真似はするんじゃないぞ。こっちにや弓矢を持った仲間もついてるんだ。妹ともども針山みたいにはなりたくないだろう？」

包囲網の端に、弓矢を持った男がいることにはレイトも気づいていた。

せいぜい二、三名といったところで、男の言うように矢ぶすまになるほどの矢数はないだろうが、狙いを外すような距離でもない。

軽く天を仰いで、レイトは横目にティアを見やった。

彼女が目を閉じて、なにかに集中している様子なのを見て取ると、彼はため息をついて同情の混ざる声を男たちへ投げやった。

「あのな。これだけは言っておくが」

腰の剣を外して、地面へと放り投げながらレイトはごく真面目に答える。

「俺とそいつは兄妹でもなんでもない、赤の他人だ。というか、こんな凶暴な妹はたとえ大金を積まれたって欲しくねえぞ」

「……はあ？」

「それから、そいつをただの子供だと思ってたら痛い目を見ることになる——文字通り、あの世を見る羽目になるぜ」

3 - 1 野党との遭遇（後書き）

タイトルに半分ほど偽りあり。それと本格的な戦闘シーンは、結局次話に持ち越しとなりました。

3 - 2 野党との戦い

困惑した顔の男たちが、言葉の意味を理解するより早くレイトは動いた。

小さく鋭い動きで足下の小石を蹴り、目の前に居並ぶ男たちの中の一人に命中させる。

「——っ！」

眉間を割られた男はしゃがみこんで呻き、周囲の男たちの視線が彼に集中する。

はっとして、彼らがレイトに視線を戻した時には遅かった。

「ぐっ！」

最も近くにいた男の懷に飛び込むと、レイトはその胴体に拳を突き入れて、身を二つに折った男の手から山刀を取り上げる。奪った山刀をレイトは、離れた場所に立つ射手へと迷わずに投げつけた。回転しながら飛んでいった山刀は、射手の持つ弓の弦をすっぱりと両断する。

それを確認することなく、レイトは地面に身を伏せた。

別の射手が放った矢が、頭の上を通過していったのはその直後だ。レイトは一回転して起きあがると、すぐそばに立つ男の剣を持つ手

を蹴り上げる。

宙に舞った剣は、手品のように見事にレイトの手の中におさまった。

剣を手に、にやりと不敵な笑みを浮かべたのは一瞬のこと。

「うわっ！」

剣を奪われた男は、次の瞬間強烈な蹴りを下顎に食らって失神する。

殺気を込めた刃がレイトの身体に殺到したが、そのうちのひとつとして彼に傷を負わせることはできなかった。

獣のような動きで刃の下をかいくぐって、レイトは次々と男たちを殴り倒す。

射手を警戒して、常に男たちの身体を盾にするようにしながら、レイトは内心で自らの動きに舌を巻いていた。

疲れを感じないのは当然としても、この動きは絶対に素人のものではない。

一瞬の停滞もなく、考えるより先に身体が動く。身体に染みついたその動きは、明らかに実戦によって鍛え上げられたものだった。

心の中に初めて、自分の正体を不審に思う気持ちが湧いたが、それにかかりわずらっている余裕はなかった。

「ティア！」

反対側から、射手を含めた数人の男たちがティアに近づいていくのが見えたのだ。

「悪い、行つた！」

「まったく使えない奴だな——だが、三分はぎりぎり保つたか」

くすりと笑つて、ティアは閉じていた目を開いた。

その前には、ぼんやりと光る十二行の呪文が完成している。迫ってくる男たちを感情のない目で見返して、ティアは宙に差し伸べた手を無造作に横に払った。

同時に、呪文はほどけて糸状の光となり、男たちの身体に巻き付いていく。

それで動きを封じるのが目的かとレイトは思ったが、次の瞬間、次々と上がった絶叫が彼の考えを否定した。

「うわあああつ！」

「な、なんだこいつは——来るなっ！」

男たちは目の前の獲物のことも忘れて、ばたばたと手を振ったり悲鳴をあげて逃げ回ったりしている。中には手に持った武器を、無茶苦茶に振り回す者もいた。

まるで気が触れたとしか思えないその様子を、レイトは啞然として見やつた。

よく目をこらせば、男たちの周囲にはうつすらと白いもやのようなものが見える。その一つがレイトの腕をかすめた時、ふっと血の臭いが漂った。

「おい……これって、一体」

わけもなく背筋が寒くなるのを感じながら、レイトはこの現象の原因と思われる人物に向かって問いの声を放つ。

狂乱状態の男たちを眺めながら、ティアは屈託のない声で答えた。
「この連中にくつついていた恨みの念に、少し力を与えてやっただけだ——それよりも、よそ見なんかしていいのか？」

「え？」

困惑した声を返すレイトの頭上に、唸りを上げて大剣が振り下ろされる。

本能的に危険を感じて後ろへ飛び退いていなかったら、レイトの頭部はよく熟れた瓜のように砕け散っていたに違いない。

「まったく、教えるんならもう少し早く……」

ぼやきながら、レイトは両手持ちの大剣を手にした巨漢に向き直る。

伸び放題の髭に覆われたその顔は、レイトたちに兄妹かと尋ねた男のものであることがわかった。

「お前らがやったのか、これは！」

吠えるように叫びながら、男は再び大剣をレイトめがけて振り下ろす。

反射的にレイトは剣で受け止めたが、手がしびれるほどの衝撃に危うく剣を取り落としそうになる。

（なんて馬鹿力だ……！）

顔をしかめながら、レイトは剣を押しやって男との間に距離を取る。

ちらりとティアを見やると、彼女は笑顔でひらひらと手を振ってみせた。手助けを期待するのは無駄と悟って、レイトは軽く舌打ちすると視線を前方に戻す。

そこに、再び風を巻いて大剣の一撃が襲いかかってきた。今度は受けることはせず、レイトは後ろに下がってその一撃をやり過ごす。間に十分な距離があったにもかかわらず、剣が起こした風がレイトの髪を巻き上げていく。

身長的一半以上ある剣を、男はまるで腕の一部のように軽々と扱っていた。その攻撃は大振りではあったが重く、一度でもまともに食らえば骨まで砕かれて戦闘不能になるのは確実だった。

(…… 本式の訓練受けてやがるな)

防衛に専念しながら、レイトは男の動きの癖を読む。

どこかの兵士崩れなのだろう。多少荒さは目立つが、動きそのものは正式な剣術の型をなぞったものだ。その分単純で、次の攻撃がどこから来るか予想はしやすいが、なにしろ尋常な腕力ではない。大剣を操っているとは思えない動きの速さに、踏み込む隙を見出せないのが現状だった。

再び舌打ちしそうになって、レイトは男の動きにわずかな違和感を感じた。

左足の動きが、右足に比べてほんのわずか鈍いのだと一瞬遅れて

気がつく。膝を痛めてでもいるのか、踏み込みの際に左足にかかる力が少しだけ抑えられているのだ。

そこにできる隙を、レイトは見逃しはしなかった。

手にした剣を一閃させて、彼は男の喉元を断ち割る。

刃は骨で止まったが、動脈を断たれて男は絶息した。血しぶきを上げて倒れる男から、素早く離れてレイトはその仲間たちへと呼びかけた。

「おい、まだ続きをやりたいか！」

白いもやにまわりつかれ、悲鳴をあげて逃げまどう男たちの視線が血刀を下げて立つレイトに向けられる。

そのかたわらに転がる死体を見て、彼らの心は決まったようだった。

「う……わあああつ！」

我先にと逃げ出す男たちを、レイトはつまらぬものでも見るように見送る。

軽く剣を振って血を払い、レイトは足下にそれを突き立てた。

「……また、見事な逃げっぷりだな」

そこに近づいてきたティアが、しみじみと感心したような口調で言った。

「あんな連中でも、自分の命は惜しいらしい——まあ、どうやらお

前が倒したのが連中の頭目だったようだしな」

言いながら、ティアは荷物の中から出した布をレイトに向かって放る。

飛んできた布をレイトは片手で受け取り、顔や手に転々と飛び散っていた返り血を拭った。まともに浴びるのは避けたが、完全にはよけられなかったらしい。

「おう……にしても、ずいぶんとえげつない真似するじゃねえか」
小首をかしげるティアへと、レイトは半分本気で顔をしかめて言いつのった。

「あの術だよ。恨みの念つて、要は殺された相手の怨念だろ？ 見ているこつちの背筋が寒くなったぞ」

「ああ……ずいぶんたくさん引き連れていたからな」

軽い口調で言い放ちながら、ティアはその顔に冷ややかな笑みを浮かべた。

「私も正直、まさかあそこまでとは思わなかった。あれほど壮絶な光景は、そうそう見られるものではないな」

「……って、お前な」

それだけ多くの人間が、あの男たちの手にかかったということだ。
(ある意味、自業自得か……にしても、俺が言ったことがまさか現実になるうとは)

「お前こそ、ずいぶんあっさりと殺したじゃないか」

瞳の奥底に妙に鋭い光を宿して、ティアはレイトの顔を見やった。

「しょうがねえだろ、他の連中と違って手加減している余裕なんかなかったんだ」

「まあ……そうだろうな」

肩をすくめて、ティアは地面に転がる男の死体へと目を転ずる。

「殺した人間の数ならこいつが一番だ。にもかかわらず、こいつの目にはまったく死者は映っていないかった……殺した相手に対して、少しも後ろめたさを持っていなかったという証拠だ」

「げんそうな顔のレイトに向かって、ティアは片手を上げて説明する。」

「死者に対して、後ろめたさや後悔といった感情を持っている相手になら、どんな微弱的な念でも取り付くことができる——手を出してもらっているのと同じだからな。しかし拳を握ってしまえば、手をつなぐことができないように——死者に対してなんの感情も持っていない生者には、よほど強力な思念でもない限り付きまとうことはできない」

「……ふうん」

話の内容が理解できず、生返事をしながらレイトは完全に日の落ちた空へと目をやる。空にはまだ赤みが残っているが、それが消え去るのも時間の問題だ。

ティアはそんなレイトを、わずかに苦笑を含んだ目つきで見やっ
て、あっさりと話題を転換した。

「それよりもさっさとこの死体を片づけて、野営の場所を探すぞ。
できたばかりの死体と一緒に、一晚過ごしたいなら話は別だがな」

「冗談じゃない、と言いたげな顔でかぶりを振ってから、レイトは

ふと思い出したような口調で言った。

「そっさいや……さっきの連中、逃がして良かったのか？」

「なんだ、急に？」

「いや、それだけの被害が出てるんなら捕まえるなり、いつそ殺すなりしておいたほうが良かったんじゃない……」

ためらいながら告げるレイトを見返して、ティアは瞳に意味ありげな笑みを浮かべた。

「その必要はないと思うがな。人を襲う余裕など、あの連中にはしばらくないだろうし」

「……なにやったんだ、お前」

「私は別に、なにも。ただ、あの念に込めた力はしばらく保つだろうからな——積極的に危害を加えられるほどの力はないだろうが、どこへ行っても自分の殺した人間が恨めしげな顔でついてくるんだ。ヤケでも起こさない限り、その状況でまた善良な旅人を襲うような真似はできないと思うぞ」

愛らしく首をかしげるティアを前に、レイトは心の底から最悪の獲物を引き当ててしまった男たちの運命に同情した。

3 - 2 野党との戦い（後書き）

ようやく護衛としての本領発揮のレイトです。そしてティアの黒さも爆発。

3 - 3 再会

その後は何事もなく旅は進み、五日ほどで二人は自由都市ミルハイムに到着した。

街道の分岐点であるこの都市は、古くから交通の要所として栄えている。

特別な祭りがあるわけでもないのに、人であふれかえっている大通りを二人は並んで歩いていった。

「さて、メシだメシだメシだー！　ようやくまともなメシにありつけるぞー！」

馬上ではしゃいでいるティアを、レイトは珍しく素直な笑みを唇に宿して見やる。

いささか風変わりな衣装をのぞけば、そうしている姿はまるきり見たままの子供にしか見えない。

「うまいメシに地面じゃない寝床、それから風呂があればもう言うことなしだ！　贅沢を言えば食後には茶と茶菓子、あと新鮮な果物なんかも……」

どんどん欲求がエスカレートしていくティアを、レイトは止めるべきかどうか迷ったが結局放置しておくことにした。

十分な路銀は用意しているようだし、人の多いところに来て浮き立つ気持ちはレイトも同じだったからだ。

（けど……あんまり上等な宿だと、俺たちの風体じゃ怪しまれて泊まれないかもな）

大きすぎる長衣の中で完全に身体が遊んでいるティアと、全身黒一色の装束を身にまとったレイトである。

親子にも友人にも見えない二人の関係を、宿の人間がどう推測するだろうかと考えると恐ろしかった。

（そういう意味じゃ、野宿のほうがある意味気楽だったな……）

ぼんやりと考えているレイトを見下ろし、ティアが問いかける声を投げやった。

「……なにか思い出したのか？」

「あ？」

返した声と表情から、ティアは自分の問いかけが的外れであると悟ったらしい。

「さつきから、きよろきよろとあたりを見回しているから、見覚えのある景色でもあるのかと思っただけだ——違ったのなら別にいい」
軽く肩をすくめて言うティアに、レイトは複雑な笑みを返した。

「記憶がないってことも半分忘れかけてたぜ——お前といると、そんなこと考えてる暇もないくらい忙しいからな」

「言ってくれるじゃないか」

口をとがらせて言い返したあと、ティアはその口元に微笑を浮かべた。

「お前、やっぱり昔は泥棒だったんじゃないのか？ 無意識のうちに更生しようと思っていて、そのせいで記憶が戻ってこないのかもしれん」

「あのな。そんなんで人を勝手に……」

「野宿にもけっこう慣れているみたいだったしな。街から街を渡り歩いて、捕まりそうになると山の中に逃げ込んでいた、とか」

「……どうなんだろうな」

あきらめたように言ってから、レイトはわずかに暗い笑みを瞳に宿した。

「もしかしたら……案外、とんでもない悪党だったのかもしれないな。追っ手に斬られたのか同士討ちか——野ざらしになってた理由も、それで説明がつくしな」

軽くまばたきをしてレイトの顔を見つめ、次の瞬間ティアはぷつと吹き出した。

「おい！」

「その顔で悪党とか言われてもな。しかし、だとしたら記憶がなくなっていたのは幸運だったな。そんな悪党、モンドステーンの術師としてこの世に野放しにするわけにはいかない——即刻、あの世に強制送還だ」

瞳には笑みが残っていたが、まぎれもない本気の口調で指を突きつけられて、レイトは顔を引きつらせる。

「だが、心配はいらんだろう——これまでのお前の行動を見てきた限りでは、悪党と呼ばれるような人間とは思えない。むしろ、お人好しと呼ばれる類の人間だ」

にこりと邪気のない笑みを投げかけられ、レイトは怒るべきか喜ぶべきかしばし判断に迷った。

「だ、誰がお人好しだ……！」

慌てて大声をあげたものの、その顔はうつすらと赤い。

くすくすと笑いながら、ティアがその点を指摘しようとした時、二人の少し後ろで叫び声が上がった。

「ど——泥棒！」

とつさに振り返った二人の目の前で、人の流れがわずかに乱れる。人と人のわずかな隙間を、こじ開けるようにして走り出してきたのは一人の若い男だ。お世辞にも綺麗とはいえない身なりをした、その男の手には女物とわかる上品な小振りの鞆がつかまっていた。

一目で状況を理解して、レイトは男の行く手に滑るように移動する。

ティアは身体の陰に隠すようにして、宙に呪文を描き始める。完成したのはたった二行の呪文——それが淡い光を放つのと、走る男の足に鈍い痛みが走るのとは同時だった。

「——っ！」

足がつつたのだと理解するより先に、バランスを崩して男は前につんのめる。

その腕をレイトが横からつかみ、おかげで男は転倒をまぬがれた。しかしレイトを見上げた男の顔に、感謝の色はかけらも浮かんでいなかった。力任せにその手を振り払って逃亡をはかろうとする。だが、その意に反して男の腕はびくりとも動こうとはしなかった。

「よう、運が悪かったな」

がつちりとつかんだ男の腕をねじり上げ、レイトはその手の鞆を取り上げた。

「悪いのは運ではなく、むしろ頭だ」

黒馬にまたがったまま、いささか苦勞して人混みを抜けてきたティアが、冷静な口調で指摘する。

「こんな人の多い場所で犯罪をはたらくなんて、捕まえてくれと言っているのと同じだ。そこまで熱心に頼まれては、応じないわけにいかないだろうが」

「で、どうするんだこいつ？」

じたばたと暴れる男を見下ろし、レイトは尋ねる。

「どうしたのか……近くに警備兵がいたら引き渡すか。もしかしたら、金一封くらいはもらえるかもしれん」

「こんなチンケなかつぱらい捕まえてか？ だつたらあの野党ども捕まえてきたほうが、よほど金になったんじゃないのか？」

「あんな遠くからそろそろ大人数引き連れてくるなんて、私はごめんだぞ。全員殺して、死体を歩かせてくるんならともかく」

「……今、なにげに黒いことを吐きやがったなお前」

人々の視線が集まる中、抑えた声で緊張感のない会話をかわしていた時だった。

ざわめきとともに人垣の一部が割れ、よく通る男の声がその向こうから聞こえてきた。

「泥棒というのはどこだ？」

その瞬間、なぜかティアは信じられないとでも言うように目を見開いた。

ティアの態度にやや引つかかるものを感じながら、レイトは声の方向へ目をやる。

人々の間から現れたのは、機能的な灰色の服を身につけた一人の青年だった。癖のない銀灰色の髪を背の半ばまで伸ばし、額に細い革紐を巻いている。

目鼻のくつきりした顔はまだ若く、二十歳そこそこであると思われた。

市の警備兵ではないようだが、かつちりとした意匠の衣服からしてなにかの組織に所属する人間だろう。腰には剣を帯び、それとは別に端に金属の輪が取り付けられた長い棒を手になずさえている。

「……そいつか、泥棒は？」

鮮やかな深緑色の瞳がレイトと、彼に取り押さえられている若い男を映し出す。

「お前がつかまえたのか？」

「ああ……」

高圧的な青年の物言いに、ややむつとするものを感じてレイトは相手を睨み返す。

悪いかよ、と言いたげな目つきのレイトに対して、意外にも青年は折り目正しい態度で深々と頭を下げて言った。

「感謝する。おかげで、善良な婦人の財産が奪われずにすんだ——この街の市民にかわって、礼を言う」

「あ、いや……」

毒気を抜かれた顔つきで、レイトは青年を見つめ返す。

これが口先だけの、心のこめられていない言葉なら鼻で笑うところだが、青年の態度も言葉も心の底からのものであるとわかった。

「別にたいしたことじゃ……足を止めたのはそいつだし」

言いながらティアに目をやって、レイトは思わずその目を丸くする。

いつの間にかマントのフードをずっぽりと深くかぶって、ティアは二人から離れようとしていたのだ。

「おい、いったいどうした、ティ——」

呼びかけた声を、フードの下から放たれた鋭い眼光が押し止めた。しかし、すでに青年はいぶかしそうな目を馬上の人物へと向け、声をかけているところだった。

「そちらは連れか？ どうして……」

口にした言葉が、不自然に途切れる。

フードの下からこぼれる、赤金色の髪の一部を目にしたためだった。

「……まさか」

愕然とした表情で、青年はかすかに震える声を漏らす。

その表情の変わりように、レイトは驚いて青年とティアを見比べ

た。ティアは青年から顔を背けたまま、小さく舌打ちをしたようだった。

「ティア……なのか？」

青年は駆け寄るようにティアへと近づき、その顔をのぞきこもうとした。

突進するようなその勢いに、考えるよりも早く身体が動いてレイトは正拳を彼の顔面に叩き入れる。

ティアの知人らしいということで、多少の手加減はしたが相当の手応えがあった。

青年は低く呻いて体勢を崩したが、ティアへと近寄ろうとする動きは止まらなかった。だらだらと血の流れ出る鼻を手で押さえながら、彼はすがりつくような目で馬上の人物を見上げて声をあげる。

「頼む、顔を見せてくれ！　ティアなのか？　……生きていたのか？」

必死なその声に、レイトは困惑を隠せない表情でティアを見やった。

ティアはしばらく顔を伏せて動かなかったが、やがてあきらめたようにフードを取って青年へと目をやった。

あらわになったその顔には、困ったような笑みが浮かんでいた。

「……久しぶり」

大きく見開かれた青年の目に、うつすらと涙がにじむ。

「よかった……本当に。生きていてくれたんだな、ティア」

「大袈裟だな」

親しげであるにもかかわらず、その笑みは異物を含んでいるかのようだった。

3 - 3 再会（後書き）

新キャラのファルケ氏登場。これで（名前の出てない人も含めて）
主要な登場人物はだいたい出そろった感じです。

3 - 4 一触即発

「ファルケこそ、元気でなによりだ。リエル神官長はお元気か？
ウィルニードの皆にも変わりはないだろうか？」

「ああ」

こちらは混じり気のない笑みを浮かべて、青年は目ににじんだ涙をぐいと拭う。

「あまり頻繁には尋ねられないが、皆元気にやっているようだ。あの時は皆、本当に心配して……夜も眠れなくらいだったが。君が生きていることを知ったら、皆喜ぶだろう。この一年というもの、ずっと君の無事を祈り続けてきたんだ」

言いながら、青年は懷から取り出した布でさらにあふれてきた涙を拭い、丁寧にそれをたたんで懷に戻す。

どうせなら鼻血も拭けよ、と思いながらライトはティアに低めた声を投げた。

「……知り合いか？ とつさに殴っちまったが」

「どうせなら、完全に気絶するくらい殴ってくればいいものを」
「え？」

「いや別に。お前が使い物にならないことくらい、ちょっと考えればわかることだしな」

「どういう意味だよ、それは？」

険悪な表情になってライトが声をあげた時、青年は歡喜の色を隠

しきれない様子でティアを見上げて言った。

「そうだ、ティア。神殿に来てくれ——君が生きていることを知らせなければ。神殿では君はすでに死んだものとして扱われている。すぐに訂正してもらわないと……本当によく生きていてくれた。君はやはり、神に特別な加護を与えられているのだな」

「……はあ？」

間の抜けた声をあげるレイトにかまわず、青年はティアへと向かって手を伸ばす。

その手を、レイトは横から手を出してやや乱暴につかんだ。

「ちよつと待てよ。お前、人の連れをどこへ連れて行こうってんだ？」

やっとその存在を思い出したといった顔つきで、青年はレイトへと目をやる。虚をつかれたような表情が、直後不信感をのぞかせたものに変わった。

「お前こそ……なぜティアとともにいる？」

「おい、お前ら……」

漂う空気にやや不穏なものを感じて、ティアが口をはさもうとした。

しかし、どちらの耳にもその声は届いてはいなかった。レイトは眉を上げて青年の顔を睨みつけ、青年は敵愾心もあらわな目つきでレイトを見返す。

「まさか……お前がティアをさらった張本人か？」

「なんだって!？」

「見るからに怪しげなその出で立ちといい、お前があの邪悪な魔獣をよみがえらせた死霊術師なのだろう!? 幼いとはいえ、聖人に叙せられる人物に手を出した罪は重いぞ! 今すぐ捕らえて神殿に連行してくれる!」

青年は手にした棒を低くかまえ、レイトも腰の剣へと手を伸ばす。すわ荒事かと、周囲の人垣がざわついて、二人との間に距離を作った。それでも逃げる人間が少ないあたり、この街の人々は多分に物見高い性質らしい。

あるいは、この程度のもめごとは日常茶飯事なのか――

「いいかげんにしろ、お前らっ!」

そんな人々のざわめきを圧して、大音声が響き渡った。びりびりと空気を震わせる幼い声の一喝に、レイトも青年も動きを止めてぼかんとした顔で声の主を見る。

その片方、レイトの頭をティアは手にした杖で容赦なく殴った。
「だっ!」

「この馬鹿者が! こんなところで剣を振り回す気か!? お前はただでさえ目つきが悪いんだから、喧嘩腰の態度を慎めと前に言っただろうが!! 人生の何割を無駄な争いに費やせば気が済むんだ!？」

あぜんと見守る青年の頭にも、ぶんと振り回した杖の先が直撃する。

「がつ!!」

「それからファルケ！ 思いこみで突っ走るその癖をどうにかしろ！ この世界に誘拐した子供をそのまま連れ歩いて、しかもちらら人助けまでする誘拐犯がいるっていうんだ！？ 少しはものを考えてから発言しろ!!」

眉をつり上げて言ってから、ティアはわずかに青年に向ける目をやわらげた。

「だいたい、私が自分をかどわかした人間に大人しくついて歩くとも思っているのか？ ずいぶんな侮辱じゃないか？」

「いや、そういうわけでは……」

「こいつはレイト。私の護衛——というか、荷物持ち兼雑用係だ」

わざわざ言い直すんじゃないかねえ、とレイトはぼやく。ティアは呟き自体は無視したまま、レイトを見やって言葉を続けた。

「レイト、彼はファルケ・ステイルガード。私の昔の知り合いで、デイニス神殿の神官騎士だ」

「神官騎士？ デイニス神殿って？」

なんだこの物知らずは、と言いたげな視線をファルケはレイトに向けたが、睨み合いが再発する前にティアが説明を加えた。

「この大陸で一番の信仰を集めているのが、ディニス信教。ディニス神殿つてのはそれを奉じる団体のことであると同時に、建物の名でもある。人の多い街に行けば、たいてい一つや二つはあるぞ」

「で？ そいつもお前の婚約者だったりするのか？」

半分以上本気の口調で問いかけたレイトの頭に、再び杖の一撃が見舞われた。

目の玉が飛び出るのではないかと思うほど強烈な一撃に、レイトは目に涙をにじませて両手で頭を押さえる。

「……一言多い」

「婚約者？」

「こいつのたわごとは気にしないでいい——それより、神殿だったな。行くでしょうか」

いぶかしげな表情をのぞかせたファルケの顔が、その一言でぱつと明るくなる。

「そうか、良かった！ ではまず、さっきのコソ泥を警備兵に引き渡して——」

言いかけて、ファルケは思い出したようにレイトを見やる。

レイトは無然とした表情で、ようやく後頭部から離れた手をひらひらと振ってみせた。ファルケを殴った際に、男の腕を放してしまっていたのだ。

とつくに男は逃げ去ってしまったらしく、周囲には影も形もない。あんぐりと開けた口を無理に閉じ、ぎっとレイトを睨みつけるファルケにティアは肩をすくめて言った。

「まあ、今回は未遂で済んだからな。鞆だけ持ち主に返してやれば

いいんじゃないか？ さつきから心配そうにこっちを見ているぞ」

ティアはレイトに目配せすると、小ささが幸いしてかこちらはしつかりとつかんだままだった鞆を、持ち主らしき年配の女性に届けさせる。

戻ってきたレイトは、うかがうようにティアの顔を見やって低く言った。

「……おい、いいのか？」

「なにがだ？」

「あんまり会いたくない相手だったんじゃないか？ なんなら今からでも……」

逃げるか、というレイトの声に出さない提案に、ティアは口元に複雑な微笑を浮かべて小さくかぶりを振った。

「積極的に会いたかった相手かというと微妙だが……それはこちらの都合だからな。いずれはきちんと会って、話をしなければいけないというのはわかっていた。ファルケに非があるわけではないんだ。ただ——まあ、できればもう少し先の話であって欲しかったが」

いつになく煮え切らない態度に、レイトはわずかに眉を寄せる。

「大丈夫だ。別にいやいや行くわけじゃない——調べたいこともあるからな。心配しなくてもいい」

「誰が、心配なんか……！」

反射的に大声をあげかけるレイトに、ティアはからかうような笑みを向ける。

「そうか？」

「ただ俺は、妙なもめ事にでも巻き込まれるんじゃないかねえかって思っ

ただけだ！ 殺しても死なねえような奴相手に、誰が心配なんかするか！」

「……そうだな」

そう呟いたティアの口調は重く、レイトは虚をつかれたような気分ですぐ黙り込む。

しかし、一瞬のあとレイトを見返したティアの顔には、いつもと変わらぬ不敵な笑みがあつた。

「もめ事の心配ならいい。たぶん、とっくに昔の話として処理されているはずだ」

「つて、おい」

「とにかく、行くぞ」

馬の腹を蹴って、ティアは先に立って歩き出したファルケのあとを追う。

安堵と不審と疑念とがごちゃ混ぜになった極めて複雑な表情で、その後ろ姿をしばらく見送ってからレイトはようやく二人を追って歩き始めた。

3 - 4 一触即発（後書き）

長かったので分割しました。書式の設定間違っていることに気づかなかったもので……（汗）

4 - 1 偽りの聖人

その報がフィニクス神官長のもとへ届いたのは、彼が馴染みの商人と額をつきあわせて商談に励んでいる最中だった。

「なんだ、しばらく誰も取り次ぐなと言っておいただろうが！」
中座して部屋を出るなり、彼は商談を邪魔した若い神官を叱りつける。

部屋の中では、豪華な多色刷りの祈祷書を作って、街の小金持ちに売りつけようという計画が着々と進められているところだった。

「そ、それが……」
恐縮した様子ながら、どこか困惑の気配を漂わせて若い神官は言った。

「ファルケ殿が、大切な話なので今すぐ取り次ぐようにと……」
「あの田舎者が？」

見下した態度を隠そうともせずに、フィニクスは口元を歪める。
茶褐色の髭を蓄えた顔はきわめて不細工というわけではなかったが、たるんだ頬とよんだ目の光が見る者に不快な印象を与えた。
でっぴりと太った体躯と四十を過ぎたばかりにしては薄い頭頂部も、それを助長させている。

「いったい、今度はなにを……」

忌々しそくに眉を寄せて、彼は独語めいた呟きを発する。

その声にわずかな怯えの響きが含まれているのは、自分の不正をファルケに見抜かれたのではないかという思いがあったためだ。

神官騎士であるファルケが現在所属しているのは、ディニス信教の総本山ともいうべきイクスヴェールの神殿である。各神殿の監査の権限も持っている彼に、自分の不正を報告されるようなことがあれば、神官長の地位も不正によって得てきた財産も失うことは確実だった。

彼を『田舎者』呼ばわりして、ことさらに蔑むのはそんな不安の裏返しである。

もともと、彼は西部辺境のろくに名も知られていないような神殿の出身だった。魔獣の封印を有していたため、かろうじて取り潰されずにいたような神殿だ。

フィニクスが記憶に留めるほどの価値もないと、そう判断した神殿の名はウィルニードという――

「それが……なんでも、ティアラ様が見つかったとか」

「ティアラ……?」

いぶかしそくに呟いた直後、フィニクスの顔に驚きの色が広がった。

「なんだと!？」

「ええと、ご本人も一緒に見えています。まだ七歳くらいの、綺麗な赤い髪をしたお嬢さんで……」

フィニクスの声にのぞいた驚きは、単純に意外な名を聞いたというものではなかった。忘れかけていたものを目の前に突き出されたような、嫌悪と拒絶を含んだその声に、若い神官はまるで気づくことなく言葉を続けた。

「どうしますか？ お会いになれますか？」

「……会わぬわけにもゆかぬだろう」

食いしばった歯の間から、呻くような声をフィニクスは洩らした。

「仮にも、一度は聖人の列に叙せられることが決定していた娘だ。今の身分がどうあれ、追いつ返すわけにもいくまい」

そこまで言って、フィニクスははつとしたように若い神官を見やる。

彼には聞かせたくないと思っているのが表情でわかったが、それをごまかすように軽く咳払いすると、フィニクスは居丈高な態度で商人を帰すように命じた。

「ああ、いや……やはり、私から直接伝えたほうがよからう。お前はその娘に、もうしばらく待つように伝えよ——くれぐれも、怒らせぬようにな」

そそくさと応接室に戻っていくフィニクスを見送りながら、若い神官はティアラという少女に対する興味を内心でひそかに覚えた。

フィニクス神官長を、これほどまでに動揺させる娘の正体が気になったのである。

同時に彼は、ファルケが神殿に連れてきた人物が彼女一人ではないことを、伝え忘れていたことに気づいた。

（まあ……いいか。今神官長を呼び戻したりしたら、大目玉を食うのは確実だしな）

実際に会ってみればわかることだからと、自分に言い訳して彼は二人の客人を待たせている場所へと向かったのだった。

中庭の見える小部屋に、ティアたちはそろって通された。

すでに習慣となった様子でぐるりと部屋の中を見回してから、レイトは開かれた窓へと歩み寄る。ぬかりなく窓の外も確認してから、彼は部屋の中央に置かれた椅子のそばに持ってきて足を止めた。

椅子にはティアが腰掛け、出された茶を悠然とすすっている。

良質の茶葉を使っているらしく、香り高い茶をゆっくりと味わってから、ティアは落ち着かない様子で視線をさまよわせているレイトに笑みを含んだ目を向けた。

「色々、聞いたそうな顔だな」

ちらりと視線を返したものの、レイトは黙って答えない。

二人が通されたのは、広くはないが趣味の良い調度で整えられた居心地のよい部屋だ。掃除も行き渡っており、人数分の茶と茶菓子が出されたことから、丁重に扱われているのがわかる。

問題は、そんな待遇を受ける理由だった。

「座つたらどうだ？」

茶のカップを手にしたまま、ティアはなんでもないような口調で告げる。

「たぶん、しばらく待たされることになると思うぞ……この責任者が、一年前から変わっていなければな」

「……なあ」

少し迷ったのちに、ティアの横の席に腰を下ろしてレイトは言った。

「あの、お前……ティア」

横目にレイトを見やって、ティアはぷつと軽く吹き出す。

「なん……！」

「そんなに、人の名前を呼ぶのが苦手か？ いちいち『なあ』だの『おい』だのと付けるほうが面倒くさいだろうに」

「うるせえな」

やや慥然とした面持ちでレイトは応じ、それで少しかり肩の力が抜けたような表情になって言った。

「お前……このディニス神殿だと、なにか関わりがあるのか？」

「ないように見えるか？」

「見えるから混乱してるんだろ……！ あのファルケって奴といい、なんだかお前がここでけっこうな地位についていたような」

そのファルケは、二人を神殿に連れてきて若い神官に面会を取り次がせたあと、鼻血で汚れた衣服を替えに行ったためここにはいない。

「ついていたわけでは……なかったんだが」

妙に可愛らしく、ティアは小首をかしげてみせた。

「その前に、行方不明になってしまったからな」

「行方不明？」

「ああ」

困惑しきりのレイトに向かって、ティアは少しばかり複雑な笑みを見せた。

手にしたカップを、彼女は椅子と並べて置かれた小卓の上へ戻す。
「神官長が来るまでにはもうしばらく時間がかかるだろうし、ちょっと昔話でもしてやろうか——私が七年前、村が襲われた際に赤ん坊の身体になってしまったことは聞いたな？ 不思議には思わなかったか？ 村から遠く離れた場所で、たった一人泣いていた赤ん坊がどうやって生き延びたのか……当然探しに来る者などいない。私が生きていることなど誰も知らなかったのだからな」

「じゃあ……いつたい」

言いかけたレイトの目に、なにかを察したような光が浮かんた。

「まさか……」

ティアは正解、と言うように小さくうなずいて、話の続きを口にした。

「山道で泣いていた私は、偶然通りかかった旅の神官に拾われて一命をとりとめた。なにしろ三日もの間、飲まず食わずで泣いていたからな……あと一日でも遅かったら、きっと衰弱死していたぞ。治癒術の得意な神官で、本当に助かった——まあ、それ以前に山の獣に襲われなかっただけでも相当に幸運だったと思うが」

話の深刻さとは裏腹に、その口調はあっけらかんとしたものだった。

「それで、身寄りのない子供として神殿で育てられることになったんだが——育つにつれて、ただの子供ではないと周囲が騒ぐようになってな。なにしろ、外見は子供でも中身は二十歳近い立派な大人だ。肉体の年齢に引きずられて多少精神的に幼くなつてはいたが、それでも同じ年頃の子供に比べれば桁違いに出来はよかった——まあ、記憶や知識はそのままなのだから、当たり前と言えば当たり前だがな」

「それで、『聖者』扱いかよ……？」
「いいや」

ティアはややばつが悪そうに、指先で頬のあたりを掻いた。

「それはまだ、あとの話だ……その時はまだ『この子供はきわめて優秀だ。きっと将来は立派な神官になるだろう』程度の話だった。それでも正直慌てたがな——ある程度身体が成長したら、すぐに村に戻ってなにが起きたのかを確かめるつもりだったから」

「じゃあ……？」

「……私は死霊術師としての知識も、能力もそのまま持っていた。

人目に触れないように気をつけてはいたんだがな……しかし焦りがあつたのも確かだ。一日でも早く村に戻りたくて……術の練習がわりに、動物をよみがえらせたところをたまたま訪れていた他の神殿の人間に見られたんだ」

さすがに、レイトも目を丸くする。どんな騒ぎになったかは、この世界の知識をまるで持たないレイトにもある程度想像ができた。

4 - 1 偽りの聖人（後書き）

書式を間違えていて（計算しやすいよう、書いた時とは別の書式に一度直している）、前話が長くなりすぎたため仕切り直します。ついでに章も切り替えました。

4 - 2 失踪の真実

「それで神殿中が大騒ぎになってな……でも、私が死霊術師だなどとは誰も思わなかった。それも当然だが——私がほんの赤ん坊だった時から神殿にいたことは、その神殿の者なら誰でも知っていることだった。そうこうしているうちに、妙な方向に話が転がりだしてな——私は神から特別な力を授けられた聖者だということにされてしまったんだ」

「すげえ勘違い……」

思わず真顔で呟いたレイトの膝を、椅子の上からティアは蹴りつける。

「うるさい。だが、その時はいいかげんに本当のことを話そうと思っていた。私は五歳になっっていたし、なんとか一人でも旅ができる程度の体力はついていた。本当のことを話して、村に向かおうと思っただんだ」

「……で、話したのか？」

一瞬、ティアは痛みをこらえるような表情で目を伏せた。

「いや——話せなかった。ずっと私を育ててくれた人たちをだましていたこと……彼らの善意を、いわば利用していたことを考えるととても話せなかった。神殿にいた五年間の間に、何度でも本当のことを話す機会はあったんだ。私は齒が生えそろった頃には、普通に話ができるくらいにはなっていたんだから。それでも——できなか

った」

彼女らしからぬ弱々しい声音に、レイトは驚きの表情をのぞかせる。

ティアは言葉を切ってレイトの顔を見返し、無理に作ったような笑みを口元に浮かべて言った。

「神殿と死霊術師とは、実のところ仲は良くない——というより、はつきり言って互いに反目し合う関係だ。生死に深い関わりを持つという点において、ある意味よく似た存在ではあるのだが……だからこそ、とも言えるのだろうな。神殿は死霊術師を死をおとしめる汚れた存在だと主張しているし、死霊術師も神殿のことを口先のお題目だけで人から金を巻き上げる、詐欺師の集団だと断定している——ほとんどの者はな」

「お前を育てた連中もか？」

突き刺すようなレイトの問いに、ティアは答えなかった。

わずかばかり空いた不自然な間にレイトは再び言葉を投げ入れようとしたが、ティアが再び口を開くほうが早かった。

「少し話がずれたが——そんな調子で勝手に話が進んでいってしまった、気がつくとは私は神殿の本拠地であるイクスヴェールに、聖者として所属することが決まってしまうていたんだ。そうなれば、もう簡単に神殿から抜け出すこともできなくなる……それで、やむをえず実力行使に出ることにした」

「実力行使って……」

なんとも不安な気分になるレイトに、ティアは瞳を悪戯っぽく光らせて告げる。

「私が育ったウィルニードの神殿の地下には、はるか昔に討ち滅ぼされた魔獣の屍が封印されていた——生まれ育った場所だ。封印のありかくらいとつくに突き止めていた。その部屋の鍵のありかもな」

「まさか……」

「その、まさかだ。封印を破って魔獣をよみがえらせ、その魔獣にさらわれたふりをして神殿から逃げ出したんだ」

「……………」

思わず絶句し、レイトは頭を抱える。

それではファルケが心配して探し回るのも当然で、彼や残された神殿の者たちの心中を思うとレイトは深く同情しなくなった。

（悪い……手加減したとはいえ、けっこうな力でぶん殴っちまって）
あとで謝ろうと、内心で決意するレイトの前でティアはどこか遠くを見やるような目つきで言った。

「それが、だいたい一年前のことで……まだファルケが、私のことを探していたとは思わなかったな」

「いや、普通は探すだろ」

即座に言い返してから、レイトはその状況なら生存の可能性がないとあきらめて、探すのをやめていてもおかしくないと思い返す。
しかし、瞳に暗い影を宿したティアの言わんとするところは別のようだった。

「……そういや」

ティアのそんな表情に気づかず、レイトはふと思い当たったよう

な顔になった。

「その時、よみがえらせた魔獣ってどうしたんだ……？ 逃げ出したあと、もとの死骸に戻したのか？」

問いかけるレイトに、ティアは微妙な間をおいてから言葉を返した。

「……知りたいか？」

「え……？」

「本当に、知りたいか？」

なにやら不気味な笑みが、ティアの口元に浮かんでいる。

ちらりと部屋の外——神殿の中に入る前に馬を預けた、厩舎のほうへとその目が向けられるのに気づき、レイトは口をつぐんだまま首を横に振った。

（アレか……）

どつりであれだけの巨体にもかかわらず、ろくにものを食べているところを見た記憶がないわけだとレイトは回想する。

ふっと笑みをこぼして、ティアは話を戻した。

「神殿から逃げ出したあと、私はすぐに村に向かった。足もできたことだしな——だが、その時はまだ村が全滅したなんて想像もしていなかった。きっと誰かが生きている、村に戻りさえすれば、誰かが私を迎えてくれると——そう信じていたんだ」

淡々と語る口調からは、次第に感情が抜け落ちていく。

まるで他人が書いた文章を読み上げるような平坦な声で、ティアは自分自身の目にした光景を語った。

「だが、半月ほどかかって村にたどり着いた私が見たのは、草木に

半分埋もれかけた村の残骸と、広場のあった場所に並んだ何十もの――墓標だけだった」

レイトはなにとも言えないまま、静かに語るティアの瞳を見つめる。じつと宙の一点を見つめて動かないそれは、磨き上げた薄紫の水晶を眼窩にはめ込んだかのようなだった。

その視線を感じ取ったように、目を上げてティアはにこりと微笑んだ。

「そこで、たまたま村を訪れていたイアンとばったり会ったんだ。あいつは、私の死体が村になかったから、どこかで生きているはずだと信じてずっと探してくれていたらしい。それでもなんの手がかりもなくて、気持ちを奮い立たせるために村に向かって――子供の姿をした私に出会った」

最初は、言葉も出ないくらい驚いていたがな、とティアは苦笑の混ざる声で言う。

「だが、イアンは私の子供の頃の顔を知っていた――なにしろ幼なじみだからな。間違いなく私がティアであることを信じてもらうのに、そう時間はかからなかった。そのあと、イアンと一緒にエルフオンベインの屋敷へと行って――そこで私は、村が全滅していたことを知った。村から ラゼール が失われていたことも」

うつすらと笑みを浮かべた口元は、むしろ他のどんな表情を浮かべればよいのか忘れてしまったように見えた。

レイトは痛々しいものを感じて、その表情からわずかに目をそらす。

「それからは、お前に話した通り――モンドスティーンの次期族長

の名前を使つて、私は村を襲撃した犯人と　レーザー　のありかを
探し続けている。一年かかっても、たいした手がかりは見つかつて
いないがな」

「……ティア」

部屋の片隅へと視線を向けたまま、レイトはぼつりと声を發した。
ティアは小卓の上に置いたカップへ伸ばしかけていた手を止めて、
隣に座つたレイトの横顔を見上げる。

「お前……他のところでも、同じようなこと繰り返してないだろう
な？　嫌だぞ、俺は。またどこかで、お前のことを血相変えて捜し
回っている人間に出くわすのは」

呆れたような口調は、いささか無理をして作っているのがわかる
ものだった。

軽くまばたきをしたあと、ティアはいかにも心外といった表情で
言葉を返したが、その目が笑っていることは隠せなかった。

「なにを言う。二度目はともかく、一度目は不可抗力だろうが。自
分でも、なにが起きているのかさっぱりわからなかつたんだぞ！
身体はろくに動かないし、目線はやたら低いし、感情の振幅はとん
でもなく激しいし——まさか赤ん坊になつてゐるなんて想像もして
いながつたから、あとで鏡を見た時は心臓が止まるかと思つたぞ」
「そりやそうだろうけど……せめて、自分で動くことができるよう
になつてからでも連絡くらい、取ることはできなかったのかよ？」
「無理だ。神殿での生活は朝も夜も早かつたし、自由に外出するこ
ともできなかつたからな。人に頼んで手紙を出すにしても——まさ
か身寄りのないことになつてゐる私が、親族に宛てた手紙を出すわ

けにもいかないだろう？ 赤ん坊の時から神殿にいるのに、と不審がられるのは目に見えている」

その当時のことを思い出したように、やや口をとがらせて言うティアをレイトは横目に眺めて声を発した。

聞こえるか聞こえないかくらいの、小さな声だった。

「……三度目は、やるなよ」

思わず、といった様子でティアはレイトの顔を見返す。

それを口に出したことを後悔でもしているような、なんとも渋い表情がそこにあるのを見て取って、ティアは口元に淡い笑みを浮かべた。

「やらないさ」

苦笑混じりの声は、奇妙なくらいに優しく響いた。

「仮にやったとしても、お前には通用しないだろう？ 術者である私が死んだら、お前ももとの死体に戻るのだから——お前には、私が生きているか死んでいるか容易にわかるはずだ。まあ、死んだ場合は一蓮托生であの世行きだから、わかると言えるのかどうかは怪しいところだが」

「……思い出させんなよ」

げんなりとした表情で呟くレイトを見て、ティアはくすくすと肩を震わせて笑う。

その様子を見やるレイトの目には、どこかほっとしたような色かのぞいていた。口元が緩みそうになるのに気づき、レイトはそっけ

ない口調を作って続けた。

「けど——言っておくが、もしお前が行方不明になるようなことがあったら、俺は必ずお前を見つけ出してこう言ってやるからな。『これが三回目だぞ』って。どれだけ時間がかかろうとも、探し出して絶対にそれだけは言ってやるから覚悟しておけ」

「……わかった」

この上なく素直な言葉と笑みで、ティアは答えた。
レイトはぎくりとしたように身をこわばらせ、視線をわずかに泳がせてから、不器用な笑みをその顔に浮かべる。

曇りのない笑顔で、その顔を見返したままティアは口を開いた。
「——にしてもお前、ずいぶんとまた偉そうに言ってくれるじゃないか。覚悟しておけ、とはこっちの台詞だぞ」

笑顔を固まらせるレイトの前で、ティアは荷物と一緒に足下に置いてあった杖へと手を伸ばした。

4 - 2 失踪の真実（後書き）

ティアの馬の正体判明。この世界では死霊術師は魔獣使いでもあります。

4 - 3 神殿の秘密

フィニクス神官長がその小部屋へと入った時、目にしたのは両手で頭を押さえて呻いている報告にはない男の姿だった。

気味悪そうに男を見やって、彼は同行した若い神官に問いの声を投げかけようとする。

それよりも早く、ティアは薄く微笑んで言葉を発した。

「お久しぶりです。フィニクス神官長」

途端にフィニクスの眉間に皺が寄るのがわかったが、彼女はまるで気にかけるそぶりを見せることなく続けた。

「お元氣そうでなによりです——目方はまた増えたようですが」

「君こそ、元氣なようでなによりだ……ティアラ」

ティアの言葉通り、でっぷりと太った男が口にした呼び名を聞いて、レイトはやや不審げな表情を浮かべる。

男に対するティアの態度も、彼にとってはどこか違和感の漂うものだった。

ちらりとレイトに目を向けながらも、特に説明しようとはせずティアはフィニクスへ視線を戻して、歯切れの良い口調で告げた。

「彼は私の護衛です。最近はどこも物騒で、供の者もなしに一人で旅することなどできませんから——つい先程も、ここから目と鼻の

先くらの場所で引ったくりの現場に出くわしたばかりです。幸い、彼の働きで奪われたものは取り返すことができましたが、犯人は逃がしてしまいました。ずいぶんと、犯行に慣れていた様子で——実になげかわしいことですが」

「……なにが言いたいのかね？」

「いえ別に。最近は物騒ですね、というただそれだけのお話です」

不機嫌を絵に描いたような表情で黙り込むフィニクスに、長い前置きを終えたティアがさりと言葉を投げやる。

「それで、私がこちらにおうかがいした理由ですが——ラクシア国内のディニス神殿に、神官長のお名前で紹介状を書いていただきました。少しばかり所用があつて、あちらへと行かなければならないので」

「……よからう」

小ずるそうな光を宿した目に、ほっとした気配を漂わせてフィニクスは言った。

その顔には、無理難題を押しつけられずに済んだという安堵の色が、隠されることなく浮かんでいる。

「あとで届けさせよう——他にはないな？」

「いえ」

一言で、ティアはフィニクスの願望を打ち砕いた。

「もう一つ。ラクシアとその周辺に存在する魔獣の封印の所在地すべてを、教えてはいただけませんか？　神殿で把握している分の、すべてをです」

「なんだと!？」

ぎょっとしたように目を見開いたのちに、フィニクスは声に怒気をにじませた。

「なにを要求しているのかわかっているのか!? 魔獣の封印については、神殿内でも極秘扱いとなっているのだぞ!」

「だからこそです」

いささかも怯んだ様子を見せずに、ティアは返した。

「簡単には開示していただけない情報だからこそ、私が直接こちらへ出向くこととなったのです。一族の人間が何度要求しても、応じてはいただけなかったようですから」

「当たり前だ! 誰が汚れた死霊術師などにそのような――!」

驚きを顔にのぞかせたのはレイトと、扉の近くにひっそりと立っていた若い神官の二人だけだった。

はつとした表情で口を閉じるフィニクスを見やって、ティアは顔色一つ変えることなく言葉を放った。

「では、言い方を変えましょうか。できればやりたくはなかったのですが――フィニクス神官長。モンドステインの次期族長として情報の開示を要求いたします。私には、その権利があるとあなたは知っているはずです」

その言葉の効果は絶大で、憎々しげにティアを睨みつけたあと、フィニクスはいかにも不承不承といった様子で口を開いた。

「……わかった」

吐き捨てるようにそれだけを言うと、彼は足音も荒く部屋の入り口へと向かう。

感情の動きのない瞳でその背中を見送り、扉にその手がかけられる寸前にティアは水のように澄んだ声を放った。

冬の河川の水のような、わずかな温もりも感じられない声だった。

「なにも変わってはいないようですね。あなたも——神殿のやり方も」

フィニクスは振り返ることなく、ただ扉の手前でぴたりと足だけを止めた。

「私のことは、神殿ですでに死んだものとして扱われているそうですね。それは大いに結構——もとよりそのつもりで、あんな騒ぎまで起こして神殿を出奔したのですし、事実神官見習いのティアラという少女はもうこの世のどこにもいない」

「ならば——」

なんの文句がある、と続けようとしたフィニクスの言葉を、ティアラはわずかに声を鋭くしてさえぎった。

「しかし、あなたたち神殿の上層部に属する方々は、私の正体も神殿を出た理由も知っていたはず……私はエルフォンベインの一族に保護されたのちに、近くの神殿を通じて私の真の名と、ウィルニードで育てられるようになるまでのいきさつを伝えておいたはずだ。なのに、あなた方は……それを誰にも伝えることなく自分たちだけの秘密とした」

刃の輝きを宿した瞳で、ティアは額に汗を浮かべたフィニクスの顔を見据える。

「神殿に属する人間すべてに対して、真実を明かすべきだとは私も思いません。ですが、私の身を案じて夜も眠れない日々を過ごしている、ウィルニードの人々にだけは教えても良かったのではありませんか？」

「お前たちが案じているあの娘は、赤ん坊の姿をした死霊術師の族

長だったのだ、と？」

嘲笑うような響きが、フィニクスの声にはあった。

「素性を隠して神殿でぬくぬくと育てられた挙げ句に、凶悪な魔獣を自らの手でよみがえらせてともに姿を消したと——そう話すべきだったと言っのか？」

「ええ……それが、真実なのだから」

瞳にのぞかせた寂しげな色を消して、ティアは冷たい笑みを口元に刻んだ。

「あなた方は、いつだって自分たちにとって都合のいい情報しか明らかにしようとはしない。不都合な情報はひた隠しにし、間違った情報に人々が振り回されていようと見て見ぬふり……死霊術師に対する人々の偏見を放置しているのも、その一例でしょう」

小さく息をついて、ティアはフィニクスの顔を見つめる。

感情の混ざらない薄紫の瞳に見据えられた瞬間、フィニクスは首筋に刃物を押しつけられたような畏怖を感じて、ぞつと背筋を震わせた。

「確かに、死霊術師の中にも悪事をはたらく者はいます。自らの能力を悪用して、人々を騙したり苦しめたりする者もいる——ですが彼らは、私たちにとっても憎むべき敵であるのです。あなた方にとって、そうであるのと同じように」

「そ、それが……」

「あなた方が、その両者をあえて区別しない理由は一つ」

喉にからまったようなフィニクスの声を、完全に無視してティアは話を続けた。

「死霊術師の歪んだイメージを作り上げて、あなた方がそれを悪として否定する理由——それは」

「……よせ！」

「神殿と死霊術師とが、もともと根を同じくする存在だから」

フィニクスの制止にかまわず、言い切ったティアの声がその場を静まり返らせた。

レイトも扉の前に立った若い神官も、凍り付いたように動きを止めてティアと、赤黒く顔を染めたフィニクスとを見つめる。

水を打ったような静けさの中、ティアは淡々と言葉を続けた。

「かつて死霊術師の中には、自らの力をより多くの人々のために役立てたいと考えた者たちがいた。彼らが当時すであつた一信教をもとに、ディニス神殿の基礎を作り上げたのです。長い年月の間に、様々な宗教の教義を取り入れたために神殿の教えは少しずつ変わっていきしましたが、使っている術は同じ——死霊術の系統に連なるものです」

「……違う」

呻くようにフィニクスは言ったが、それは誰の耳にも虚しいあがきとしか聞こえなかった。

「だから、神殿はモンドステイーンの族長の要請には、無条件で応じなければならない。それは、もともと神殿がモンドステイーンに属する人間の手で作り上げられたのと、もう一つ——」

「黙れ！」

「現在も、術の伝授に際してモンドステイーンの助力を受けているため——まあ、七年前からは肝心のモンドステイーン一族が減んで

しまったため、別の一族がその任を担っていますが。どちらにせよ、神殿では数年に一度死霊術師を招いて、極秘に術の伝授を受けている。神殿で使われる治癒の術は、長年の間独自に伝えられているうちに、本来の形とはかけ離れたものになってしまった——威力も弱まり、時には発動しないこともある。それでは神殿の威信に関わると、教授を担当する神官に念入りに口止めをした上で、死霊術を覚えさせることになったのです」

「——黙れと言っておろうが！」

フィニクスの怒号は、ティアの視線を揺るがすことさえできなかった。

「この事実を知っているのは、当事者である神官を除けば、神殿の上層部に属するほんのわずかな人間のみ——しかし彼らは、絶対にそれを口にしようとはしない。それは、死霊術師に対する誤ったイメージが広く浸透しているため。そして誤ったそのイメージを放置しているのは——自分たちの劣等感から目を背けようとしているため」

憤激に顔を染め、言葉もないフィニクスに向かってティアは冷たい目で言った。

「死霊術師をおとしめることは、別段かまいません。私たちは誰かに尊敬されたくて術を磨いているわけじゃない。最近是一般の人々相手に、商売をしている死霊術師も多いから一概には言えませんが——敬遠されるなら、それは別にかまわないと私は思っています。ですが、あなた方の動機はあまりにも単純で幼稚だ——そんなものために、身内にまで都合のいい嘘を教え込むのですか？ そんなやり方が、あなた方にとってごく当たり前のものだと言うなら——それはもはや、組織としてまともな状態とは言えない。仮にも人を

教え導く組織としてのやり方では……断じてあり得ない」

射抜くような光を宿した瞳が、まっすぐにフィニクスを見据えて告げる。

「あなた一人に、その責を問おうとは思いません。ですが、あなたが責を負うべき人間の一人であることは間違いない。神殿の一つを預かり、多くの神官を指導する立場にある者として、今の神殿のやり方が正しいのか——今一度、冷静に考えていただきたい」

「……それは、命令か？」

反感をあらわにした低い声に、ティアはうつすらと微笑んで返した。

「いえ。これは……一人の死霊術師としての願いです」

「そうか」

その一言だけを投げ捨てて、フィニクスは今度こそ部屋の外へと出て行く。

黙ってそのあとに続きながら、若い神官は内心とんでもないことを聞いてしまった、とどこか他人事のように思っていた。

通常なら、神官長くらいの地位でなければ耳にすることのない話に違いない。

驚きといくばくかの興奮を隠すため、軽く顔を伏せて歩いていた彼はフィニクスが振り返ったことに気づくのが一瞬遅れた。

「グランド」

「……は、はいっ!？」

慌てて姿勢を正す彼に、フィニクスは不機嫌そうな面持ちで告げた。

「わかつているとは思うが、あの部屋の中で見聞きしたことはいい、誰にも告げてはならぬぞ——それが、お前の将来のためだ。わかったな？」

「はい」

大人しく答え、彼は頭を下げる。

その頭の中で彼が、しかしあの子供は何者だったんだろうなあ……ずいぶん迫力のある子だったけれども、などと考えていることはついに、フィニクスも最後まで気づくことはなかった。

4 - 3 神殿の秘密（後書き）

……長い上に台詞多いです。そしてティアは特大ネコ装着中。

4 - 4 死霊術師の悔恨

フィニクス神官長と若い神官が出て行ったあと、しばらくの間、ティアは目を伏せたまま動こうとはしなかった。

どこか厳しい表情を宿した顔を、レイトは横目でうかがい見る。

今しがたの会話を思えば、その胸に様々な思いがあるだろうことは想像がついた。

何度か口を開こうとしてはやめ、無意識に唇を舌先で湿らせてからレイトは思い切ったように声を発した。

「なあ——」

同時に目に入ったティアの様子の変化に、思わずぎょつとして言葉を切る。

ぴしりと背筋を伸ばして椅子にかけていたティアが、深々と息を吐きながら椅子の背にもたれかかって——

「あー、疲れた」

半分目を閉じてばやく姿からは、とても先程までの威厳を漂わせた少女の姿は想像できなかった。

（なんか……今、こいつの背中から巨大な猫がよつこらしよって、声かけて立ち上がったのが見えた気が……）

「まったく、我ながらよくあんな堅っ 苦しい喋り方できるもんだ。昔取った杵柄ってやつか？ 何度舌嚙むかと思ったことやら……」
ぶつぶつと呟くティアを、レイトは呆れたともほつとしたともつかない微妙な顔つきで見やって声をかける。

「……おい、ティア」

「なんだ？」

「さっきの……あの神官長とかつて奴が呼んでた名前だけど、あれって……」

ああ、と言いたげな顔で、ティアは笑って答えた。

「保護された神殿で付けられた名前だ。偶然とはいえ、縮めた呼び名が本名と同じだったのは驚いたがな——妙な名前を付けたら許さんぞ、と全力で念を送っていたのが効いたのかもしれないが」

「そうか……」

短く言って、レイトは低めた声を続けた。

「で、お前が言ってたあれって本当の話なのか？」

「あれ……って？」

「神殿とモンドステーンが、もともと一つだったって話だよ」

「ああ」

つまらなさそうに、ティアは肯定の答えを返す。

「そんなことで嘘をついても、意味などないだろう——あいつらじやあるまいし」

「そりゃあ、まあ……」

「あのジジイが相変わらず偉っそうで、ついムカツときてまくし立ててしまったが、正直馬鹿なことをしたもんだと思っている。あのジジイになにを言ったところで無駄だとわかつているのにな……あの程度で変わるようなものなら、とっくの昔に変わっている」

深々と息を吐き、ティアは熱くなった頬を冷ますように両手を当てる。

その仕草は妙に可愛らしく、見た目通りの少女のものに見えた。レイトは内心これも一種の詐欺だよなと思いながら、苦笑めかした口調を作って言った。

「——いいんじゃないか？」

「え？」

「お前がやり込めていなかったら、俺があんたのジジイをぶん殴っていいところだ。嫌いなんだよ、ああいうジジイは——断言してもいいぜ。俺はきつと以前から、あの手のやたらと偉そうなジジイは大っ嫌いだったはずだ！」

ぼかんとレイトを見返した目に、ティアは淡い笑みを浮かべる。

「……暴力沙汰はやめておけ。お前がなにかやらかすと、私の管理責任能力が問われることになる」

その声は苦笑を帯びていたが、瞳に浮かぶ光はやわらかかった。

「それに、お前に殴らせるくらいなら自分で殴るぞ。いつそ徹底的に——半年くらいはベッドから起きあがれないかもしれん」

妙に嬉しげな口調で、小さな拳を握るティアをレイトは慄然として見やる。

幼い少女の姿で言うと、冗談にしか聞こえないが——まぎれもなく本気であり、しかも実行可能であることをレイトは身体で知っていた。

（俺がやったほうが、まだしも軽傷で済むんじゃないか……？）

「しかし——ありがとな、レイト」

少し照れくさそうな表情で、しかしまっすぐにレイトを見返してティアは言った。

あまりにも直截に告げられた礼の言葉に、逆にレイトが動揺する。ぱくぱくと口を開閉し、忙しく顔色を変えた挙げ句にあらぬかたを眺めたまま「ああ」とだけ返した彼を見て、ティアは小さく吹き出した。

肩を震わせて笑うティアを、レイトはふて腐れたような顔で見やしたが、その口元にはいつしか、本人も気づかないうちにほのかな微笑が浮かんでいた。

やがて運ばれてきた食事をほとんど一人で平らげてから、ティアは神殿の湯殿へと向かった。ティアのために湯の支度が調えられたことが伝えられたためである。

フィニクス神官長の手配であるはずはないから、他の誰かが気を回したのだろう。

湯浴みをしたかったのは確かなので、ティアはそれを伝えに来た女性神官に丁寧に礼を言うと、案内を断り一人で湯殿へと向かったのだった。

レイトは湯と聞いただけで、顔をしかめて辞退したため同行はしていない。

入浴が不必要な身体だという以前に、おそらく風呂そのものが嫌いなのだろう。嫌がる顔が面白くて、つい色々と脅かしてしまったのも事実だが――

(……だが、風呂に入っただけで劣化するような身体じゃないんだかな)

人気のない廊下を、とてとてと歩きながらティアは思った。

湯浴みを終えて、もとの部屋へと戻る途中である。濡れた髪を小さく団子状にまとめ、着替えとして出された新しい衣服をまとっている。

子供用のものは間に合わなかったらしく、用意されたのは大人用の衣服だった。

大人が着れば膝丈くらいの裾が、ティアが着るとくるぶしまで隠す完全な長衣となる。

ある意味ちようどよかったとも言えるが、袖のほうは完全に長さが余っていて、何度も折り返してようやく指先が見えるという有様だった。

その手に、しっかり握られているのはいかなる時も手放すことのない金属の杖だ。

ティアの身長と変わらぬほどの長さがあり、見た目にもずっしりと重いそれは内部が空洞になっているため意外と重くはない。それなりの重さはあるものの、持つのにも一苦労するような代物ではない。

それでも、子供の腕には十分すぎるほどに過酷な重さだったが――

(――こんな身体)

ティアの瞳に、一瞬苛立ちとも悲しみともつかぬ光が揺れる。

ぎり、と杖を握る手に力が込められ、次の瞬間には驚くほどの自制心でその力が弱められ、ティアは静かに深い息を吐いた。

吐き終わったのと同時に、廊下の先に人の気配を感じてティアは顔を上げた。

その瞳を一瞬よぎった、底の見えない闇のような暗さはかけらも残ってはいなかった。どこか近づきたい雰囲気を漂わせて凜然と前を向き――近づいてくる人物の姿を視界に捕らえた瞬間、その表情がわずかに動いた。

ほっとしたとも、後ろめたいともつかない表情でティアは口を開く。

「ファ……」

途中で言葉が止まったのは、相手が表情を硬くするのが目に入ったためだった。

閉じた唇に苦みを帯びた笑みを浮かべて、ティアはファルケに歩み寄っていくと五歩分ほどの距離を残して立ち止まる。

「……………」

自分を見上げている幼い少女の顔を、ファルケはどこか途方に暮れたような顔つきで見下ろした。

「……聞いたのか、私のこと？」

当たり前の会話をかわすような、何気ない声であり言葉だった。

ファルケは黙ってうなずきかけて、ぐっと眉を寄せると低く絞り出すような言葉を喉の奥から発した。

「先程……フィニクス神官長から」

「そうか」

その声には落胆も安堵も、いかなる感情も含まれてはいなかった。ただ単に発したただけといった平坦な声に、反射的に返されたファルケの眼差しのほうにこそ悲痛とっていい光が宿っていた。

「本当なのか……？ 本当に、君は……死霊術師の一族の」

「次期族長」

一拍の間も置かずに答えて、ティアは唇に笑みを含ませた。

「それは、まぎれもない事実だ。私の本当の名前は、ティア・レーヴェ・モンドステーン。死霊術師すべてを束ねる、モンドステーン一族の次代の長——それが私だ」

「その姿が、偽物というのも……？」

「一応、今はこれが私の本当の姿なんだけどな」

少し不本意そうに言って、ティアは口元の笑みを苦笑に変えた。

「だが、中身と一致していないという意味においてはそうかもしれない。七年前、一度赤ん坊の身体になって、そこからあらためて成長し直しているところなんだ——本当の年齢は二十五。外見の影響で、精神年齢は多少引き下げられているかもしれないが」

「——では、一年前……ウィルニードに封印されていたあの魔獣をよみがえらせて、襲われたかのように見せかけて姿を消したというのも……」

「事実だ」

一瞬のためらいもなく言い切ったティアを見て、ファルケは奥歯を噛みしめる。

その拳が固く握りしめられるのを、視界の隅にティアは見て取る。間違っても女子供相手に手を上げるような男ではなかったが、万

—そうなったとしても避けるつもりはなかった。
それだけのことをしたという自覚はあったし、彼には騙され裏切られた者たちの代表としてティアに怒りをぶつける権利があるはずだった。

黙って目を伏せているティアの前で、だが彼は拳を握ったまま呻くように言った。

「……どう、して」

無理に感情を押し殺しているのがわかる、かすれた声だった。

「どうして、そんなことをしたんだ？」

ティアは目を上げたが、答えを返すことはできなかった。

静かにファルケを見返す瞳に様々な感情が揺れ、そのすべてが強い意志によって一様に塗り潰されていく。

完璧に制御された表情で、自分を見つめるティアをファルケは黙って見返した。

その顔に浮かぶ表情もまた抑制されたものだったが、瞳には不安と怒りと悲しみの色が隠しきれずにのぞいていた。

ファルケを見つめる目に、ティアはやがてあるかなしかの笑みを浮かべた。

溜めていた息を吐き出すようにして、短く彼女は言う。

「——場所を変えようか」

「え……？」

「長い話になりそうだ。ここでは人が来ないとも限らない——少し、

場所を移そう」

それだけ言って歩き出した背中を、つかの間見送りかけてからファルケは慌てて追って歩き出す。

困惑めいた光が、その瞳の奥でまたたいている。

先を歩く少女の背中は、片手で抱き上げることもできるほど小さなものだった。

しかしそれは、自分よりも年上の心を持つ女性の背中だった。なのに——まるで見た目通りの、幼い少女の背中であるように思えてならなかった。

必死に虚勢を張り続けている、幼い少女の背中のように——

言葉にならない問いを胸の奥底に宿したまま、ファルケはほとんど足音を立てずに歩くティアのあとに続いた。

4 - 4 死霊術師の悔恨（後書き）

背中のネコは一瞬で離脱。そして次はファルケとの正面对決です。

4 - 5 死靈術師の告白

神殿の裏庭にある小さな花壇の前で、ティアは足を止めた。

そこまで手入れがまわっていないのか——雑草に半ば埋もれた花壇の縁を軽く手で拭いて、ティアはそこに腰を下ろす。

すぐ目の前で、棒のように立っているファルケを見ないまま彼女は話し始めた。

七年前、自分の身に起きたことを。魔獣とともにウィルニードを去ったのち、ティアが故郷の村で目にしたものを。

そして今日まで、なにをしていたのか——

ファルケは言葉をはさむことなく、黙ってその話を聞いていた。

淡々とした口ぶりで話すティアの瞳から、彼は一瞬たりとも目を離すことはなかった。

やがて、すべて話し終わってティアが口を閉じた時には、うつすらと青みを帯びていた空気が完全な闇となってあたりを覆い隠していた。

「……で」

感情の混ざらない声で、ティアは付け足すように言う。

「今は、村を襲った魔獣の手がかりを求めてラクシアに向かっていくところだ。向こうで見つけたという未知の魔獣の封印が、何者かによってすでに破られていたら……ラゼールを奪った死靈術師を見つげ出す絶好の機会となるかもしれないから」

「……ティア」

意を決したように——と評するには、やや弱い声音でファルケはその名を呼んだ。

ティアは再度口を閉じて、ファルケに目をやる。その目に浮かぶ光はいささかの迷いもなく——いつそ哀しいくらいに穏やかだった。ほんの一瞬、迷うように目を伏せたあとでファルケはもう一度、ティアの顔を見据えて口を開いた。

「君は……最初から、我々を騙すつもりでいたのか？」

「……そのつもりがなかったと言え、おそらく嘘になるだろうな」
ティアの口元に、わずかばかり苦い笑みが浮かぶ。

「私は、安全に育つための場所を必要としていた。村でなにが起きていたとしても、あの山の中で過ごした三日間のうちに、とっくに手遅れになっているだろうことくらい想像がついた。それなら、せめて自分だけは確実に生き延びなければと……少なくとも、自分で自分を守るようになるまでの間だけでも、正体を隠して生きようと思った」

杖を握った自分の小さな手に、ティアは視線を落とす。

「村を襲った人間の正体も素性も、まったく不明だったからな——安全に成長するための隠れ家としては、神殿は最適だった。まさか私がそんなところにいるなんて、誰も想像はしないだろうし——たとえ、多くの人を騙すことになったとしてもかまわなかった。正直そんなこと考えもしなかった。一日でも早く自由に動ける身体になつて、村に戻らなければと——そればかりを考えていた」

「……」

表情を曇らせるファルケに向かって、ティアはほんの少しだけ微笑んでみせた。

どこかためらいがちな、頼りない星の光のような笑みだった。

「だから、最初は数ヶ月程度のつもりだった——自分でものを食べ、立って歩けるようにさえなれば出て行ける——移動の方法はいくらでもあるんだ。私はただの子供ではなく、死霊術師なのだから」

「だが、君は五年もの間ウィルニードにいた……」

呟くようなファルケの声に、ティアは淡い笑みを浮かべたままうなずいた。

「……時間が経つにつれて、だんだん不安になってきたんだ。いくら術が使えると言っても、一歳にもならない子供が一人で旅をして無事に目的地にたどり着ける可能性は低い。腕力では絶対に大人にはかなわないのだから——それで、もう少しと思っっているうちに五年が過ぎてしまつて……結局、あんな大騒ぎを起こす結果となつてしまつた」

当時のことを思い出したのか、ファルケのまぶたがぴくりと動く。ティアはそれを見て取りながら、口に出してはなにも言おうとはしなかった。わずかに固さの感じられる口調で、淡々と話を続けただけだった。

「リエル神官長にだけは……あの方にはだけは本当のことを話しておこうと思つた。それが最低限通すべき筋だと思つたから——だが、話せなかった。あの方には本当の孫のように可愛がつてもらつていたから……もし憎まれたらと思うと、怖くて話せなかった」

「そんな方じゃないだろう」

「わかつている……でも神殿の中では、死霊術師はまるで悪の化身のように言われていたからな。たとえ憎まれはしなくても、ひどく衝撃を受けるだろうと思った——五年もの間騙されていたのだから」
「ティア……」

ため息の混ざる声を、ファルケは発した。

「あんな形で姿を消されることのほうが、よっぽど衝撃的だ——実際あのあと、しばらく寝込まれたんだぞ。お年もお年だから、もしかしららと思つて俺たちも青くなつたんだ」

「……ごめん」

「それを言うべき相手は、俺じゃない」

うなだれるティアに向かつて、ファルケはきっぱりと言った。

「君が謝るべき相手は俺じゃなく、あの件で死ぬほど君のことを心配したウィルニードの皆じゃないのか？」

「……」

大きく見開いた瞳に沈痛な色を浮かべて、ティアはうつむく。

「……そうだな」

力なく返された声は嘘のない、素のままの少女のものだった。

その顔を黙つて見下ろすファルケの胸に、よく似た——だが今より少しだけ幼い少女の姿がよぎる。

思い詰めたような瞳で、一人黙々と鍛錬に励んでいた少女。

幼い身体には過酷すぎるほどの鍛錬を自らに課し、常に生傷が絶えることがなかった。すぐ疲弊する脆弱な身体に、悔し涙を流すこともあった。人目を避けて行つたようになった鍛錬を、目撃した自分に向けられたのは警戒心をあらわにした瞳だった。

硬い表情がほぐれ、笑みさえ見せるようになったのはいつからだろう——

「——本当は、違うんだ」

ぽつりと放ったティアの言葉が、過去へと向かいかけていたファルケの心を現実に取り戻した。

「え？」

「まだ一人で旅ができる年齢じゃないなんてのは——言い訳に過ぎない。本当はただ怖かっただけだ。旅に出ることもそうだが、それ以上に——村で起こったことを、その結末を自分の目で確かめるのが」

ファルケの視線の先で、ティアは顔を伏せたまま身動き一つしなかった。

「最悪のことを何度も考えた。どんなに振り払っても、その想像が頭を離れることはなかった。生き残った誰かが、私のことを必死で探しているかもしれないと思って、今すぐにでも神殿を飛び出していきたくなったことは何度もある——残念ながら、そんな相手は誰一人として残っていなかったわけだが」

思わずファルケは口を開きかけたが、言すべき言葉が見つからず黙って口を閉じることしかできなかった。

「あるいはいつそのまま、神殿で暮らそうかとも思った。なにとも忘れて……ここで生きているのは死霊術師のティア・レーヴェ・モンドスティーンなどではなく、神官見習いのティアラなのだと。死霊術師だったことなんて、変な夢でも見たと思って忘れてしまおうかと……」

寂しげな笑みが、かろうじて見える口元にのぞいた。

「だが、それもできなかった。身体は赤ん坊からやり直すことができて、心は死霊術師として生きた時間のほうが長いんだ。神殿を出て行く際に、あんな大騒ぎを起こしたのはたとえどんなに戻りたくなっても、神殿には決して戻れないようにするため——逃げ道を潰してしまっただった」

「——どんな理由があつたとしても」

ティアの顔から視線を外さずに、今度こそファルケは断固とした——なのに、不思議と突き放す響きのない穏やかな声音で告げた。

「君が、たくさんの人間に心配と迷惑をかけたという事実が変わりはない」

「……ああ」

「もし君が、本当に悪いと思っているのなら……今すぐにはなくても、いつかその人たちに無事な姿を見せるべきだ。細かい事情は脇にのけておくとして——君が元気で生きていることを、その人たちに知らせるべきだと私は思う」

黙ってうなずいてから、ティアはわずかに笑みの混ざるまなざしをファルケに向けた。

「……戻ってしまったな」

「え……？」

戸惑った表情になるファルケに、ティアは笑顔で言葉、と指摘する。

「さっき、ちょっと『俺』になっただけ……もう、『私』に戻ってしまった。少し懐かしかったんだがな」

「……あ」

ようやく気づいて、ファルケは少しきまり悪そうな顔で頬のあたりを掻く。

その顔を見やってティアはくすりと笑い、ファルケは苦笑とも微笑ともつかない表情で黙り込む。

わずかな沈黙のあと、彼は真剣な目をティアに向けて言葉を發した。

「ティア……私に、なにかできることはないか？」

それは裏の意味などない、どこまでもまっすぐな真情にあふれた言葉だった。ティアは軽く目を見開いたあと、笑ってゆっくり首を横に振った。

「いいや、ない」

はつきりと否定する言葉を返しながらも、その声は優しくかった。

そうか、と目を伏せるファルケにもう一度笑いかけて、ティアは勢いよく花壇の縁から立ち上がった。大きすぎる衣服の裾が、風を受けてはらりと舞う。

立ち上がる寸前、ティアの表情がなにかをこらえるように歪んだが、周囲の暗さがその表情をファルケの目から隠した。

「ありがとう、ファルケ」

ファルケに向き直った顔には、先程までと変わらぬ笑みだけがあった。

「その気持ちだけ受け取っておこう。これは私がやるべきことだから」

ら——他の誰かの力を借りるわけにもいかないんだ。それに、君の力が及ばないことでもあるから」

その目に力強い輝きをたたえて、ティアははっきりと言い放つ。

薄紫の瞳に浮かぶのは、ファルケにも見覚えのある強い意志の光だった。こうなると彼女が決して譲らないことも、彼は過去の経験からよく知っていた。

彼にできたのは、その顔から目を離さないまま黙ってうなずくことだけだった。

4 - 5 死霊術師の告白（後書き）

ティアの本音の一部暴露。ファルケに対しては素直なところを見せる彼女です。

4 - 6 闇に踊る影

神殿内へと戻り、ファルケと別れて歩き始めて少したった頃だった。

照明の数が少ないため、薄ぼんやりと暗い廊下の一角で足を止めると、ティアは曲がり角の向こうへためらうことなく声をかけた。

「レイト」

わずかな間を置いて、闇の一部が分かれるようにしてレイトが姿を現す。

闇にとけ込む黒一色の装束の中、そこだけ白く浮かぶ顔に観念したとも、後ろめたさを隠しきれずにいるともつかぬ表情があるのに気づいて、ティアは吹き出すのをこらえるような顔つきになった。

「素直に出てきた潔さは認めてやってもいいが……それ以前に立ち聞きとはいただけないな。言っておくが、お前の身体は私の魔力で維持されているのだから、居場所くらい簡単にわかるんだぞ」

「……悪かったよ」

あっさりと、レイトは自らの非を認めた。

「なかなか戻ってこないもんだから……どこかで迷子にでもなっているんじゃないかと思ったんだよ。でなけりゃ、あのクソ偉そうなジジイにとっ捕まって、くだらねえ話聞かされているんじゃないかって……」

「私が大人しくそんなもん聞いていると思うか？ それにこんな単純な構造の建物の中で迷子になるほどの方向音痴でもないぞ」

「……そうだよな」

そっぽを向いたまま、疲れたように答えるレイトを見やって、ティアはその顔に浮かぶ笑みを濃くしていく。

やがてこらえきれないように吹き出すと、彼女は身を二つに折って笑い始めた。

明るい声を立てて笑うティアを、レイトはやや憮然としながらもどこか安堵の色の漂う瞳で見返した。

ティアが笑いを収めるのを待って、レイトはおもむろに口を開いた。

「お前……あいつの前じゃずいぶん素直だったな」

「え？」

「さっきの話……その、聞くつもりじゃなかったんだけど。聞こえてきちゃったからよ。俺にはなかなか話さなかったのに、ずいぶん簡単に話すもんだって思ってた」

その声に面白くなさそうな響きがあるのに気づき、ティアはようやく収めた笑いが再びこみあげてくるのを感じた。

かろうじて吹き出す寸前にこらえ、微笑を残した唇で言葉を紡ぐ。
「そうだな……私はファルケには、あんまり嘘はつきたくないのかもしれない」

「どうして……」

「二度目の、初恋の相手だからな」

その言葉に、レイトは口にしかけた問いも忘れてぽかんと口を開ける。

目と口を大きく開いた間抜けな顔を、今度こそくすくすと笑いながら見やってティアは言った。

「これもずいぶん昔の話だがな。私がウィルニードにいた頃――まだ三つにもなっていなかったか。肉体に引つ張られて、精神的には十二、三歳といったところだったんだが……あの頃、ファルケはなにくれとなく私の面倒を見ていてくれてな。それが私には、本当に頼もしいお兄さんに見えたんだ」

「……って」

開けていた口を強引に閉じると、レイトは唸るような声を発した。「初恋って、普通は何度もするもんじゃねえだろ？」

「仕方ないだろう。私の場合、人生を頭からやり直しているようなものだし……ちなみに一度目の初恋の相手は内緒だ。全然タイプの違う相手だったとだけ言っていこう」

「聞いてねえよ、そんなの！」

思わずがなり返してから、レイトは疲れたように深々と息をつく。もはや、なにを言い返す気力もわかないといった様子のレイトに、ティアは悪戯つばいまなざしを向けた。

「もしかして……妬いたか？」

「だ、誰が……っ！」

愕然と目を見張って、レイトはぶるぶると首を横に振る。

「んなわけあるか、阿呆！」

「その割には、ずいぶんしつこくからむじゃないか？」

「そんなんじゃねえっ！ あんな泣き言めいたこと口にするなんて、お前らしくもないと思っただけだ！」

軽くまばたきして、ティアはその言葉を唇に載せる。

「……泣き言？」

「じゃなかったら、言い訳だろ」

動揺の気配を瞳に残したまま、鋭い口調でレイトは言い放った。

「お前はお前らしく、クソ偉そうにふんぞり返っているよ。でない
と、こっちの調子まで狂うんだよ」

「……………」

「お前がしおらしくなったりしたら、お前にいいようにこき使われている俺の立場がないだろうが。仮にも俺の主人を名乗るんなら、
それにふさわしくしゃんとしてるよ」

視線をあらぬ方向に向けたまま告げるレイトのほうが、よほど偉
そうな態度に思えたがティアはそれを口にしなかった。

ほんの少しの笑みを唇に刻んで、レイトを見返しただけだった。

「らしくない……か。確かにそうだな」

「ああ」

うなずくレイトの脇をかるやかな足取りですり抜け、蝶が舞うよ
うにひらりとその場で一転する。

レイトへと向けられた顔には、曇りのない笑みが浮かんでいた。

「ところで、さっきから言い放題言ってくれてるようだが……誰が
クソ偉そうだって？ 阿呆？ 誰に向かって言ってるんだ？」

ぎくりと表情を凍らせて、レイトはティアから少しずつ離れようとする。

それよりも早く、小さな手がレイトの服の裾をつかんだ。

「そこまで言うからには、覚悟あつてのことだろうな？ 暴言の責任は取ってもらうぞ」

「……暴力はいいのか、暴力は」

ごく小さく呟いた声は、杖が風を切る音とごつりと重い響き、それに押し殺した悲鳴によってあえなくかき消された。

夜半、人気の絶えた街の一角で動くものの姿があった。

広い屋敷をぐるりと取り囲むように張り巡らされた塀の上——そこに、暗い色の衣服と帽子を身につけた人物が姿を現す。

高い塀をなんなくよじ登り、ロープで引き上げた荷物を塀の外へ静かに下ろす。

荷物の底が地面に触れるのと同時に、その人物は手にしたロープを投げ捨てた。小さな音を立てて地面に落ちたロープの横に、ひらりと宙に舞ったその人物が音一つたてることなく着地する。

その際にずれた眼鏡を指先で直して、その人物は注意深くあたりを見回した。

暗い街路に人の姿は見当たらない。時間もそうだが、街の中心部から少し外れたここに死霊術師の屋敷があることは、この街の人間なら誰でも知っている。

酒を過ぎして、家に帰りそびれてしまった男たちもここへは決して寄りつかない。

周囲に人の気配がないことを確認し、少しほっとしたようにその人物は屈めていた身を起こした。

先に下ろした荷物を回収しようと、そちらへと一歩足を踏み出した瞬間——凍りついたようにその動きが止まった。

ぎこちなく振り返った瞳が、闇の中に立つ一人の男性の姿を映し出す。

周囲には街灯も少なく、濃い闇があたりを包んでいるのにもかかわらず、その姿は光に包まれているかのようにはっきりと見えた。

白を基調とした長衣、抜けるように白い肌——そして輝くような淡い色の金髪。

薄い水色の瞳に浮かんでいるのは、今まで一度として見たことのないような厳しく——どこか、身を切るような痛みをも感じさせる表情だった。

「……イリス」

動きを止めたままの妹に向かって、イアンは呼びかける。

慣れない装束に身を包んだイリスは、こわばった顔で兄の姿を見返すことしかできなかった。

「こんな時間に、一人でどこへ行こうというんだ？」

ものやわらかに問いかける声にも、彼女は答えを返せない。

蒼白な顔で立っているイリスのほうへと、イアンはゆっくりと歩み寄っていった。

「……どこへ行くつもりだったんだ？」

重ねられた問いに、イリスは震えを懸命にこらえて口を開く。

「ティア姉様の……ところへ。私もなにか、お手伝いできたらと思っ
て」

「——違うだろう？」

今にも泣き出しそうなイリスの声を、彼は容赦なくさえぎった。
伸ばされた手が、イリスの白い頬にそっと触れる。びくりとイリスが身をすくめるのがわかったが、イアンはその手を離すことなく
言った。

「本当は……なにをしに行くつもりだった？」

「わ、私は……」

イアンの視線から逃れようとするように、イリスはきつく目をつ
ぶる。

その目を見開くと、彼女は真正面から思い切り兄の身体に拳を打
ち込んでいった。

「ごめんなさい、兄様！」

鋭い一撃は、しかしイアンの身体には届かなかった。

打ち込んだ拳が、包み込まれるように受け止められた——そう感
じた次の瞬間イリスは首筋に強い衝撃を受けて昏倒した。

意識を失った身体を、イアンは片腕で受け止める。

もう片方の手には、今しがたイリスを気絶させた 気死 の呪文
がまだ、刺青のようにまわりついたままだった。

背後に控えていた男にイリスの身体を預けると、イアンは男に向かって「閉じこめておけ」と低く告げた。

「決して外へは出すな——嚴重に見張らせておくように」

男が一礼して去っていくのを見ようとせず、イアンは地面に置き去りにされた荷物に視線を転じた。

持ち上げてみると、イリスの決意を表しているかのようにずしりと重い。

その重さに、イアンは表情を曇らせてため息をついた。それは、言葉にできない数々の思いが絡まり合った複雑な吐息だった。

4 - 6 闇に踊る影（後書き）

今見返すと、レイトの言動が典型的なツンデレ男子であることに気づいてちよつと衝撃を受けました。そんな意図はなかったのですが……くはっ。

そして裏でも色々と進行中。

5 - 1 新たなる同行者

翌朝、まだ陽も昇りきらぬうちに、ティアたちは神殿をあとにした。

神殿の朝は早く、この時刻でもあちこちで忙しげに働く者たちの姿が目に入る。多くは修行中の若者のようだったが、彼らに負けぬほど早起きをして、簡単な食事を済ませるとティアは支度を調べて部屋を出たのだった。

「いいのかよ、挨拶もなしに出て行つて？」
門に向かう途中、どこか呆れたような声をレイトはティアに投げやる。

「いいもなにも——置き手紙もしてきたし、第一あの神官長が朝っぱらから私の顔を見て喜ぶとも思うのか？ それにあのジジイは今頃まだ夢の中だ——奴が起きるのを待っていたら、昼過ぎまで出発できないぞ」
「じゃなくて」

レイトは目を半分閉じて、とうとうと語るティアを睨みつけた。
彼女が故意に話をすり替えていることに、レイトはとつくに気づいていた。

「あのファルケとかいう奴に、挨拶しないでいいのかって聞いてん

だよ。まさか、あいつまで朝寝坊ってことはないだろ？」

「……ファルケは鶏よりも早起きだぞ」

そっけなく答えてから、ティアは微苦笑を口元にのぞかせる。

「だが、その必要はない……ここで会ったのだって偶然みたいなものだ。向こうは使者の役目で忙しく飛び回っているはずだし、今日だってもう出発したあとと思うぞ」

「……いいのかよ、それで？」

レイトの声には案じるような響きがあつたが、ティアは答えずにまたがった馬の鼻先を門の方向へと向けた。

だが、馬の足はそこから一步も進み出しはしなかった。

手綱を握ったまま、動きを止めたティアをレイトは不審そうに見やり、彼女の見ている方向へと視線を移す。

同時に、驚きとも微笑ともつかない表情がその顔に浮かんた。

「……お早う、ファルケ」

ゆつくりと馬を進ませて、ティアは行く手に立っている人物にその声をかけた。

ファルケは旅装束に身を包み、栗毛の馬の手綱をその手に握っている。

やや居心地悪そうな表情で、彼はティアの挨拶にお早う、と答えるとおずおずと道の端から歩み出してきた。

「どうしたんだ？ とつくに出発したものと思っていたぞ。まさか私に挨拶するために、わざわざ待っていてくれたのか？」

「いや、その……」

歯切れ悪く言いながら、ファルケはレイトへと目をやる。

いやに鋭い目つきに内心むつとするものを感じながら、レイトは軽く顎を上げて言葉を投げ返す。

「別れの挨拶だったら、手短にやってくれ。こっちも今から出発するところなんだ」

「見ればわかる」

愛想のかけらもない口調でファルケは言い返し、わずかな沈黙のあと意を決したようにティアに向き直った。

「……ティア」

「ん？」

「その……昨夜、君はラクシアに行くようなことを言っていたが」
「ああ」

「実は、その……私も、これからラクシアに向かうところなんだ」
「ぎこちない口調で告げるファルケを、やや意表をつかれたようにティアは見返す。」

「この男と二人だけではいささか心もとないだろうし、私もせつかく君に会えたのだから積もる話もある——それで、よければ一緒に行かないか？」

額に汗を掻きながらの、ファルケの言葉をティアは最後まで聞いてはいなかった。

むずむずと動いていた口がこらえきれないように笑いの形を作り、やがて彼女は盛大に吹き出したのである。

「ぷっははははは！ ファルケ、相変わらず嘘つくのが下手だな！」
目に涙をにじませて笑い転げるティアを、ファルケはぽかんとした顔で見やる。

レイトもいたたまれない様子で、頬をぽりぽりと掻いていた。あまりにも下手すぎて、混ぜ返す気も失せるほどの嘘だった。

そんな二人の反応に、ファルケの顔がみるみる赤く染まっていく。茹でたように赤くなった顔を伏せて、その場で立ちつくすファルケを見やってティアは笑いの気配の残る声で言った。

「次の神殿には行かなくていいのか？」

「え？ あ、ああ……このあとはイクスヴェールに戻るだけだ」

「わかった」

吹っ切れたような笑みを浮かべ、ティアはひらりと馬から飛び下りた。

「じゃあ、神殿から正式にファルケの身柄を借り受けることにする。モンドステインの次期族長の要請なら、イクスヴェールも文句を付けられないだろう」

「……それじゃ」

「隠れてついてこられたりしたら、そっちのほうがよほど困る。それなら最初から、同行させたほうがまだ心臓に悪くないだろう」

「——ただし」

明るい表情となったファルケを見上げて、ティアはきっぱりと言いつ放った。

「ラクシア国内に入るまでの間だけだ。それから先は、どれだけ時間がかかるかもわからないから——そんなに長い間、身柄を借りっぱなしにするわけにもいかない」

「……わかった」

神妙な顔でファルケが答えると、ティアは目に見えてほっとした顔つきになった。

「少し待ってろ。誰かに、神官長への伝言を頼んでおくから」

かるやかに走り去るティアの背中を、二人並んで見送ってからレイトとファルケはお互いの存在に気づいたように目を見交わした。友好的という表現からは天と地ほどにかけ離れた目つきであり、表情だった。

結局、出発は遅れるんじゃないかねえかと内心で呟きながら、レイトはファルケの顔を横目に見やって口を開いた。

「あんな子供にくつついて回って——変質者かよお前？」

ひくりとファルケは眉を動かしたが、場所柄を考えてかあえて反論しようとはしなかった。無視された格好になって、レイトも眉を上げると。

しかし、反応がないためそれ以上の言葉を口にすることはなかった。

ティアが戻ってくるまでの間、二人は口を閉ざしたままその場に立ち続けていた。最初から最後まで、両者の間に漂う険悪な空気が消えることはなかった。

「そうか、料理番のガットウ爺はいまだ健在か——懐かしいな、あんな偏屈爺の作るオムレツの味が私の人生の中で最高の味なんだ。たまに木クズや石ころが混ざっているのにも関わらずな。あの味はまったく詐欺に近いと思うぞ」

「……確かに」

「まあ、八十を越えているし——老眼でほとんど見えていないんだろうな。手元が狂わないのが奇跡みたいなもんだ」

「だが、さすがに助手を入れるようになったぞ。仕込みから一人で全部やるのはさすがに無理だろうし……歳のせいか、少しは性格が円くなったみたいだ。以前のように、一日で助手が逃げ出すこともなくなった」

「それは、画期的な進歩だな」

いたって和気藹々と言葉をかわしながら、ティアとファルケは馬を進めていた。

朝のぎこちなさが嘘のように、ファルケの口調は軽い。対するティアも肩の力を抜いた様子で、彼の言葉に応じていた。

そんな二人を、やや後ろからレイトは恨めしそうに見つめやった。

「……あのなあ、お前ら」

呻くような声は、肩の上のずっしりと重い荷物のためである。

前方の二人は、その声に気づく様子もなく和やかに会話を続けている。レイトは奥歯をぎりっと噛みしめると、二人に向かって声を張り上げた。

「お前らっ！ 少しは手伝おうって気にならねえのかっ!？」

ようやく馬を止めて、前をゆく二人が振り返る。

馬上にあるのは騎手の姿のみで、荷は一つとして載っていない。

それらはすべて、レイトの肩に背負われていた。

荷物の総重量は、もはや体格のよい大人の体重をも凌駕している。肩に食い込む荷物をまとめた紐も限界状態だったが、それ以上に

レイトの身体が限界を訴えていた。その足取りはもはや歩くというより、よろめくに近い。

「恨むんなら、自分の口の悪さを恨め」

そんなレイトの姿にも、眉一つ動かさずにティアは言い放った。

「何度言っても直らないから、身体に教えてやっているんだ。これで、少しは口を慎むということ覚えるだろう」

レイトは顔をしかめ、盛大に呪いの文句を吐き散らそうとしたが、ティアが投げ入れた台詞が寸前でそれを阻止した。

「言っておくが、さらに侮辱的な言葉を吐くようだったら薪拾いを追加するぞ。もちろん荷物は背負ったまま、屈んで立って——これ以上ない足腰の鍛錬になりそうだな」

「……………」

喉元まで出かかった罵倒の言葉を、慌ててレイトは呑み下したのだった。

そんなやりとりをかわしながら、順調に三人は北に向かって進んでいた。今までの旅とは違って大きな街道を通っているため、行き来する人々の姿が目立つ。

そのほとんどが、異様なものを見るような目をレイトへと向けていった。

それも無理からぬことだったが、同行する二人はかまうそぶりを見せなかった。

視線を向けられている当人は言うに及ばずである。もとより人の視線を気にするような性格ではなかったし、今は押し潰されそうな

背中荷に耐えるので精一杯だった。

胸の中で文句を並べ立てながら、ひたすら足を動かして、気がついた時にはすでに陽が西に傾き始めていた。

そこで、野宿に適した場所を見つけてティアはようやく馬を止める。

もとはなにかの建物があったのだろう、石組みの土台が残る場所だった。何度も野宿に利用されているらしく、火を焚いた跡がそこかしこに残っている。

街道には宿場町も点在しているが、騎馬の二人がさほど速度をゆるめることなく進んだために、夕刻前に通り過ぎてしまっていた。普通ならばそこで足を止め、少し早めに宿を取るのだろうが、旅慣れている二人は野宿してでも先に進むほうを選んだのだ。

「まったく……」

草のまばらに生える地面にひっくり返ったまま、レイトはてきぱきと野宿の準備をする二人を眺めやった。

ファルケは拾ってきた小枝に手際よく火を付けると、荷物の中から足つきの鍋を出して水を張り、火にかける。

その間にティアは食料の包みを自分の荷物から取り出し、必要な分だけ割り取ってかけられている腐敗防止の術を解く。死霊術を応用したもので、下拵えの済んだ食材の鮮度を長い期間保つが、そのままでは調理できないのだ。

残った食材を荷物に戻しながら、ティアは大の字になって転がっているレイトを睨んで言った。

「休んでないで、少しは手伝ったらどうなんだ？」

「……お前にだけは言われたくねえ」
顔を上げようとせず、レイトはティアの非難めいた声に応じる。
「昼間、さんざん人をこき使っておいて……せめて少しくらい、速度を落としてくれてもよさそうなもんだろ」
「まさか、本当についてこられるとは思わなかったからな。どこまで走り続けられるか試してみたくなくて……本当に、死人の体力とというのは底なしだな」

しみじみと感心したように言われて、レイトは寝転がった地面にずぶずぶとめり込んでいくような気分になった。
(いくら死人だからって……ここまでひどく扱われる覚えはねえぞ)

「……どうせ俺は食えないんだから、食事の支度くらい免除してくれたっていいだろ？」

投げやりな口調で応じた言葉に、反応したのは火のそばに座ったファルケだった。

彼はレイトとティアとを交互に見やると、さすがに気の毒そうな表情になって控えめに口をはさむ。

「ティア……いくらなんでも、夕食まで抜くのは厳しすぎないか？彼は昼食だってまともにとっていないのだし」

「え？」

「その……なにか意味があるのかもしれないが。しかし、それでは明日以降どうあっても体力が続かないぞ」

「……あ」

やっと思い出したような表情で、ティアはファルケの顔を見返す。
レイトもひっくり返った姿勢のまま、顎を上げて逆さまに二人を

見やった。その顔にはまだ言っていなかったのか、という思いがありありと現れていた。

5 - 1 新たな同行者（後書き）

道連れが一人増えました。やはりパーティーに神官は不可欠。

5 - 2 魔獣の襲撃

「そういえば……まだ話していなかったな」
「なにをだ？」

「いや……そうか、ファルケは死霊術師じゃないからな。てつきりもうわかってるものだとばかり……」

呟くティアに、ファルケはやや不審の色の混ざる視線を向ける。
そこにはわずかな不快感も含まれていたが、死霊術師であるティアをおもんばかってかはつきりと顔には出さなかった。

「その……言うのが遅くなってしまったが、こいつは——レイトは、私がよみがえらせた死人なんだ」

「……は？」

言葉の意味を理解し損ね、ファルケが間の抜けた声をあげる。

「だから……」

ティアが言いかけた、その時だった。

ざわりと背中毛が逆立つような感覚を覚えて、レイトは跳ね起きた。

まったく前触れのない行動に、ファルケはもちろんティアまでも

が目丸くする。その目が理解の光をのぞかせるのと同時に、鋭く細められた。

「——なんだ？」

わけがわからぬなりに、二人の様子からただならぬ気配を感じたのだろう。ファルケが口にした問いに、レイトは視線を動かさずに答えた。

「わからねえ——が、すごい殺気だ」

「私には、けっこう馴染みのある気配だけだな」

今まで気づかなかった自分を揶揄するような、苦い笑みを含んだ口調でティアが言う。

二対の視線が集まる中、彼女はすぐそばに置いてあった杖へと手を伸ばした。

「——魔獣だ。生きているか、死んでいるかまではまだわからんが」
ティアの言葉に、ファルケが表情をこわばらせる。彼は神殿に伝わる伝承から、魔獣の恐ろしさと厄介さを知っているようだった。

一方、レイトは魔獣に対しての知識がないためか、気負いのない表情ですらりと立って腰の剣に手をかける。その姿からは、相手が高んであれ襲ってくるものならば撃退するというきわめて単純な決意だけが感じられた。

その姿を見て、ファルケも慌てて手の届く場所に置いてあった金属の棒を取り上げる。

「ファルケ」

緊張した顔のファルケを見やり、ティアは低い声で呼びかけた。

「私のそばから、できるだけ離れないでいてくれ」

その言葉に、ファルケはいささか傷ついたような表情となった。
「いくらなんでも、君に守られるほど弱くはないつもりなんだが…
…」

「わかつている」

ほんの少し、苦笑を含んだ笑みをティアは口元にのぞかせる。

「術を使う間、私はほとんど無防備になってしまっ……ファルケにはその間、私を守ってもらいたい」

「そうか、わかった」

晴れやかな笑顔になって、ファルケは力強くうなづく。

少し離れた場所から、そんな二人のやりとりを見守っているレイトが、やや面白くなさそうな表情でそっぽを向いたが、それは誰の目にも留まることはなかった。

「あと、これは二人に言うておかないとならないが……」

ティアの言葉は、最後まで続かなかった。

夕闇を引き裂いて舞い降りた巨大な影が、ティアめがけてまっすぐに襲いかかってきたのだ。

レイトの手元から鞘走った銀光が、猛禽を思わせるその爪を受け止める。

即座に斬りつけ返したレイトの刃を、影はくると宙を一転してかわした。巨大な鳥のように見えたが、その動きは通常の鳥のそれではあり得なかった。

困惑を隠せない表情のレイトに向かって、ティアは淡々とした声音で告げた。

「魔獣はこの世界の物理法則に支配されない——ただの獣を相手にするつもりでいたら、怪我するぞ」

「……な」

「あと、通常の武器では魔獣に傷を負わせることはできない。物理的なダメージに対しては、連中はほとんど無敵といっていい。仮に傷を負わせたとしても、完全に滅ぼすことはまず不可能だしな」

「じゃあ、どうやって……！」

倒せばいいんだ、とレイトが口にするより早く、新手の魔獣が闇にまぎれるようにして近づいてくる。

その数は時間とともに、刻々と増えてゆきつつあった。

「おい……ティア！」

悲鳴じみた声をあげるレイトに、ティアはうつすらと微笑みを浮かべて答えた。

「とりあえず、時間稼ぎを頼む」

それだけ言い置いて、彼女は手にした杖を水平に掲げる。

レイトは舌打ちしたげな表情を見せたが、精神集中に入ったティアを見て、仕方ないと言いたげに周囲を取り囲みつつある魔獣たちへと向き直る。

その横に、蒼白な顔をしたファルケが並び立った。

「……足手まといになるなら引っ込んでろ」

視線を前方に固定したまま、レイトが言葉だけを隣へと投げやる。

なるか、と返したファルケの言葉こそ勇ましかったが、その語調からはいつもの覇気が感じられなかった。

レイトがそれに対して、さらになにか言い返しかけ――

「――っ！」

言葉が形になるより早く、足下の地面が爆ぜるように割れて異形の影を生み出す。

それは、薄青い甲羅を被った甲虫のような姿をしていた。しかし六本であるはずの足は数え切れないほどに枝分かれして、不気味にざわつく繊毛と化している。

中型の犬ほどの大きさをしていたが、その外見はありふれた獣の愛らしさからはかけ離れていた。身体のおちこちが不自然に歪んでおり、まるで作りかけで放り出された玩具のように見える。

思わず息を呑むファルケへ、それは意外に俊敏な動きで襲いかかってきた。

手にした棒を一旋して、ファルケはそれを叩き落とす。しかし安堵する間もなく、別の魔獣が彼の足下に這い寄ってきていた。鳶のような触手が足首に巻き付く寸前、棒の先で地面にそれを縫い止めて一歩後ろへ下がる。

それを横目にしながら、レイトも自分に向かってくる魔獣の相手で手一杯だった。

力の限り手にした剣を振るうが、ティアの行った通り魔獣にはまるで通じない。まるで金属が硬い木に斬りつけているようだった。疲れを知らぬはずのレイトの腕が、徐々にその動きを鈍くしていく。

(……畜生)

胸の内で呟いて、レイトは剣の柄を固く握りしめる。

その目がティアの姿へと向けられ、同時に彼は軽く目を見張った。ティアの周囲には、数えきれぬほどの光る文字が浮かび上がっていたのである。それは壁のように彼女の周囲を取り巻き、その姿をぼんやりと照らし出している。

半ばその目を閉じ、ティアは流れるような動作でさらに文字を描き続けていた。

一瞬の停滞もない動きは、まるで踊ってでもいるかのように見えた。それだけの速さで描き続けているにもかかわらず、文字を書き損じたり、その配置を間違えたりするようなこともない。

その光に気づいたファルケが、驚きの色を瞳に宿してティアを見る。

まもなく最後の一字を書き終えて、忙しく動いていたティアの指先が動きを止めた。同時にティアは伏せていた瞳を上げ、明瞭な発音で声を発する。

『——虚ろなる闇を抱きし無貌の王（モーマ・サーガント・リア・エルメル・ウエリオス）』

言葉というよりも音の連なりに似た、耳慣れないその言語を聞いた瞬間ファルケの顔に信じられないといった表情が浮かんだ。

『水盤に描かれしかりそめの器の糸を切れ（デア・ウィクシール・デュリスト・マール・カムセル・ルーギオス）』

その音は耳に入ると同時に、意味をともなつた『言葉』となる。生きた人間の口から出ているのが嘘のような、自然音めいた不思議な音声だった。

染みわたるように空間に音が溶け入ると同時に、変化が起こる。音が描いた波紋をなぞるように、淡く光る図形が生まれたのだ。極細の糸で編み上げたレースのような図形は、その場に立つ全員の足元へと見る間に広がっていく。

そこに巻き込まれるような形で、ティアの周囲に浮かんでいた文字が散らばって図形の一部となる。最初から計算されていたように無駄のない、ある種の美しささえ感じさせる光景だった。

知らず、レイトの目がそれに奪われた——瞬間、前方からわずかに注意が逸れる。

そこにできた隙を見逃さず、魔獣の一体が跳ね上がるようにして彼へと躍りかかった。反射的に剣を振るって鋭い爪の一撃をはねのけるが、魔獣はさらに跳躍して図形の中心に立つティアへと襲いかかる。

「——の野郎っ！」

悲鳴じみた罵声とともに、レイトは魔獣とティアとの間に割り込んだ。

割り込むことしかできなかった。手にした剣を使う間も、防御の態勢を取る余裕すらもなかった。

無防備に立ちつくすレイトの胸の中央に、魔獣の爪が深々と突き

立つ。

「……っ！」

血の混ざる呼気を吐きながら、くずおれるレイトをファルケは愕然と見やった。

一目で致命傷とわかる傷だ。それでも万に一つの可能性でもあればと思い、治癒の術を施すために彼はレイトに駆け寄ろうとする。

その進路を、レイトの血で爪を赤く染めた魔獣がさえぎった。

思わず足を止めたファルケの頭に、魔獣はその爪を振り下ろそうとする。

避けるべきか防ぐべきか、一瞬迷ったのが仇となった。硬直したように立つファルケの脳天へと、重い唸りをあげて魔獣の爪が襲いかかる。

「——っ痛えだろ、こん畜生！」

それが額に届く寸前、割り込んだ声と剣の一撃がなかったら、ファルケの頭部は跡形もなく粉碎されていたことだろう。

だが、その声の主を見やるファルケの目に浮かんでいたのは、感謝の色ではなかった。

そこにあっただのは、驚きと——恐怖をにじませた表情だった。

「——んの、舐めるな！」

レイトはそんなファルケの様子には気づかないまま、魔獣の首元に剣の切っ先を入れて力任せに地面に叩きつける。

首を貫かれても魔獣は動きを止めなかったが、地面に縫いつけら

れた格好になってじたばたともがくことしかできなかった。

レイトは頭をもたげてふんと鼻を鳴らし、胸に血をにじませたその姿をファルケは半ば呆然として見つめる。背中まで貫通した傷の深さを考えれば、生きているだけでも奇跡に近い——動き回るなどまず不可能のはずだった。

5 - 2 魔獣の襲撃（後書き）

3 / 14 真音の読みを追加しました（ルビがどうしても上手く入ってくれないので、かつこ書きです）。

5 - 3 死者の刻印

「お前……」

喉の奥に貼りついたような声を、ファルケが発する。

レイトが視線を動かし、なにか言いかけた——が、それが言葉になるより早くティアの凜とした声が空気を震わせた。

『我が声に応え、我が声に従え（ミルト・ニア・モスト・ディム・エール・バストゥ）——我が名は 月に架かる虹（ミ・デア・ラクト・エールメインティア）』

その声に反応するように、足元に広がった図形がまとった輝きを強める。

息づくような淡い明滅をくり返しながら、それは徐々に明るさを増し、やがては正視が難しいほどに強烈な光を放つ。

あまりの眩しさに、ファルケも耐えきれず目を閉じる。

その直前、真っ白に漂白された視界の中で魔獣たちが、水を浴びせられた砂糖菓子のように次々と崩れ落ちるのが目に入った。

一瞬で光は消え、恐々と開いた目に映ったのはなにもない野原だ

けだった。

ほとんど闇に沈みかけた景色のどこにも、魔獣の姿は見当たらない。魔獣が現れる前とまったく同じ、ありふれた風景だけがそこにあった。

しきりにまばたきをしながら、ファルケはあたりを何度も眺め回す。

その耳に、苦痛に低く呻くレイトの声が届いた。はっとして視線をやった先には、草の中に膝をついたレイトの姿があった。

反射的に駆け寄りかけてから、ファルケは先程の光景を思い出して足を止める。

「――の、馬鹿が！」

大音声とともに、かわりに駆け寄ったのはティアだった。

その第一声に、レイトはもちろんファルケまでもがそれはないだろう、といった表情を浮かべる。

「……ティア」

「お前な……感謝しろとまでは言わねえが。馬鹿はねえだろ、馬鹿は」

脱力しきつたため息を吐くレイトに、眉を逆立ててティアは言った。

「馬鹿を馬鹿と言つてなにが悪い。そこまで思い切りよく、真正面から攻撃を受ける奴がどこにいる！ もう死ぬことはないと思って油断していたんじゃないのか？ 言っておくが、その傷を治すのは

本当に面倒なんだからな！」

レイトに反論する間も与えず、一息に言い切つてティアは血で汚れた衣服の前を乱暴に開く。

むごい傷跡がさらされ、ファルケは思わず視線を逸らす。

予想はしていたが、胸の中心にぽっかりと空いた穴は深く、内部の肉や骨がはつきりとのぞいている。傷の周囲が歪んでいるところを見ると、肋骨も二、三本折れているに違いない。出血は止まっているようだが、すでに肌は土気色に変じている。

「ティア……」

のろのろと、ファルケは口を開いた。

そこまで見れば——いや、見なくとも異常は明らかだった。

どう見ても即死以外ありえない傷なのに、平然と動いて喋っているそれがなんなのか、すでに答えは返されていたが——問いを口にせずにはいられなかった。

「それは……いつたい、なんなんだ？」

「さっき言っただろう。こいつは、私がよみがえらせた死人だ」

ファルケを見やることもせず、ティアは言つて空中に指を滑らせる。

指の軌跡通りに描かれた線が、光る文字となって宙に並べられていく。その作業を中断することなく、ティアは少し硬い声で続けた。

「もともと、白骨死体で転がっていたのを私が拾ってよみがえらせたんだ。生きている身体に限りなく近いから、怪我也するし痛みも感じるが——この程度の傷で動けなくなるようなことはない」

愕然と見開いた目を、ファルケはティアからレイトに移す。

痛みをしかめながらも、レイトはその顔をどこか挑戦的な光の浮かぶまなざしで見返した。

その視線から逃れるように、目を逸らしたのはファルケのほうだった。

ティアはそんな二人にはかまわず、次々と空中に文字を描き連ねていった。びつしりと並べられた文字は、宙に浮かんだ巨大な壁のように見える。

それが光を放つのと同時に、レイトは身を二つに折って呻いた。

「……っ！」

悲鳴を呑みこむことができたのは、奇跡に近かった。

それほどの痛みが、胸の傷を中心に全身を駆けめぐったのだ。まるで焼けた鉄棒を傷に押しつけたような痛みに、レイトは胸を手で押さえて地面を駆け回る。

「……ぐ、うっ！」

その手に伝わってきたのは、皮膚が波立つような異様な感触だった。

肉と皮膚とが猛烈な速度で再生しているのだと、激痛の中でレイトは悟る。折れた骨も自動的に正しい角度で接合し、熱した金属を触れあわせたように傷口が一つに溶けあって見る間に消えていく。ものの数分とたたぬうちに、レイトの傷は完全にふさがっていた。

しかし、彼は傷一つない胸を手で押さえたまま目に涙をにじませて訴えた。

「もうちょっとマシなやり方はないのかよ！ 死ぬかと思ったぞ！？」

「死ぬわけないだろう」

ティアの声はそつけなく、その目はさらに冷やかだった。

「お前の身体には、通常の生物が備えている自然の治癒力がそなわっていない——だから普通の治癒術ではお前の傷は治せないんだ。

治すためには無理矢理細胞を活性化させて、傷口をくつつける意外に方法はない」

「だからってなあ……」

「文句を言うなら、うかつに怪我をした自分自身に言うんだな。お前の反射速度だったら傷を負わずに私を助けることだってできたはずだ」

「へいへい……」

あきらめたように言って、レイトは胸から手を離す。

その下から現れた無傷の皮膚に、吸い寄せられるようにファルケが目をやった。

傷の片鱗も残っていないことにあらためて驚かされたせいもあったが、そこに鮮やかに浮かび上がる血色の紋様に気づいたためでも

あつた。

ついさつき、ティアが空中に描いた文字とよく似たそれは――
ファルケの硬い表情に気づいたレイトが、少し考え込むような光
を瞳にのぞかせたあとティアに目をやり、何気ない様子で尋ねた。

「そついや……さつき、お前いつたいなにをやったんだ？ どうや
ら、魔獣はあれで全部片付いたみたいだが……」

「ああ」

いつもと変わらないレイトの口調に、少しだけ表情をゆるめてテ
ィアは答えた。

「普通の方法では魔獣は殺せない――から、普通じゃない方法を使
ったまでだ。ちよつと連中の魂の器を分解してみた」

「分解……つて」

わけがわからない、といった表情を見せたのはレイトだったが、
その顔つきを見る限りファルケも同様の思いを抱いたようだった。

そんな二人の顔を等分に見やり、ティアはゆっくりとした口調で
説明した。

「さつき、魔獣はこの世界の法則に縛られないという話をしただろ
う。それは魔獣がこの世界ではない、別の世界から紛れ込んできた
異分子だからという説がある。それも肉体を持たず、魂――精神の
みの状態で紛れ込んできたのだと。そして、この世界で精神を守る
器を獲得することができたものだけが、存在し続けることができる
のだと――あくまでも一説に過ぎないがな」

小さな笑いを口元にひらめかせて、ティアは話を続ける。

「だが、肉体を持たないものがこの世界では長く存在できないのは事実だ。変化しやすく壊れやすい、精神という名の情報を守るための器が必ず必要となる——その器に守られている状態の精神のことを『魂』という。私はその魂の器を、分解してしまったというわけだ」

「……あー」

半分以上理解できていない顔つきで、レイトは宙に視線を漂わせた。

しかしいくら考えても、彼にわかったのはティアの術によって魔獣が跡形もなく消えたということだけだった。

別にそれでもいいか、と投げやりな気分でレイトは思う。

「ついでに言うなら、魔獣以外の存在も精神だけでは長くこの世界に留まらない。死んだ生き物の精神が肉体から離れる理由はそこにある。生命活動を停止した肉体は、単なる物体でしかない——もはやそこに、精神を守る『器』としての力はないのだ」

「え……じゃあ……」

急に不安になったように、自分の身体を見下ろすレイトにティアは笑って言った。

「お前の身体は、私の魔力で維持されていると言っただろう？ 仮の生命活動に過ぎないが、それがお前という精神を守るための器となる。お前がお前を認識する中心——脳でも破壊されない限り、その活動が停止することはない。まあ、仮に肉体の機能が停止したとしても、私との契約がある限りお前の精神が損なわれることはない

と思うが——連中が何者かに使役されている魔獣でなかったのは、
そういう意味では幸いだったな」

「……もしそうなら、どうするつもりだったんだよ？」

思わずレイトは呟いたが、ティアはかまう様子もなく周囲を見回して、ふと思い出したように眉をひそめた。

「それにしても……珍しいな。こんな人里に近いところに魔獣が現れるなんて——もっと深い山の中か、荒野の真ん中にも行かない限り遭遇することはないと思っていたが……天変地異の前触れか？」

「もしかして、妨害とか……」

言いかけたところで、いかにも馬鹿にした視線を向けられてレイトは口を閉じた。

「……どうやってだ？」

「いや、だってお前が探している奴も魔獣を使っつていうし……」

「それなら、自分が使役している魔獣を使うだろう。わざわざ人の支配を受けていない魔獣を送ってよこす必要がどこにある？ だいたいどうやって、支配しているわけでもない魔獣に命令を聞かせるんだ？」

たたみかけるように問いを投げられ、レイトはうつと言葉に詰まる。

「だけど……不自然じゃねえか？」

「自由な魔獣が、人の命令を素直に聞くほど不自然な自体じゃないと思うがな——それが仮にできたとして、どうやって私の居場所を

特定するんだ？」

重ねられた問いに、レイトは今度こそ答えられなくなる。

複雑きわまりない表情をしたレイトを見上げて、ティアは小さく肩をすくめた。

「偶然だろう——それより、さつさと食事の支度をしよう。あいつらのせいで、全部やり直した……ああ、ファルケ。悪いがもう一度火を起こしてもらえるか？」

「あ、ああ……」

はっとしたようにファルケはうなずいて、たき火のあった場所へと戻った。魔獣に踏み散らされて火は消え、水を満たした鍋もひっくり返っている。

その背中が、わずかに緊張したままであることをティアもレイトも気づいていた。

ティアはファルケの背中から視線を外して小さく息をつく。その表情はどこか安堵したような、寂しさを隠せないような複雑な色をもとっていた。

そんなティアの横顔を、レイトはどこか冷めたまなざしで見つめていた。

5 - 3 死者の刻印（後書き）

レイトの場合、治療というよりむしろ修理。ボンドで傷をくっつけてホチキスで固定するくらい乱暴。

3 / 1 4 真音読みを追加しました。

5 - 4 真夜中の密談

「後悔してるのか？」

なんの前触れもなしにそう声をかけられ、ファルケはびくりと身をすくめた。

すでに真夜中といつていい時刻。火の番をするため起きていた彼以外は、皆横になって眠っている——はずだった。

身体を起こしたレイトを見やるファルケの目には、警戒と恐怖の色があつた。

「……なにを、だ？」

予備動作なしでレイトは起きあがり、火のそばへと歩み寄ってくる。

ちらりと横目で確認すると、ティアは厚地の毛布にすっぽりとくまるまって熟睡している様子だった。少し離れたところで、木にっながれている黒馬もこちらにはまったく関心を払っていないようだ。

レイトは火の前に座るファルケの隣へ、どっかりと腰を下ろした。「付いてきたことを、だよ」

途端、ファルケの瞳に炎の照り返しよりも強い光が生まれる。

向けられた鋭い眼光に、ひるむ気配もなくレイトは薄く笑って言葉が続けた。

「そういう顔をしていたぜ」

「後悔などしていない」

語気を強めてファルケは言い放ったが、その言葉はどこか自分自身へ言い聞かせようとしているような響きを帯びていた。

レイトがそれを指摘するよりも早く、彼はわずかに声を落として続けた。

「だが少し……驚いたのは事実だ。ティアが死霊術師だということ、私はさほど真剣に考えていなかった——いや、考えないようにしていたと言ったほうが正しい。どのような肩書きで呼ばれていようと、彼女が彼女であることに違いはない、と」

思いがけず真剣な声音を返され、レイトは口にかけていた言葉を呑みこむ。

「しかし——目の前にお前という現実を突きつけられて、その考えが甘かったことを思い知らされた。ティアはまぎれもなく死霊術師だ。その現実が私にとって思った以上に受け入れがたいことだとも……よく、わかった」

「だったら、どうするんだ？」

冷たい声を、レイトはうなだれたファルケへと投げやった。

レイトにとってのティアは、出会った当初から死霊術師以外の何者でもない。そもそもそうでなければ、出会いそのものが成り立たないのだ。

「どう……とは？」

「商売敵なんだろう？ お前ら神官にとつての死霊術師つてのは……
やっぱり、汚らわしいとか思うのか？」

「そ……！」

思わず反駁しかけた口を、一度閉じてからファルケは抑えた口調で言った。

「……私は、死というものは揺るがしがたい現象だと思っている。
生者と死者の境界線は厳然として存在しなくてはならない。それを
たやすく侵す死霊術師を、私は決して認めるわけにはいかないと――
――そう、思っている」
「そうかよ」

「だが……私は、ティアという少女のことをよく知っている。彼女は
生と死の境界線を、簡単に侵すような人物ではないはずだ。生の
尊さも、死の重さも彼女は十分に知っている――そうじゃないのか
？」

向けられた視線の強さに、レイトは思わず気圧される。

その瞳には、すでに一片の迷いも存在していなかった。心の奥底
まで見通すような揺るぎのないまなざしで、ファルケははっきりと
告げた。

「彼女がお前をよみがえらせたというなら、それはそうする以外に
方法はなかったということだろう。必ずなんらかの理由があつての
ことだと私は思っている」

「……ふうん」

そっけなく答えながらも、レイトは口元がゆるむのを感じずには
いらなかった。

これほどまでに強い信頼を寄せられる理由は、彼とティアとの間
にある絆――レイトが知らない年月の間につちかった関係にあるの

だろう。

その絆が、今は不思議と胸に心地よく感じられた。

（……って、別にあのクソガキが、こいつにどう思われようと知ったことじゃ）

「——それに、私が驚いたのはそのことだけではない」

内心焦って呟くレイトの耳に、ファルケの感情を排した声が届いた。

目をやると、そこには畏怖にも似た表情を浮かべたファルケの顔があった。

「まさか……ティアが真音を使うとは思っていなかったからな」

「真音？」

「魔獣の襲撃の際に耳にしただろう。音声化した呪文のことだ——通常は描くことで使用する呪文を、音韻と声の波長を使って呼び起こす。これを使用できる人間はほんの一握り——神殿では、大神官の中に一人か二人いるくらいだ。よほどの術の使い手でない限り、使いこなすのは不可能だと言われている……実際、私も使われているのを見たのはこれが初めてだ」

「へえ……そうなのか」

さほど関心を持った様子もないレイトを、ファルケはくつきりとした眉を寄せて見た。

その口から吐き出されたため息は、大袈裟ではあったがまぎれもない本心からのものであるとわかった。

「まったく……ティアが同行者として選んだ割には、なんの知識も持っていないのだな。本当にただの護衛兼荷物持ちなのか？」

「うるせえな」

嫌そうに鼻の頭にしわを寄せて、レイトは言い返した。

「好きでなにも知らねえわけじゃねえんだ。ティアの奴が俺をよみがえらせた時、記憶をすっぱり全部消しちまったんだよ！ おかげで自分がどこの誰なのかも、死ぬ前になにをやっていたのかも全然思い出せねえんだ！」

「記憶が……ない？」

「ああ」

ふて腐れたように言うレイトの顔を、穴が開くほどにじっと見つめ返したあとで、ファルケは呆れたように首を振って言った。

「ティアも不用心なことを。素性も知らない相手をそばに置くなんて……この顔はきつとろくなことをしていないぞ」

「顔は関係ねえだろうが、顔は！」

その言葉にまるきり説得力が感じられなくなるような、凶悪この上ない顔つきでレイトがわめく。

と、その瞳になにか思いついたような光が揺れた。

とびきりの悪戯を思いついた子供のような顔になって、レイトはちよいちよいと指先でファルケを招いた。

「おい、クソ坊主」

「なんだ、その言い草は。私にはファルケという名が——」

「そんなことはどうでもいいから、ちょっと耳貸せ。面白いことを教えてやる」

うさんくさそうにレイトを見返したあと、ファルケは根気強く手招きを続ける彼に顔を近づける。

「……なんだ？」

「あのな、よく聞け——ティアがよみがえらせた魔獣なんだがな……」

レイトの声がさらにひそめられて、容易に聞き取れなくなる。

かろうじて聞き取れたかすかな声に、ファルケの目が限界まで大きく見開かれた。目と口を大きく開いたまま、動きを止めた彼をレイトは愉快そうに眺めやる。

あとでティアに文句を付けられるかもしれないが、その時はその時だった。

「な……な、な、な」

「ほら真夜中だぜ。静かにしろよな」

「あ、あの馬が……あの馬が？」

愕然とした顔で呟き続けるファルケを、レイトはこらえきれないようなにやにや笑いを浮かべて眺めていた。

5 - 4 真夜中の密談（後書き）

嫌な情報は皆で分け合いましょう、の精神で暴露するレイト。もちろん翌朝ティアにばれてしこたま殴られます。

6 - 1 ラクシア到着

じめじめとした半地下の一室に、その少女は拘禁されていた。

天井近くに明かり取りの窓があるだけの、薄暗い部屋だ。石造りの壁に寄せて置かれた小さな寝台には、古ぼけた毛布が一枚かけてあるのみ。

拘禁されているのが若い女性であるためか、部屋の奥に用意された便器がわりの壺の前には目隠しのついたてが置いてあった。もっとも、ついたての足元には隙間があり、その向こうに人がいるかどうか一目で確認できるようになっている。

部屋に近づいてきた足音が、その扉の前でぴたりと止まった。

足を止めたのは、二十歳になるかならないかといった年頃の男性だった。薄茶色の髪を短く切り、ひよろりとした身体に灰色の長衣をまとっている。

鉄格子のはまった窓から、部屋の中をのぞきこんで青年は首をかしげた。

いつもはそこから、寝台の上で膝を抱えて丸くなっている少女の姿が見えるのだが、今日は部屋のどこにもその姿が見当たらない。

「——お嬢さん？」

手に持っていた食事の盆を床に下ろして、青年は声をかけた。

扉の下の方にも鍵の付いた窓があるが、そちらは室内に食事などを差し入れるためのものであって、人の出入りはおろか中を見ることすらできない。

青年はもう一度、鉄格子のはまった窓から室内へと目をやる。

ついたての下もちろん確認したが、その向こうに人がいる様子はなかった。もとよりさほど大きなついたてではないので、完全にその向こうの人の姿を隠すこともできない。便器の上などに乗って隠れることも不可能なはずだった。

(……誰か、人を呼んできたほうがいいだろうか?)

そう思いながら、壁の小窓に目をやった時――

「あっ！」

青年の目が、大きく見開かれた。

小窓にはめ込まれている格子の何本かが、外されているのが目に入ったのである。床の上に無造作に転がされているそれを目にした瞬間、彼の顔面からさあつと血の気が引いていった。

(逃げた――!?)

思わず彼は、所持していた鍵で部屋の扉を開けて飛び込む。

勢い余って、ややつんのめるような姿勢となった――その彼の後頭部めがけて、なにか細く硬いものが振り下ろされた。

「――っ!？」

強い衝撃を受け、青年は声も出せずに気絶する。

うつぶせになって倒れ込む青年を、加害者である少女——イリスは申し訳なさと安堵の混ざる複雑な表情で見下ろした。

「……いくらなんでも、あんな隙間を通れるほど細くないです、私」
呟いた声音には、それ以上に複雑な心情がこめられていた。

しかしすぐに表情を引き締めて、手にした鉄格子の一部を放り捨てると、イリスは気を失った青年の身体を部屋の奥へと引きずっていく。

苦勞して青年を寝台に寝かせ、毛布をその身体にかけてからイリスは部屋を出た。

青年が持っていた鍵で扉を施錠し、彼女はちらりと同情めいた視線を室内に向けてから外に向かって走り出す。

遠ざかる靴音は、壁に反響して奇妙にこもった音となった。

街の城壁が遠く見えてきたところで、ティアは一度馬を止めた。

ラクシアの最南端に位置する街——ケニスである。ミルハイムの街を出てから、ここに至るまでにかかった日数はおよそ六日。一度魔獣の襲撃を受けた他には、さしたる障害もないたって平穩な旅だった。

ちらりと横を歩くレイトを見やってから、ティアは再び進み出す。

国境近くに位置する街らしく、その周囲は立派な城壁に囲まれている。城門には簡素な鎧を身につけた、何人かの兵士の姿も見受けられた。

ティアは馬に乗ったまま彼らに近寄ると、その手に持った杖をよく見えるように掲げてみせる。

「――通るぞ」

その杖を――正確には、杖に刻み込まれた無数の紋様を見て取ると、兵士たちは表情をこわばらせて逃げるように道を空けた。

堂々とその真ん中を通りながら、ティアは思い出したようにふり返って言った。

「ああ、それから――その黒髪は私の使役だから、所有物ということを通してもらえるか？ 死人に身元証明書は出してもらえないのでな」

ティアに向けられていた恐れと嫌悪の入り混ざった視線が、今度はいっせいにレイトへ向けられる。

目つきを陰しくして、その視線をレイトは受け止めた。ティアの所有物発言に対しての腹立ちもあったが、それ以上に怪物でも見るような兵士たちの顔つきがレイトは氣にくわなかったのだ。

その後頭部へ、馬上からティアは杖を振り下ろした。

「――だっ！」

「無闇やたらに喧嘩を売るなど、何度言えばわかるんだ？ 少しばかり元気が有り余っているが、間違いなくこれは死人だ。なんなら

その剣で、斬ってくれてもかまわない」

言葉の後半は兵士たちに向けたものだったが、それを実行する勇気のある者はそこには一人もいなかった。

ティアは肩をすくめると、レイトをうながして城門を抜ける。

そこでは一足早く、神殿の身分証で城門を通ったファルケが二人を待っていた。心配そうな表情で、こちらを見ている彼にティアは手を振りながら近寄っていく。

殴られた後頭部を手で押さえながら、レイトが恨めしそうな目をティアに向けた。

「人がとつくに死んでると思って、容赦なくボカス力殴りやがって……そのうち陥没してくるぞ、このへん」

「文句を言う前に、少しは行動を慎め。誰にでも喧嘩を売ったような顔をするからだ——まったく、お前には学習能力がないのか？」

「……お前こそ、暴力行為を少しは慎めよ」

聞こえるか聞こえないかといった程度の声だったが、しっかりと聞きつけてティアは再び杖でレイトの頭を殴りつける。

にぎやかなやりとりをかわしながら、近づいてくる二人をファルケはやや呆れたように見やった。

もはや見慣れた光景と言ってよかったが、よく飽きないものだとしみじみ思う。

特にレイトの口の回りっぷりは、死人だということをまるで感じさせないものだった。使役される死者を見るのは初めてだったが、ここまで元気が有り余っているものかと内心呆れるのを通り越して感心させられる。

そう思いながら歩き出しかけ、ファルケは二人が向かう方向が間違っていることに気づいた。

「ティア……！ どこへ行くんだ？」

慌てて声をかけると、ティアは馬を止めもせずにより返る。

「どこつて……とりあえず、宿でも取ろうと思ったんだが」

「神殿に行かないのか？ フィニクス神官長から、紹介状をいただいてきたと言っていただろう？」

ああ、とティアは思い出したような表情を浮かべたが、続けた言葉はファルケの予想を裏切るものだった。

「……では、ここまでだな」

「え？」

「約束していたはずだ。一緒に行くのはラクシアに入るまでの間だけだと……忘れたのか？」

「いや……忘れてはいないが、しかし」

「神殿があるならちょうどいい。ファルケとはここでお別れだ——世話になったな」

にこりと笑って背を向けようとするティアを、ファルケは目をむいて呼び止める。

「ティア？ しかし、君は神殿に行くのではなかったのか？ 紹介状は……」

「念のためと思って、一応用意させておいただけだ。こちらで調べ物をしなくてはならないかと思ったが——必要な情報は向こうで手に入ったからな」

「しかし……」

「なんだ、約束を違えるつもりか？ 自分の口にした言葉には、きちんと責任を持つべきだと思うぞ？」

馬を止めて言い合う二人を、レイトはやや後ろからつまらなさそうに眺めた。

以前、この二人の言い争いに口をはさんで「うるさい！」とありがたくもない言葉を、二人同時に返されて以来、徹底して非干渉を貫くことにしている。

所在なげに立つてあたりを見回すレイトの感覚に、ちくりと触れてくるものがあつた。

わずかに眉を寄せて、レイトはゆっくりと視線を巡らせる。道の真ん中で、やけに年齢差のある二人が言い合いをしているのだから、視線が集まるのはむしろ当然のことだ。今も通りすがりの人々が、驚きと軽い非難の念のこもる視線をちらちらとよこしている。

しかし、レイトが感じたのはそういう視線ではなかった。

（なんだ……？）

不必要にきよろつかないように用心して、レイトは視線だけで周囲を探る。

まもなく、彼は人目に付かない場所でこちらをうかがっている、武装した男たちの姿を発見した。はっきりと風体までを見て取ることはかなわないが、明らかに自分たちを見ているのがわかる。

内心で首をひねって、レイトはティアへと顔を向ける。

が、呼びかけようとしたところで、依然としてファルケと言いつつ継続中であることに気がついた。

すでに問題は、約束を守る守らないという論点から、お互いの過去の不始末にまで移行している。両者の顔つきはこの上なく真剣だった。話の内容は子供の言い争いとほとんど変わるところがなかった。

きっかり三秒間、この不毛な口喧嘩をやめさせるべきかどうか考えたあとで、レイトは放っておこうという結論に達した。

飛んでくるのが罵声くらいなら可愛いほうで、下手をすれば拳や杖の強烈すぎる一撃をお見舞いされかねない。

（まあ……あとでいいか）

口論が終わるのを、レイトはその場に立ったまま退屈そうに待った。

周囲に見物人の山を築きながら続けられた口論が、結局この一先きの街までファルケの同行を認めるところに落ち着くまで、ゆっくに半刻はかかった。

そこでようやく我に返った二人が、慌てたようにその場を離れる。二人とともに移動しながら、先程の怪しい男たちのことを伝え忘れていることに、レイトはもはや気づくことすらなかった。

6 - 1 ラクシア到着（後書き）

中身と微妙に合っていないことに気づいて、章タイトルを入れ替えました。この話から「死霊術師と北の大国」になります。

6 - 2 モンドステイーンの証

長い衣の裾が、さらさらと音を立てて石の床を滑っていた。
黒に近いほどに深く染めた藍色の長衣だ。風化して白っぽくなつた石の床に、その色はひととき鮮やかに映えて見える。

その背に流れ落ちる、琥珀色の長い髪。
しゃらしゃらと鳴っているのは、手にした杖に巻き付けられた細い鎖だった。杖を持つ左手には、いくつも指輪がはめられている。
中でも、薬指で輝いている深い紫色の石は大きさのためもある人目を引く。

歩を進めているのは、三十代の半ばほどに見える男性だった。
整った細面の顔は優しげだったが、同時に顔色一つ変えることなく生き物の命を奪うような酷薄さをも感じさせる、不思議な風貌をしていた。伏せられた瞳の色は煙るような紫——指輪の石の色を、ごく淡く薄めたような色合いだった。

その瞳を上げて、男は足を止めた。
窓の外へと向けられた瞳に映ったのは、空から舞い降りてくる一羽の影だった。

ただの鳥でないことは、その大きさからも馬に似たたくましい後ろ足があることから明らかだった。広げた翼の差渡しは大人の身長ほどもあり、その身体は金属を薄く削り出した箔のようなものに

包まれている。

「……遅かったな」

男が発した声は、枯れ木の空洞を震わせる風の音にも似ていた。

『申し訳ございません』

鉛色の喉を震わせて、鳥の形をした魔獣が答える。

その声は硝子をヤスリで引っ掻くような、ひどく耳障りなものだったが、はつきり人の言葉として聞き取れた。

『思わぬ事態がございましたので……』

「まあ、いい」

薄く笑って、男はその言葉をさえぎった。

「どのみち、しばらくここで待機ということにわりはあるまい……支援者殿は一日でも早い結果をお望みのようだが、そう簡単には……ことは進まない。まあ、肝心の皇帝の寿命に限りがある以上、あまりに気長にかまえてもいられないだろうが」

『順調にゆけば、もうラクシアに入っている頃でしょうが……』
「入っているさ」

男はあっさりと、断定の言葉を口にした。

「あれは旅慣れているからな。昔も今も……同行者に足でも引っ張られない限り、遅れをきたすようなことはあるまい」

わずかに細められた男の目が、懐かしげな色を浮かべる。

「術の腕もその他のことでも——あれは常に優秀だった。ささやかな畏など、軽々と突破してやってくることだろう。今はあの外見に

ごまかされがちだが、あれの中身は年季の入った死霊術師だ——それ
れも、十代で長に指名されるほどの才能を持った、な」

魔獣は硝子をはめ込んだような瞳で、男の姿をじつと見返してい
る。

虹彩と瞳孔の区別もない、一律に半透明の瞳からはどんな内心も
うかがい見ることはできなかった。

そもそも、それは死霊術師に操られている仮の肉体に過ぎない。
その感覚と運動中枢を支配して、手足同然に動かすことはできても
心は宿せなくて当たり前だった。

しばらくの沈黙のあと、男はぽつりと呟くように言葉を発した。

「——来なければいい、と思っているか？」

『……いいえ』

「あれは必ず来る。そのために生きていと言っても過言ではない
のだから」

男の口元に、薄い笑みが浮かぶ。

それは不思議と純粹な、心からの笑みのようにも見えたが、同時
にねじ曲がった暗い感情を宿したもののようにも思えた。

かすかな衣擦れの音を立てて、男は歩み去っていく。

窓枠に爪をかけたまま、鳥形の魔獣はその姿をいつまでも見送っ
ていた。

ケニスの街で一泊し、翌朝ティアは街道を北へ向かって出発した。ラクシアは中央諸国の中では最も北に位置する。首都レイハムは国内ではやや南よりにあるが、国境のケニスから見れば当然北だ。

街道を行く人の中に混ざって、ゆつくりと馬を進めるティアにレイトがふと思い出したような視線を向けた。

「そっついや……お前の、その杖」

「え？」

「いや、ケニスの城門を抜ける時に、それを見せたらあつさり通れただろう？ それってなにか特別なもののなか？」

「……ずいぶん、今更な質問だな」

「ぱちぱちとまばたきしたあとで、ティアは呆れ含みの苦笑を浮かべる。」

「というか、特別なものでなかったらこんな重い思いをしてまで、わざわざ持ち歩いたりしないぞ」

「俺はてつきり打撃専用の武器かと思ってたぜ……」
「ぼそりとレイトは呟いたが、その声はティアの耳には入らなかった。」

「——これは、モンドステインの族長が代々受け継いできている杖だ。死霊術師は必ず杖を持ち歩くものだが、モンドステインの

紋章が刻み込まれているこの杖を持つことが許されているのは族長一人だけ——この杖と同じものは一つたりと存在しない」

薄く微笑みを含んだ瞳に、ティアは切れるような光を浮かべる。

「この杖を所持する者は、すなわちすべての死霊術師の長ということになる。だからどの国でも、どの街でも、この杖を持っている者の通行を阻むことはまずない。死霊術師をまとめて敵に回す覚悟が必要になるからな」

「……ふうん、そうか」

「これだけは、まったくの無傷で村に残っていたんだ。先代の族長が、まるで守るように胸に抱いていたらしい——発見したエルフォーンベインが屋敷で保管していたんだが、私が戻った際に渡してくれたんだ。私が持つのが最もふさわしいからって」

口元にほんのりと笑みを漂わせたティアの顔を、レイトは無言で見つめることしかできなかった。

「少し嬉しかったな。これだけでも無事に残っていたとわかって……まあ、ラゼールとは違って、これは特別な魔力を持っているわけでもないからな。盗んだところで族長として名乗りを上げるわけにもいかないし——なにも知らない一般人ならだませるかもしれんが、そんなことをすればすぐに、どこかの一族に知られて追っ手がかかけられるはずだ」

言いながら、ティアは大切そうに杖を手でそつと撫でる。

その姿を、レイトはかける言葉もないまま見守った。少し視線をずらすと、同じような表情で黙っているファルケの姿があった。

居心地の悪そうな表情で、レイトがさらに視線を巡らせた——時

だった。

背後から土煙を上げて接近してくる騎馬の一群を、その目が捕らえた。かなりの速度でみるみるうちに近づいてくる。

荷物を抱えた旅人が、慌てて道の端に避難するのが目に入った。

「おい——」

警告を発しようとした時、風を裂く音とともに地面に矢が突き立った。

レイトたちの足元から数歩も離れていないあたりだ。また盗賊でも現れたのかと、反射的にレイトは身構える。

その耳に、わずかに驚きをにじませたティアの声が届いた。

「ラクシアの正規兵だ」

「な……？」

思わず動きを止めて、レイトは背後の集団をよくよく見やる。

近づいてくるにつれて、彼らが身につけているのが揃いの装備であることがわかった。統率の取れた動きといい、よく訓練された身ごなしといい、そこいらの盗賊などとは明らかに質が違う。

「……どうして、正規兵が？」

背後を見やるファルケの顔にも困惑の色があった。

レイトは答えず、ティアのまたがる黒馬と兵士たちとの間の位置に立った。理由などはあとで考えればいい——相手が何者であれ、ティアを害する者から守ることが今の自分の使命であるはずだった。レイトの動きに気づいたファルケが、慌てて自分もティアのそばへと馬を寄せる。

そうしている間に、追いついてきた兵士たちは二手に分かれ、半数ほどが行く手をさえぎるように一行の前へと回り込んでいった。残りは矢が届く程度の距離を残して、後方で馬を止める。

その数は十六、七——子供も含んだわずか三人を包囲するにしては、いやに嚴重すぎる配備であり、ものものしい雰囲気であった。

「ティア・レーヴェというのは、お前か？」

前方に回り込んだ兵士たちの中から、ひとときわ恰幅のよい男が声を放った。

似合わない口髭をたくわえた、四十がらみの男だ。装備の胸元に刻まれた徽章と周囲の者たちの態度から、この集団を率いる人間であることがわかった。

「答える、小娘」

その居丈高な態度に、レイトがむっとした様子で声をあげかける。しかし、それよりも早く当のティアが、いたってにこやかに言葉を返していた。

「人に名前を聞く時は、まず自分から名乗るものだと言わなかったのか？ 子供以下の礼儀知らずだな、貴様」

「な……！」

「その様子から察するに、自分よりも弱い立場の人間に対しては、いつも威張り散らしているのだろう——つまり男だ。そうやって笠に着ている権威が、自分自身のものでないことにも気づいていない。誰にも尊敬されない哀れな種類の人間だな」

「なんだと、この……！」

ティアの容赦のない毒舌に、男は顔を真っ赤に染めて怒声をあげる。

はからずも、それがティアの指摘が正しいことを証明したが、男はそれに気づく様子もなく周囲の兵士に向かってわめいた。

「その小娘を捕らえろ！」

「心が狭いな」

いや、それはどうだろうとレイトは心の中だけで呟く。

あそこまで言われて、腹を立てない人物のほうがよほど珍しいだろうと思ったが、口に出すことはせずに、レイトは腰の剣をすらりと抜きはなした。

だが、弓矢で狙われていることがわかっていて、彼はティアの前を動けない。

ファルケも同様らしく、長い棒を手にしたまま前後の兵士を油断なく睨んでいる。ティアを彼にまかせて、思い切って飛び込もうか——そうレイトが思った時だった。

ティアの周囲の空気が、氷に変じたようにうつすらと白く濁った。その異変を目にした瞬間、レイトは素早く飛び出していた。前方に立ちふさがる敵との距離を詰め、彼らの握る手綱を一刀のもとに切って捨てる。

おまけのように馬の尻を蹴飛ばして、暴れ始める馬を横目に次の目標に接近する。

目の前に迫ったレイトの姿を見て、指揮官らしき男は顔を引きつ

らせると誰にもなく叫んだ。

「そ、その娘を射て——！」

年端も行かない少女に矢を射かけることに、ためらいがあったの
だろう——実際に矢が放たれるまでにはわずかな間があった。

しかし、放たれた矢は正確にティアの胸の中央めがけて飛んできた。

レイトの目に緊張の色が走り、ファルケが顔色を変える。ファルケは手にした棒で矢を払い落とそうとしたが、それよりも早く別の兵士が彼に斬りかかってきた。

「ティ——！」

思わずファルケが叫んだ瞬間——ティアの目の前の空間が薄い輝きを放った。

6 - 3 銀鱗の魔獣

その空間を突破できず、矢はカツンと硬い音を立てて跳ね返る。続けざまに発射された矢も同様だった。

虚しく地面に落ちていく矢を、兵士たちは呆然と見つめやった。ティアは身動き一つせず、口元に笑みさえ浮かべてそんな彼らの姿を見やる。わずかに動いた唇が、形作ったのはなにものかの名前だった。

「――フォカ」

その声に応えるように、ティアの目の前の空間がさらに色を変える。

にじみ出るようにそこに姿を現したのは、氷のような半透明の鱗をまとった優美な形の生き物だった。

身体を包んでいる鱗が毛皮であれば、鼬や貂といった動物に酷似していただろう。

だが、目も鼻も存在しない頭部と、いやに長く間接の多い手足がこの世界の生き物ではないことを物語っていた。

「ぐっ！」

呆然とそれを見ていた兵士の一人が、低く呻いて体勢を崩した。馬から転がり落ちたその姿に、目をやった他の兵士たちも次々と

頭や腹に衝撃を受けて意識を失う。

彼らの視界に、最後にちらりと映ったのは白く動くものの姿だった。

レイトと対峙していた男の目にも、それは映っていた。ただ動く速度があまりに速く、はつきりとした姿はとらえられない。

ただ、部下が次々と昏倒していくのが目に入るばかりだった。

「——ひっ！」

それが方向を変え、自分へと向かってきたことに男は気づいたが、手にした剣をふるうどころかその正体を確かめることもできずに彼の意識は闇に没した。

「……おい、ティア」

馬の背にぐったりと倒れ伏した男に見向きすることもせず、レイトはどこか硬い表情でティアに声を投げた。

「こいつ……」

その視線は、目の前に立つ生き物から外れない。

息も乱さずに立っていたのは、ごく普通の犬のように見えた。白くふさふさとした毛並みの中型犬だ。

だが、その顔に長く垂れかかる毛の間から瞳が見えた時、レイトは先程から感じていた違和感の正体に気がついた。

どろりと白く濁ったその瞳は、生きた犬のものではあり得なかったのである。

「……っ！」

「――イアン！」

思わず喉の奥で呻いたレイトの前で、ティアがほっとした調子の声をあげた。

その視線の向かう先へ、レイトは反射的に目をやる。レイトと似たような――あるいはそれ以上の嫌悪を宿した瞳で、犬の姿を見ていたファルケも同様の行動を取った。

三対の視線の集まる先で、馬を駆っているのは淡い金色の髪の青年だった。

「ティア！」

互いの顔がはっきりわかる位置まで近づいてきたところで、青年――イアンはこぼれるような笑みを浮かべて言った。

「間に合ってよかった。怪我は？」

「おかげでまったくの無傷だ」

「そうか、それなら良かった」

言いながら、イアンはティアのそばで馬を止める。

その瞬間、レイトに向けられた刺すような視線は、護衛として役に立っていないことを暗に責めるものだった。

レイトは思わず顔をしかめたが、ティアを守ったのが自分でないことは彼も十分に承知していたため、あえて言葉を返すことはしなかった。ティア自身の魔獣かとも思ったが、おそらくイアンの操る

もののだろう。

それを証明するように、レイトへと近づくと、イアンのすぐ横に、銀色に輝く先程の魔獣が姿を現した。

複雑な表情のレイトに、それ以上目をやろうとはせず、イアンは馬上で気を失っている指揮官の襟首をつかんだ。

乱暴に地上に放り出した、その衝撃で男は意識を取り戻す。

「な……」

まだ覚醒しきっていない、ぼんやりとした顔つきで男は周囲を見回す。

はつとその目が見開かれるのと、イアンが冷え切った声を投げたのは同時だった。

「——言え。何者に命じられた？」

男は怒りの相を浮かべて、反射的になにか喚こうとした。

しかし、それが言葉になるより早く全身を締め上げるような痛みを感じて、男は苦痛の恐怖の悲鳴をあげた。

気配も感じさせずに男の後ろに立っていた銀色の魔獣が、長く伸びた手足で男の四肢を絡め取っていたのだ。容赦のない力で間接をねじり上げられて、男は顔中に脂汗をかきながら絶叫する。

「やめろ、やめてくれ！」

「だったら、大人しく答えることだ」

イアンの声には、ひとかけらの暖かみも存在していなかった。

「正直に答えなければ、このまま手足の骨を一本ずつへし折る。指

先から順番に一本ずつだ。手、腕、肩、肋——どこまで折れば話す気になる？ 言っておくが首の骨を折るのは一番最後だぞ」

「話す、話すから……！」

見苦しく唾を飛ばして叫ぶ男を、ティアは肩をすくめながら半分同情のにじむ顔つきで眺めやった。

レイトも同感である。ティアに矢を射かせさせた男を許すつもりなどなかったが、同じ理由で激怒しているイアンが相手では、さすがに気の毒になってくる。

二人に内心で同情されていることなどつゆ知らず、男は恐怖から逃れようとするかのように必死の形相でまくし立てた。

「命じたのはディエフ伯だ！ ティアという名の死霊術師が国内に入ったら、すぐに追い出すか殺せと……」

イアンに命じられるまま、男は自分が知る限りのことをすらすらと話した。

伯のところに、怪しげな死霊術師が出入りするようになったのはもう七、八年前からのことだという。

その男は罪を犯して、他の死霊術師に見つかったら命はないとのことだった。

しかし、その死霊術師が来てから明らかに伯の宮廷での発言権は増していた。表立って人に言えないような仕事を任されるだけでなく、男は伯に様々な局面で適切な助言を行っていたらしい。

これ以上聞き出せることはないと判断したところで、イアンは銀色の魔獣に目配せして男の頸動脈を圧迫させる。

再び意識を失った男の身体を、無造作に解放して魔獣は姿を消し

た。

現れた時と同様、空気に溶け入るように消えた魔獣を見送ることもせず、イアンは白い犬を従えてティアに近寄っていった。

「——イアン」

ほっとしたように表情をゆるめて、ティアは口を開く。

その顔を見やるイアンの表情は、先程までとは別人かと思うほどにやわらかく暖かみを感じさせるものだった。

しかし、彼はティアの声にすぐに答えようとはせず、あたりをばかるように見回してから言った。

「話はあとにしよう、ティア——まずはここから離れないと」

「ああ……そうだな」

今思い出したといった表情で、ティアは周囲に倒れている兵たちを見やる。

素直に馬首をめぐらせて、イアンのあとに続く彼女をレイトは複雑な表情で見つめた。わずかに動かした視線が、似たような表情でティアを見送っていたファルケのそれと重なり、いかにも不本意そうな顔で両者は同時に目を逸らした。

そのまま両者は、ティアとイアンの二人を追って場所の移動を始める。

あとに残されたのは、意識を失って地面に横たわる気の毒な男たちばかりだった。

6 - 4 死霊術師の決意

現場から十分に離れたところで馬を止めると、ティアはイアンに向き直ってあらためて礼を言った。

「助かった、イアン——ありがとう」

「いや」

イアンはにこりと笑って答えてから、鋭い目をレイトに向ける。

「同行の護衛が役に立たないのだから仕方がない。やはりティアには、別の護衛をつけるべきだった——あれでは犬のほうがまだ役に立つ」

「なんだと、この野郎」

「それより——ティア、彼は？」

気色ばむレイトを無視して、イアンはやや後方で馬にまたがっているファルケを視線で示す。

同行者であるティアに配慮してか最低限の礼儀は守っていたが、明らかに神官とわかる出で立ちのファルケを見る目つきは険しいものだった。ファルケもまた、一目で死霊術師とわかる人物を前に隔意ある態度を隠さない。

「僕のところに来た時は、一緒ではなかったようだけど……？」

「ああ」

二人の間に漂う微妙な空気には気づかない様子で、ティアは笑って言った。

「彼はファルケ——神殿にいた頃の私の知り合いだ。こちらに来るついでがあつたので、護衛がてら送ってくれたんだ。ファルケ——こっちは私の父方の従兄弟でイアンという。見ての通り死霊術師だが、喧嘩しないようにな」

「……初めまして」

複雑な表情で、ファルケは軽く会釈する。

対するイアンは笑顔でこそあつたものの、まったく目は笑っておらずその口調にも棘があつた。

「護衛ですか——それはどうも。ずいぶんとお世話になったようで先程の場面で、レイトと同様にまるで役に立っていなかったことを皮肉るような口調にファルケの顔に怒りの朱がさす。

しかし、ティアを助けられなかった事実を前にしては、憤然とした表情のまま黙り込むことしかできなかった。

そんな彼をそれ以上見ようとせず、イアンはティアに視線を戻して言った。

「それにしても、本当によくここまで無事に来られたものだよ。君がラクシアに入る前になんとか捕まえようと思つただけど……」

「……イアン？」

やけに切羽詰まつたイアンの様子に、ティアは軽く首をかしげる。「どうしたんだ？」

「さっきの男の話からもわかつたと思うが、七年前のあの事件——ラクシアの貴族が裏で糸を引いていた可能性が高くなった。魔獣の調査とは別口で、この国の内情を探らせていた者たちから連絡があつたんだ。ここ数年、宮廷で急激に勢力を広げている貴族がいる。

その屋敷に、得体の知れない死霊術師が出入りしていると」

「……いつの間に、そんな調査を」

やや啞然としたように呟くティアに、イアンは言い訳めいた口調で言った。

「いや、その……ラクシアだけでなく、この中央諸国の主立った国には必ず内部の事情を探る役目の者が潜り込ませてあるんだ。なにしろ僕たちの商売は情報が命だから」

「ああ……まあ、そうだな」

続けてくれ、というティアの言葉に、イアンはほつとしたように表情をゆるめた。

「それで、その貴族がディエフ伯だ。皇帝に気に入られて今では側近のような地位におさまっている、というところまでは探り当てることができた。あと、問題の死霊術師も伯に同行する形で、何度も宮廷に出入りしているらしい。名前はヤーデー——まあ、間違いなく偽名だろうけれど」

「ああ……」

いささか苦いものを含んだイアンの言葉に、ティアもうなずく。追われる立場の人間が本名を名乗ることはまず考えられないし、そもそも死霊術師は本名を名乗らずに、通り名を使うことが多い。名前は呪術に用いられる、最も一般的なものであるからだ。

「それで——その死霊術師が怪しいと言い切れる、決め手となったものは？ まさか単に急激に勢力を伸ばした貴族のところに入出入りしているというだけで、そう決めつけたわけじゃないだろう？」

切れるような光を瞳に宿して問い返すティアに、イアンはややた

めらうつように口を閉ざしてから言った。

「……ディエフ伯の領地には、ざっと調べてわかっただけでも十いくつもの魔獣の封印があった。そのうちの 하나가、先日見つかったあの神殿だ。記録を徹底的に洗い出させたらそこに封じられている魔獣らしきものが見つかった——その外見と、七年前の事件で死んだ者たちを呼び出して聞き取った魔獣の外見とが一致したんだ」

「それは……まさか」

「翼を持った巨大な獅子——君にも、覚えがあるだろう？」

大きく見開かれたティアの目から、すっと表情が消えた。

かわりに口元に浮かんだのは、奇妙な艶やかな印象の笑みだった。幼い容貌には不釣り合いなその笑みはまるで仮面のようだった。

「……よく、覚えているさ」

その声は、ため息のような響きを伴っていた。

「自分を殺しかけた相手だからな——忘れることなどではしない。他にも何人そいつに殺されたか……族長を殺したのも、おそらくそいつだ」

「……すまない、ティア」

沈痛な表情を浮かべるイアンを、ティアは感情のない瞳で見返した。

「なにを謝る必要がある？」

「あまり……思い出したくない記憶だろう、君にとってでは？」

ティアの瞳に、一瞬苦笑ともつかない影がよぎった。

「——思い出さなければ、それで済むような過去じゃないんだ。先に進むためには、乗り越えていくより他に道はない——で、そいつ

の所在はわかったのか？」

「え？」

「お前のことだ。もうそこまでつかんでいるんじゃないのか？ 話したくなければ、それでもかまわない。私は王宮に殴り込んででも、ディエフ伯を締め上げてでも、そいつの居場所を突き止めるつもりだ」

「……ティア」

明快に言つてのけたティアを見て、イアンの顔色が変わる。

「まさか……君」

「そこまでわかつているのなら、出直す必要なんてない。この足でそいつのところに乗り込んでいつて、カタをつけてやる」

「ティア！ 君、なにを言ってるんだ！？ 父に言ったことを忘れたのか？ 無茶なことはいないとあれほど……！」

「どこが無茶なんだ？」

イアンの言葉を、毛ほども揺るがずにティアは受け流した。

「七年前ならともかく、今の私に術で勝てる人間がどれだけいる？ 強力な魔獣がついていようと同じことだ。見くびってもらっては困る」

「だが……奴の手元には ラゼール があるかもしれないだろう！ いくら君でも一人じゃ無理だ！ 今、父が他の一族にも連絡を取って、こちらへ向かっている最中だ。せめて、その到着を待つてから——！」

「それでは遅すぎる」

断ち切るように言って、ティアはイアンを見返した。

「急がなければ、逃亡される恐れがある——たぶんさっきの襲撃は、デイエフ伯の独断によるものだろうが……死霊術師の指示なら、あんな中途半端なものになるわけがないからな。少なくとも、私ならまず最初に死霊術師の口と動きを封じさせる——けど、デイエフ伯はあれで、私がラクシアに入ったことを知ったはずだ。それが死霊術師の耳に入るまで何日かかるか……下手をすれば明日にも知るようになるだろう」

「だったら……あの兵たちを始末しておいたほうがよかったんじゃない」
「国境で姿を見せているから、どちらにせよ同じだ。とにかく、余計なことで時間を浪費するより、一刻でも早く乗り込んで相手の身柄を押さえたほうがいい。ぐずぐずしてたら冷静な判断力を回復させて、どこかに雲隠れしてしまわないとも限らない。七年もの間、用心深くナリを潜めていた相手なのだから」

「だが……」

なおも説得を続けようとするイアンの不安そうな顔を、ティアはわずかに視線をやわらげて見やった。

「もちろん、叔父上には到着し次第協力してもらうつもりだ。そいつを逃がさないためには、きっちり包囲する必要がある。だが急がなければ、どれだけ人を集めてきてももらってもすべて無駄になってしまいかねない」

「ティア」

整った顔を悲しげに曇らせて、イアンは首を横に振った。

「……君に、危険なことはして欲しくないんだ」

「私が危険を冒さないで、誰が冒すんだ？」

その口調は静かだったが、揺るがしがたい決意に満ちていた。

はっとしたようにイアンはティアの顔へと目をやり、そこに笑みのかけらもない表情を見て取る。レイトもファルケも同様だった。

それは、ティアが普段は決して見せることのない『族長』としての気迫にあふれた表情だった。

「たった一人しかいなくても、今の時点では身分保留のままで『族長』を名乗る人間が危険を恐れてどうするんだ？ 族長の名にはそれだけの責任が生じるんだ。責任も果たさない長に、いったいどれだけの価値があるというのだ？」

その気迫に吞まれたように、イアンは一言も発することができない。

「答える、イアン——いや、ダスティルイアン。死霊術師ヤーデはどこにいる？」

「……北の、城に」

切れ切れの声を、イアンは返した。

「デイエフ伯の領地の中でも、最も北に位置する古城が彼に与えられている。用がない限り、そこから離れることはほとんどないそうだ」

「そうか」

呟くように言って、ティアはイアンに向けていた視線を切る。

感じていた強い圧迫感が消失し、イアンは知らず詰めていた息を吐く。額に浮いていた汗を拭いながら、彼はティアに目をやった。

「ティ……」

「言っておくが、止めても無駄だぞ」

機先を制するように告げるティアに、イアンは小さく首を振ってみせた。

「止めはしない。君の性格は、よくわかってるからね——そこま
で言う以上、止めても無駄だろう。ただ、どうしても行くというの
なら僕も一緒に連れて行ってもらおう。その条件だけは決して譲れな
い」

「イアン……？」

「危険だということがわかってるのに、君一人をそんな場所へ向
かわせることなどできない——できるわけないだろう？」

「……一人というわけでもないのだが」

ティアのささやかな反論を、イアンは取り合おうともせずに無視
した。

「君の腕には及ばないかもしれないが、僕もれっきとした死霊術師
だ。なにか役に立てることだってあるはずだ」

真摯な声と瞳で、イアンは訴える。

「頼む——君の力になりたいんだ」

その視線から逃れるように、ティアは目を伏せた。

わずかな沈黙のあとで、再び上げた目にはごく淡いものではあつ
たが、まごうかたなき笑みが浮かんでいた。

どこか困ったような——しかしやわらかな笑みだった。

「……わかった」

「ティア」

イアンが頬をゆるめるのと同時に、横からファルケが言葉を差し挟んだ。

「私も同行させてもらおう」

「え？」

「そういう事情があるのなら、戦力はわずかでも多いほうがいいはずだ。それに今の話を聞いて、そのまま何事もなかったように君と別れられるほど、私は神経が極太にできてはいない」

「……戦力になるならいいのだが」

ぼそりとイアンが呟き、ファルケはそれに対して険のある視線を向けた。

両者の間で高まった緊張は、ティアのやめないか、という一言によって実力行使に出る前に解消された。

「だめだ、ファルケ——これは、私たち死霊術師の問題だ。君を巻き込んだりするようなことはできない」

「違う。これは死霊術師の問題ではなく——私と君との問題だ」

焦りをにじませた表情で告げるティアに、ファルケはきっぱりと言いつつ放つ。

「私は君を助けない。君が何者であろうと、その気持ちは変わらない。それに君が危険な目に遭うとわかっていて、放り出してきたりしたら——それがウィルニードの皆に知られたら、きっと寄ってたかって殴られてしまうだろう」

真剣この上ない表情のファルケを見返し、ティアはやがてぷつと吹き出した。

「ティア……？」

「お前って奴は、本当に……」

顔を手で覆って呟く声には、笑いとともて涙の気配が混じっていた。

それを感じ取って、レイトはぎくりとしたようにティアの顔を見返す。しかしその手の下から現れたのは、呆れたような笑みを浮かべた顔だけだった。

「まったくもう……どいつもこいつも、そろいもそろって馬鹿ばかりだな。自分からわざわざ危険に首を突っ込もうとは」

「じゃあ、お前は馬鹿の親玉……？」

思わず口に出した瞬間、ぶんと振り回した杖の先がレイトの額を直撃した。

「うおっ！」

「一言多い！……というか、何回食らえば学習するんだお前は」
「畜生、油断した……」

ずきずきする額を手で押さえて、レイトは低く呻く。

それでも、ティアがいつもの調子に戻ったことに対する安堵の思いは、瞳の奥に隠しようもなく現れていた。

「忘れないように、いつそのこと手のひらにでも書いておけ。まったくお前は——なにをにやついてるんだ？」
「いいや」

一言放り捨てて、レイトは歩み出す。

胸の中には安堵と、いくばくかの寂しさが入り混ざった思いがあった。

他の二人に対しては、その意志を尊重する態度を見せていたティアだった。自分にはその気配たりとも見せなかったのだ。

（しよせん、俺はモノってことか……）

自嘲をにじませた笑みを口元に浮かべて、進み出しかけたレイトの背中にティアが声をかけた。

「レイト」

「あ？」

「お前がどう思っているかは知らんが、私にとってお前は最終兵器だから——同意があるうとなかるうと連れて行く。言っただろう？

一蓮托生だと——お前の運命は私が握っているが、私の運命を左右するのはお前なんだ」

自信たっぷりな口調で告げてから、ティアはわずかに弱い笑みを浮かべた。

「……悪いな」

「な……っ！ なにを言っ……！」

慌てふためいた顔で、レイトは言葉を返した。

「最初っから、わかってんだよんなこと！ お前に従うって決めた時からな！」

「……そうか」

「そんなこと、いちいち断ったりするんじゃないよ！ いつものお前らしくクソ偉そうに胸を張っている。背中丸めた情けないガキに

従う気なんてないんだからな！」

「……そうだな」

ティアは答えたが、その顔に浮かぶ笑みにいつもの力はなかった。その顔をちらりと見やつてから、レイトは再び彼女に背を向けて歩き出す。胸に広がる不安めいたものから目を背けるように、彼は足早に進んでいった。

やがてティアたちも馬を進ませ始めたが、レイトがそれを確認することはなかった。

6 - 4 死霊術師の決意（後書き）

ちよつと長くなり過ぎました（汗） でも、キリのいいところで切ると極端に短い章ができちゃいそうだったので……

仲間が増えて、パーティー結成です。

死霊術師二人に神官に死者。各自戦闘能力を持っているからいいけど、ひどい偏ったパーティー編成だな……（苦笑）

7 - 1 内通者

砂塵を蹴立てて、一群の騎馬が走り抜けていった。

疾走する馬に乗っているのは、厚いマントとフードで身体をすっぽりと覆い隠した人々だった。その外見からは、男女の区別を付けることさえ難しい。

しかし、その素性をはっきりさせるものが彼らの荷物の端からのぞいていた。

各人異なる意匠を刻みつけた、長い杖——それは、死霊術師の証である。

およそ二十騎からなるその集団は、宿場町に入っても速度を落とすことをしなかった。まだ陽が昇るにも早い時刻。ひんやりと静まった街の中心部を、馬蹄の音を轟かせて走り抜けていく。

それを目撃したのは、宿屋の下働きの少年だった。

飼い葉でいっぱいの桶を抱えて、宿の裏手へと向かおうとしかけ——その集団がやってくるのを目にしたのである。

次々と店の前を走り抜けていく騎影を、彼は目を丸くして見つめやった。

こんな時間に、それもこんな速度で走っていく集団に心当たりなどなかった。いったい何事かと、彼はまだ半分寝ぼけたままの目をこらす。

（いい馬なのに——乗り潰してしまうつもりなんだろうか。もったいない）

そう思った彼の心の片隅を、ちらりと違和感めいたものがよぎった。

理由のわからぬその感覚に突き動かされるように、彼は目の前を通り過ぎた最後の馬をじっと眺め——ようやく、一つのことにくづく。

すなわち、その馬たちがまるで呼吸をしていないことに。

これだけの速度で走っていれば、当然息はかなり乱れているはずだ。しかし呼吸の音はもちろん、馬のいななきも人々の声もまるで聞こえてはこなかった。

ぞくりと背筋に冷たいものを感じて、少年は無意識のうちに後じさる。

その時、やや遅れてきた一騎が少年の目の前を走り抜けていった。少年の目にその馬の顔が映った瞬間——彼は声をあげて宿の中に逃げ込んだ。

——轡を噛んだ馬の顔は、半分腐って下の骨が見えていたのである。

「……さすがに疲れたな」

夕刻まで馬を走らせ、山間に差し掛かってきたあたりでティアはようやく馬を止めた。

傾いた陽が、その姿に淡い朱の色を添えている。手頃な場所を宿営地に定めると、馬を下りて彼女は大きく伸びをした。

「全速で飛ばすのは、この身体ではちょっと厳しいものがあるな――何回鞍から放り出されるかと思ったことやら」
確かに、揺れる鞍の上でぽんぽんとはずむ身体を見ているのは、レイトにとっても冷や汗ものだった。

（しかし……まだ馬に乗っているだけマシだろ）

野営の支度をしながら、レイトはひっそりと思う。なにしろこちらは、一日走りずくめだった挙げ句に、休む間もなくこき使われているのだ。

正確には、ひっくり返って休もうとしていたところをイアンの殺人的なまなざしに射抜かれて、支度を手伝う羽目となったのだが。

「だから、きちんとした宿に泊まったほうがいいと言ったのに……」
その元凶であるイアンは、ティアの前に膝について切々とした口調で訴えているところだった。

「こんな野宿を続けていたのでは、疲れもろくに取れないだろう？金持ちの子供らしい格好でもしていれば、とやかく詮索される心配もない。護衛の一人や二人、連れて歩いているのが当たり前だからね。君に似合いそうな服だって用意してあるのに……」

「いや、遠慮しておく」

苦笑混じりに答えるティアの、ぶかぶかの長衣をイアンはなぜかわしげに見やる。

首を振つてため息をつく姿からは、いくらでもサイズの合う可愛らしい服があるのという思いがありありと見て取れた。

「それに、万一また襲撃があつた歳に宿や、他の泊まり客に迷惑をかけることになるのは避けたいからな」

「そんなこと……」

どうでもいいのに、と言いかけたイアンをティアは目で黙らせる。小さく吐いたため息は、しかし彼の無神経さを嘆くばかりのものでもなかった。

「しかし——情報があまりにも早すぎる気もするな。あの兵士たち……私の外見に戸惑いこそすれ、疑問は持っていないかった。迷いもせずに私に向かって『ティア・レーヴェとはお前か?』と聞いてきたんだ」

レイトとファルケもいつしか食事の支度をする手を止めて、ティアの言葉に耳をそばだてていた。

「確かにこの中で女性は私だけだし、ティアという女名前だったら私に聞くのが自然だ。第一死霊術師が背後にいるのだったら、モンドステインの次期族長が女性ということは知っていて当然……二代続いて女性が長に選ばれたということで、ずいぶん話題になっていただろうしな」

淡紫の瞳に思案するような光を浮かべて、ティアは己に問いかけるように呟く。

「ただ——私が今、子供の姿をしていることを知っている者はそれ

ほど多くない。少なくとも現在、どこの死霊術師の一族とも関わりをもたないでいる死霊術師の耳に簡単に入るとは思えない」

「……ティア」

ためらいをにじませたイアンの声が、ティアの耳を打った。向けられた視線から、わずかに目を逸らすようにしてイアンは口を開いた。

「非常に言いにくいことなんだが……どうも我々エルフォンベインの一族の中に、裏切り者がいるようなんだ」

「裏切り者？」

「……ああ。七年前に、モンドステイーンの村がたやすく壊滅させられたのもそれが原因だ。ヤーデに情報を渡していた者がいたんだよ——村の警備態勢や見張りの位置、そして一族皆がそろって祭りの日のこと」

重たいため息と一緒に、イアンは言葉を吐き出す。

「今、父上がその者たちのことを調べている最中だ。ああ、大丈夫——こちらに向かっている父の手勢は、無関係だとわかった者たちだけだから。ただ——これだけは言っておくよ。そこまでの行動に出ることはなくても、モンドステイーンがラゼールを独占しているとを不服に思っている者は多いんだ」

言葉を切って、イアンは黙って話を聞いているティアの顔へと視線を向ける。

「父上が、君と僕との結婚話に乗り気なものもそれが理由だ。もうモンドステイーンの名に縛られることなく、すべての死霊術師のためにラゼールを使うべきだと、父上はそう考えているんだ」

「イアン……」

「もちろん僕に否やはない。言っただろう？ 何年でも待つ覚悟があるって——君を一番そばで守り続けていきたい。ずっと昔から、そう思っていたんだ」

ごく淡く微笑んだイアンの瞳から、ティアは視線を外した。

わずかに伏せた瞳に睫毛が影を落として、その表情を隠す。薄紙一枚分の沈黙のあとで、彼女は目を上げることなく硬い声音で答えた。

「ごめん、イアン——私には本当に、そんなことを考えている余裕がないんだ。今は……目の前のことしか考えられない」

「わかってている」

愛しげに目を細め、イアンはうなずいた。

「そういう人だということは、よくわかってている——だから好きなんだ。でも、できれば真剣に考えて欲しい。僕の気持ちはいつまでたっても変わることはないから」

「……ああ」

答えた口元に、ティアはほのかな笑みを含ませる。

どこか痛みを隠してでもいるような、申し訳なさそうな微笑だった。しかし瞳の奥底に浮かぶ表情は決してうかがうことはできなかった。

「ありがとう」

ぽつりと告げた、その言葉だけが真実の響きを宿していた。

7-1 内通者（後書き）

見直してみると、けっこう誤字（変換ミス）があることに気づきました。気づいたところは直してますが、お気づきの際にはお知らせ下さい（礼）

7 - 2 母の形見

夕食の準備が終わると、四人は火を囲むようにして座った。

献立はファルケが作った、塩漬け肉と根菜類を煮込んだものと堅焼きのパンだ。

質素な食事を見て、イアンが持っていた調理済みの食料を提供しようとしたが、ティアはやっぱりとそれを断った。

「食べきれないくらい並べられても困るだけだ」

というのが彼女の弁だったが、普段のティアの食事を量を知っているレイトとしては額面通りには受け止められなかった。

本人の意志で加減することはできるようだが——その気になれば、大人二人分の食事をぺろりと平らげてしまうのだ。どれだけ並べられたとしても、食べきれないということはないのではないように思われた。

だが、結局イアンは出しかけた食料を引っ込めて、皆と同じ『質素な』献立を口にする事となった。

不満があるのは明らかで顔つきだったが、ティアの見ている前でファルケに文句を言うわけにもいかなかったのだろう。そもそも味の薄い煮込みを口に運ぶイアンは、極端に口数が少なくなっていた。

それは、他の面々も同じことだった。

ティアはなにか考え込んでいる様子でほとんど喋らないし、ファ

ルケなどイアンが合流してからというもの、最低限の言葉しか口にしていない。

奇妙な緊張感の漂う食事風景を前に、レイトはなんだかなあ、と胸の内で呟いていた。

食事を取る必要がないので、彼の手元には茶の入ったカップしかない。

（なんだこの……妙な空気は。葬式じゃあるまいし）

その思いはイアンも同様だったのだろう。食事がおおかた終わったところで、ティアのかたわらに置かれている杖を見やって、彼は口を開いた。

「それ……大事にしてくれてるみたいだね」

「え？」

物思いから覚めたような表情でイアンを見やってから、その視線の先にあるものに気づいてティアはああ、と微笑んだ。

「そりゃあ、大事にもするさ」

「……そうだね。単なる族長の証というだけではなく、それは君にとって大切な母上の形見でもあるのだから……」

「母？」

思わずレイトはそう声を出す。やや離れたところに座っていたフアルケも、驚きの色を顔にのぞかせてティアへと目をやっていた。

二人分の視線の集まる中で、ティアは軽く肩をすくめて言った。

「なんだ、二人とも……イアンもそんな話、ここでする必要はないだろう？」

答えは返らず、ティアの口元に苦笑じみた笑みが浮かぶ。

「わざわざ話すようなことでもないだろう？ 一族が全滅したことはすでに話したんだし……先代の族長が私の母だったと聞かされても、だったらそれがどうしたって程度の話でしかないだろう？」

「いや、けど……」

「確かに、村を襲撃した犯人は私の母親の仇でもある。でも、勘違いするな——私がそいつを探すのは、誰かの仇を討ちたいからとかいうような理由じゃない」

星を閉じこめたような、強い輝きを宿した瞳でティアはきつぱりと言い放つ。

「私はモンドステイーンの次期族長として、しなくてはいけないことをしているだけだ。もちろん、そいつのことは憎いさ——生きたまま魔獣の餌にでもしてやりたいくらいだ。けれど、そうしたところで……誰一人帰ってくるわけでもない」

ぼつりと呟くような言葉の重さに、思わずレイトは声を失う。

「どれほど憎かろうと、私は私個人としてそいつを裁くわけにはいかない。それは私刑であってはならないんだ。私の憎しみをぶつけるためじゃなく、そいつの罪にふさわしい報いを受けさせるものでなくてはならない」

小さな拳が、きつく握りしめられていることにレイトは気づく。

彼が口を開こうとしたその瞬間、イアンが思い切ったような口調

でティアに言葉を投げやった。

「ティア——最後にもう一度だけ確認させてもらいたい。本当に僕たちだけで城に向かうのかい？ 父上が到着するまで待ってもらうわけには……」

むしろ穏やかな笑みさえ浮かべて、ティアははつきりと首を横に振る。

「しかし……なんといっても相手は ラゼール を持っている。君だってあの宝玉の力は知っているだろう？ 君がいくら優れた死霊術師だとしても、まともにやりあってかなう相手じゃ……」

「イアン」

その顔に微笑みを浮かべたまま、ティアはどこか悲しげな口調で言った。

「母も ラゼール を持っていたということを、忘れてやしないか？」

「……」

「それでも村と、自分の命を守りきることはできなかった。 ラゼール も万能じゃないんだ——むしろそれがあることで、油断してしまう弊害のほうが大きい」

言いながら、ティアは自分の小さな手指に視線を落とす。

「術者が最後の最後に当てにすべきもの——それは自分の力で得た知識と身につけた技術だと私は思う。それについては、少しばかり自信があるからな。なにしろ人生をやり直しているおかげで、人が一生のうち一番成長する時期を二度も迎えることができた——それも確固たる意志と目標を持って、な」

ティアのその言葉に賛同の表情をのぞかせたのは、三人の男性の中でファルケただ一人だった。彼だけは、ティアがどれほどの努力を重ねてきたのか——その目でつぶさに見てきているのだ。

「だから、私は絶対に退かない。勝算は五分五分かもしれないけど、ここで奴を取り逃がしたことで、もしも ラゼール を悪用されたら……それによって新たな被害者が出たりしたら、私はモンドステイーンの皆に顔向けできなくなる」

強い瞳できつぱりと言い放つティアを見やって、イアンは大きく肩を落とした。ため息混じりの声が、その唇から洩れる。

「本当に……君は、変わらないね」

「当たり前だ」

言い返してから、ティアはくすりと笑みをこぼした。

「そういえば、お前と初めて会ったのはこのくらいの年齢の頃だったな——いきなり人の髪をつかんで引つ張るものだから、うっかり手加減忘れて思い切りぶん殴ってしまった。盛大に泣かれた時にはどうしようかと思ったぞ」

「それは……きらきらして綺麗だったから、つい触ってみたくなっただよ」

わずかに顔を赤らめて、イアンは弁解ともつかない言葉を口にする。

「それに、変わらないっていうのは外見じゃなくて、中身のほうだよ。こうと決めたら絶対にその意志を曲げなくて——強くて、鮮やかで、目が離せなくなる」

ふっとゆるんだ口元は、微笑を苦笑を混ぜ合わせたもののように見えた。

「惚れた立場というのは弱いな。本当なら、なにがなんでも——いつそのこと実力行使に出てでも、君をラクシアから連れて帰ろうと思っていたのに」

「それは無理だ」

間髪入れずに言い返されて、イアンはやや情けなさそうな顔になる。

それでもそれなりの実力は……と口の中で呟くイアンに、ティアは笑顔を少しも減ずることなく言った。

「もし実力行使になど出ていたら、レイトがお前をぶん殴って気絶させて、私たちだけでさっさと城に向かっていたところだ。言っておくがお前が使役を動かすよりも、レイトの反射速度のほうが早いぞ」

「そいつはいいな」

にやりと笑みを浮かべて、レイトが言葉を差し挟む。

脅しめいた口調は半分演技だったが、残る半分は本気なのが顔つきでわかった。

「ぜひ、そうしてもらいたかったところだ」

「調子に乗るな」

その言葉とともに、ティアは平手の一撃をレイトの後頭部に見舞う。

さして力のこもっていない一撃だったが、後頭部を押さえてレイトは恨めしげにティアへと目をやった。

そんな二人を探るようなまなざしで見て、イアンはやや不本意そうな声を投げた。

「……ティア。君はいつたい……何者をよみがえらせたんだい？」

「さあな」

答えるティアの表情は、はぐらかしているとも心からそう思っているとも、判別つけがたいものだった。

「あいにく、私にもよくわからない……が、けっこうな拾いものだったんじゃないかと、そう思っているところだ」

レイトは軽く目を見開いてから、きまり悪そうな表情でそっぽを向く。ゆるんだ口元を無理に引き結ぼうとしたためか、妙に歪んだ表情だった。

その顔を、イアンは探るような目で見つめやる。

そんな彼らのやりとりを、少し離れた場所からファルケは一言も発することなく冷静な目つきで眺めていた。

7 - 2 母の形見（後書き）

食事のシーンが好きなんです、今ひとつ美味しいそうに食べ物を描写できません。食は文化ともいいますし、ファンタジー書くのなら力を入れたいところなんですけどね……

7 - 3 悪夢の城

砂利の散らばる道の上を、全力で駆け抜けていく一頭の馬の姿があった。

騎手は男物の衣服を着ていたが、ほっそりとした身体の線で一目で女性とわかる。淡い金色の髪を一本のお下げに結んだ十六、七の少女だった。

手綱をしっかりと握りしめ、身を乗り出すようにして馬を走らせている。

空色の瞳が印象的な端麗な容貌の主だったが、あいにく無粋なものがその顔を半分覆い隠していた。

玻璃のレンズと金属で作られた、視力矯正用の分厚い眼鏡である。

（お願い、間に合って——！）

今にも泣き出しそうな顔で、少女は必死に馬を駆る。

しかしその思いは、天には届かなかったようだった。荒い呼吸をくり返していた馬が、がくりと速度を落とし、やがて立ち止まってしまう。

もう一昼夜も駆けどおしだったのだから、それも無理のないことだった。

「走って！　お願いだから……！」

少女は馬へと呼びかけるが、馬は走り出すどころか崩れるようにその場にへたりこむ。

全身汗にまみれ、その口からは細かい泡がこぼれていた。

限界であることは一目でわかったが、それでも少女はあきらめなかった。馬から下りると、少女は懸命にそれを立ち上げらせようとする。

「お願い、走って——！」

声をかけながら、細い身体で馬を持ち上げようとさえしたが、彼女の必死の努力が実を結ぶことはなかった。

「……………」

少女も息を荒げて、馬の横にぺたりと座り込む。

うつむいたその顔を、乱れた髪が隠した。かろうじて見える口元がきゅっと引き結ばれて、少女は腰に手を伸ばした。

「——ごめんなさい」

平坦な声で呟くなり、彼女は腰から抜いた短剣を馬の首に突き立てる。

深々と首を貫いた短剣が引き抜かれるなり、派手な血しぶきが上がった。少女はそれを避けようとせせず、全身を血に染めたまま空中に素早く文字を描く。

整った顔に浮かぶ表情はなかったが、血に汚れた頬を一滴の涙が伝って落ちた。

空中に描かれた文字が光を帯びると、馬の胸にもそれとよく似た

紋様が浮かび上がってきた。くつきりと鮮やかな緋色の紋様が完成するのと同時に、絶命したはずの馬の身体がぴくりと動く。

まだ温もりさえ残したままの身体が、妙に硬い動きでぎこちなく身を起こす。

徐々にその動きはなめらかになり、少女の横に立った時には生きている馬と変わらないほどになっていた。首から流れる血が前肢をべったりと汚しているのさえ見なければ——の話ではあったが。

少女は手綱を取り直し、馬の背にひらりと飛び乗る。

強く鎧を蹴って、走り出した馬の速度はそれまでとは比較にもならぬほどに早かった。振り落とされないように、必死で手綱を握りながら少女は胸の奥でただ一つのことだけを強く念じ続ける。

それは祈りにも、ここにはいない誰かへの呼びかけにも似た思いだった。

（どうか——どうか、間に合って！）

ラクシアに入って五日後、ティアたちは問題の城へと到着した。その一帯は、ディエフ伯の所有する土地の中でも特に辺境に位置している。点々と散らばる村はどこも貧しげで、畑も小さく痩せている。そもそも、伯の領地は広さこそあれどあまり豊かなものではない。

なかった。

立木もまばらな平野部を過ぎると、峻険な山脈が目の前に迫ってくる。

その境目のあたりにカレウス城はあった。イアンの調べによると、五百年ほど前にこの地に現れ、死霊術師によって封印された魔獣の骸の上に建てられたものだという。それは一般的に『封印の城』と呼ばれるものだったが、同じようなものはこの大陸のあちこちに無数に存在していた。

「……なるほど。いかにも、といった感じだな」

木々の間から城の姿を見やって、ティアは小さく笑って言った。

その言葉に応える者はいない。崩れかけた城の異様な迫力に圧倒されたのもあったが、険しい山道をかなりの速度で登ってきたのが理由の大半だった。馬で通れるような道ではないので、途中の村で馬を預けてきたのだ。

そこから徒歩でおよそ八時間。ティア一人が涼しい顔をしているのは、黒馬から黒豹に姿を変えた魔獣の背に乗っていたためだった。

「本当に……行くのかい？」

念を押すように、イアンがティアへと声をかける。

もはやくどいとも言わず、ティアは笑顔で言葉を返した。
「帰るんだったら、お前一人で帰るんだな」

「……………」

「近隣の住人にも、被害が出始めているのがわかっているんだ。このままにして帰るわけにはいかんだろう」

「それは、そうだけど……………」

カレウス城の周辺では、問題の死霊術師が来てからというもの、人が突然いなくなるといった事件がたびたび起こっているらしい。死霊術師の仕業であることは明らかだったが、領主の保護を受けている相手に抗議することもできず、困り果てている様子だった。馬を預けるために單身村を訪れたファルケがディニス神殿の者だとわかると、すがりつくように訴えてきたのだ。

——神殿の力で、カレウス城の死霊術師を討ち果たして欲しい、と。

「ヤーデの罪はもう過去のものだけじゃない。一刻も早く身柄を確保して、これ以上被害者が出ることを防がないと——」

「……………わかった」

イアンは目を伏せて、深いため息を吐いた。

それから間もなく、一行はカレウス城の城門の前までたどり着いた。城門は堅く閉ざされており、ティアはそびえる城門と城壁とを見上げる。

扉を破って入るか、とレイトが視線で問いかけたが、ティアは小さく首を振ると魔獣の背中から降りてその首を叩いた。

「頼むぞ、ガット」

途端に魔獣の姿が、ぐにやりと歪んだように見えた。

黒い塗料に水をかけたように、その輪郭が崩れて別の姿を形作る。まばたき一つほどの時間もたたぬうちに、そこにいるのは黒豹ではなく漆黒の羽を持った大鷲となった。

大きな翼を広げて、大鷲は悠々と空に舞い上がる。

すかさずティアが投げたロープを空中でくわえると、大鷲は城壁の向こうへ飛び去っていった。

「……技の多い奴だな」

「お前より、よほど役に立つんじゃないのか？」

ぼそりと呟いたレイトに、ファルケが低く応じる。

そんな二人のやりとりを目をやることもなく、ティアはするするとロープが城壁の向こうへ引かれていくのを見守る。

それが止まったところで、手元のロープを彼女は強く引っ張った。しっかりと固定されているのを確かめた上で、彼女はファルケと睨み合っているレイトへと目をやる。

視線の意味を察したレイトは、素早くロープをつかんで登り始めた。

その姿が城壁の向こうに消えて間もなく、低くきしむ音を立てて城門の扉が開かれた。

「イアン」

細い隙間の向こうへ、足を踏み入れようとしながらティアはふり返って言った。

「この規模の城なら、どこかに必ずもう一つ出入り口があるはずだ。お前の使役のうちの一体を、そちらへとやってもらえないか？」

「それは、かまわないけど……」

イアンの声が、わずかに自信なさげなものとなった。

「使役に見張りを命じてしまうと、僕の側の戦力が落ちることになるよ？ それでもいいのかい？」

「かまわんさ」

ティアの口元に、不敵な微笑が浮かんだ。

「私にはレイトもガットもついてるし、お前とファルケだってついてきてくれている。それに、いざとなったら奥の手もあるしな」

「奥の手……？」

問いかけるようなイアンの声と視線に、ティアは明確な答えを返そうとはしなかった。

「ああ。だから大丈夫だ——行こう」

歩き出したティアのあとに、腑に落ちないような顔をしたままのイアンが続く。

二人の姿が城門の向こうに消えてから、ファルケはやつとそちらへと向かって足を踏み出した。

その瞳にはずっと、深く思案するような光が揺れていた。

7 - 3 悪夢の城（後書き）

なんか、前々話と出だしがかぶってしまいました。キリのいいところで切るつとすると、こんなことにもなっちゃいます……（汗）

7 - 4 闇に潜む影

踏み込んだ城の中に、人の気配はなかった。

地面は大人の腰のあたりまで伸びた雑草に覆われ、ところどころに見える石畳も大半が砕け散っている。建物のほうはそこまで荒れてはいなかったが、窓にひるがえる織物一つ見て取ることはできなかった。

「……本当に、ここに住んでいるのか？」

疑わしげに、レイトが建物を見やって呟く。

応える声はなかったが、ファルケも同様の思いでいるのがわかった。重ねて問いかけようとした時、ティアが周囲に目を配りながら低く言った。

「人がいるのは間違いないようだ。そこに、人が何度も通ったような跡がある」

言われて、レイトはようやく伸び放題の草の一部が、明らかに不自然に倒れているのに気づく。

それは城門から、城の正面入り口までまっすぐに続いていた。

レイトは一瞬ためらったが、ティアは迷う様子もなくその跡を通って城の入り口へ向かっていった。

「あ、おい……！」

呼びかけたが、ティアは足を止めず黒豹の姿に戻ったガットに従

えて歩いていく。

レイトは小さく舌打ちして、彼女のあとを追った。むろん足元と城の方向に神経を配るのは忘れない。本当に人が通ってできた道であるなら城内の者の目にも付きやすいだろうし、そうでなかったとしたらまず間違いなく罠である。

だが、一行は誰かに発見されることも罠にかかることもなく、すんなりと城の入り口にたどり着いた。

「……………」

あまりのあっけなさに、むしろ気味の悪い思いで彼らは顔を見合わせる。

「考えていても仕方がない。行くぞ」

振り切るようにそう言って、ティアは入り口の扉に手をかけた。

レイトがそれを制して、かわりに扉を押し開ける。万が一の罠を警戒したのだが、妙な仕掛けが作動することもなく、滑らかに扉は開いた。

片目を閉じて闇に目を慣らしてから、レイトは扉の内側へと踏み込む。

数秒後、異常がないことを確認して戻ってきたレイトの姿を見て、残りの者たちも中に入っていた。

「…………… 本当に、なにもないな」

あたりを見回しながら、レイトが気抜けしたように呟く。

建物の中は、戸外に漂い始めたものよりもやや濃い夕闇に満たされていた。

しかし、その薄闇の中でも周囲にまともな調度品らしきものがないことは見て取れた。がらんとした室内に、家具の残骸が転がっているばかりだ。

油断なくあたりに目を配りながら、一行は移動を始める。足元には家具の残骸を始め、崩れ落ちた壁などの障害物が転がっている。自然と慎重な足取りになりながらも、誰もが内心の違和感を拭えなかった。

人の姿はもちろん、人が生活している痕跡すらどこにも見当たらないのである。

「おい……」

困惑と警戒のにじむ表情で、レイトが口を開いたその時だった。

ティアの横を歩いていった黒豹姿のガットの毛が、風を受けたようにふわっと逆立った。同時にレイトも、闇の奥から吹き付けてくるような殺気を感じる。皮膚がぴりぴりと痛むような、凄まじいばかりの殺気だった。

「——っ！」

空気が動いたように感じた、その瞬間彼は反射的にティアの前に飛び出していた。

抜き放った剣を顔の前に掲げたのは、無意識のうちの行動だった。しかしそれが正解だったと、肩まで伝わる衝撃が物語っていた。危うく剣を取り落としてしまいそうになるほどの衝撃だったが、レイトは足を踏ん張ってそれをこらえる。

「気をつける！ なにかいるぞ！」

怒鳴るレイトの目に映ったのは、周囲を取り囲む大小さまざまな影だった。

「やはり、お出でしたか」

薄く口元に笑みさえ含んで、ティアは手にした杖を足元に突き立てた。

宙を滑るように動いた手が、複雑な曲線を見る間に描き出す。描き出された文字は淡い光をまとって空中に留まり、周囲を薄明るく照らし出した。

その光が、奇怪な姿をしたものたちの姿をぼんやりと浮かび上がらせる。

「侵入者対策は万全、といったところか——あるいは、これこそが目的だったのか」

呟くようなティアの声に、イアンがぎょつとしたような目を向ける。

その間に、周囲を取り囲んだ魔獣のうちの一体が、ティアめがけてまっすぐに襲いかかってきた。

馬に似た魔獣だったが、前肢には鋭い爪がある。その爪がティアの顔面を引き裂こうとする寸前、レイトの突き出した剣がわずかに爪の軌道を逸らした。赤金色の髪の一房がぱつと宙に散ったが、ティアはまばたき一つすることはなかった。

返す刃で魔獣を斬り伏せようとしたレイトだったが、鎧のような皮膚に阻まれて傷一つつけることはできなかった。

舌打ちをするレイトを視界の隅に留めて、ティアは微笑を残した唇で真音を紡ぐ。

『介在する力よ、かりそめの器に宿る加護にしばしの眠りを（ルー・ウェール・エト・セクター・ウエリア・ノス・タイル・セント・ファルヴェーレ）』

空気の震えが、細かな光の文字へと変化してあたりに波紋のように広がっていく。

ティアが描き出した呪文に反応して、それらは一瞬だけ強烈な光を放った。闇に慣れた目には突き刺さるよう感じられたが、不思議と長い間視界を奪うことはなかった。

だが、再びものの明るさに戻ったレイトの視界にあったのは、先程までと少しも変わるところのない五体満足の魔獣の姿だった。

「——って、おい！」

失敗したのかと冷や汗をにじませながら、レイトは襲いかかってきた魔獣の胴体を横に切り払う。

その刃が、すっぱりと魔獣の身体を真つ二つにした。

「な……！？」

まるで抵抗を感じなかったためもあって、レイトは目を丸くする。だが、驚いていたのは一瞬だった。それなら好都合とばかりに、彼は次々と魔獣を切っては捨てる。他の二人も彼を見習うように、剣を抜いて魔獣を斬り伏せていった。

斬られても魔獣は死ぬことはなかったが、手足を失えば動きは大

幅に制限される。そうやって自由を奪われた魔獣の身体が、やがて床を埋め尽くすかと思われるくらいになったところで、レイトたちはようやく剣をふるう手を止めた。

息を弾ませる彼らを見やって、ぱちぱちと拍手しながらティアは言った。

「お疲れ。だが連中の器の物理強度をできる限り下げてやったから楽だったろう？ あれなら刃のないテーブルナイフでも切れるぞ」
「だったら、お前もテーブルナイフで参戦すれば良かっただろう？」

「こんなか弱い子供に力仕事させる気か？」

いかにも心外といった様子で言い返され、レイトはうんざりした顔になる。

「それに私は、きちんとやるべきことはやったぞ。人に使役されている魔獣を倒すには、とにかく身体をばらばらに刻んで動けないようにするか、そうでなければ精神を傷つける術を使う以外に方法はない——今回は刻んだほうが早そうだったからな」

「そうかよ……」

もはや言い返す気力もなく、レイトはため息混じりに返す。

そんなレイトの顔を見やって、ティアがくすりと笑った——その時、横合いから衝撃を受けてその身体が吹っ飛ばされた。

「……っ！」

思いがけぬ方向からの衝撃に、ティアの身体は為す術もなく宙に

舞う。

床に叩きつけられる寸前、レイトが彼女の胴体をさらうようにして受け止めた。同時に身体で彼女の身体を庇うようにする。

なにを考える間もなく、ほとんど反射的な行動だった。

しかし、それが正しかったことはすぐさま証明された。ティアの立っていたまさにその場所を、長いものが鋭く薙ぎ払っていくのが見えたのだ。

それは、ティアと入れ替わるように立っていた被害者——ガットの身体に深い断ち傷を残していった。揺るぎもせずとその一撃を受け止めたガットの姿を見て、レイトはやっとガットが身体を張ってティアを守ったことに気がついた。

だが、ガットに感謝の言葉をかける間は無かった。

黒豹の姿をした魔獣は、大きくよろめいたかと思うとずしりと重く響く音を立てて床に倒れたのだ。

そして直後——空中から叩き下ろされたなにかが、ガットの頭部をぐしゃりと打ち砕いた。

7 - 4 闇に潜む影（後書き）

3 / 1 4 真音読みを追加しました。

7 - 5 異形の獅子

「――！」

ティアの目が見開かれ、唇が動いたが言葉は出なかった。

その身体を、レイトは近くにいたイアンに押しつけた。半ば放りやるような形になったが、イアンがきちんと受け止めたか確認することもなく剣を構える。

すでにその顔からは、完全に余裕が消えていた。

闇の中に浮かび上がる姿は、巨大な翼とトカゲの尾を持った獅子といったところだろうか。その全身を覆っているのは毛皮だったが、身体中のいたる場所で宝石をちりばめたような鱗が輝いている。

身体と同じくらいの長さがある尾だけは、完全に鱗で覆われていた。一つ一つが大人の手のひらほどもある、まるで刃を並べたような鋭く分厚い鱗だ。

ぎらぎらとレイトを見据える眼は、もはやただの獣のものとも思われない。先程感じた殺気が、この魔獣のものであることにレイトは気づいていた。

「こいつは、ちょっと簡単にはいかなさそうだぜ……」

固く強ばった顔に、レイトは無理に笑みを浮かべる。強がりでも口にしていなければ、身体が震えだしてきそうだった。

「——レイト」

その耳に、小さくティアの声が届く。

呼びかけの意味を、確認している暇はなかった。その声を合図としたように、勢いよく獅子の姿の魔獣が飛びかかってきたためだ。床を蹴ってその牙をかわしながら、ちらりとティアに目をやるのが限界だった。

一瞬見えたティアの顔は、異様なほど白く——その目にはなんの感情ものぞいてはいなかった。

「っ！」

それを怪訝に思う間もなく、魔獣が方向を変えて迫ってくる。

巨体に似合わぬ動きであり、また速度でもあった。素早くレイトは飛び退いたが、それ以上の速度で魔獣は彼に接近してくる。鋭い爪の一撃を、無理矢理身をひねってレイトはかわしたが、完全にかわしきることはできず衣服の背がすっぱりと切り裂かれる。

かろうじて身体には届いていないものの、まるで刃物で斬りつけたような跡だった。

レイトは床で一転して起きあがると、ほとんど予備動作もないまま手にした剣を魔獣に向かって突き出した。

不自然な体勢からの一撃だったが、それは正確に魔獣の眼球を狙っていた。

だが、魔獣はそれもなく宙に飛び上がってかわした。その背の翼が単なる飾りではないことを示すように、ばさりと大きく風を打って姿勢を変える。

(……ったく、なんて夕チの悪い敵だ)

内心でレイトが歯がみした瞬間、墜落するような勢いで魔獣が襲いかかってくる。

とつさに伏せて攻撃をかわしたが、不吉な予感とともに横へと一転する。まさしく彼の頭のあつた位置の床を、尾が碎いていくのが見えたのは次の瞬間だった。

(早い……っ！)

飛び散る破片から、腕で顔を庇いながらレイトは内心で呻く。
レイトの反射神経でも、相手の動きに反応するのがやっとだった。それも動きの片鱗をかるうじて捉えることができるだけである。
たとえ全力を尽くしても、相手に先んじることなどまず不可能だと思われた。

(……どうする?)

素早く起きあがって、レイトは自分自身に問いかける。

ティアたちの支援は望めないかと、視線をわずかに動かした――瞬間だった。

地を蹴って飛びかかってきた魔獣に対する反応が、ほんの一瞬ばかり遅れた。しかし、それが致命的だった。

背筋の凍りつくような思いで、身を引いたレイトの右腕を魔獣の爪がかすめる。

かすめただけではあつたが、威力は相当なものだった。肘のすぐ上の肉がごっそりと持っていかれ、断面から骨がのぞく。

それでも直撃ではなかっただけ、まだ良かったのだろつ。もしまともに受けていたら、腕そのものが完全に引きちぎられていたはずだ。

「……くっ」

しかし、レイトにとってさしたる差はなかった。

今の衝撃で、剣を取り落としてしまったのだ。次に襲いかかられたら、身を守る手段も反撃する術もなかった。

拾おうにも、剣のありかを目で探すこともできない。今視線を外したら、魔獣は間違いなくレイトの喉笛を食い破りにやってくる。

「——レイト」

凍りついたようなその場の空気を、静かな声が震わせた。

その場には不似合いなくらいに落ち着き払った、幼い子供の声だった。奇妙な威厳さえ漂わせて、その声はレイトに告げた。

「これを使え」

レイトの視界の端を、回転しながら飛んでくるなにかがすめる。なにも考えず、勘だけでレイトはそれを受け取った。同時に魔獣が床を蹴り、レイトの頭上から襲いかかってくる。

視線を動かさず、レイトは手にしたものを思いきり横薙ぎにふるった。

そうしてようやく、レイトはそれが金属の杖であることに気づいた。

ティアがいつも携えているものだ。細かな紋様が刻み込まれたそれは、意外なくらいによく手になじむ。

その先端からは、淡く発光する巨大な刃が現れていた。

「——っ!？」

ゆるく湾曲した刃は、魔獣の前肢をあっさりと両断する。

先程の魔獣たちを切り捨てた時とは、また違った手応えだった。

確かに硬いものを斬ったとわかるのに、まるで抵抗を感じさせずに刃はその肉体に沈む。

「これは……?」

戸惑った顔になるレイトの耳に、妙に冷え冷えとしたティアの声

が届いた。

「そいつには、私も多少個人的に恨みがある——それに、こんなところで時間を浪費するわけにもいかない」

その声は静かだったが、狂的な熱が奥底に秘められているのがわかった。

「だから、お前の身体を借りるぞ」

問い返す間もなく、レイトは自分の手足の感覚が遠のいたことを悟った。

意識は明瞭なままだったが、手足につながる神経だけが遮断されでもしたかのように、彼の意志を受け付けなくなる。

（な……？）

声をあげかけて、レイトは自由に声を出せなくなっていることに気づいた。

ぎよつとする彼の意志を裏切り、その身体だけが滑らかに動き出す。その動きは平素の彼とは、似ても似付かないものだった。慣れた仕草で鎌によく似た形状の武器を操る動きは、優雅とさえ言うてよかった。

「すまない。お前を信用しないわけじゃない——だが、今だけお前の自由を奪わせてもらう。私には『お前』という武器が必要なんだ」

その声と同時に、レイトは全身の熱が急速に失われていくのを感じ

じる。

まるで死者へと戻っていくような感覚に、思わず心の中で抗いかけたが、ティアの声に含まれた焦りとも怒りとも付かないものに気づいて、レイトは観念したように全身の力を抜いた。

（……仕方ねえな）

胸の中で、彼は誰にも届かない呟きを発する。

（貸してやるから、大事に使え）

それが聞こえたように、わずかにティアの口元がゆるんだ。

レイトの胸に浮かび上がる紋様が、焼け付くような熱を帯びたのはその時だった。冷え切った身体の隅々までも、その熱は広がっていく。

熱は力となり、細胞の一つ一つまでを活性化させていく。

半ばは自分の意志で、レイトは大鎌を強く握り直す。

眼前の魔獣を睨み据えて、走り出す意志が自分自身のものであるかどうか、レイトはもはや考えてはいなかった。

ただ、目の前の敵を倒す——そのこと以外頭にはなかった。

7 - 5 異形の獅子（後書き）

ちよつと細かく分割し過ぎたでしょうか……？ スピード感を出したかったんですが……加減がなかなか難しいです。

8 - 1 復讐の刃

男は深く椅子に腰掛けて、その時を待っていた。

淡い紫の瞳には、眼前の闇だけが映し出されている。窓一つない部屋の中、壁の四隅に配された燭台だけが唯一の光源である。ちらちらと燃える小さな炎だけでは、部屋全体を照らし出すことはかなわず、濃い闇が部屋のほとんどを覆っている。

男が身につけているのは、漆黒にも見える濃い藍色の長衣。闇に沈む色合いの中、白い肌と琥珀色の長い髪だけがいやに鮮明に浮き上がって見えた。

「……………来たか」

男の唇の両端がわずかに持ち上がり、笑みを形作る。

その目は室内の何物をも映してはいなかった。視覚以外の感覚によつて、彼は侵入者の存在を感知していた。

彼が城内に放っておいた魔獣が、その者の手にかかって行動不能になったことも。

にもかかわらず、男の目に焦りの色はなかった。

むしろ、この状況を楽しんでもいるかのように、男は悠然と微笑んでいた。

その手には鎖を巻き付けた、長い杖が握られている。鎖の端は床にまで届き、男が動かしたびにかすかに澄んだ音をたてていた。

なにもない宙を見つめたまま、男は静かに待ち続ける。

いずれ訪れるその時が、そう遠くないことははっきりしていた。

喉元へ迫った魔獣の牙を、レイトは体重を感じさせぬ動きでかわした。

空中を一転、着地するなり彼はたてがみに覆われた首めがけて、大鎌と化した杖をふるう。手になじんだ武器ではなかったが、それを感じさせない鋭い一撃が魔獣の首筋をかすめていった。

本当なら一刀両断に首を切断されているはずだったが、魔獣の反射神経はたてがみの毛数本を犠牲にただけでかわしたのだ。

空中に散った毛が、細かな粒子に変わったかと思うと跡形もなく消える。

その様子を、レイトは妙に静かな気持ちで眺めやった。

今その身体を支配しているのは、彼自身の意志ではない。透明な壁を隔てて、他人の戦いを見てでもいるような気分だった。

もちろん、戦っているのは彼自身の身体なのだが、そのことに対する不安はない。

『生き物の身体は、持っているすべての力を発揮できるようにはできていない』

脳裏に、女性の声がよみがえる。

ティアのものだろうか、と一瞬思ったが、そのあとでレイトはこんな話をいつしたのだろうかと思議に思った。

『すべての力を発揮しないように、生き物の身体には枷がかけられている。中でも人間を縛る枷は強い。長い長い時間をかけて、少しずつ進歩してきた私たちの身体は、他の生き物とは比べものにならないほどの力を秘めている。そのすべてを発揮すれば、身体が保たないくらいに——でも、その枷が外れる瞬間は誰にでもある』

それは、誰にでも平等に訪れる死の瞬間。

（そうか……だから）

死霊術師が死者をよみがえらせて使役するのは、枷のなくなった肉体を道具として操るため。

（だから、俺は……）

ぼんやりと考えている間も、レイトの身体は魔獣を追いつめていく。

魔獣の爪や牙が、何度か身体をかすめることもあった。だが、痛みはまったくといっていいほど感じなかった。ただ軽い衝撃があるばかりだ。

（死者つてのも、こうなると便利だな）

瞳の奥に皮肉めいた光を浮かべ、レイトはそんな感想を抱く。

この場で抱くには呑気すぎる感想であつたが、それくらいレイトの戦いぶりには余裕があつた。

その筋力も速度も、いつもの彼とは桁違いだつた。

そして彼の身体を操るティアの技量も——他人の身体を操っているとは思えないほどにその動きは正確で、しかも鋭い。

まるで舞うような動きで、レイトが大鎌をふるうたびに魔獣の身体が切り裂かれ、その動きを鈍らせていく。

何度目かに大鎌が閃いた瞬間、魔獣の翼の片方が切り落とされて宙を舞つた。

その戦いを、ファルケは手を出すどころか目で追うのもやっとといった状態で、呆然と見つめていた。

手出しできるようなレベルの戦闘ではないことが、一目でわかつた。

魔獣の動きもレイトの動きも、あまりにも速すぎて目で追うことしかできない。それも気を抜くと、双方ともに見失つてしまいかねないほどの非常識な速さだ。

しばらく睨むように戦いを見つめてから、ファルケはティアに視線を移す。

イアンに後ろから抱きかかえられるようにして立っているティアの顔色は、異様なほど白かつた。

すべての神経を、眼前の戦いに集中させているのだろう。蒼白な顔をしているのにもかかわらず、その額にはびっしりと汗が浮いている。

「……………」
言葉をかけることもできず、ファルケは視線を戦いのほうへと戻した。

一瞬、ティアの表情に違和感を感じたが、それは戦いに気を取られた瞬間に胸の奥へと滑り込んでしまっていた。

繰り広げられている戦闘は、もはや完全に一方的なものとなっていた。

魔獣の攻撃はレイトには届かず、レイトの攻撃は確実に魔獣の手足を切り裂いていく。薄く光を放つ刃をふるうレイトの姿は、人にはとても見えなかった。死者であることはすでに承知していたが――まるで人の姿をした別の存在であるかのようなようだった。

そう、それこそ彼が今戦っている相手――魔獣と同じもののように。仮にも人間の姿をしている以上、『魔人』と呼ぶのがふさわしかったかもしれない。

レイトが大きく鎌をふるうと、魔獣の足がすつぱりと切断される。すでに翼の片方を失い、前肢も一本失っている魔獣は身体を支えきれず、大きく体勢を崩してその場に倒れ込んだ。

同時に閃いた刃が、魔獣の残った前肢を斬り飛ばす。

（これで、終わりだ）

ファルケは胸の中でそう確信したが、次の一撃は魔獣の胴を浅く切り裂いただけに留まった。

その時は単に狙いが狂ったのだと思った。魔獣は翼をばたつかせて起きあがろうとしており、その必死の動きで狙いが逸れたのだと――だが、続く一撃も急所ではなく、魔獣の後肢を切り落としただけに終わった。

「――？」

ファルケはまばたきして、再びティアへと目をやる。

その唇に、うつすらと笑みが浮かんでいることにファルケは気がついた。表情を失った顔の中、異様に生々しい感情を感じさせる笑みだった。

「……ティア？」

同時にレイトが振り下ろした刃が、魔獣の翼を半ばから切り落とす。

「ティア!？」

それは完全に、なぶり殺しの様相を呈していた。思わず大声を上げるファルケに、声を返したのは冷たい表情をしたイアンだった。

「それは、七年前に彼女の故郷を襲った魔獣だ」

「だからといって……」

「お前に、彼女を責める資格があるのか？」

その声はいつそ、突き放すように響いた。言葉を呑みこんだファルケに向かって、彼は容赦なく言葉を放った。

「生まれ育った村と肉親、さらにはすべての知人に至るまで失ったものの気持ちがお前にわかるのか？ 赤子の身体で見知らぬ環境に放り込まれた者の気持ちが？」

「……………」

「わからないのなら、黙っているがいい——これは彼女の正当な権利だ。受けた苦しみのすべてを返すことはできなくとも、気の済むまでぶつけるくらいのは許されてもいいはずだ。それだけの思いを彼女はしてきたのだから」

「だが……………」

呻くように呟いて、ファルケは魔獣に目をやる。

すでに全身、傷を受けていない箇所はないほどの無惨な姿だった。床の上に力なく横たわったまま、自力で動くことすらできない。

レイトが大鎌を振り上げたが、狙っているのが急所でないことは明白だった。

そこまで見て取って、ファルケはたまらず口を開いていた。他の何物にも目をやらず、ティアだけを見据えて彼は言葉を放つ。

「ティア！ それは本当に、その魔獣の罪とされるべきことなのか？ 現実に人を殺し、血を吸ったのはその爪かもしれない——だがそれを命じた者がいるはずではないのか？ 君の怒りは、その者に向けられるべきではないのか！？」

必死にそう言いつつながらも、ファルケは内心虚しさを感じずにはいらなかった。

自分が口にしていることが、単なる理屈でしかないことはわかっていた。

この魔獣が人を殺すところを、自分は見たわけではない。自分の肉親や親しい人々が、その爪にかかったわけでもない。

当事者でないからこそ言える、ただの理屈——それが、ティアの

心に届くのかどうかはわからない。

だが、黙っていることなどできなかった。彼女がこの魔獣を、必要以上にいたぶる場面など見ていたくはなかった。それが、彼女の正当な権利を邪魔することになるうとも——彼女が自分の誇りを、汚すような真似をするのは許せなかった。

「ティア！」

その声には彼女は答えなかったが、レイトの動きがぴたりと止まった。

8 - 2 疑念

ティアの口元から笑みが消え、仮面じみた無表情となる。その瞳は魔獣を映したまま、微動だにしなかった。

「……ティア、こんなところで余計な時間を使っている方がいいのか？
ここぞとばかりに、ファルケは声の調子を強める。
「急がなければならぬと言っていたのは君だろう？ 肝心の敵を取り逃がしてしまっていないのか？ 仇に拘泥することなく、自分のやるべきことをやるだけだと君は言ったはずだ。その言葉は単なる口先だけの飾りに過ぎなかったのか？ 一時の感情に流されてたやすく見失ってしまう程度のものだったのか？」

真剣な目で言葉を重ねるファルケを、睨み殺しそうな目つきでイアンは見やった。

だが、ファルケはそれに気づくこともなかった。彼はひたすらティアだけを見つめ続けながら、言葉に対する反応が返ってくるのを待っていた。

その視線の先で、ティアは動かなかった。まるで縫い止められたように、彼女は魔獣の姿をじっと見つめている。

それはいかなる説得も拒むような姿であり、表情でもあった。

「……………」
ファルケが言葉にならぬため息を吐いた時、床の上の魔獣がぴくりと動いた。

四肢のすべてを断たれ、両方の翼を失ってなお戦う意欲は衰えていないようだ。爛々と目を輝かせる姿からは、いずれ時間がたつて回復すれば、即座に襲いかかってくることが想像できる。

「…………ティア」
力なく、ファルケが呟いたその時だった。

ティアがゆつくりとそのまぶたを閉じた。固く目をつむって数秒間、動きを止めてから決意したように再び魔獣を見やる。

空気に操られるように、レイトの手の刃が宙を滑った。

大きく弧を描いて振り下ろされた刃の切っ先は、あやまたず魔獣の頭部へと突き立っていた。びくりと身を震わせて、魔獣が完全に動きを止める。

そのかたわらに、レイトは崩れ落ちるように膝を突いた。

肉体に無理をかけた反動が、一気に現れたかのようにだった。機能していないはずの汗腺から汗が噴き出し、その全身をびっしょりと濡らす。

荒い息をくり返しながら、レイトは離れて立つティアへと目をやる。

「…………まったく、恥ずかしいったらないな」
伏せた目をうつすらと開いて呟くティアの顔には、言葉通り自嘲めいた笑みが漂っていた。

「自分で自分の感情を抑えることもできないとは…… 本当に、あまりの未熟ぶりにいつそ腹が立つ」

「本当に、情けねえったらないな」

ようやく呼吸を整えたところで、レイトが容赦のない台詞を浴びせた。

「恨み晴らすのに夢中になって、物事の優先順位も忘れっちまうなんてよ。なんのために援護も待たないで突入したんだか——これでもんままと逃げられていたら、指差して笑ってやるからな」

「……悪かった」

少しだけ不本意そうな表情で、しかし大人しくティアは謝った。

その素直さに、レイトは逆に不味いものでも口にしたような表情となる。

視線が忙しく泳ぎ回り、明後日の方向を見やったらま彼は「わかってんならいいけどよ」と固い口調で返した。

ティアはごくかすかに微笑むと、気持ちを切り替えるかのように深く息を吸った。

その息を吐き出し、口にした台詞には怒りの念も恨みの感情ものぞいてはいなかった。ただ強い決意がのぞいているばかりだった。

「行こう」

レイトは口元に淡い笑みを浮かべ、うなずいて立ち上がる。

それから彼は、ふと気づいたような表情になった。

「——それはいいが、本当にまだこの城の中にいるのか？　今の騒ぎを聞きつけて、もう逃げちまつてるんじゃない……」

「いいや」

きっぱりと、ティアは否定の言葉を返す。

「城の中に入る前に、城内の生き物の気配を探ってみた。間違いない生きた人間の気配が一つ——城の上階のほうに存在しているのがわかった。今も、な……おそらく待っているんだ。私たちが訪れるのを」

「待つ……って、どうしてまた？」

「さあな。もう逃げられないと観念したのか、それとも真正面から私たちを迎え撃つ気でいるのか……どちらにせよ、いい度胸をしているんじゃないか。よほどの勝算があるらしいな」

言葉とは裏腹に、不敵な笑みを口元にたたえてティアは言う。

そんなティアの顔を、イアンはどこか思わしげな色の瞳で見やった。言いたいことを無理に胸の奥に押し込めているような、複雑な表情がその顔にはあった。

ティアは彼を見返して、にこりと笑った。

「まあ、それならそれで好都合だ。その思い上がりを存分に後悔してもらえば済むだけのことなのだからな」

「……お前のその自信って、いったい」

思わずレイトが口にした呟きを、ティアは取り合おうともしなかった。

「ファルケの許しも出たことだし、思う存分やらせてもらうとしよう——ありがとうな、ファルケ」

その言葉と笑みとを向けられ、ファルケはややたじろいのような表情となる。

とんでもないことを言ってしまったのではないかと、顔色を悪くする彼にティアはもう一度心からの感謝をこめて言った。

「……本当に、ありがとう」

「い、いや……」

そんなファルケに、レイトは手にした杖をティアに押しつけてから声をかけた。

「俺からも一応礼を言っとく——ありがとうよ、ティアを止めてくれて」

「……！」

思わず身体全体で向き直ったファルケの目に映ったのは、いささか面白くなさそうではあったが、真剣なものを宿したレイトの表情だった。

「俺があの時、自分の意志で身体を動かせたなら、きつとお前と同じことをしてただろう——それ以前に、あいつの命令に黙って従ったりしなかっただろうけどな。けれど、あの時は……見てることしかできないってのが、あんなに悔しいもんだとは思わなかったぜ」
驚いたようにその顔を見つめ返してから、ファルケはふんと鼻を鳴らした。

「私は、あそこで自分が言つべきだと思ったことを言っただけだ。お前に感謝されたくてやったことではない」

「……そうかよ」

レイトはわずかに眉根を寄せたが、すぐに微苦笑をのぞかせて言った。

「別にそれでも俺はかまわないさ。俺だってお前に礼を言いたくて言ってるわけじゃないからな。ただあの時、俺にできなかったことをかわりにやってくれた奴に——それが誰であれ、感謝してるってだけのことだ」

「だったら、胸の中でひそかに感謝していればいいだろう。いちいち口に出さなくとも」

「俺は思ったことは、素直に口に出す主義の人間なんだよ」

「歩く死体が一丁前に人間を名乗るな。ティアがいなかったらただの骨なんだろう、お前は」

「骨で悪いか。こつちだって別によみがえりたくてよみがえったわけじゃねえぞ」

互いの顔を見ないまま、抑えた声で二人は応酬を続ける。

その間にティアとイアンはさっさと歩き出しており、二人は肩を並べてその背中を追った。

二、三步進んだところで、ファルケがささやくような声をレイトに投げやった。

「杞憂であることを願っているのだが——」

足を止めず、レイトは視線だけを横を歩く青年に向ける

ファルケもまた、前方に向けた顔を動かすことはしなかった。その横顔にわずかな迷いと、深い懸念がのぞいていることにレイトは

気づいた。

「ただの心配で終わるのなら、それに越したことはない。だが、だとしても……あまりに順調すぎる気がする。彼が来てからの事態の動き方が——いささか滑らかすぎるような。どこかに、ごまかしがあるように思えてならない」

「おい、いったい……？」

いぶかしむような表情で、レイトは思わずまともにファルケの顔を見る。

ファルケは前方の二人の背中を見たまま、少し言いよんどから思い切ったように口を開いた。

「なにが、とはっきり言えるわけではない。少なくとも、彼の様子からはティアを心の底から案じている思いしか感じ取れなかった。もしもあれが芝居なのだとしたら、彼は不世出の名優に違いない」

「……って」

はつきりしない言葉に、レイトの目がいらだちの色を浮かべた。

その顔をようやく見やって、ファルケは表情も口調も変えないまま短く言った。

「わからないのか？」

「だから、なにが……」

言いかけてから、レイトは口をつぐんだ。

ファルケの視線の示す方向と、その意味に気づいたのだ。同時にその目が大きく見開かれ、わずかな沈黙のあとで彼はかすれた声を発した。

「まさか……お前」

「最初から、気にはなっていたんだ」

低めた声で続けるファルケの口調は、妙に平坦なものだった。

「それこそ、ティアの話聞いた時から——いくら強大な力を持つ魔獣を操ろうと、死霊術師が多く集まる村をそんなに簡単に滅ぼすことができるのだろうか。内通者がいたとしても、一人や二人の術者にそれが実行可能とはとても思えない」

「けど……」

レイトの目が、前方を歩くティアの背中に向けられる。

痛みを隠したようなその瞳を、同じ感情を宿した瞳で見やってファルケは続けた。

「だが、私が考える程度のことは、おそらくティアも考えているはずだ。黙ってこの城に乗り込んできたのも、それが真相を探り出すために必要だったからこそ——私は、彼女の判断を信じる」

だが、と続けたファルケの瞳には、激しい感情の光がのぞいていた。

「それでも、ティアは肉体的にはまだ七歳の子供に過ぎない。たとえどれほど死霊術師として優れていようと……その技が使えない状況になってしまったら、特別な力をなにも持っていない人間が相手でも、彼女のほうが圧倒的に不利だ」

「つまり、一瞬たりとも目を離すなっ……」

呟くようなレイトの声に、ファルケは瞳だけでうなずきを返した。

横目にそれを見て取り、レイトは前方へと視線を戻して小さく肩をすくめた。

「あのお坊ちゃん締め上げたほうが、よほど早くないか？」

「彼がすべて知っているとは限らない。ただ利用されているだけということも考えられるのだから——乱暴な方法は控えたほうがいい」
小さく舌打ちするレイトを見やって、ファルケは表情に複雑なものをにじませた。

「それに、これはすべて憶測に過ぎない——私自身、正直これがただの思い過ごしであることを祈らずにはいられない」

「祈ったって、現実は何一つ変わりゃしないだろうが」

神官相手に、レイトは暴言としか思えない発言を返す。

ファルケはそれをとがめだてようとはせず、ただ憂慮の色を濃くしただけだった。ある面において、レイトの言葉がまぎれもない真実だと理解しているのだった。

レイトは横目にそんな彼の表情を見やると、やや取って付けたような口調で当面関係のなさそうな話題を口にした。

「にしても、お前……ずいぶんティアのことを高く評価してるんだな。ついこの間まで、たった七歳の子供と信じていた相手を」

「私にとっては、今も七歳の子供だ」

わずかにむっとしたような口調で返してから、ファルケは真面目な顔で言い添えた。

ここからは二人とも、通常の声の大きさを会話していた。だが前方の二人は、こちらに注意を払うそぶりも見せなかった。

「私は知っているだけだ。どれほど幼かろうとも、彼女がこうと決めたことは絶対にやり遂げる意志と、その力とを持った人間だということ。実際の年齢がどうであろうと関係ない。どれほど年齢を重ねようとも、なにもできない——しようとも思わない人間は山のようにいるのだから」

睨むように、ファルケはレイトの顔を見返した。

「これまで私は何度も、彼女が子供どころか並の大人——いや、相当に経験を積んだ大人でもできぬようなことを成し遂げるところを見てきた。彼女の判断力や理解力、洞察力といったものがいかに優れているか、私はよく知っている。私が彼女を信じてよいと思うのは、それらの経験を踏まえてのことだ」

虚を突かれたような顔つきで、ファルケの言葉を聞いていたレイトの口元に、いつしか淡い笑みが浮かんでいた。

それに気づいて、ファルケは険のある声を投げやった。

「なんだ、その顔は？」

その声でようやく、レイトは自分が笑みを浮かべていたことに気づいた。

「いや……けど、お前がそう言うってことはあいつの頑固ぶりも、相当年季が入っているってことだよな」

「なにを言う」

ファルケの声にはやや苦笑じみた、笑みの気配がにじんでいた。

「あのイアンとやらにも、さんざん同じようなことを言われていただろうが。彼のほうが私よりも付き合いは長いはずだぞ」

「それもそうか」

つられたように、レイトも苦笑する。

「俺の感想も、まったく同じだぜ——本当にあの石頭、もう少しまわりの人間を信用するってことを覚えてもいいんじゃないのか？」

ファルケは答えを返さなかったが、その目の色が同感であることを物語っていた。

ティアは迷うことなく、城の最上階を目指して歩いていった。

途中階段が崩れ落ちていたり、行く手を瓦礫にふさがれたりといったこともあったが、さほど時間をかけることなく排除して一行は先へ進む。

城の構造は、さほど複雑なものではない。もともと居住を目的としたものでなく、砦としての役割を持った城なのだろう。あるいは封じられていた魔獣が、万が一目覚めた時のために兵士を駐留させておくのが目的だったのかもしれない。

時の経過とともに魔獣の名も忘れ去られ、兵士の姿がどこにも見えなくなっても、城の役割そのものは変わらない。

歩いているうちに、レイトはこの城が崖に面して建てられていることに気づいた。

地上部分はおそらく四階。傾斜した地面に建っているため、やや変則的な造りとなっているが、長方形をいくつも重ねたような形をしている。最上階部分は最も奥まった場所にあるため、到達するまでには多少時間がかかった。

「――不気味だな」

最上階の部屋の前まで、なんの妨害もなく到達したことをティアはそう評した。

その顔には言葉とは裏腹に、不敵な笑みが浮かんでいる。

「ティア……」

心配そうにその顔を見やるイアンに、声を返すことなくティアは部屋の扉へと手を伸ばした。

それを再び制して、扉を押し開けたのはレイトだった。万が一、扉の周囲に罠が仕掛けられていた時のために、ファルケが携帯していた小型の盾を持ってティアのそばに立つ。

さほど力を込める必要もなく、滑るように扉は開いた。その隙間から漏れ出た光が、室内に灯りがあることを示唆する。

レイトの顔がわずかに緊張の色を帯びたのは、その光がすなわち室内に何者かが存在しているという証明であるためだった。

ファルケはさりげなく移動して、イアンの姿と室内が同時に目に入る位置に立つ。

視界の端でそれを確認して、レイトは扉を大きく開け放った。

最初に目に入ったのは、部屋の四隅に配された飾り気のない燭台だった。小さな灯りは部屋全体を照らし出すにはとうてい足りない。がらんとした部屋のほとんどが、よどんだ水のような薄闇に包まれている。

そんな中、部屋の奥で悠然と椅子に座っている男の姿があった。レイトは男を睨み据えながら、室内に一歩足を踏み入れる。その声は自然と警戒の色を帯びたものとなった。

「……お前が、ヤーデか？」

答える声はなかったが、最初からレイトも期待してはいなかった。

油断なくあたりに神経を配りながら、彼はさらに部屋の奥へと踏み込んでいく。

蠟燭の炎を手がかりに、風の流れにも留意したがおかしい空気の変動は、特に感じられなかった。足元がやや寒く感じられるのは、外壁に作られた空気抜きのためだろう。床近くに作られたそれがないのなら、室内で蠟燭を燃やすことなどできまい。

他に誰か潜んでいる様子もないと判断し、レイトは椅子にかけた人物に向かって静かに歩み寄っていった。

「おい、返事くらいしたらどうなんだ？ わざわざ出向いてやったんだからよ」

レイトのその声にも、椅子にかけた人物は聞こえていないかようにまったく反応を返すことをしない。

いらだちにも似た、剣呑な光がレイトの瞳をかすめる。

ティアが室内に足を踏み入れたのは、その時だった。羽毛が空気を滑るような、まるで気配のない動きにイアンは気づくのが一瞬遅れる。

慌てて追いかけるイアンに続いて、ファルケも部屋に入った。彼は部屋の奥に座る男に気づくと、庇うようにティアの前へと出る。

「ファ……」

抗議めいたティアの声に、彼は無言で頭を振ることで答えた。その仕草に断固たる意志を感じ、ティアは複雑な表情で口を閉じる。その肩に、横からイアンが手をかけた。引き留めるようなその仕草は、この状況下ではごく自然で——そのためティアもファルケも気がつかなかった。

イアンの身体の陰に、隠すようにして描かれた呪文の輝きに。

「——！」

肩に手がかかった——その瞬間、己の意志とは無関係に身体がまったく動かなくなったのにティアは気づいた。

声さえも出せない彼女の異変に気づかず、ファルケは歩を進める。ちらりと肩越しに視線を向けて、ようやく彼はティアの異変を察した。軽く見開かれた瞳が、次の瞬間まぎれもない怒りをたたえて彼女の横に立つ青年に向けられる。

「お前……っ！」

その瞬間——ファルケの足元の感覚が消失した。

踏みしめていた床の感触が消えたのだ、と理解した直後、ファルケの視界は暗転する。内蔵が掻き回されるような不快感とともに、彼は自分の身体が足元に開いた穴の中に落下したことを悟った。

穴の範囲はレイトの足元にも及んでおり、前方の人物に気を取られていた彼も為す術もなく転落する。

身動きもできないまま、ティアは闇の中に消えていく姿を見つめていた。

それ以外、できることはなかった。最後にティアに向けられた、驚愕の表情を浮かべたレイトの瞳が視界に焼き付いたまま離れなかった。

8 - 3 暗転（後書き）

いよいよラストステージに突入です。しかし、あえてラスボス戦とは言わない……（笑）

8 - 4 裏切者の正体

「……すまない、ティア」

隣でそう告げるイアンの顔さえ、身動きのできない今のティアには見て取ることではできなかった。

だが、肩をつかむ手の力の強さが、彼の内心を物語っていた。なまかな決意ではない——痛みさえ感じさせる力が、それを明確に感じさせる。

「でも、こうする以外に方法はないんだ……君を傷つけないためには」

その声をどこか遠く聞きながら、ティアは全身を耳にして周囲の様子をうかがう。

冷たい汗が、背筋を濡らすのがわかった。いつさいの抵抗を封じられているという事実が、ティアの心に重くのしかかる。

それは、この事態を回避できなかった自分への怒りも含んでいた。

視線を固定されたティアの視界の中心で、その時ふいに動くものがあつた。

椅子にかけていた人物だと気づいたのは、一瞬あとのことだ。その人影は優雅な所作で立ち上がると、ティアたちのほうに向かって一歩踏み出す。

その爪先で、床に開いた穴が音もなく閉じた。

床の一部が下側に向かって開く、両開きの扉のようになっていて気づいたのはその時だった。扉の表面には床と同じ模様が刻まれており、気づかずにそこに立った者を落とすための仕掛けなのだとわかった。

「ティア」

低い声が、ティアの耳朵を震わせた。

その瞬間、彼女は自分が置かれている危機的な状況も忘れた。それはあまりにも意外な声だった。ここにいるはずのない——いや、この世のどこにもいるはずのない人物の声としか思えなかったのだ。呆然と目を見開いて、ティアはその人影を見つめた。光量が足りず、まだその姿ははっきりとは見て取れない。

だが、その声と——かすかに光を反射する琥珀色の輝きが、ティアの記憶の奥底に眠るものを呼び起こした。

（まさ……か）

思いは、やはり声にはならなかった。

しかし仮に今、自由に声が出せる状態であつたとしても、それを言葉にすることはできなかったのではないかと思われた。

それほどの驚きと、衝撃がティアの胸を貫いていた。

（……そんな、はずは）

あり得ない、と胸に呟きかけて、ティアは内心でその思いを否定する。

起こりえないような話を、どれだけ自分は体験してきたのだろう。その一言ですべてを葬ってしまうのなら、自分の存在こそがまずその対象となるはずだった。

（だが……）

愕然と見開かれたティアの瞳の中で、その人物は少しずつ大きくなってくる。

近づくにつれて、その姿形がはつきりしてきた。癖のない琥珀色の長い髪に、白い肌をなお引き立てるような暗い色の長衣。

手にしているのは、鎖のついた長い杖。その鎖の輪の一つ一つに、鱗の紋様が刻まれていることをティアは知っていた。蛇は知恵の象徴、輪は永遠の象徴——その意味を間近で教えてくれた人物がいた。

それは幼い頃——今とほとんど変わらない姿をしていた頃の話だ。

（あの頃は幼すぎて、その意味もわからないまま鎖の紋様の美しさに見とれていたが——理解できるようになったのは、あの人が妻を

迎えたあとだ)

その時の胸の痛みは、今も忘れない。

尊敬と憧れの念が、いつしか恋情に変わっていた。それは幼い子供の恋だったけれど、当時の自分にとってはかけがえない思いだった。

口にも出せずに終わったそれが、まぎれもない初恋だった——
そう冷静にふり返れるようになったのはずっとあとのことだ。

(……あなただったのか)

まばたきもできず、乾いたティアの目から一滴の涙が転がり落ちる。

多くのことを教わった人物だった。体術も剣も、死霊術も——族長である母を除けば、彼は村一番の使い手だった。短気なところのある母よりも、教師としては彼のほうが優秀であったかもしれない。胸の一部が切り取られたような気持ちで、ティアは深く長い息を吐く。

その顔を、男は感情を表さない淡い紫色の瞳で見つめた。一匹の魚もいない海のような——死と隣り合わせの静けさをたたえた瞳だった。

「久しぶりだ——元気でいたようだな」

（あなたこそ——ヴァーゲ叔父上）

声にならぬ言葉で、ティアは胸の内だけで答えを返した。

それは七年前、血族とともに死亡したはずの死霊術師——ティアの母親の実弟でもある男の名前だった。

「……っ！」

長い落下のあと、全身に衝撃を感じてファルケは呻き声を洩らした。

全身の骨が砕けたかと思うほどの、強烈な衝撃だった。とつさに受け身の体勢を取ったものの、落下した時間の長さを思えばそれで緩和できるようなものではない。

むしろ、その程度で済んだことのほうが不思議だった。文字通り全身の骨がばらばらになっても、少しもおかしくなかったはずだ。痛みはあっても、負傷している様子のない自分の身体をいぶかしく思いながら、ファルケは身を起こす。

——同時に、彼はその理由を悟った。

「お前……っ！」

ファルケの身体の下敷きとなる形で、レイトが横たわっていたのだ。

その瞬間、ファルケの脳裏につい先程耳にした、硬いものを無理矢理押しつぶすような音と呻きを呑みこむような奇妙な声とがよみがえった。

「なんとということを！」

慌ててレイトの上から退いて、ファルケはその全身を確認する。

ざっと見ただけでも、二十力以上の骨が折れているのがわかった。その一部は皮膚を突き破って、鋭い断面をのぞかせている。折れた骨は内臓をも傷つけているらしく、泡の混じった血が唇からあふれ出していた。

石の床に叩きつけられた後頭部は大きくへこんで、血と透明な液体がにじみ出しているのがわかる。

「く……っ」

上げかけた声を呑みこんで、ファルケは治癒の呪文を描こうとした。

しかし直後、それが無駄であることを彼は思い出した。死人であるレイトの身体には、通常の治癒術は使えない——そう言っていたのは、他ならぬレイトをよみがえらせた張本人のティアだった。

悔しさと焦りのにじむ表情で、ファルケは上げかけた手を下ろす。食いしばった歯の間から、呻きにも似た声が洩れた。

「なぜ……こんなことを……」

「……仕方ねえだろ」
かすれた弱々しい声が、ファルケの鼓膜を震わせた。
はっとして目をやると、レイトがわずかに目を開いているのがわかった。落下の衝撃で毛細血管が切れ、その目は赤黒く充血している。

「俺はこれ以上死なない……けどよ、お前は死ぬだろうが。あんな高さからまともに落っこちたりしたら」

「だが……！」
声を荒げるファルケに、レイトは口の端をわずかに持ち上げた。

「お前が死んだりしたら、哀しむヤツがいるんだよ」

思わず言葉を失い、ファルケは愕然とレイトの顔を見返す。
その目が決意の色を宿すのと同時に、彼の手が空中に複雑な紋様を描き始めた。必死といえる速度と表情で、ファルケは手早く十二行の呪文を完成させる。

「おい……」

「お前に効くかどうかかわらんが——なにもしないよりはマシだろう」

「マシって……」

なにもしないのと同じだろう、とレイトは続けかける。

その言葉が途切れたのは、ファルケの真剣この上ない表情を目にしたためだった。

「お前は……自分とはつくに死んでいる人間だから、どんな無茶を

してもいいと思っではないか？」

「……………」

「あいにく、私はそうは思わん。おそらく、ティアも——たとえ死人であろうとも、目の前に自分の意志と身体を持つて存在しているのなら、生きた人間となにも変わりはないんだ。無茶をされれば心配にもなるし、傷を負えば——胸が痛む」

ファルケの描いた呪文の光が、やわらかくレイトの全身を包み込む。

気のせいか、身体の痛みが薄らいだように感じて、レイトは軽く目をしばたかせた。手にも足にも力が戻ってきている。先程まで指先一つ動かせなかったのが、いつしか腕を持ち上げられるほどに回復していた。

（どういう……ことだ？）

「むろん、助けてもらったことには感謝している」

内心で首をひねるレイトの思いに気づかず、ファルケは言葉を続けた。

「そうでなかったら、今頃私が重傷者として横たわっているか……最悪すでに死んでいたかもしれないのだからな。しかし、それならなおのこと、今のお前を放っておくことなどできん。たとえ効果が望めなかつと、今の私にできる限りのことをする」

「んなこと言ってる場合じゃねえだろ」

噛みつくように返したレイトの声は、先程よりもだいぶんしつかりしていた。

「上に残っているのが、ティア一人だってことを忘れたのかよ？」

「……っ！」

ファルケの瞳が揺れたのは、彼も同じことを案じていたためだった。

目つきを険しくして、レイトはさらに言いつのつた。

「こんな手の込んだ真似をしてまで、ティアから俺たちを引き離れた奴らがあいつに手を出さないと思うか？ 一刻も早く戻らないと……手遅れになっちまうだろう！」

「しかし……」

「しかしもへったくれもあるか！ さっさと行け！ 俺のことは別にどうだっていい——死人はこれ以上死んだりしないからな」

冗談めかしてレイトは笑い、強い光を瞳にのぞかせてファルケを見つめる。

「あとで、ティアと一緒に拾いに来てくれればいいさ。それまで、ここでのんびり待っているからよ。だから、早く——」

その声が途切れたのは、近づいてくる複数の靴音を耳にしたためだった。

ファルケも同じものに気づき、不審そうな表情を浮かべる。レイトの顔に浮かんだのはそれよりも幾分、現実的な危惧を宿した表情だった。

（まさか……いや、でも）

二人のいる場所に、足音は徐々に近づいてきている。

抑えてはいたが、確実に十人以上の人間がいると想像ができた。人の足音の他に、いくつか奇妙な物音も混ざっている。それは人ではないものが、それを従える人間とともに近づいてくる足音だとレイトは直感した。

（畜生……そういうことかよ）

「——つたく、もたもたしているうちに簡単には行けなくなっちまったぜ」

「……え？」

きょんとしたファルケの前で、レイトは痛みをこらえて身を起こす。

脊椎の損傷などはない——あるいはすでに修復したらしく、身体を起こすのに不都合はなかった。潰れていた肺も、いつしかもとに戻っている。

ファルケの術に効果があったことを、あらためて確認しながらレイトは手探りで自分の剣を探した。

「おい……まだ無茶は！」

「無茶でもなんでも、今やらなかったら殺されるぜ」

目を見張ったまま動きを止めるファルケに、レイトはようやく探り当てた剣を引き寄せながら告げる。

「団体様のご到着だ。俺たちを、あそこから落とただけじゃ安心できなかったようだな……それとも、死体の確認にでも来たのか。この人数ってことは、止めを刺しに来たって考えたほうが合っているだけだな」

淡々と説明するレイトを、真剣な顔つきで見つめやっってから、ファルケは再び空中に治癒の呪文を描き始めた。

レイトも黙って、彼の行動を見守る。

今はとにかく、少しでも身体を回復させておくことが大事だった。どうして自分の身体に、通常の治癒術が使えるのか疑問に思っ気持ちはあったが、まずは目の前の問題を片づけるのが先だ。

（あとで、絶対にティアに問いただしてやるからな）
内心でそう呟きながら、レイトは近づいてくる足音の方向に目をやる。

呪文の淡い光に照らされるのは、天然の洞窟を加工して作ったとわかる小部屋だった。ぬめるような質感の壁や床が、光を鈍く反射している。

その中に一カ所だけ、がっちりとした木の枠がはめ込まれた扉があった。

足音は間違いなく、その向こう側から聞こえてきている。

堅く閉ざされた扉を、レイトは無言のまま見つめやった。間に合うのかという焦りにも似た思いがあったが、それはファルケの治癒

術ではなくはるか上方の部屋で、一人きりで残されているティアを思っているものだった。

そうしている間にも、扉の向こうに足音は集結しつつある。

そこに集まった者たちの緊張した息づかいと、彼らの従えるものたちの唸り声さえ聞こえるような気がした。

ゆっくりと息を吐きながら、レイトは目を閉じる。

その目が再び開かれた瞬間、盛大な音を立ててその扉が開かれた。

8 - 4 裏切者の正体（後書き）

すみません、戦闘前のイントロが思った以上に長いです（汗） 次
もたぶん戦闘シーンには突入できない……（泣）

9 - 1 死霊術師の妄執

淡い光の差し込む部屋に、その少女はいた。

部屋の調度類はみな手の込んだ、見るからに高価とわかる品ばかりだ。絹張りの椅子に腰掛けて、少女は窓の外へと視線を向けていた。

五つになるかならないかといったその容姿には、薄暗い部屋の中よりもさんと降り注ぐ陽射しの中のほうが似合いだろう。だが少女は窓に近づこうともせず、膝の上に立てかけた杖を手でもてあそんでいた。

それは、少女の身長と同じくらいの長さのある杖だった。

表面に彫り込まれた細かな紋様を、小さな手が探るように撫でていく。ぼんやりと宙を見つめる瞳には、どんな表情も浮かんでいなかった。まるで感情をどこかに置き忘れてきたような、空疎な瞳だった。

小さく開いた唇から、ため息にも似た細く長い息が吐き出される。

『——幽明の域に留まりし人の魂よ（ユーシエリル・ミクト・プラウ・ミド・シース）』

その息にまぎれこませるように、幼い声が呪文をつむいだ。

声の響きと音韻の両方が、魔術の核となる記号を形成する高度な呪式——それは真音と呼ばれるものだった。十にも満たない少女にはもちろん、経験を積んだ大人の術者にもたやすく使いこなせるものではない。

『親しき声を聞き、平明なる水盤に再び現れ出でよ（レクティア・ホル・サドバ・ミーシラム・エルドア・ディ・ウィーア・ラウ）』空中に壁のように浮かび上がった文字が、ぼんやりと人の姿を作り上げる。

歌うように呪文を唱えながら、少女は指で空中に文字を描く。複雑な紋様にも似た文字が、吸い込まれるように壁の中に消えていくと同時に、それはうつすらと光をまとった鏡へと変わった。

鏡の表面には、室内の光景とともに大人の女性の姿が映し出されている。

四十に届くか届かないかくらいの、美貌の女性だった。活動的な衣服を身につけたその姿は、ともすれば二十代にも見えそうなほど若い。

うつむいた顔には、それを見上げる少女とよく似た面差しがあった。

顔立ちはもちろんのこと、その背に豊かに広がる赤金色の髪は少女のそれと寸分違わぬ色合いをしている。

女性の姿を見上げる少女の目には、驚きの光があった。

だが、それは間もなく悲しみと怒りの色に変わった。わずかに開かれた唇が、ぎりっと音がしそうなほどに噛みしめられる。

その時、女性が伏せていた睫毛を上げた。

あらわになった瞳の色は、最上級の紅玉に似た深みのある紅だった。よく似た顔立ちの中、そこだけが淡い紫色の瞳を持つ少女とは異なっていた。

その瞳をいつぱいに見開いて、少女は宙に浮かぶ女性の姿を見つめる。

色の違う二対の瞳が交差し、女性は口元に淡い笑みを浮かべた。生前には一度も見せたことのなかった、慈しむような笑みを少女は呆然と見やった。

震える唇が、涙の混ざる呟きを口にする。

『……………母様』

女性の目に、愛おしさとも哀しみともつかないものが揺れた。

それは、かつて少女が本当に現在の外見をしていた頃に用いていた呼び名だった。

その時より弱い光が、ティアの視界を淡く染めていた。

闇の成分の混ざった光の中へと、男は足を踏み入れる。爪先までを隠す濃藍色の長衣の裾を危なげもなくさばき、彼はティアの前に歩み寄ってきた。

視線を合わせるように身を屈めると、長い髪がさらりと肩を滑って落ちる。

「大きくなった——と言ってやりたいところだが、以前に見たのは十八のお前だからな。だが、見たところ無事に成長しているようになによりだ」

穏やかな笑みを瞳にたたえて、告げる男をティアは無感情に見返した。

顔の筋肉さえも自由にならないためだったが、それ以上にどんな表情でこの叔父を見返せばいいのかわからなかった。

かわりに視線を動かして、先程まで落とし穴の口の開いていた床を見やる。

その視線を目で追って、男——ヴァーゲ・レーニス・モンドステーンは口元に笑みを浮かべた。

「その仕掛けは、最初からそこにあったものだ。少し手を加えたが——以前は穴の上に、薄い石材を載せただけのものだったからな。事故でも起きてはまずいと思って、機械式の扉に変えたのだが……まさかこんな形で役に立つとは」

どこか他人事のような口調で語る叔父を、ティアは鋭い瞳で見つめ返す。

ヴァーゲは実年齢よりも十近く若く見える顔に、親しげな——どこか妙に空疎な印象を感じさせる笑顔を見せて告げた。

「なぜ、と聞きたそうな顔をしている」

その声は快活だったが、同時に言いようのない闇も含んでいた。

「なぜ、生きているのか——それは簡単だ。七年前の襲撃は、私の指揮によって行われたものだったから。村の構造も、警備の配置もよく知っていた。後者については、私自身が手配していたものだったから——たいして難しいことではなかった」

ティアとよく似た色の瞳に、切れるような光がのぞいた。

「ではなぜ、そのようなことをしたのか——その答えもきわめて単純だ。モンドステイーンの長が、ラゼール の力を独占していたからだ」

ヴァーゲを見返すティアの瞳に、わずかに剣呑な色が宿る。

微笑んだままヴァーゲはその瞳を見返したが、それは口元だけで、瞳にはまるで笑みがのぞいていないことにティアは気づいていた。

「お前も知っているだろう？　ラゼール には我々一般の死霊術師には、決して教えられないことのない呪文が数多く収められている。それを使うことができるのは　ラゼール の持ち主である長のみ——それも、我欲ではなく一族の存亡に関わる場合にのみ、使うことが許されるのだという」

まばたき一つできぬまま、ティアは心の中だけでうなずく。

それはモンドステイーンの一族として生まれた者なら、誰もが知っていることだった。私欲のために　ラゼール を使うことは、たとえ長であっても許されない。

「だから長は——私の姉は、私のために　ラゼール を使おうとは

しなかった。どれだけ頼んでも、レイアを生き返らせてはくれなかった」

レイアという名が、ティアの胸にちくりと突き刺さる。

もう十年以上も前に死んだ女性の名前だ。この男の幼なじみであり、のちに妻となった笑顔の愛らしい小柄な女性。ころころとよく笑う陽気な性格で、急な病に倒れても決して辛い顔を人には見せようとしなかった。

その強さを知ったのは、倒れて一月もたたずに亡くなったあと――自らの病を死病だと理解してなお笑顔を見せていたのだと知った時だ。

それまで感じていた、彼女に対する複雑な感情があとかたもなく消え去ったのもその時だった。感じたのは深い後悔と喪失感――当時のヴァーゲの嘆きようとともに、それらはくつきりと心に焼き付いている。

「私は姉を恨んだ。私に同情し、私の痛みはわかると――自分も愛した者を亡くした身であるからと言いながらも、決して私に復活の術を教えようとはしなかった姉を。そして訳知り顔で死は死だと――あきらめると諭した連中を。私は思ったのだ。なぜモンドステインの長だけが ラゼール を使うことを許されるのかと……どうしてすべての死霊術師に、それを知る機会が与えられないのかと」
その声は氷のように冷たく、しかし激しい熱情をも宿していた。
「それを使えるか使えないかは、個人の力量だろう。せめて機会は均等に与えられるべきではないのか？ 私自身の力量が足りないというのなら、まだあきらめもつく。だが長でないからという――た

だそれだけの理由で、挑む機会さえも奪われてしまうというのはあまりにも不公平ではないのか？」

（――違う、叔父上）

乾いた瞳にヴァーゲを映しながら、ティアは胸の内を呟いた。

（その妄執こそが ラゼール に収められた術のすべてを、一般の術師には教えることのできない最大の理由――決して使ってはならない術でも、人は簡単に使ってしまう。己の欲のために――そして、己の愛する者のために）

そしてそれは、いずれこの世界の生と死のバランスを狂わせることとなるだろう。

だからこそ、掟によって ラゼール は長のみ手にすることが許され、長自身も決して私欲のために使わないという厳しい枷を自ら課すことが求められるのだ。

「それでも、まだ気持ちを抑えていることはできた。お前が次期族長として指名を受けるまでは」

ヴァーゲの口元から、初めて笑みが消えた。

「次期族長は私だと――そう思っていたからな。そうすれば ラゼール を自由に使うことができる。だから我慢できた……しかし、指名されたのはお前だった。せめてお前が、次期族長にはふさわしくないとはつきり言うことができるような術者ならよかった。それなら姉が肉親の情に負けて、お前を指名したのだと弾劾することができる」

だが、と続けるヴァーゲの声は暗く、重かった。その目にはもはやティアの姿も、他の何物をも映し出されてはいなかった。

「残念ながら、そうではなかった——お前の才能は私はもちろん、姉さえもしのぐ可能性があることを一族の誰もが知っていた。もちろん、私自身も——長くお前の教師を努めていたのだからな」

ほろ苦い笑みが、一瞬ヴァーゲの唇をかすめていった。

「教師として見た時、お前の才能は実に魅力的なものに思えた。だから私は持てる知識と技術のすべてを、お前に注ぎ込んだ。まさかお前が私を追い越して、次期族長に選ばれるなどは想像もしていなかったから——選ばれたとしても、私の次の代に違いないと思いこんでいた。なにしろ、十以上も歳が離れていたのだから」

9 - 2 婚約者の思い

現在ではなく、過去の幻影に向かってヴァーゲは語りかけているようだった。

「愚かだったと言すべきなのだろうな。私は自分の後継者を育てているつもりで、自分の競争相手を育ててしまっていたのだ。だが、気づいた時にはすでに手遅れだった。一族の重鎮も、若すぎると渋い顔をしながらも指名そのものには反対しなかった。仮に私が反対を唱えたところで、同調する者はいなかっただろう。つまりその時点で、私は—— ラゼール を手にする機会を永遠に失ったのだ」

さすがに、お前の次の代の族長となるには歳を食いすぎているだろうからな、と自嘲を込めた口調でヴァーゲは告げる。

瞳にのぞいた嫉妬の色を隠すように、目を伏せてヴァーゲは小さく首を振った。

「だから私は決意した。もうどんなに待ったところで ラゼール が私の手に入ることはない—— ならば奪い取る以外に方法はないと思った。そして、そのためには一族の人間を皆殺しにする必要があると—— そうしなければ、 ラゼール を手にしたところで永遠に一族の追っ手に追われることになる」

(……だから、一族全員が集まる祭りの日を狙ったのか)
凍てついた氷の塊のような思いが、ティアの胸の中を滑り落ちていった。

その胸をよぎったのは、あの朝見た平和な村の光景だ。飾り付けも済んだ村の広場や、朝靄の中で眠る家々。村の広場ですれ違った子供は、秘密の場所に花を摘みに行くのだと言って、一本歯の欠けたとびつきりの笑顔を見せた。

あの子も——それから半刻とたたずに起こった騒ぎの中、ティアの手の届かぬところで命を落としたに違いない。

「むろん、私一人で成し遂げられることではない」

そんなティアの思いを踏みにじるかのように、ヴァーゲは淡々と無関心な様子で言葉を重ねた。

「協力者が必要だった。だから私はエルフォンベインの一族に話を持ちかけた。モルトが ラゼール に収められている術に、色目を示しているのはわかっていた。それがあればこれまでに築き上げてきた人脈を生かして、今まで以上の富や権力を思うがままにできるはずだと——彼は自分の息子を、次期族長であるお前とめあわせることでその望みを叶えようとしていたが、君が簡単に夫やその親の言いなりになるような娘ではないことは薄々察していたのだろう——」
「ラゼール を手に入れた際には、エルフォンベインに優先的に術を伝えるという条件と引き替えに、いとも簡単に私に協力することを約束した」

ティアのすぐ後ろに立っているイアンが、わずかに身体を硬くしたのがわかった。

ふり返って、その表情を確かめたい思いがあつたが、依然としてティアの身体は本人の意志を拒み続けていた。

ティアにできたのは胸の中で、幼なじみの名を呼ぶことだけだった。

「あとは簡単だった。彼は自分と同じように ラゼール の力を欲している者や、モンドステインのやり方に不満を持っている術者たちを集めて、以前から懇意にしていたこのラクシアのディエフ伯から、彼の領地に眠る魔獣の封印のありかを聞き出した——うまく ラゼール に収められた禁呪を手に入れることができれば、ディエフ伯とラクシア皇帝に不老の術を施すことを約束して」

そこから先はヴァーゲの役割だった。彼は次々と魔獣の骸に死霊術を施し、忠実な僕としてよみがえらせていったのだ。

最も強力な一体——有翼の獅子の姿をした魔獣を彼は手元に残し、あとはすべて惜しむことなく他の死霊術師に支配権ごと譲った。一人の死霊術師に扱える使役の数は限られているのだ——それが魔獣であればなおさらのこと。

彼には、その一体の魔獣を操ってやらねばならないことがあつた。村で最強の術師——族長である姉の抹殺である。

「私はこの城に封印されていた魔獣、デモルアードを連れて村へ戻った。祭りに参加するためではなく、そこに集まる村人を皆殺しにするために」

薄い笑みを瞳に浮かべて、ヴァーゲはティアの顔を見つめた。

「あとはお前も知っているはずだ。村は壊滅し、族長は死んだ。だが、なぜかお前の亡骸だけは見つからなかった——デモルアードに瀕死の重傷を負わされていたはずなのにな。残っていたのはお前の杖と、大量の血痕のみ……その血の量からして、生きているはずがないと思っていたが、まさかそんな姿で生き延びていようとは——子供の姿をしたお前が戻ってきたと、モルトに知らされた時は心底驚いたものだ」

懐かしむような口調はどこか楽しげでさえあったが、その声が底知れぬ闇のような冷たさを帯びていることをティアは悟っていた。

「だが、ある面納得もできた。残された血の量から考えて、まともなやり方で生き延びたとはとうてい思えない。おそらく族長が——お前の母親がなにかしたのだろう。そうしてお前を村から逃がした」
ティアは内面に踏み込ませることを拒む、鏡のような瞳でヴァーゲを見返す。

どこまでも揺るぎないその瞳を見て、ヴァーゲはわずかに苦笑めいた表情を浮かべると手を伸ばし、ティアの髪の一房をすくい取った。

さらりとした質感を楽しむように、指先で髪をもてあそびながら彼は言った。

「そう考えれば、もう一つ納得できることがある。この七年間、私たちをずっと悩ませていた謎だ。どうして族長の魂が、我々に召還されることを拒み続けていたか——その謎の答えでもある」

その声を聞くティアのまわりを、見えない敵意が取り囲むのが感じられた。

視線も動かせないため、固定された視界の一部で見て取ることしかできないが、たとえ自由に動くことができたとしても結果は同じだったろう。

ティアの周囲を取り巻いているのは、そのほとんどが周囲の景色に体色を溶け込ませた魔獣だったのだ。

顎のあたりに硬い感触を覚えて、ティアは知らず顔をのけぞらせる。

同じような感触が、動けない全身をさらに固定するのがわかった。痛いほどの力で締め付けてくるそれらの数は、十や二十ではなかった。蠟燭の明かりにちらりと、長い無数の足を持つ昆虫めいた影が浮かび上がる。

「……ティア」

苦痛の色さえものぞかせぬ瞳を、間近から見つめてヴァーゲは言った。

「お前は知っているはずだ。答えてもらおう——むろん、おかしい真似をすればその首を即座にねじ切るつもりだ。慎重に行動するといい。死んだお前をよみがえらせてすべてを聞き出してもかまわないのだから——むしろ私としては、そのほうが楽なくらいだ。それをせずにいるのは、そこにいるお前の婚約者のたつての望みあつて

のことだ」

「ティア、頼む」

イアンの声は、必死の響きを帯びていた。

「君をもう二度と、失いたくないんだ。君が傷つけられるのも、君が死ぬのも僕は嫌だ。そんな光景は見たくない。レーザーより――長の務めなんかより、君の命のほうがずっと大事じゃないか。なぜ、そんなもののために君が犠牲にならなくちゃいけないんだ？ そんなことは他の誰かに任せておけばいいんだ。どうせ、やりた奴はごまんというんだから……！」

こらえていたものを一気に吐き出すように、激しい口調でイアンは言い放つ。

その言葉を聞いた瞬間、ティアの目に冷ややかな色が浮かんだ。こにも彼は気づかなかった。

彫像のように動かないその肩に腕を回し、彼はティアを抱きしめる。

「僕は、君が無事で、僕の手の届くところにいてくれさえすれば、それだけでいい。他のことなど、どうなったってかまわない」

肩に触れる温もりが、かすかに震えていることにティアは気づいていた。

それでも瞳の奥に、わずかな感情をのぞかせることもしないティアを、ヴァーゲは面白そうに見やって告げた。

「彼の思いを無駄にするかどうかは、お前の決断次第だ」

表情とは裏腹に、ヴァーゲの口調にはどこまでも熱がなかった。

「私には彼の気持ちがよくわかるが、お前に手心を加えるつもりもない。お前が並大抵の術者でないことは、私が誰よりもよく理解しているのだから。手加減などすれば、屍となるのは私のほうだ——だから、お前には選択肢は二つしかない。生きたまま私の問いに答えるか、死んで答えるかのどちらかだ」

ティアの瞳はかけらも動揺の気配を見せることなく、ヴァーゲは口元にほんのわずかに苦笑めいた笑みをのぞかせた。

「お前は用心深かったから、こんな大芝居を打つより他に手はなかった。同じ死霊術師の一族にも、婚約者にも容易には心を開かず、薬にも敏感でエルフォンベインの屋敷からもたびたび抜け出す——自分で育てておいて言うのもなんだが、これほどやりにくい相手もないと思ったものだ」

雲間から差し込んだ陽光のような笑みは、一瞬で消え去った。

「だから、これは最初で最後の機会だ。くり返して言うが、お前を殺して私に逆らえない僕としてよみがえらせたほうが、私にははるかに楽だ。記憶さえ無事なら、どんな状態であってもかまわないのだから——動いて喋るただの肉で十分だ」

いつさいの温もりを感じさせない、無機物めいた瞳がティアの瞳

を映す。

すでにそれは、人間らしい感情のすべてを失っていた。生も死も自在に操ろうとする、妄念めいた執着だけがそこにあった。

「正直に答えるといい、ティア——そこにいる婚約者のためにも」
付け足しのようにそう加えた時、ティアは舌と唇の感覚が戻ったことに気づいた。だが口を開くより早く、ヴァーゲが問いの言葉を投げかけていた。

「——ラゼールは、どこにある？」

9 - 3 来訪者

カレウス城の裏門近くで、見張りに立っていた一人の死霊術師が接近してくる影に気づき、わずかに眉を上げた。

五十も間近な男の名は、ロームという——エルフォンベインの一族の末席に名を連ねる死霊術師だった。白いものの混ざり始めた濃褐色の髪と、眠っているような細い目がいかにも人畜無害めいた印象を与える。

実際、彼はモンドステインの支配体制に不満を感じているわけでも、ラゼール の禁呪に魅力を感じているわけでもなかった。エルフォンベインの長であるモルトや、それに迎合する死霊術師に半ば引きずりこまれるような形で、この場に居合わせることとなっていたのである。

（やれやれ…… やっぱ、 やめておいたほうが良かったかな）

実力は備えているものの気が小さく、七年前の襲撃の際にはそのため声をかけられることもなかった。今回初めて裏の事情を知り、協力するなら ラゼール の禁呪を授けてやると言われて、おっか

なびつくり参加を決意したのだ。

しかし、その内心は今もなお不安定に揺れ動き続けていた。

（あんな子供をなあ……いや、中身は十分に大人なのだろうが、それにしたって……第一簡単に村を滅ぼしてしまうような連中に荷担したところで、用済みになったらすぐに殺されちまうんじゃない……けど、今更やめましたと言ったところで、黙って返してもらえるはずもないだろうし。下手をすれば——というかまず間違いない、その場でさつくり殺されて終わりだろうな）

そんな内心を見透かされて、見張りというさほど重要ではない仕事を割り振られたのだが、本人はそれに気づいていなかった。

あれこれと思い悩みながらばんやりと立ち続け——夕闇があたりを覆い始めた時刻に、それを発見したのだ。

「……え？」

近づいてくる影が、人を乗せた馬であることはじきにわかった。

馬の背に身を伏せるようにしているのが、見覚えのある人物だということも。

「——お嬢さん!？」

空にかろうじて残る夕日のかけらを、淡く反射する金色の長い髪。近づいてくるのが長の娘である、イリスだと悟ってロームはどう対処すればいいのか迷う表情となった。

むろん失礼があつてはならないが、彼女が長の企てをティアに報せようとして捕らえられ、幽閉されたことはロームの耳にも入っている。どうやって抜け出したのかはわからないが、ここを通してしまつては職務怠慢を責められても仕方がなかった。

「お嬢さん、止まって下さい！」

大声で呼びかけながら、ロームは自分の従える獣に目で命じる。

馬の足を止めると命じられて、飛び出していったのは大きな狐だった。赤褐色の毛並みだけをかるうじて視界に残すほどの速度が、それが生きた獣ではないことを明確に物語っている。

狐が進行方向に飛び出してきても、イリスは馬の速度を落とさなかった。それどころか手綱を強く握りしめて、強行突破の構えさえ見せる。

(……仕方ない！)

それを見て、ロームは馬を攻撃するように命令の内容を変更した。

同時に、どたどたと巨体を揺るがせながら走り出し、近づいてくる馬に向かって両腕を広げる。万が一、イリスが落馬した時に受け止めるためだった。

妻も子供もない彼だったが、それだけにイリスとイアンの二人に対しては肉親めいた感情を持っていたのだ。

しかし、狐に喉笛を咬み裂かれても、馬はまったく速度を落とそ

うとしなかった。

「――！」

土煙を立てて走り抜けた馬の首から、狐が振り落とされて声一つあげることなく地面に転がる。ころころと転がったその尻を、馬の後足が容赦なく蹴飛ばしていった。

呆然とたたずむロームを置き去りにして、馬は城内へと走り去っていった。

イリスが乗っていた馬が、自分が操っていたのと同じ生命なき使役であつたと彼が気づいたのは、その姿が完全に消え去つたあとのことだつた。

城の最上階では、血のつながつた叔父と姪とが言葉もなく見つめ合っていた。

その瞳の色は、瓜二つとっていいほどによく似ていた。しかし、まるで異なる性質を宿した瞳でもあつた。

鏡に映る虚像と実像のように――空と海とが違ふ世界を、その内に宿しているように。

「……ティア」

長い沈黙に耐えかねたように、声を発したのはイアンだつた。

「頼む、答えてくれ――それがどんなものであると、君が命をかけるほどの価値なんてないはずだ」

「それを決めるのは、お前じゃない」

かすれた弱い声で、しかしきつぱりとティアは言い放った。

「私の命の値段を決めるのは、私自身だ——お前が口出しするようなことはない」

「だが……！」

「叔父上」

それ以上イアンの声に耳をかたむけることはせず、ティアはヴァーゲに向かって言葉をかけた。

「あなたには、もう私の答えは想像がついているのではないのか？ たとえ私が大人しく喋ったところで、あなたは絶対にその答えを信用しない。必ず確認しようとするはず——それも、最も確実な方法で」

ヴァーゲは答えなかったが、ごくわずかに持ち上げられた唇の端がティアの言葉の正しさを証明していた。

「あなたは最初から、私を生かしておくつもりなどなかった。そんなことをすれば、必ず私はあなたの手から ラゼール を取り返そうとする。あなたのしたことが明るみに出れば、エルフォンベイン以外の死霊術師一族はみな敵に回る。私という旗印があれば確実に——神殿だつて黙ってはいないだろう。仮に ラゼール に収められた禁呪を報酬としてちらかせたところで、すべての人間を従わせることなどできない。あなたのやり方に、異を唱える者が必ず現

れるはずだ」

感情をまじえぬ口調で淡々と語りながら、ティアは内心抑えがたい焦りと戦っていた。すぐ横に立つイアンの顔を、見ることができないのがもどかしい。

自分を助けるのがイアンの目的なら、どのみち殺すつもりだというヴァーゲの本心を知れば味方に付く可能性も高い。今はその可能性にかける以外、方法はなかった。

(……それでも、まだ動かないか?)

表情一つ変えないティアの背中を、冷たい汗が滑り落ちていく。

「……だとしたら?」

ヴァーゲはティアの言葉に、悠然たる笑みさえ浮かべて応えた。

ティアも負けじと、余裕の漂う声音で返した。こうなったら、あとはもう度胸とはったりで時間を稼ぐしかなかった。

「どちらにせよ殺されるのなら、私は沈黙を守るほうを選ぼう。二度も同じことを言わされるのは業腹だし、私をよみがえらせる術が必ず成功するとは限らない——万に一つの可能性でもあるなら、私はそちらに賭けよう」

「姉が聞いたなら、涙を流して喜びそうな言葉だな」

口元の笑みはそのまま、冷やかな口調でヴァーゲは言い捨てた。「さすがは身内の情よりも、掟を守ることを選んだあの女の娘だ。似合いの親子と言っべきか……」

その視線を、彼はティアの横で凍りついたように立つイアンへと

移した。

「そういうことだ。気の毒だが——文句なら強情な婚約者に言っといい」

「……………わかりました」

呻くようなその声を聞いて、ティアは自分の目論見が外れたことを知った。

思わずその顔を見やろうとしたが、魔獣に拘束された状態では指一本動かすことはできなかった。

「せめて……………僕自身の手で、送らせてくれませんか？　よけいな傷などつかないように、一撃で殺しますから」

「……………イアン」

そう声を返すのが、やっとだった。

しかしその声は、イアンの耳には届いてもないようだった。

9 - 4 兄妹

「いいだろう」

ヴァーゲがうなずくのと同時に、首の後ろでひやりと金属の気配がした。

抜かれた剣が、首の後ろに押し当てられたのだとティアは理解する。知らず身体が強ばったが、胸の内にはまだ信じられない思いがあった。

喉の奥に貼り付いたような舌を動かして、ティアは懸命に言葉を紡ぐ。

「イアン、お前……」

「許して欲しい、ティア」

イアンの声に力はなく、しかし悲壮なまでの決意の響きをまといていた。

「それでも——僕はもう二度と君を失いたくない。君が生きたままそばにいられないのであれば、いつそ死人でもかまわない。君が僕のそばにいてくれさえすればいいんだ。もう二度と、僕の目の前から消えてしまわないのなら……どんな姿でもかまわない」

「……お前は」

ぼつりと呟くように、ティアはその言葉を口にした。

「骨の髄まで、死霊術師なのだな」

その声も、イアンの心へは届いていないようだった。

追いつめられたような面持ちで、イアンは抜き身の剣を逆手に掲げる。ティアは覚悟を決めたように、口をつぐんでそのまぶたを閉ざした。

黙って殺されるつもりなど、みじんもなかった。どれだけ望みが薄かろうと、最後まで抵抗を続けるつもりだった。

この状況下で、できることなど限られていたが——死んでいった者たちのことを考えれば、簡単にあきらめることなどできるはずがなかった。

目を閉じたまま、ティアはごく小さく息を吸い込む。

その唇が言葉を紡ぐよりも早く、イアンがその手の剣でティアの首の動脈を断つよりも早く——その場の流れを決定的に変えたものがあつた。

すなわち、火のついた松明がイアンの顔をめがけて飛んできたのである。

「——っ！」

反射的にイアンは松明を手で払い落とし、そちらにヴァーゲの注意もほんのわずかではあつたが奪われた。

その一瞬が、まさしくティアの待ち望んでいたものであつた。

「ガット！」

声をあげたティアの全身を、足元から立ち上がった影が包み込む。闇そのもののような漆黒の影は、ティアの身体を拘束する魔獣に絡みついてその動きを奪った。

そのまま殻を剥がすように、ティアの全身から透明な魔獣を引きはがしていく。

影の下から現れたティアの目と、松明を投げた人物の目とがあった。

ほつれた金髪を汚れた頬に貼り付かせて、肩で息をしている人物――分厚い眼鏡に半分隠されたその顔は、イリスのものであった。

わずかばかりの沈黙が、その場を支配した。

イリスは松明を投げた姿勢のまま、イアンとヴァーゲの両名に鋭い視線を注いでいる。その目には、今にも泣き出そうな光が揺れていた。

イアンは表情を失って、この場にいるはずのない妹の姿を見つめていた。

そんな中、ティアとヴァーゲだけは一瞬も迷うことなく、次の一手を選んでいった。

『世界を満たす秩序よ、水面の疵を阻む盾となれ（シェスティル・ヴァーグ・レト・ミール・ファルガス・デルム）』

ティアが口にした真音は、同時に描いた呪文を巻き込むようにして、彼女の周囲を取り囲む光の壁となる。

同時に彼女を包み込んでいた漆黒の影が、吸い込まれるようにその足元に消えた。

残されていた透明な魔獣だけが、光の壁によってその外側へと弾き出される。ティアの手足に絡みついていた魔獣の身体の一部は、光に焼き切られるようにあっけなく引き千切られた。

ティアはそれに構うそぶりも見せず、さらなる真音を紡いだ。

『築かれし秩序を破る無の刃よ（ウィー・レクト・シエル・ファミル・デイスリーク）』

自由になった手に握られた杖が、淡く光を帯びる。

杖を一振りすると、それは長く伸びる湾曲した光の刃となった。

大鎌状の武器と化した杖を、ティアは両手でしっかりと握りしめる。ティアを守る非物質の壁が、音もなく砕かれたのはその瞬間だった。

風を裂いて襲いかかってきた魔獣の牙を、ティアは鎌を一閃して打ち払う。

手がじんと痺れて、杖を取り落としそうになるほどの衝撃があった。顔をしかめながらも、ティアは続く攻撃を杖を使ってなんとかしのぐ。

その背中に、剣を振り下ろしたのはイアンだった。

「――！」

とつさにかわしきれず、体勢を崩したティアの真上で刃が弾き返された。

抜き身の剣を手に、ティアとイアンの間に飛び込んできたイリスの仕業だった。彼女は怒りと哀しみの混ざる瞳で、兄の顔をひたと見据える。

「お兄様！」

呼びかける声に答えず、イアンはさらなる斬撃を放った。

イリスの喉元を狙った一撃は、まごうかたなき殺意が込められたものだった。イリスは顔を歪め、必死にその一撃を受け流す。

彼女も死霊術師の一人として、十分な戦闘訓練を受けていた。しかし腕力体力ともに、男性であるイアンに大きく劣っている。

なにより、動揺を隠せないその瞳が彼女の不利を明らかに物語っていた。

「お兄様…… どうして」

イアンは見知らぬ他人でも見るようなまなざしを、実の妹へと向ける。

「—— お兄様！」

「他に、方法がなかったんだ」

虚ろな口調で、イアンは初めて言葉を投げ返した。

「父もヴァーゲも ラゼール をあきらめるつもりなど毛頭ない。ティアも黙って ラゼール を渡す気などないという。だったら、僕にできることは少しでも苦しめずに彼女を殺すことだけ—— そし

て、彼女がどんな姿になろうともそばにい続けることだけなんだ。
僕はそれでもいい。彼女をもう二度と、失わないですむのなら……」

大きく見開かれたイリスの瞳に、驚きとも嫌悪ともつかぬ色が浮かぶ。

兄の中で育っていた怪物の存在に、初めて気がついたような表情だった。イリスは強く頭を振り、イアンの目をまっこうから見つめ返して言った。

「あなたは間違っています、お兄様」

「間違っていようとかまわない」

間髪入れず、イアンは言い返した。

その瞳に浮かんでいる絶望のあまりの深さに、イリスは呑みこまれてしまいそうな気持ちとなる。

懸命に自分を励ましながら、イリスは兄の目を見据えて言葉を紡いだ。

ここで退いてしまったら、兄を止めることなど絶対にできないだろうと思った。

「違う、そんなものは愛でもなんでもない。そんな方法では——誰も幸せにはなれない」

「幸せ、だと」

その目に暗い炎を燃やして、イアンは吐き捨てるように言った。

「お前になにがわかる。なにも知らず、のうのうと暮らしていたお前に……ティアの村が魔獣に襲撃されたと知った時、僕がどれだけ

苦しんだと思う？ 死体が見つからなかったということだけを支えに、ティアを探し歩いた時の気持ちを——そんな折に、村の襲撃を指示したのが実の父だと知った時の絶望を」

お前にわかるはずがない、と告げる声は低く呻くかのようだった。言葉もないイリスを睨み据えて、イアンは鬼気迫る表情で言いつのる。

「父からすべてを聞かされた時は、父を殺してやろうとさえ思った。しかし、僕の力ではそんなことはできるはずがなかった——父や父に従う術師、それにヴァーゲを相手にして生きていられるはずがない。僕にできるのは誰よりも早くティアを見つけ出して、ラゼールをあきらめるよう、説得することだけだと思った」

「……どうして」

かすれた声が、イリスの唇から漏れ出た。

「どうして、そんなに簡単にあきらめてしまえるの？ お兄様にできることが、必ず他にあったはずなのに……」

「言うだけなら簡単だ、イリス」

冷たい声音は、あらゆる他者の言葉を拒絶しているように感じられた。

「だが、お前が同じ状況に陥った時、お前はそれ以外の結論を出すことができるのか？ □先でならどうとでも言える。どんな綺麗事だって——だが現実には、そうすれば命がないことがわかっていて、勝てる望みなどなきに等しいとわかっていてなお、他の結論を出すことができるというのか？」

刃を突き立てるように、イアンは容赦なく言葉を口にする。

イリスには、答えることができなかった。できると口にするのは簡単だったが、実際にその境遇に置かれたわけでもない人間がそう言っただけで、ひとかけらの説得力も持たないことは明らかだった。

「お前が言っているのは、渦中になく人間の無責任なたわごとに過ぎない。どうせなら、最後までカヤの外にいれば良かったんだ……それをわざわざ、こんなところにまでやってきて賢しげな口を利き——お前は、いったいなにがしたいんだ？ いや、いったいなにができるというんだ？」

憎悪さえ感じさせるその声音が、イリスの言葉を奪った。

叩きつけられる負の感情に、息もできないほどだった。これほどの悪意と絶望を向けられたのは、初めてのことだった。

しかし、膝が折れそうになるほどの重圧を感じながらも、彼女は屈しなかった。

眼鏡越しに兄を見据える瞳には、あきらめも絶望も宿ってはいなかった。

「私は……確かに無力だわ」

食いしばった歯の間から、呻くような声が洩れた。

「あなたにも、お父様にも、ヴァーゲ様にも……力では決してかなわない」

「ならば……」

「だけど、私にだってできることはあるの」

強い瞳でイアンを見つめて、イリスは言い放った。その表情は驚くほどにティアに似ており、イアンは我知らず息を呑んだ。

「お兄様、あなたを引きつけておくくらいのことは、私にだってできるわ。あなたとヴァーゲ様の両方を同時に相手取るよりは、ごくわずかではあってもティア姉様の勝つ確率が上がるはず——いいえ」
イリスの口元に、うつすらとだが力強い笑みが宿る。

「あなたが卑劣な手段さえ使わなければ……ティア姉様は決して負けたりしません。私はそう、信じています」

わずかに見開かれたイアンの瞳が、一瞬のあと睨み殺しそうな表情を浮かべる。

どこか嫉妬めいたその表情は、どこまでも純粹にティアを思うことができる妹の強さに向けられたものだった。そして同時に、そうすることのできる妹の境遇を妬ましく思ったためでもあった。

殺意をはらんだその視線を、イリスは恐れげもなく受け止めた。見た目ほど余裕があるわけではなかった。術でも剣の腕前でも、兄には遠く及ばないとわかっている。

それでも、退くことはできなかった。

(……どうか)

心の片隅で、イリスはひそやかに願った。

それは兄に勝つことでも、その心を変えることでもなく——たった一人の少女の無事を祈る切なる思い。

今は、自分にできる限りのことをするだけ——だから、負けない

でと。

それ以外に、願うことは何一つなかった。

10 - 1 切り札

イアンとイリスが言葉を交わすのを聞きながら、ティアは素早くその場を離れた。

近くにいたのでは、イリスをヴァーゲとの戦いに巻き込む恐れがあった。それにイリスが、イアンを足止めしてしてくれるだろうという願望めいた予測もあった。

（無茶はするなよ……！）

胸にそう呟きながらも、ティアはふり返ることもなく石の床を蹴る。

その足が、もつれたように見えた——次の瞬間、ティアは自分から床に身を投げ出していた。転がりながら足元の空間を大鎌で一閃し、足首に巻き付いた透明な魔獣の腕を切り払う。

さらに一転して起きあがると、自由を取り戻した足でティアは走り出した。

ちらりと目で確認すると、ヴァーゲはゆっくりとこちらへと向かって歩き出しているところだった。自分に注意を引きつけることに成功したとわかって、ティアは内心ひそかに胸をなで下ろす。

イアンに与する形で、イリスに危害を加えられることになるのを最も恐れていたのだ。

だが、だからといって安堵してはいられなかった。たった一人とはいえ、おそらくこの世で最も手強い相手——自分の戦い方や癖を熟知している相手だ。なにより、大人と子供——そして、男と女という肉体的な力の差は絶対的だった。

「——っ！」

姿を消したまま、再び襲いかかってきた魔獣の爪をティアは直感だけでかわす。

交差するようにふるった刃が、ざっくりと魔獣の身体を切り裂いた。その姿は見えなかったが、鎌から伝わった手応えがそれを確信させた。

直後、目の前の空間が揺らめくように歪み、昆虫型の魔獣が姿を現す。身体をほとんど真っ二つにされたそれは、現れるのと同時に細かな粒子となって消えていった。

しかし、その時にはもう、十数体の魔獣がティアの周囲を囲んでいた。

ヴァーゲの支配する魔獣だろう——中にはイアンが連れていた、銀箔めいた体毛に包まれた魔獣の姿もある。

（まったく、ご丁寧なことだ）

油断なくそれらを見据えながら、ティアは内心でばやきめいた呟

きを発した。

（全戦力をつぎこんできてくれるとはな……にしても、よくまあこれだけ集めたものだ。執念とは恐ろしいものだな）

いささか緊張感に欠けることを考えながらも、ティアは一秒も無駄にすることなく次の準備を整えていた。

それは、魔獣の攻撃にまぎれるようにして、ヴァーゲが一撃を放った瞬間証明された。

首筋めがけて振り下ろされた剣を、大鎌の刃ががちりと受け止めたのだ。

幼い少女の力では、どれほど鍛えていようと受け止められるものではなかった。仮に受け止められたとしても、すぐに力負けしてしまうはずだ。

しかし、ティアの身体は大人の攻撃を受け止めてなお微動だにしなかった。

その両腕に、絡みつくような形で淡い光の紋様が浮かび上がっていることにヴァーゲは気づいた。

「術で肉体を強化したか——だが」

うつすらと笑みを浮かべて、ヴァーゲは片手で空中に呪文を描く素早く書き上げられた紋様は、ヴァーゲの両腕に吸い寄せられるようにして巻き付いていった。

肘のあたりまで巻き付いたそれは、ティアのものと寸分違わなかった。

「私にも、同じ術が使えるということを忘れたか？」

「……いいや」

言った瞬間、ティアの足元の影が再び膨れ上がってその前に立ち
はだかった。

それは一瞬のあと、漆黒の毛並みと優美な四肢を持つ獣の姿へと
変わる。紅玉のような二対の瞳が、闇そのもののような毛並みの中
で爛々と輝いていた。

もはや豹にも、馬にも似ていないその姿はこの魔獣の本来のもの
なのだろう。鮮やかな真紅の瞳には、人間めいた知性の光さえ感じ
られた。

自分の身長と変わらぬくらいの体高のある獣の首に手を置き、テ
ィアは反射的に距離を取ったヴァーゲへと目をやった。

「これが、私の奥の手その二」

「……失念していたな」

ヴァーゲの口調は、苦い笑みをともなったものだった。

「その魔獣がいたか……先程、影から現れるところを見せられたば
かりだというのにな」

その声に、ティアは口元だけに笑みを浮かべて答える。

「変化と穩行は彼の得意技だ——偽物の頭を作って、碎かせてみせたのは万が一のための保険さ。こうなることを予測していたわけじゃないが……」

言いながら、ティアは素早く指先で呪文を描き始める。

それを見て、ヴァーゲの表情がわずかに険しくなった。彼は身振りで周囲の魔獣たちにティアを襲うよう命じる。

人間の目には、影が走ったようにしか見えない速度で彼らはティアに襲いかかる。

しかし、そのうちの一体として目的を遂げられたものはいなかった。見えない壁が出現したかのように、彼らはティアの手前でもんどり打って倒れ、あるいは宙に舞い上がったのだ。

黒い風と化したようなガットが、その原因だった。

数体の魔獣を一瞬で行動不能にしたあと、ガットは続けて襲いかかってきた大きな猿のような魔獣の腕を咬み千切る。

刃物で断ち切ったような鋭い断面を見せ、放り出された腕が床に転がった。

その時にはもう、ガットは次の相手へ襲いかかっていた。銀箔のような体毛に包まれた魔獣——フォカの顔面に鉤爪を叩きつけようとする。フォカは素早く体色を変化させて、溶けいるように空中に消えた。

しかし、それはガットが相手では無意味な行為であるようだ。少しも狙いを逸らすことなく、鋭い鉤爪がフォカの顔面を抉る。頭から床に叩きつけられ、フォカは笛の音のような悲鳴を發した。それでも力は緩むことなく、叩きつけられた頭がみしみしと音を立てて歪む。

だが、一方的に痛めつけられるばかりでもなかった。

フォカはいくつも節の付いた長い手足を、ガットの全身に絡みつかせその自由を奪う。それに気づいたガットが、振り払おうともがいたが手足はしなるばかりで振りほどくことも、引きちぎることもできなかった。

ガットは前肢に力を込め、床に押しつけたフォカの頭部を押し潰そうとする。

長い手足がぎりぎりと全身を締め付けたが、ガットの力が緩むことはなかった。最後に高くかすれた悲鳴を残し、フォカの頭がぐしやりと潰れる。

だが、それまでに要した時間が致命的なものとなった。

ガットが足止めされている間に、その脇を通り抜けた数体の魔獣が無防備に立つティアへと襲いかかっていたのだ。

「……っ！」

一体目の攻撃は鎌で払いのけたが、それがヴァーゲの狙いだっただけは滑るような足取りでティアとの距離を詰めると、から空きになったその背へと手にした剣を振り下ろす。

ティアはふり返ったが、彼女の反射速度をもつてしてもそれが限界だった。

雷光めいた光を浮かべた二対の瞳が、交錯した一瞬――

『巡り流れ止まらぬものよ』

ティアの唇が紡いだ真音が、彼女の周囲に白く輝く壁を出現させた。

緻密な紋様によって作り上げられた壁は、物理的な圧迫感さえともなつてヴァーゲの視界を奪う。

半ば勘だけでヴァーゲは剣を振るったが、手応えは感じられなかった。

『秩序の水面の上にかりそめの平盤を。切り取られし平盤の回転は偽りの時を刻む。平盤砕かれしその時まで、維持されるべきはその流れ』

息を継ぐこともせず、一息にティアは唱えきった。

彼女の周囲を取り囲む壁は、砂粒のように細かな文字によって形作られたものだった。文字と文字とが重なり合って、複雑で立体的な紋様を描き出している。文字の密度の濃淡によって描かれた紋様

は、繊細なレース編みにも似て美しかった。

その光の中へと、ヴァーゲは再び剣を突き入れた。

直前にティアが立っていた位置を狙った、正確この上ない一撃だった。ティアが動いていなければ、確実にその心臓を貫き通すはずだ。

「——っ!？」

しかし、返ってきたのは人体を貫く手応えではなかった。

肩まで響く衝撃とともに、返ってきたのは剣を弾き返される強烈な手応えだった。

「な——!」

思わず目を見開いた瞬間、ヴァーゲの目の前の壁が跡形もなく消滅した。

その向こうで、片膝を落として剣を構えているのは十代後半と覺しき女性だった。長く背に広がった赤金色の髪が、ヴァーゲの記憶に眠る一人の女性の名を呼び起こす。

「……ラクス、姉上？」

答えるように目を上げた、その瞳の色だけが記憶とは異なっていた。

夜明けの空に浮かぶ雲のような、淡く煙る紫色。

あどけなさを残しながらも、大人の女性の輪郭で微笑むその顔の持ち主に、ヴァーゲもまもなく思い至った。

むしろ、それ以外にはあり得ぬはずの答えだったが——あまりにも想定外の成り行きに脳が理解を拒んだようだった。

「まさか……」

愕然と呟くヴァーゲに、その女性は不敵な微笑を浮かべて告げる。

「——そしてこれが、私の奥の手その三だ」

言葉もないヴァーゲの眼前で、その女性はすらりと立ち上がった。伸びやかな肢体を包んでいるのは、膝丈のズボンと七分袖の上衣。衣服の端からのぞく手足の白さが目にまぶしいほどだった。

女性——大人の姿となったティアは、手にした鎌を慣れた手つきで構え直す。

一分の間もないその立ち姿を、ヴァーゲは呆然と見つめた。その目に理解の色が浮かぶのと、呻くような声がその唇から洩れるのは同時だった。

「まさか……お前が」

「死霊術は、生命と精神とを操る技術。死者を好き勝手に操るばかりのものじゃない……そのくらいことは、あなただって知ってるはずだがな」

ティアの言葉は、ヴァーゲの耳にはまるで入っていないように見えた。

彼は異様に光る瞳でティアを見つめ、首をわずかに横に振る。再びティアに向けられた顔には、どこか自嘲めいた笑みが浮かんでいた。

「……お前は、最初からすべて知っていたのだな？」

ティアは答えずに、婉然とした笑みを浮かべてヴァーゲの顔を見返す。

「その術は、準備もなしに行えるようなものではない——どれほどの才能の持ち主であってもだ。たとえ万全の準備を整えていたところで、成功する確率は五分以下。そんな分の悪い賭けを、今この局面でお前がするはずもない」

その瞳に理解と、まぎれもない怒りの色をのぞかせてヴァーゲは言った。

「お前が持っているのだろう——ラゼールを」

問いではなく、それは確認の口調だった。

ティアは苦笑すると、哀れむともつかぬ表情でヴァーゲを見つめ、豊かな曲線を描く胸に手を置いた。

「正解——ただし半分だけだ。ラゼールは、ここにある」

「……まさか」

「そう。私の身体の中に」

ティアの顔に浮かんでいた笑みが消える。

「忘れたのか？ 村には私の杖と大量の血が残されていた。あの時、確かに私は一度あの魔獣に殺されたんだ」

表情を消した瞳が、闇を映したような濃い陰りを帯びる。

「私は忘れはしない。あの時の絶望も苦痛も——この世界のすべてから切り離されていくような、絶対的な恐怖も。人の意志など歯牙にもかけない力——それが死なのだということがよくわかった」

その脳裏に、七年前のあの場所で目にした光景がよみがえる。

村中のいたるところに、無造作にうち捨てられていた数々の死体。男も女も関係なく、命を奪われてもののようになり出されていた——己の身になにが起こったのか、理解することもできぬまま生命を奪われたその表情。

驚きと恐怖と、理不尽さに対する怒りをのぞかせた物言わぬ瞳。彼らを感じたものと、同じものをティアは確かに感じたはずだった。彼我を隔てる境界線を彼女は間違いなく越えた——はずだったのだが。

「私を生き返らせたのは、母だ」

脳裏に浮かぶ光景を打ち払うように、強い声でティアは言った。

「あの日、私は仕事で村を出ていた……村に戻ってすぐに襲撃が始まった。叔父上もよく覚えているだろう——私が村に戻るのを待って襲撃を行ったはずだからな。何体の魔獣を行動不能にしたか覚えていない。けれど叔父上——最終的には、あなたが母のもとへ送り込もうとしていたあの魔獣が、私の喉を咬み切った」

今は傷一つない白い喉に、ティアは指先でわずかに触れる。

「その直後だ。母が姿を現したのは……母のもとにも、多くの魔獣が送り込まれていた。村の主立った術師のすべてが狙われたんだ。夜も明けきらぬ早朝のこと——ほとんどの者はろくな抵抗もできずに命を落としたけど、母はなんとか魔獣を倒して家を出て……村になにが起こっているのかを知った」

だが、その時にはもうすでに手遅れに近かった。

村人たちはあらかた殺し尽くされたあとで、かろうじて抵抗を続けている者たちのもとへと急ごうにも、おびただしい数の魔獣が進路をさえぎった。

魔獣を倒しながら懸命に生存者を探し——村の広場まで来たところで倒れているティアと、獅子の姿をした魔獣とを見つけたのだ。

「もともと、デモルアードの狙いは母だった——襲ってきたデモルアードを倒したあと、母はまず私を蘇生させようとした。でも遅すぎた……私の身体は、もう完全に生命活動を停止していたんだ。そこで母は禁断の術——死者を生者として生き返らせる、復活の術を使った」

ヴァーゲの瞳が、奇妙な光り方をしたのはその時だった。

それに気づかないように——あるいは気づかないふりをしてか、ティアは表情を変えることなく淡々と続けた。

「むろん、普通だったら成功の確率はなきに等しい。なんの準備もしていないのだから——だから母は、私の魂を定着させるための器として ラゼール を使った。そして私の肉体を構成している情

報の大半を破棄して、必要最小限のものだけを残した。そうやってできる限り成功の確率を高め――術を行ったんだ」

「……うるわしい母性愛だな」

ヴァーゲの言葉はそっけなかったが、その奥には皮肉めいた響きが混じっていた。

「娘のためであれば、禁断の術も使うということか」

「――母も、瀕死の重傷を負っていたんだ」
呟くような声で、ティアは告げた。

「母には二つの選択肢しかなかった。自分を助けるか、それとも私を助けるか――前者のほうがはるかに簡単だった。母は優れた死霊術師だったし、魔力を増幅する ラゼール も手元にあった。しかし――母が選んだのは私を助けることだった」

薄紫の瞳が、異様なまでに静かな光をたたえてヴァーゲを映し出す。

「母がその選択をしたのは、一つはモンドステインの血を絶やさないため――若い私を残したほうが、確実に血が残ると思ったからだ。そしてもう一つは――やはり肉親としての情だったんだろうな」
ため息とも苦笑ともつかない息を吐いて、ティアは言葉を続けた。

「術は成功し、私は赤ん坊の姿で生き返った――そして母は従えていた使役の一体に私を託して、できる限り村から遠くに運ばせた。村を襲撃した犯人に私が見つからないように……あんな派手な襲撃を行った以上、赤ん坊だつて見逃しはしなかっただろうし、万が一私の体内に ラゼール があることが知られたら、その結果は――火を見るよりも明らかだったろう」

すでに、百人を越える数の村人を虐殺しているのだ。たとえ相手が赤子であろうとも、目的のものを手に入れるためなら平気でその身体を引き裂くはずだった。

「私を少しでも遠くへ逃がすために——母は執念だけで数時間、生き続けた。そしてその間に、最後の力をかき集めてもう一つの術を行った。自分が死んだあと、その魂が誰にも利用されることがないように——自分の死と同時に、その魂を封印することにしたんだ。それが、母の魂が誰の反魂にも応じなかった理由だ」

手にした杖へと、ティアはわずかに視線を落として言った。

「そして同時に、私がこうして詳しい事情を知っている理由でもある——母は自分の魂を手元にあつたこの杖に封じたんだ。私がこの杖を手にして、反魂を行った時にのみ封印が解けるようにした上で」

「……では、お前は」

「ああ」

微笑みを浮かべてティアはヴァーゲを見やったが、その瞳には鋭い輝きが宿っていた。

「私には最初から ラゼール がどこにあるかも、なぜ自分がこんな身体になったのかということもわかっていた。エルフォンベインが私の手に、無用と判断したこの杖を戻してくれたおかげでな」

「……………」

「それを隠して ラゼール を探し続けたのは、襲撃を行った犯人を見つけ出すため——最初から個人ではなく、いずれかの一族が関わっていると思っていた。母もそれを案じていたからな。どんな強大な力の持ち主であろうとも、あれほどの魔獣を率いて襲撃を行うのはまず不可能だろう、と——そういう意味では、エルフォンベインの一族も決して容疑から外れてはいなかった」

できれば疑いたくはなかったがな、と淡く紅を引いたような唇が複雑な微笑をたたえて言った。

「だが、最も疑わしいのがエルフォンベインの一族であることも確かだった。だから私は ラゼール と襲撃犯を探し出すという名目で、エルフォンベインのもとを抜け出してはそれぞれの一族の動向を探っていたんだ……モルト叔父上の動向が怪しいことに気づいたのは、最近のことだ。まさか、あなたが裏にいたとは思わなかったけど……モルト叔父上がラクシアの魔獣の件を持ちだしてきた時、私は危険を承知であえて乗ってみた。もしも叔父上が無関係ならそれで良し、無関係ではなかったら——すべての決着をつける好機となると思ってた」

ティアが話している間も、ガットと魔獣の戦いは続いていた。

接近しようとする魔獣たちをガットは爪と牙とで牽制し、鋭い動きで襲いかかってくるものは長い尾を鞭のようにしならせて容赦なく弾き飛ばす。

ふさふさとした尾にどれほどの力が潜んでいるのか——弾き飛ばされた魔物の身体は、無惨にひしゃげているものが多かった。

一方、そう離れていない場所では剣を打ち合う鋭い音も聞こえて

いた。

イリスの無事を気づかう思いが、ちらりとティアの胸によぎったが彼女はヴァーゲから視線を外すことをしなかった。

今はかろうじて均衡状態を保っているが、ヴァーゲとの間に張り渡された緊張の糸は、いつ切れてもおかしくない危険を秘めたものだった。一瞬でも目を離せば、その瞬間にも薄く張った氷のようにこの均衡状態は破られることだろう。

「あなたがたは私を罠にかけたつもりだったかもしれない——だが実際は、あなたがたが私の仕掛けた罠にかかったんだ」

「……たいした自信だが」

ヴァーゲの声からは、もはやなんの感情もうかがい取ることとはできなかった。

「それは、いささか過信に過ぎるのではないか？ その姿であれば、決して負けることはないとも思っているのか？ お前の実力は私が最もよく知っている—— ラゼール を持っていようと、純粋な技量だけでは私に敵うまい」

「そう思うか？」

挑発するように、ティアは可愛らしく首をかしげてみせた。

「だったら—— やってみるといい」

その言葉が終わるのを待たず、ヴァーゲは影が滑るような動きでティアに接近し、その首へと手にした刃を叩きつける。

素人目には、銀光が走ったとしか見えない一撃だった。

しかし、その一撃が目標をとらえることはなかった。空気を裂く手応えで、ヴァーゲは空振りに終わったことを悟る。同時に彼は、刃の軌道を変えて縦に振り下ろした。身体を低くして初太刀をかわしたティアの脳天へと刃が迫る。

ティアはわずかに身を反らして、その一撃をもかわした。逃れきれずに刃にかかったのは、赤金色の髪の一房だけだった。

断ち切られた髪が、ほのかな灯りを受けて宙で輝く。

それに気を取られたのは、一瞬にも満たぬ間のことだった。だがヴァーゲが次の一撃を繰り出すよりも早く、その膝裏に強い衝撃があった。

背後に回り込んだティアの蹴りを受けたのだと気づいたのは、大きく体勢を崩して倒れ込んだそのあとのことだった。仰向けに倒れながら、ヴァーゲはティアが手にした大鎌を高く振りかぶるのを目にした。

振り下ろされた大鎌の刃は、倒れたヴァーゲの胸の中央を正確に刺し貫いた。

「……っ！」

感じたのは痛みではなく、全身の力が吸い出されていくような虚脱感だった。

倒れたまま身動き一つしないヴァーゲを、ティアは冷たい瞳で見下ろした。

「叔父上——あなたが知ってる私の實力は、七年前までの私の實力だろう？」

急速に闇に没していくヴァーゲの意識に、その声だけがいやに明瞭に響いた。

「私の今の外見は、確かに七年前のものだが——中身まであの時のままだと思っただのか？ 私は立つて歩けるようになったら、すぐに鍛錬を始めたぞ。一日でも早くもとの身体に近づけるように——私が過ごした七年間は、それまでの七年間とはまるで質が違っただ」

ヴァーゲの唇がわずかに動いたが、どんな言葉も口にすることはできなかった。

「ラゼール から得たこの術を、自在に使えるまで何年もかかった——それからはこの身体でもくり返し鍛錬を行った。いざという時、この身体を十分に使いこなせないんじゃない意味がないからな」

そこまで淡々と告げたティアの声が、がらりとその質を変える。鋼の芯を通したような声音は、断罪の響きをともしなうものだった。

「あなたは自ら犯した罪を償わなければならない。その身をもつて」

大鎌を引くと、ヴァーゲの身体はずるりと力なく石の床に横たわる。

意識はすでになかったが、その身体には傷一つついていなかった。ティアが術によって作り出した大鎌の刃は、肉体に影響を与えず精神だけを傷つけるものだった。

引き抜かれるのと同時に、大鎌の刃は吹き消される炎のように揺らいで消えた。

「あなたを殺しはしない。あなたには犯した罪の重さを知ってもら

わなくてはならない。死霊術師としての能力のすべてと、五感とを奪わせてもらおう。永劫の闇の中で、自分が奪った人生の重さを知るがいい」

大鎌からただの杖に戻ったそれを低くかけて、ティアは素早く宙に呪文を描く。

同時に、呟くように口にした真音が彼女の周囲に、幾層にも重なる輪のように呪文を浮かび上がらせた。

それらはティアと、その前に横たわるヴァーゲとを囲むように増えていく。

やがてティアは呪文を描く手を止め、その手をヴァーゲの額へと伸ばした。うつすらと輝く紋様がその手の甲に現れていたが、ヴァーゲがそれを目にすることはなかった。今も——これからも、永遠に。

ティアが無造作にその手をヴァーゲの額に押しつけるのと同時に、びくりと彼の身体が跳ねた。それで終わりだった。

びくりとも動かなくなったヴァーゲの身体の横に、ティアは力なく膝をついた。

うつむいたその顔にはどんな感情も現れてはいなかったが、きつく噛みしめられた唇が彼女の内心を物語っていた。

（——いいんだ、これで）

自らに言い聞かせるように、ティアは心の中で呟く。

その心を占めていたのは、七年前の凄惨な光景だった。無惨な姿で横たわっているのは日頃親しく言葉をかわしていた人々――

ヴァーゲが彼らにしたことを思えば、何度殺しても飽きたらぬくらいだった。

だが、そうすればこれは復讐に――私刑になってしまふ。たとえ誰に責められなかったとしても、ティア自身の誇りがそれを許さなかった。

おそらく彼らも、ティアの選択を支持してくれるはずだと――そう信じたかった。

そこまで考えたところで、ティアは静かに顔を上げた。今やらなければならぬことは他にいくらかもある。

瞳に浮かんでいた不安定な光が、その瞬間拭つたように消えた。立ち上がったティアが真っ先に足を向けたのは、依然として戦いを続けているイリスとイアンの兄妹のもとだった。

「……っ！」

イアンの攻撃を受け止めきれず、イリスは膝から倒れ込んだ。その全身は、すでに傷まみれだった。一度でも膝をつけば、もう立ち上がることはできないくらいに彼女の身体は力を失っていた。

それでも剣を捨てようとしないうリスを、イアンは冷たい瞳で見下ろした。

苛立ちと怒りが、その眼差しには含まれていた。イリスはなにかを訴えようとするかのように口を開きかけたが、どんな言葉も口にすることはできなかった。

なにを言っても、今の兄には届かないだろうことが想像できたためだった。

（イアン……兄様）

ただ心の中だけで、呼びかけるのが精一杯だった。
本気で斬りかかられていることがわかって、兄に殺意を向けることはイリスにはできなかった。

ただ、自分の身を守るために——そしてティアを兄の手にかけさせないために剣を振るい続けているだけだ。

しかし、その気力ももはや尽き果てようとしていた。

剣を持ち上げる力もないイリスに向かって、イアンは剣を振り下ろしかけ——その手が凍りついたように止まった。

驚愕に見開かれた目に、映し出されていたのはイリスの後ろに立つ一人の女性。

歡喜の色が、その瞳の表情に加わった——次の瞬間、彼は背後から強烈な衝撃を受けてその場に倒れた。

目の前に立つ、漆黒の獣をやや呆然と見つめてから、イリスは喜色を浮かべて背後へと目をやった。

「ティア姉——！」

その言葉が不自然に途切れたのは、そこに立つ女性の姿を見たためだった。

癖のない赤金色の髪は、まぎれもなくイリスがよく知る人物のものだ。整った造作も、すらりとした立ち姿もよく目になじんだものだった——少なくとも七年前までは。

だが、それはこの場に存在するはずのない人物の姿だった。

困惑しきりのイリスに向かって、その女性は手を差し伸べてきた。その手が肩に触れた瞬間、身体中の痛みが消えたことにイリスは気づいた。

同時に、信じられない思いでイリスはその名を口にする。

「……ティア姉様？」

「間に合ってよかった」

自分とそう変わらない年齢に見えるその女性が、ほっとしたように相好を崩すのをイリスはやや呆然と見つめた。

「姉様……その姿は？」

言ってから、イリスははっと周囲に視線を巡らせる。

「ヴァーゲ様は……！？」

「大丈夫——終わったよ」

静かに微笑んで告げ、ティアは空中に指を滑らせた。

描かれた呪文は即座に効力を発揮し、イリスの全身の傷が跡形もなく消える。

「……姉様？」

「ヴァーゲだったら、あつちに転がってる。死んだわけじゃないけど、もう自分では動けない。ああ、この身体は戦うのに不利だったんで、ちよつと術を使って大きくしたんだ。そんなに長くは保たないんだがな……そんなことより」

イリスに向ける視線を、ティアはわずかに厳しいものにした。

「こんなに傷だらけになるまで、無理をするもんじゃない。女の子なんだからお前は——痕が残ったりしたらどうする気だ？」

「姉様だって、女の子です」

驚きから覚め、イリスの口ぶりがいかにも不本意そうなものとなった。

「それに無理なんて言葉は、他に誰に言われても姉様にだけは言われたくありません！ 本当にもう……心配したんですから」

「……わかってる」

イリスの声に涙が混じるのを感じて、ティアはあつさりと引き下がった。

低い声でごめんと伝えてから、彼女はイリスに手を貸して立ち上

がらせた。すでに傷は完治しており、手を借りる必要はなかったがイリスはティアの厚意を素直に受ける。

立ち上がりながら、イリスは倒れたままの兄の姿へと複雑な視線を向けた。

「ああ——死んではない」

イリスの視線に気づき、ティアはあっさり言い放った。

「一応、手加減はさせておいたからな。気絶しているだけだ——こいつには、まだ聞かなきゃならないこともあるし」

「……よかった」

ほつとしたように眩き、イリスは胸に手を当てた。

それを尻目に、ティアはアインの着ているものを使って、手早く彼の身体を縛り上げていった。最後の仕上げに猿ぐつわを噛ませ、ようやく顔を上げたティアへとイリスはやや不思議そうな口調で言葉を投稿えやった。

「ティア……様、あの……」

「呼びにくいなら、姉様でもティアでも別にかまわん。どうした？」
「いえ……あの、本当なら姉様は今二十五歳なんですよね？ それに比べると、ずいぶんお若いように見えるんですけど……」

「ああ」

ちらりと自分の身体を見下ろして、ティアは苦笑めいた笑みを浮かべた。

「別に本来の年齢に戻しているわけじゃないんだ。肉体に流れる時間を強制的に進ませているだけだから——十七年進ませるよりも、十年進ませるほうが楽だからな。それに十八歳までの身体なら、一

度実際に使っていた分慣れるのも早いだろうと思っただし」

「そういう……ものなんですか？」

「そういうもんなんだ」

なおも首をかしげているイリスに、ティアはそう言って強引に話をまとめ上げた。

「それより、急いで階下に向かわないと——落とし穴に落っこちた間抜けな連中がいるんだがな。無事でいるなら、とつくに帰ってきていてもおかしくない頃合いだ」

「それは……」

「無事でないのか、あるいは妨害されているか、だな」

ティアの瞳が、切りつけるように鋭い光を帯びる。

「そう簡単にやられるような連中じゃない。だが、万が一のことがないとも限らない——少なくとも片方は生身の人間だからな」

それに、と呟くような声で彼女は続けた。

「……本当に危ないのは、あの二人じゃなく……」

その先は不明瞭に途切れ、イリスの耳には入ることがなかった。

ティアはイリスに目をやると、ほんの少しだけ表情をゆるめて言った。

「とにかく、急ごう。なにもなかったとしても、自力で戻ってきた連中になにをぐずぐずしていたなんて言われたら腹が立つからな。

レイトなんか絶対に言うぞ——」助けに来るのが遅すぎる」ってな」

冗談めかして笑い、ティアはイリスに背を向ける。

その顔に浮かぶ表情は、今しがた浮かべた笑顔が嘘のように厳しかった。どこか思い詰めたような眼差しで、ティアは走り出しかけ――いきなりその足を止めた。

続いて走り出そうとしていたイリスがその背にぶつかりかけ、慌てて立ち止まる。

「ティア――姉様？」

不審げに呼びかけるイリスの声も、聞こえないかのようだった。

大きな目をいっぱいに見開いて、ティアは宙を睨みつけていた。その表情は呆然としているようでもあり、どこか怯えているようでもあった。

まとう空気のアマリの異様さに、イリスも続く言葉をかけることができない。

「……まさか」

一言、呟いた声は強い否定の響きを帯びていた。

そうであつて欲しいという願いを、知らず口に出してしまったものだとわかった。紙のような顔色で、ティアは無意識のうちに同じ一言をくり返していた。

「まさか、そんな……」

言葉もなく、ファルケはその光景を見つめやった。

地下にある部屋の一角で、まさに今一つの戦闘に決着がついたところだった。熊に似た巨大な魔獣と、その足の下に横たわる一体の――首のない死体との。

「……っ！」

自分も傷を負っていることを忘れて、ファルケは声にならぬ声をあげる。

彼の周囲も数体の魔獣と、それを操る死霊術師に囲まれていたが、今この瞬間それらは彼の目に入ってはいなかった。

魔獣の足の下で、無惨に押し潰されたレイトの頭部――

ファルケの目に映し出されているものは、ただそれだけだった。

レイトの身体が本調子でないことは、最初からわかっていた。常人なら即死していてもおかしくない重傷を負っていたのだ。できる限り回復させはしたが、普通の人間に比べて治療術の効き目は弱く、ゆっくり術をかけている時間もなかった。

その状態で、彼は襲いかかってきた魔獣の半分を引き受けていたのである。

「……ようやく、一人片付いたか」

満足そうな声音で、モルトが呟いた。

その目に浮かんだ酷薄な光は、彼の息子の瞳にのぞいていたものとよく似ていた。彼は無造作に首を振って、残ったファルケも片づけるよう仲間に指示を出す。

多少腕は立つようだが、神官一人片づけるのにさほどの時間はかからないだろうと思われた。どのみち、彼の武器は魔獣にはなんの打撃も与えられないのだ。

それよりも、ヴァーゲとイアンが首尾よく ラゼール のありかを聞き出せたのか彼は気になっていた。それができなければ、この計画はまったく意味をなさないものとなってしまふ。

（ヴァーゲがいれば……おそらく心配はないだろうが）

モルトの口元に、淡い笑みが浮かぶ。彼の脳裏には、すでに ラゼール を手に入れたあとの計画が描かれていた。

その時、彼の視界の片隅でぴくりと動いたものがあつた。

無意識に目をやってから、彼は目の錯覚に違いないと心中で断じた。そこにあつたのは首を失ったレイトの身体だけだったためだ。すぐに視線を戻そうとして——その動きが凍りついたように半ばで止まった。

その目に映つたのは、とても信じられないような光景だった。完全に頭を叩き潰されたはずのレイトの身体が、何事もなかったかのようにむくりと起きあがったのだ。

「……なんだと？」

モルトの驚愕は、すぐに他の術師たちにも伝わった。

周囲の魔獣に対して、防戦の構えを固めていたファルケも同様だった。彼は愕然と目を見開いて、レイトであつたものを見つめる。

「そんな……馬鹿な」

呻くような声が、誰のものであつたのかはわからない。

しかし、その思いは誰もが共有するものであつた。彼らは自らの操る使役がどのようなものかよく知っている。たとえ不死に等しい魔獣であろうとも、生命活動の中枢たる脳を破壊されてはすぐには動けない。

時を止めたような静寂の中で、ゆっくりとそれは立ち上がる。

それを見ていた術師の一人が、恐怖に抗いきれなくなったように魔獣に命を下したのはその時だった。

「タオン！」

蛇に似た魔獣が、一抱えもありそうな胴をレイトの身体に巻き付かせる。

全身の骨という骨を砕くのに、一瞬もかからないはずだった。しかしそれよりも早く、レイトの手が魔獣の頭をつかんだ。

さほど力を入れたようにも見えないつかみ方だったが、それだけで魔獣はぴたりと動かなくなった。

「どうした、さつさと絞め殺せ！」

主の声にも、まったく反応する気配を見せない。

言葉を吞んでそれを見守る人々の眼前で、レイトの身体に変化が起こった。

形骸を留めぬほどに無惨に破壊されていた頭部が、またたく間に骨格から再生される。頸部から形成された骨の上に、血管と神経が広がり筋肉の層が上からそれらを覆う。

皮膚と頭髮が再生したあと、そこにあったのは完全に元通りのレイトの姿だった。

だが、その瞳に見慣れない光があることにファルケは気づいていた。

「……ふん」

レイトは自分を取り囲んだ長衣姿の集団をぐるりと眺め回すと、口元に笑みを浮かべて手にした魔獣の頭に目をやった。

その視線が、傷を負ってうずくまるファルケの上に留まることは一度もなかった。

先程から感じていた違和感がいつそう強くなるのを感じながら、ファルケはそこに立つ男の顔を穴が開くほどに見つめた。

「お前のか、これは？」

レイトは集まる視線をものともせず、手につかんだ魔獣の主のほうへと視線をやった。

中年の術師がひつと声を呑みこむ。相手の答えを待とうとはせず、レイトは人なつこい笑みを浮かべて言った。

「だったら、返すぞ——ほら」

その声が響くのと同時に、レイトの身体に巻き付いた魔獣がすりりとほどけて、目にも留まらぬ速さでその主へと襲いかかる。

胴体の倍ほどまでにも開かれた口の中に、術者の上半身が呑み込まれた。

「……………！」

くぐもった悲鳴は、魔獣の身体の外までは届かない。

かろうじて残った下半身がじたと抵抗するが、魔獣の力には抗いきれるはずもなかった。必死の抵抗も虚しく、ずるずると魔獣の腹の中に引きずりこまれていく。そこだけ膨らんだ腹がしばらく不気味に波打っていたが、すぐにその動きもおさまった。

それがなにを意味しているのか——居並ぶ術師たちには考えるまでもないことだった。

蒼白な顔の彼らを見回して、レイトは愉快そうに言った。

「ああ、そっぴゃこいつらには食事の必要はないんだったな。不味いものを食わせて悪かった——適当なところで吐き出していいぞ」

親しげに魔獣に声をかけるレイトを、術師たちは恐怖と敵意の入

り混ざった眼差しで見つめやった。

ファルケも、その表情に嫌悪の色のぞくのを抑えきれなかった。いくら自分を害そうとした相手とはいえ、魔獣に食らわせるというのはあまりにも悪趣味に過ぎる。

（——いや、そんなことより）

衝撃的な光景に気を取られて、忘れかけていた問題があった。

（どうして、レイトが魔獣を……？ そんな能力があいつにあったのか？）

混乱するファルケの前で、レイトは周囲の魔獣を興味深そうな顔つきで見やっていた。

「面白いものを使っているな、お前ら」

闇よりも深い紫色の瞳には、子供のような好奇心の輝きが宿っていた。しかしそれは、子供特有の残虐さを併せ持つ瞳でもあった。

「魔獣を使うのが流行っているのか？ まあ確かに、目の付けどころとしては悪くない。頑丈だし、特殊な能力を持っている奴も多いからな。そこの獣や人間を使役にするよりずっと使い出がある…

…けど、お前ら」

その口元に、くつきりと笑みが刻まれる。

「大事なことを一つ、忘れてやしないか？ 魔獣ってのは『死なない』存在だぜ。活動を停止してりやあ死んだように見えるし、そういった状態の魔獣を『よみがえらせて』使役しているつもりなんだろうが……その状態が純然たる『死』でない以上、その対象を縛る契約のくびきは極めて——弱い」

その言葉が終わらないうちに、部屋のあちこちで悲鳴があがった。

支配しているはずの魔獣に、牙をむかれた術師たちがあげた悲鳴だった。彼らの大半はろくな抵抗もできずに、その牙や爪の餌食となった。中には巨大な魔獣の下敷きとなってひしゃげた肉塊と化した者もいた。

かろうじて剣を抜いた者や、攻撃の呪文を描きかけた者もいたが、彼らの抵抗も数分と保たなかった。

ある者は魔獣の全身から放たれた鋭い針で串刺しにされ、またある者は魔獣のまとった高温の炎によって骨も残らないほどに燃やし尽くされた。

悲鳴の響き渡る室内から、モルトは必死の形相で逃げ出そうとしていた。

さいわい、レイトの注意は彼に向けられていなかった。やっとの思いで部屋の入り口にたどり着き、扉に手をかけようとしたところで――彼は初めて異変に気づいた。

扉に伸ばした自分の手と、扉との間を薄い半透明の膜が隔てていたのである。

いぶかしげな表情が、恐怖の色をまとったものへと変わるのに時間はいかからなかった。自分を包み込んだ皮膜状の魔獣の名を、彼は知っていた。

「やめろ、ドーナ！」

悲鳴じみた声は、骨と肉とが押し潰される音によって消された。ねじれた柱のようになった魔獣の内側は、鮮やかな朱の色に染ま

っていた。あまりにも無惨なその光景から、ファルケは思わず目を背けた。

それを平然と眺め続けているのは、レイト一人きりだった。明らかに楽しんでいることがわかる瞳の色だった。うつすらと笑みを浮かべた顔が目に入るのと同時に、ファルケはわけもなくかつとなつて声をあげた。

「お前——レイト！」

その声で、初めて気づいたようにレイトはファルケを見やる。

驚きと興味を宿したその瞳は、まるで見知らぬ他人に対して向けられているとしか思えないものだった。

思わずファルケは言葉を呑み、その一方でレイトは面白がるような笑みを見せた。

「なんだ、お前……見たところ死霊術師ではないようだが？」

じろじろとファルケの全身を眺め回して、レイトはごく軽く首をかしげる。

「この連中に殺されかけていたみたいだが、礼の言葉もなしにいきなり呼び捨てとは……ずいぶんな振る舞いだな」

「……お前、は」

こわばった舌で、ファルケは懸命に言葉を紡いだ。

「お前は……いったい、何者だ？」

その問いに、レイトは浮かべていた笑みをすっと消した。

奇妙な風格さえ漂わせるその姿は、間違いなく『レイト』とは別人のものだった。底の見えない深い紫の瞳でファルケを見返すと、彼はむしろ穏やかといっていい口調で言葉を返した。

「俺の名を知っている奴が、どうしてそれを聞く？ 妙な奴だな、お前は」

そう言つて男は目を細めたが、その笑みが親愛を表すものでないことは明らかだった。つい先刻、この男が楽しげに笑いながら幾人もの人間を虐殺するところをファルケは目にしたばかりである。

「俺の名はレイト。だが、その名で呼ぶ奴はあまり多くはない。もう一つの名のほうが、すっかり通りが良くなってしまったからな。もう一つの俺の名は、レキシア・コルムスという——死霊術師ではないようだが、お前、この名に聞き覚えはないか？」

その言葉を聞き終えぬうちに、ファルケは顔面が蒼白になるのを感じていた。

むろん、その名に聞き覚えがあつたためだ——聞き覚えがあるなどという段階の話ではなかった。

（レキシア・コルムス……！）

それははるかな昔、古代の神殿から知識の宝珠を持ち出したとされる人物の名だ。

現在まで残る死霊術の基礎を作った人物であるのと同時に、自ら得た力に酔つて無数の罪のない人々を虐殺したとも言われている。

（まさか、この男が——）

信じられない思いで、ファルケは目の前の男の姿を見つめる。

その言葉だけでは、とうてい信じられなかった。しかし男の行動を――魔獣をたやすく支配してのけたその技を見れば、信じざるを得なかった。

同時にファルケの胸に、戦慄めいた思いが湧き上がってきた。

（――ティアは、知っていたのか？）

氷の塊を、胸に押しつけられたような思いだった。

（適当に掘り出した死体が、たまたまレキシア・コルムスのものだった――そんな偶然があるのか？ 最初からそうと知っていて……しかし、だったらなんのために！？）

不審と恐怖がファルケの胸の中で渦巻いていたが、ゆつくりと考えに沈んでいる時間はなかった。

魔獣を従えて、男がゆつくりと歩み寄ってくるのが見えたのである。

無意識のうちに後ずさりしそうになるのをこらえ、ファルケは男の顔を見上げた。その顔に抑えきれない恐怖の色が現れているのを見て取って、レイトの姿をした男はくすりと笑みを洩らした。

「俺のことは知っているようだな。それじゃ今度は、お前のことを聞かせてもらおうか？ お前と、お前の知っていることのすべてを――どうやら俺が死んでから、相当の年月が過ぎているみたいだからな」

わずかに腰を屈めて、男はファルケの顔をのぞきこむようにする。近い距離から紫の瞳に見据えられて、ファルケは身動き一つでき

なくなった。その瞳の放つ威圧感はもちろんのこと、周囲に迫ってきた魔獣の気配が彼の自由を奪う。

「俺はあまり気が長くない。質問にはできる限り素直に答えてくれないか——でないと、その頭を叩き割って、尋ねたことにすらすら答える正直な下僕に作り替えてやりたくなるからな」

親しげな笑顔で、口にするにはあまりにも落差のある台詞だった。しかしまぎれもなく本気であることを感じ取って、ファルケは凛然と男の顔を見返す。それは、まともな人間の思考ではなかった。人を人としてみていないその考え方が、男にとってはごく当然であるようだった。

「じゃあ、まず最初の質問だ——お前の名は？」
投げられた問いに、ファルケは瞬時答えるのをためらった。

死霊術師が、相手の名前を用いて術を行うことを知っていたためだ。ここで名を明かすことは、相手の手のひらに自分の命を載せることに等しい。

だが、その一瞬がレキシアには不服だったらしい。

「——っ！」

首の後ろに鋭い痛みを感じて、ファルケは思わず声をあげそうになった。

顔をしかめるファルケを、レキシアは薄く微笑んだまま眺めていた。相手の苦痛を気にかけるどころか、むしろ楽しんででもいるか

のようなその表情を見て、ファルケは先程の言葉を実行するのに彼がいささかのためらいも見せないだろうことを確信した。

「……私は」

恐怖と危機感がファルケの口を開かせる。

名を明かすことに抵抗はあったが、すでに他の選択肢はなかった。

「ファ——」

「——答える必要はないぞ！」

室内に凜と響いた女性の声が、ファルケの言葉を半ばで断ち切った。

思わず、ファルケは傷の痛みも忘れて声の主へと目をやった。その口調にも、声の性質にも心当たりはあった。しかし——明らかに別人の声であることもわかった。

それは幼い少女の声ではなく、十分に成長した女性のものだったのだから。

「——ティ」

呟きかけたその言葉が、口の中に消える。

予想通り、そこにいたのは別人としか思えない人物だった。沈みかけた太陽のような赤金色の髪も、星のような輝きを宿した薄紫の瞳もまるで変わらず——しかし、その年齢は十代も後半のものだった。

困惑した顔つきで、ファルケはその女性の姿を見つめる。

その視線に応えるように、女性は珊瑚色の唇に艶やかな笑みを浮かべた。

10 - 4 死霊術師の王（後書き）

ついにラスボス登場です。これがやりたくて書いた……！

11-1 悪夢のはじまり（前書き）

「残酷な描写あり」をつけてあるので一応心配はないと思いますが、死体などの描写が入りますので、苦手な方はお気をつけ下さい。

11-1 悪夢のはじまり

開いた扉の前に立って、ティアは恐れげもなく室内を見つめやった。

その目に映っていたのは、床に座り込んだまま動けないファルケと、その前に涼しげな顔で立っているレイト——レキシアの姿のみだ。

室内の惨状も彼女の目には入っていたが、それに対して彼女は眉一つ動かそうとはしなかった。

毅然と立つティアの横から、室内に目をやったイリスが吐き気をこらえるような表情を見せたが、くぐもった呻き声をあげたのみで悲鳴は洩らさなかった。

だが、入り口のすぐ前に転がるものを目にした瞬間、こらえきれないように彼女はかすかな悲鳴をあげた。

それが、原形もわからぬほどに押し潰された人体であることに気づいたためである。

「——っ！」

蒼白な顔で目を背けようとして、イリスは肉片の中からのぞく金屬の塊に気がついた。それが死霊術師の持つ杖だとわかったのは、

全体に彫り込まれた特徴的な紋様を目にした瞬間だった。

同時に杖の持ち主の正体を悟り、イリスは今度こそ悲鳴じみた声をあげた。

「お父様——っ!？」

くらりと意識が遠のきかけたが、ここまで同行したのはティアの足を引っ張るためではないと自らを叱咤し、イリスは懸命に意識をつなぎ止めた。

ティアはそんな様子に気づいてはいたものの、声をかけるほどの余裕は持たなかった。

目の前の相手——気負う様子もなく、ごく自然な立ち姿でこちらを見返している男に意識を集中するだけで精一杯だったのである。

「そこまでしておけ、レイト——いいや、ディレイト・レキシア・コルムス」

静かに告げて、ティアは血まみれの室内へ足を一歩踏み入れる。

レキシアは不快そうに眉を上げて、その姿を眺めやった。なにかを思い出そうとするような光が、その瞳の奥底でちらりと揺れた。

「それ以上の殺戮は私が許さない。あなたにならわかるだろう——あなたの身体は、私の支配下にある。不本意だろうがここは従ってもらう」

「……嫌な色の髪だな」

細めた瞳に剣呑な色を宿して、レキシアが口を開いた。

「そんな色の髪を持つ女を一人、知っている……味方面をして俺を裏切った女だ。お前、あの女の血族か？ 髪の色も顔つきも、喋り方までなんとなく似ていやがる」

「私の名は、ティア・レーヴェ・モンドステイン」

男の顔から目を離すことなく、淡々とした口調でティアは告げた。
「あなたの言う女性の姓がモンドステインであるなら、間違いなく私の先祖の一人だろう。そんな話を耳にした覚えもある——確か名前はフレア。モンドステイン一族の開祖にして、レキシア・コルムスの妻だった女性だ」

「ああ」

レキシアの視線が、刃物の鋭さを宿した。

「確か、そんな名前だったな。やたらと堅い性格で、口説くのにには苦労したもんだ」

応えずに、ティアは手にした剣を構えた。

実用的な造りの剣は、イアンの手からそのまま失敬してきたものだ。よくある大量生産の品だったが、この際武器として役に立てばそれで十分だった。

ティアの構えを見て、レキシアは唇に薄い笑みを含ませた。

「俺とやり合うつもりか？ どうやら、それなりには使えるらしいが……だったらなおのこと、自分がいかに無謀な真似をしているかわかりそうなもんだが」

「仕方ない」

いっそ朗らかなほどの口調で、あっさりとティアは認めた。

「他に方法はないのだからな。できれば大人しく従ってもらいたい

ところだが——正直、荒っぽいことはあまり得意ではないのだな」

「お前が、か？」

目を丸くしたのちに、レキシアは軽く吹き出した。

「この部屋を見ても、顔色一つ変えない女がなにを言う。なかなか冗談が上手いじゃないか。そこだけは、あの女とは大違いだ」

「比較対象を知らんから、なんとも言えんのだが——まあ、冗談と理解してくれたようであった」

くすりと笑みを洩らして、ティアはこともなげに続ける。

「だが、大人しく従って欲しいという部分は冗談じゃない。あらためて尋ねるが——私の言うことを、素直に聞くつもりはないか？」

「……お前の？」

薄く微笑んだまま、レキシアは笑みの質を変えた。

ひやりとするような鋭さを感じさせる笑みは、つい先程見せた表情以上に物騒な気配をまとっていた。

「俺の名を知っているなら、俺が生涯一度も主と呼べる人間を持たなかったことも知っているよな？」

「ああ。知っている」

ティアは動じた様子もなく、静かな声音で答えた。

「レキシア・コルムスを手に入れようとした権力者は多かったが、一人としてその目的を果たした者はいない。力づくや、卑劣な策を用いた者も中にはいたが——そういう連中は皆、相応の返礼を受けたいらしい」

本人を目の前にしていながら、ティアの言葉はその場にいない人

物について語っているようだった。

その本意を探ろうとするように、わずかに目を細めてレキシアはティアを見る。

「だが、私は私の責任に置いてお前を自由にするわけにはいかない。素直に従うつもりがないと言うのなら、仕方がない——この手で消滅させる」

「できるのか、お前に？」

レキシアの言葉は、ごく自然な自信にあふれて響いた。

その口調は優しげといってもよかったが、まとう気配は身も凍るほど冷たかった。

「確かに、お前からはかなりの魔力を感じる——妙な気配があるな。その身体の中に——ラゼールがあるのか。完全に肉体と同化しているようだ……それが自信の源か？　しかし、そんなもので俺をどうにかできると思っているなら、少しばかり考えが甘い——ぞ！」

最後の一語を放つと同時に、レキシアの姿がティアの視界から消えた。

顔の前に剣をかざしたのは、半ば反射的な行動だった。しかしそれによって、ティアの首は胴体から離れることを免れた。

消えたかと思うほどの速度で、レキシアが足元の剣を拾い上げて斬りつけてきたのだと理解したのはその時だった。あまりの衝撃に剣を取り落としそうになったものの、かろうじて攻撃だけは受け流せたようだ。

自らの反射神経にひそかに感謝しながら、ティアは入れ替わるように攻撃を繰り返す。

しかしその一撃は、レキシアの衣服の端を裂くに留まった。あまりの技量の差の大きさにティアは悔しそうな表情をのぞかせたが、口に出したのはまったく別の言葉だった。

「——行け、イリス！」

その一言が放たれるよりも前に、イリスはティアの後ろから駆け出していた。

目指す場所は、ただ一つ——周囲を魔獣に囲まれ、力なくうずくまっているファルケのもとだった。

足が鈍ることを恐れたのだろう。よけいなものにはいつさい目をやらず、放たれた矢のように一直線に彼へと走り寄っていく。

動く獲物につられたように、数体の魔獣がイリスへと襲いかかったのはその時だった。

人間はむろんのこと、通常の生物にはまず不可能な動きで滑るようにイリスに接近し、無防備なその背に爪を振り下ろそうとする。

——が、白い火花がその爪を阻んだ。

まるで爆発したような衝撃を感じて、魔獣は足を止めた。同時にレキシアは、イリスが両腕でしっかりと抱え込んでいる杖の存在に気づいた。

それがうつすらと、青白い光を帯びていることにも。

光の正体が、砂粒のような文字の群れだということにも気づいて、

レキシアは感心とも苦笑ともつかぬものを瞳によぎらせた。

「霊壁か——確かにそれでは、魔獣は手出しできんな」

しかしその声は、すぐに嘲るような響きを含んだものへと変わった。

「よく考えた、と言ってやりたいところだが、もしもこの場に魔獣以外の使役が一体でもいたらどうするつもりだった？ 肉体付きの相手には霊壁は通用しないだろうが」

「叔父上方が、私を相手取るのに魔獣以外の使役など連れてくるものか」

どこか皮肉めいた口調で、ティアは明快に言い切った。

「手持ちの使役の中でも、強力な魔獣ばかり選んで連れてくるに決まってる。仮に、それ以外の相手がいたとしても——魔獣以外なら対処は難しい」

「……ほう」

レキシアの目の中に、面白がるような色がのぞいた。

悪戯を思いついた子供のよう——と例えるには、いささか暗いものの混ざる瞳だった。

「ならば——試してみるか？」

滑るように指先が、空中へと伸ばされる。

描き出された文字を見て取って、ティアは顔色を変えた。その行動を阻止せんと彼女は手にした剣を突き出したが、刃先がレキシアに届くよりも早く、間に割って入った魔獣がその身体で攻撃を受け止めた。

『虚ろなりし闇の器。我が声に応えて、いま一度命の水を満たせ（ウィーオ・ルム・ゲイト・ファデン リスミト・エリスク・フィーレ・ワンデ・ザイ・ミスエーク・カーゲル）』

独特のリズムで、歌い上げるように朗々とレキシアはその言葉を口にする。

それが終了すると、部屋の各所に倒れている死体の額に烙印めいた朱い紋様が浮かび上がるのは同時だった。

目の端でそれを見て取ったイリスが、軽く息を呑む。

ぎこちない動きで死体が起きあがったのは次の瞬間だった。人間らしさのまったく感じられない、操り人形のような動きでそれらは不器用に立ち上がる。

それでも人間としての姿を留めているものは、まだ良いほうだった。

完全に炭化して手足のついた棒杭のようになっているものや、骨も関節も砕かれた肉の塊となって、満足に動くこともできずにいるものもある。

それらの死体が自分へと近づいてくるのを見て、イリスの顔に恐怖の色が浮いた。

11-2 人ならぬもの

「……っ！」

あげかけた悲鳴を呑み込み、彼女はファルケのもとへと走った。

これでも死霊術師の端くれである。死体が動き出した程度のこと
で、いちいち悲鳴などあげてはいられない——たとえば、自分に害を
なそうとしているのが明白であつても。

今の自分には、やらなければならないことがあつた。
そのために——ティアの力になるために、危険を承知でここまで
来たのである。

イリスは死者たちにかまわず走つて、床にうずくまつたファルケ
のそばに膝をついた。神官の装束を身にまとつた見知らぬ男性は、
半ば意識を失っているように見えた。迷いもせず、イリスはその身
体に自分の身体を覆い被せた。

死者たちが間近に迫ってくるのがわかったが、彼女はそのまま動
こうとはしなかった。

「っ！」

衝撃を覚悟した、その瞬間だった。

イリスの背後で重いものがぶつかるような音がして、それきり静かになった。

無意識のうちに固く閉じていた目を開き、イリスは恐々と背後をふり返った。その目に映ったのは、黒く艶光りする獣の毛皮だった。まさしく目と鼻の先に、漆黒の獣が立っていることにイリスはその時気がついた。

赤く燃える熾火のような瞳で、ちらりとイリスを一瞥したあと獣は近づいてきた死者を前肢の一撃であっさりと跳ね飛ばす。

紙くずのように宙を舞い、床へと叩きつけられる死者からイリスは目を背けた。

頭部が半分潰れたその死者は、父の片腕と評されていた男だった。

「……なるほど。用意がいいな」

その様子を見やり、むしろ感心したような口調でレキシアは呟いた。

ティアは無言で彼へと詰め寄り、その喉元へと剣を突き入れる。無駄な動きのいっさいないその攻撃に、レキシアの反応が一瞬だけ遅れた。

素早く身を引いた彼の首筋に、くつきりと赤い線が一筋浮かんでいた。

ティアはさらに踏み込んで一撃を見舞ったが、それはレキシアの

手にした剣でたやすく弾き返された。

軽く舌打ちするティアへ、レキシアは目を細めて賞賛の色の混ざる言葉を投げた。

「たいしたもんだ。術で腕力を強化しているにしても——だったらなおのこと、その力を制御するのは並の反射神経じゃ難しいだろうに。大口を叩くだけのことはある」

「それはどうも」

平坦な声で言い返すなり、ティアは下からすくい上げるような一撃を放つ。

しかしその攻撃は見切られていたらしく、剣を使うこともなく半歩退いただけで簡単にかわされた。

逆に体勢を崩したティアへと、蛾のような巨大な羽を持つ魔獣が襲いかかる。

ティアは身体をひねって体勢を整えると、視線を動かすこともなくそれを横薙ぎに切り捨てた。

魔獣の身体が砂のように崩れ落ちるのを、彼女は見ようとしなかった。

レキシアもまた、表情一つ動かそうとしなかった。彼の目にはティアの剣にうつすらと浮かび上がる、光の紋様が映っていた。

「——史上最強の死霊術師とやり合うのに、まさかなんの準備もしてこないってわけにはいかんだろう？」

悪戯っぽい口調で、ティアはレキシアへと笑いかける。

しかしその口調とは裏腹に、まるで余裕というものが感じられな

い声だった。口元には笑みが浮かんでいるが、その瞳は切れるほど真剣な光を宿していた。

応えるように、レキシアは微笑した。

「準備は万端……か。周到なことだ——その割には、少々つかつなようだが」

その目が向けられたのは、イリスとファルケを背後に庇うように立ったガットだった。

紫の瞳に浮かんだ光を見れば、その意図は明らかだった。先程と同じように、ガットの支配権をティアから奪い取ろうというのだろう。

しかし、その目はすぐに訝しげな光をのぞかせて、ガットから離れた。

「奪えない？　だろうな——ガットは自分の意志で、私との契約を結んでいるのだから」

「なに……？」

「そのへんの魔獣みたいに、意志を奪われた状態でよみがえらされたものなら——それもはるかに格下の相手の支配にあるものなら、再支配もたやすいだろうが。あいにく私は、そういうことは嫌いなんでな」

不敵に笑ったまま、ティアは手にした剣を構え直した。

「この際、よけいな横槍はなしにしようじゃないか。その二人に手を出すことは、私が許さない——手出ししたいのなら、まず先に私を片付けることだ」

まるで世間話でもするかのような、気負うところのない声だった。

しかし瞳の光の強さと、隙なく剣を構えた姿勢がその声の響きを裏切っていた。

レキシアは感情のわからない瞳でティアを見返すと、おもむろに身体の向きを変えた。まともにティアに向き直る形となった途端、凄まじいばかりの殺気が押し寄せてくるのが感じられた。

物理的な圧迫感さえ感じ、イリスは身動きできなくなる。

直接それを向けられているわけでもない、彼女でさえそうだった。まっとうからそれを受け止めているティアが、どれほどの圧力に耐えているのかは想像もつかなかった。

しかし、ティアの唇には微笑が残ったままだった。

突き刺さるような殺気を感じていないはずはないだろう——それでも悠然と立っているその姿を、イリスは祈るような気持ちで見やっていた。

同時に腕を伸ばして、空中に呪文を描く。

自分は今ここで、自分にしかできないことをやろうと思った。その思いだけが、彼女をかるうじて支え続けていた。

小さく息を吐いて、イリスは空中の呪文に意識を集中した。

向かい合ったまま身動き一つしなかった、レキシアとティアが同時に床を蹴った。

瞬間、両者の間で刃が火花を散らせた。鋭い金属音が響き渡った時には、もう両者は飛び退って互いに距離を取っていた。

中間の動作をすべて省いたような、もはや人間同士の戦闘とは思われない光景だった。

互いを見つめる瞳は、色彩こそ異なれ同じ種類の魂を宿しているのが一目でわかった。どちらも誇り高く、決して意志を曲げず——自らの前に立ちふさがるものは、どんなものであろうと必ず打ち砕いて進む意志の主だ。

その二つの意志は、今互いを敵と見なしていた。

敵であるのなら——それは排除するのみ。機械的とさえいつていい意志が、二対の瞳に満ちている。

「——っ！」

レキシアの身体がわずかに沈んだ。それを見て取った瞬間、ティアは床を蹴って横へと身を躍らせた。

わずかに体勢を崩したその身体へ、一体の魔獣が襲いかかった。ティアは眉も動かさず、その蛇に似た魔獣を一刀のもとに斬って捨てた。しかし、その時にはもう次の魔獣がティアに迫っていた。四方から襲いかかってきた魔獣を、ティアは一瞬にも満たない時間差を利用して続けざまに叩き斬った。

だが、襲い来る魔獣の数は半分にもなっていなかった。

それでもティアの顔に、焦りや恐怖の色は浮かんでいなかった。彼女は最小限の動作で近づいてくるそれらを次々と斬り伏せていく。

腕や足が次第に重くなってくるのも感じていたが、今は目の前の戦いに集中する以外になかった。

焦りは実際の疲れ以上に、精神を疲弊させ限界の訪れを早めてしまっ

はつきりとそう認識しているわけではなかったが、無意識にティアはそれを避けるべく行動していた。

そうでなくても、不利なことは歴然としている。

いくら術で強化してあるとはいえ、女性の身体である。こうしている今も、首筋に汗の珠が浮かび、呼吸も荒くなりつつある。

さらに、いつもとは違う身体であることも大きかった。

鍛錬をくり返して意識に身体をなじませていたが、それでも手足の長さや視点の高さに違和感を感じる瞬間がある。子供の身体に、精神が慣れきってしまったているのだ。

まだ決定的な隙を生むには至っていないものの、それが積み重なっていくことでなにか起こるかはわからなかった。

（それよりも早く、この身体に慣れることができればいいんだが…）

そう考え、ティアは内心でちらりと苦笑を刻む。

この身体に慣れるほど戦いが長引けば、不利になるのはどう考えてもこちらのほうだ。そのことを考えることができないほど余裕のない自分に、いささかばかり遅れて気づいたのだった。

（まあ、いい）

少なくとも、イリスとファルケの身の安全だけは確保した——当

面の間は、という条件付きではあったが。

それでも、二人を気にしながら戦うことに比べたら雲泥の差だ。

「……っ！」

巨大な袋状の魔獣が視界を覆い、ティアは反射的に剣を振るった。斬り捨てるのと同時に、巨大な蝙蝠に似た魔獣が空中から襲いかかる。ずらりと並んだ針のような爪を、ティアは身を反らすことでかわした。

完全にはかわしきれず、衣服の胸元が鋭い切り口を見せたが、ティアはかまうことなく返す刀で空中の魔獣を斬って捨てた。さらに反対側から襲いかかってきた双頭の犬へと、彼女は素早く向き直る。その牙を避けながら、突き出した剣が首の一つをはね飛ばした。しかしもう一方の首は無傷だった。獰猛な唸りをあげて襲いかかってくるそれを、怯む様子もなく見返してティアは身をひねった。身体を反転させ、勢いを付けた一撃でその首をも叩き落とす。それはその魔獣の牙が、ティアの身体に届く一瞬前の出来事だった。

必死になつて戦うティアの姿を、レキシアはもはや手出ししようともせずに離れた場所から眺めていた。

その目には、観察するような光があった。いつしか口元に浮かんでいた薄い笑みは、この場にあつては違和感を感じさせるほどに純粹なものだった。

しかし一方で、ひどく歪んだ印象も与える笑みだった。

汗を跳ね散らかして剣を振るうティアと、レキシアの視線が一瞬重なり——彼は口元の笑みを深くした。

それはまるで、夜が明ける前の闇のような暗さを宿した笑みだった。

「……う」

鈍い痛みと、ほのかな温もりを感じてファルケは目を開いた。

同時に、彼は自分に覆い被さるようにしてうずくまっている少女の存在に気づき、その目を大きく見開いた。

「な……！」

思わず身を起こしかけたファルケを、その少女は慌てて制止した。
「駄目です、まだ動いちゃ……！」

ファルケの行動を半ばで中断させたのは、その言葉ではなく全身に走った痛みだった。

顔をしかめて悲鳴を押し殺すファルケに、少女は手を貸して楽な姿勢を取らせる。額に脂汗をにじませながら、ファルケはその顔を見やって礼を言った。

「ありがとう。だが、君は……？」

見たことがないと、はつきり確信できる顔だった。

色白の繊細な美貌はもちろん、顔にかけた大きな玻璃の眼鏡は一度でも見たことがあれば、決して忘れられまい。

一つに編まれたお下げは乱れ、頬や首筋に淡い金色の髪がかかっている。

華奢なその身体を包んでいるのは、一目で男物とわかる暗い色の服だった。

「私の名はイリス・ミューゲル・エルフォンベイン——ティアの従妹と言えはおわかりになりますか？」

イリスの答えに、ファルケはわずかばかり表情を硬くする。

「では、君も……」

死霊術師なのか、と続けようとした言葉を呑みこんだのは、イリスの表情にさつと暗い影が差したためだった。

目を伏せたまま、イリスはファルケの顔を見返すことなく答えた。

「……ええ。私も、死霊術師です」

それだけ答えて、彼女は素早く空中に指を滑らせる。

思わず身構えたファルケが目にしたのは、見覚えのある呪文だった。それが自分もよく使う治癒の呪文だと気づいたのは、身体中の痛みが湯に溶けるように薄れていつてからのことだった。

困惑と安堵と、そしてどこか尊敬の混ざる瞳でファルケはイリスを見返す。

治癒術の使い手は神殿にも多く、ファルケもその一人だったが、ここまで鮮やかに術を使いこなす人間を見たのは初めてだ。間違はなくティアの同族であると確信すると同時に、彼女が自分に敵意を持っていないこともわかった。

そうでなければ、わざわざ傷を癒すようなことはするまい。

まじまじとファルケが自分を見つめていることに気づき、イリス

はやや困惑したような顔つきになった。眼鏡の向こうから、澄んだ空色の瞳に見つめ返されてファルケはかっと体温が上がったように感じた。

「あ……その、見事な腕だ」
「はい？」

ごまかすように口にした言葉に、イリスはわずかに首を傾けて応じる。

術の腕前を誉められているのだと理解すると同時に、彼女は色白の頬にさあつと血の色を昇らせた。

「そ、そんな……私なんてまだまだです！ その傷だつて、くり返し術をかけてようやくそこまで回復させられたくらいで……ティア姉様だったら、一度の術で完全に治すことができたでしょうに……」
「……ティア姉様？」

訝しむように呟いた直後、ファルケの顔にはつとした色が浮かぶ。

跳ねるように彼は身を起こして、室内へと目をやった。自分を取り巻いている状況を、思い出したがゆえの行動だった。

途端に鈍い痛みが身体の各所に走ったが、我慢できないほどではなかった。

室内へと巡らせた視線が、何体もの魔獣を相手取って戦う女性の姿を捕らえた——より正確に言うのであれば、その女性の赤金色の長い髪を。

「あれは……！」

ファルケの脳裏によみがえったのは、先程部屋に飛び込んできた女性の姿だった。

開かれた扉の向こうに見えた、ティアと瓜二つのその容貌。姿だけでなくその物腰も、言葉遣いも——挑みかかるようなその眼差しさえも。

「ティア……なのか、まさか？」
「はい」

イリスの声は、どこか沈痛な響きを帯びていた。それに気づかずに、ファルケは食いつかんばかりの勢いで尋ねかけた。

「いったいどうして、あんな姿に——いや、それよりもレイトは……あいつがレキシア・コルムスだということをティアは知っていたのか？ どうしてティアが、レキシアをよみがえらせたりするようなことを——」

「お、落ち着いてください……！」

イリスの言葉に、素直に従う形でファルケが口を閉じたのは、自分でも混乱しているという自覚があったためだった。

そんな彼に、内心で安堵の息を吐きながらイリスは手短に事情を説明した。

説明の間、ファルケは厳しい表情でずっと黙ったきりだった。

その瞳の奥底を、ちらりと複雑な光がよぎったのは、ティアが自分の力で仇の死霊術師を捕らえたと聞かされた瞬間だった。自分は結局、なんの役にも立てなかったのかという思いがその瞳には現れていた。

しかし、それを口に出すことはせずにファルケは説明を終えたイリスに向かって、もう一度礼を言った。

「ありがとう……それで、あの男がレキシアであることは間違いのないのだな？」

「……はい」

重たげな口調で、しかしはっきりとイリスは断定した。

それは彼女が、つい先程ティアに聞いたただしたことでもあった。ガットを先頭に地下へ続く階段を下りながら、こらえきれずにその問いをぶつけたのだ。

ティアは七年前に起こったことも、それを自分が知っている理由もすべて隠すことなくイリスに教えた。

それは、イリスにとっては信じがたい話であった。

ティアが七年前に一度死んだということも——母親である族長の術によって、赤ん坊の姿となって生き返ったということも。

その時からずっと、ラゼールが彼女の体内に隠されていたということも。

そして——それを知っていながら、ティアがラゼールの搜索を一族に命じたのは、エルフォンベインも含めたすべての死霊術師一族を疑っていたからだということも。

（——だけど）

苦い思いで、イリスは内心に呟いた。

（姉様のその判断は、間違っていなかった）

七年前の事件について調べているうちに、エルフォンベインが深く関わっていることを知り――父がその実行犯の一人であることを突き止めるまでに至った。

ティアにそのことを報せようとした自分を止めたのは兄で、彼がティアへと剣を向けているところもこの目で確かめた。自分が到着するのがあと少し遅かったら、ティアは兄に殺されていただろう。ティアの判断は間違っではないなかった――杖に魂を封じて、彼女に危険を知らせた先の族長、ラクスの判断も。

口をつぐんだままの自分を、戸惑ったような顔でファルケが見返しているのに気づき、イリスはあえて感情を排した声音で告げた。

「……モンドステイーンの長は、代替わりの際にレキシア・コルムスの墓のありかを教えられるのだそうです。その墓には決して近づいてはならないという警告とともに――なぜならレキシア・コルムスは、厳密には死んでなどいなかったから」

「どういう……？」

「その肉体は滅びても、精神は変わらず存在し続けていたのだそうです――モンドステイーンに代々伝わる宝玉　ラゼール　の中で」

「……なんだって？」

ファルケの声は驚愕よりも、わけがわからないといった不安を宿したものだった。

その顔を見返し、イリスは言葉を続けた。つとめて淡々と告げるその声は、しかしかすかな震えを隠しきれずにいた。

「ラゼールに収められている術の中に、『不死』と『不老』という術があるのだそうです。これはどちらも不完全なもので、『不死』は死ぬことはなくなりますが肉体は老い続け、『不老』は肉体の加齢を止めますが、死から逃れることはできません。レキシアはこの二つの術を組み合わせることで——ほぼ完全に近い不死の身体を手に入れたんです」

それは、この世のあらゆる権力を手にした者が、最終的に必ずといっていいほど夢見る——歳を取ることも、死ぬこともない肉体。

「彼を殺すためには、肉体の活動を一時的に停止させるのと同時に、その魂を引きはがす必要がありました。そのために使われたのがラゼールです。呪文も魂も情報の集合体であることに変わりはありません。無限にも等しい容量を持つラゼールになら、彼の魂をそっくりそのまま封じることができると思われたんです」

「……そんな危険なものが、死霊術師の一族に伝えられていたのか」「封じられた魂は、解放されるまでその中で眠り続けます。本当なら、レキシアもラゼールの中で永遠に眠り続けるはずでした。ティア姉様が——彼の墓から骨を掘り出し、よみがえりの術さえ使わなければ」

イリスの声が沈み、ファルケはどんな顔をするべきかとつさに迷った。

そんな彼の様子に気づくことなく、イリスは顔を伏せるようにして言葉を続けた。

「ティア姉様は掘り出してきた骨を使って、レキシアの身体を――生きた状態に限りなく近い身体をよみがえらせました。そのための媒介として使ったのが、ラゼールに封じられていたレキシアの魂です。魂はその肉体の情報も保有しているから――ほとんど完璧な状態で、レキシアはよみがえりました。ただ一つ――その記憶だけを失って」

イリスは顔を上げ、星のような光を宿した瞳でファルケを見つめる。

「レキシアの魂が持つ精神の情報を、ティア姉様はすべて破棄した状態でよみがえたせいです。肉体そのものが持っている情報――習得した技術や動きはそのままでしたが、精神はまったくの白紙に近い状態です。人の生死をまるでかえりみないような危険人物をよみがえらせるつもりなど、ティア姉様にもなかったんです」

「しかし……」

ファルケはわずかに眉を寄せ、首を振って言った。

「どうして、そこまでしてあの男を……？」

「……ティア姉様には、味方が必要だったんです」

イリスの瞳の奥を、泣き笑いめいた表情が一瞬かすめていった。

「決して裏切る心配がなく、簡単に死んだりしない——そして魔獣と対等に戦えるほどの戦闘能力を持った味方が。その条件を満たす者は、レキシア——レイト以外にはいませんでした」

ファルケの顔にも、胸を衝かれたような表情がのぞいた。

その顔を見やりながら、イリスはつい先程耳にしたばかりのティアの言葉を思い出していた。それは静かで——悲しいまでに穏やかな声だった。

『馬鹿なことをしているって自覚はあったさ』

告げるティアの表情は、暗さもあつてはつきりと見て取れることはできなかった。

『よみがえったあの男に、万一以前の記憶があるようなら差し違えることになっても、封じ直そうと思っていた。記憶が戻る確率は

半々だったけど——普通なら、精神の情報を破棄した時点で二度とその記憶が戻ることはないはずだが、なにしろ不死の身体から引きはがされた魂なんて、そうそうあるもんじゃない——どうなるかなんて、予想はまったくつけられなかった」

とんでもない博奕さ、と笑う声には自嘲の陰りがにじんでいた。

『それでも——私にはどうしても、あの男が必要だった。あの時は誰も——イアンやお前でさえも、信じることはできなかったんだ』

そう告げるティアを責めることは、イリスにはできなかった。

今の自分とほとんど変わらない年齢で、彼女は帰るべき故郷も知人も家族も——ありとあらゆるものを失ったのだ。

どんな思いで、彼女が今日まで生きてきたのか。残されたわずかな血族さえ、信用することができずに過ごした日々がどんなものであったか——その過酷さを想像することさえ自分にはできそうにない。

「……なんということを」

呻くようなファルケの声が、イリスの心を現実に取り戻した。

はっとして目をやると、彼は顔をしかめて立ち上がろうとしているところだった。

「駄目です、動かないで！」

「黙って見てなどいられるものか！」

思わずファルケは声を荒げ、イリスはびくりと身をすくめる。

その怯えた顔を見て、ファルケも冷静さを取り戻したようだった。彼はわずかに視線と表情とをやわらげ、それでもはつきりとした口調でイリスに言った。

「ティアがしたことのは非を問うても仕方がない。他に方法があったのかもしれないが、過ぎたことを悔やんでもなにも変わるまい。大事なことは、今の彼女になにをしてやれるかということ——最初から、私はそのために彼女と行動をともしたんだ。どんな微力であろうとも、彼女の力になればと思っただけなの……なのに、ここでまた手をこまねいて見ているだけなのか？ だったらなんのために私はここまで来たのだ！」

「……それでも」

たぎるような感情を奥に隠した声に、怯みそうになりながらもイリスは目を逸らすことなく言い返した。

「それでも、駄目です。傷はふさぎましたが、肉体の受けたダメージは完全に消えたわけではありません。それに、あなたには絶対に手出しさせるなど、ティア姉様から言われています。力づくでも、あなたをここに足止めしておけと」

「悪いが、それは無理だろう」

ファルケの頬に苦笑が浮かんだのは、イリスの細い腕で自分をどうこうできるとは思えなかったためだった。

ティアも酷な命令をする——そう思って、極力乱暴にならないようにイリスの腕を振りほどこうとする。

だが、その腕がぴくりとも動かないことに気づいて、ファルケは顔を強ばらせた。

すっかり失念していたが、この少女もまた死霊術師だったのである。

「……っ！」

懸命に身体を動かそうとするファルケを、イリスはどこか悲しそうな瞳で見やりながら口を開いた。

その腕は、肘のあたりまでうつすらと光を放つ紋様に覆われていた。

「あなたをここで守るのが、私の役割です」

いまにも泣き出しそうな響きを、イリスの声は帯びていた。

「あなたと——私の二人くらいなら、霊壁と魔獣で守ることが出来る。だから姉様は私の同行を許したんです。あの方は決して、人の力を借りようとしらない人だから……あなたのことがなかったら、私をここへ連れてきたりしなかったでしょう」

「……………」

ファルケは齒を食いしばったが、身動きはおろか声一つ出すことはできなかった。

その瞳に、力を込めるのが精一杯だった。しかしイリスの表情を目にするのと同時に、瞳に込められていた怒りの色は影もなく消失した。

澄んだ空色の瞳からこぼれる、大粒の涙を見て取ったためだった。

「ごめんなさい………だけど、私も姉様に賛成だから。もうこれ以上、

このことで誰かが傷つくところは見たくない」

白い頬を滑り落ちた涙が、暗い色の衣服にはたばたと染みを作る。「姉様はどんなことをしても、彼を——レキシアを止めるつもりでいます。だけど、私やあなたをそれに巻き込むことだけは、決してしたくはないのだと言いました。もしも私に力があれば、姉様を助けることができたかもしれない……でも、今の私じゃ足手まといになるのが関の山なんです」

その声を震わせるのは、怯えでも不安でもなかった。

自らの力不足に対する怒りと嘆きが、その声には色濃く漂っていた。

「だから、私はあなたと自分自身の命を守ること、姉様が戦いに集中できるようにする——それぐらいしか、私にできることはないんです」

もっと自分に力があれば——その気持ちはファルケにも痛いほどわかった。

自分自身、どうにもならない無力感を噛みしめている最中だ。助けになりたいと思った相手が目の前で戦っているにもかかわらず、なんの手助けもできない——そればかりか、当の相手の力によって守られている有様だった。

ファルケは喉の奥で、呪詛めいた呻き声を上げる。

指一本動かせない自分がもどかしかった。そしてここまで徹底した手段で、自分を排除することを選んだティアとイリスを恨めしく思った。

なにより、彼女たちにそうさせざるを得なかった自分自身の無力さに腹が立った。

(……ティア)

自由にならない身体で、ファルケは眼前の戦いを見つめながら強く願う。

(神よ——どうか、ティアをお守り下さい)

祈りは人の心を救うものであって、現実には作用をもたらすものではない。それを承知の上で、ファルケはひたすら強く願い続けた。

もはや、それ以外に彼にできることはなかった。

息を弾ませながら、ティアは九体目の魔獣を斬り捨てた。

これで残っている魔獣は、レキシアの傍に立つ二体のみとなった。しかし、レキシアは焦りの色を見せるどころか、むしろ楽しげに目を細めて言い放った。

「たいした腕だな——だが、そいつらをよみがえらせるのはわけもないことだぞ。肉片の一つからでもよみがえるのが、魔獣って存在だ」

「わかつてるさ、そんなことは」

やや捨て鉢な口調ながら、ティアは昂然と首をもたげて言った。

「その暇をお前に与えなければいいだけの話だ——にしても、どこぞの誰かが魔獣ばかり集めまくってくれたおかげで、いらん苦勞をする羽目になる」

視界の片隅で、イリスが申し訳なさそうに身をすくめるのが見えたが、ティアはかまうそぶりも見せなかった。

浅くその身体が沈んだかと思うや、猛然と彼女はレキシアに斬りかかる。

下から放たれた一撃を、レキシアは余裕を持ってかわした。同時に、後ろからティアに襲いかかるうとした魔獣は、死者を一掃して戻ってきたガットの体当たりを受けて、あえなく弾き飛ばされた。

ガットはその場所に留まり、床に転がった魔獣ともう一体の動きを牽制する。

背後の守りをガットに任せて、ティアはさらに踏み込んだ。手にした剣が空中に銀色の軌跡を描き、レキシアの手元で激しい火花が散る。

それで終わることなく、刃は方向を変えてレキシアの額に襲いかかった。

跳ね上がった剣が攻撃を逸らしたものの、レキシアの目にはもはや笑みのかけらものぞいていなかった。

「本気か、小娘」

放たれた声は、背筋を凍らせるような響きを帯びていた。

それに気圧されたように、ティアの動きが鈍った。無造作とも言える動作で、その手の剣をレキシアがティアの頭部に振り下ろしたのは次の瞬間だった。

「——っ！」

ティアがそれをかわし得たのは、ほとんど幸運のたまものだった。後ろに飛び退くか前に身体を投げ出すか、一瞬迷ったせいでどちらとも言えない方向にその身体が倒れたのだ。

空気さえも断ち切るような斬撃は、倒れた身体のすぐ脇をかすめていった。

ティアは一転して起きあがり、その時にはもう反撃の準備は整っていた。足元を狙った一撃を、レキシアは予期していたかのように軽やかな動きでかわす。着地のタイミングを狙って、ティアは身体ごと剣を突き入れた。

だが、その攻撃もレキシアの予測のうちにあったようだった。

ティアの刃は、レキシアの身体に届く寸前その剣の峰によって受け止められる。

それでもティアの瞳から、戦意が失われることはなかった。笑みを浮かべたレキシアの目を見返し、彼女は剣の柄から片手を離す。

「——っ!？」

直後、レキシアの目が驚愕に見開かれた。

その胸に押し当てられたティアの手が原因だった。その腕がぼんやりと光を帯びていることに、レキシアは一瞬遅れて気がついた。

「これなら少しは——効いただろう？」

レキシアを見上げるティアの瞳に、あるかなしかの笑みが浮かぶ。その腕——衣服の袖に隠れる部分に、描き込まれているのは『氣死』の呪文だった。触れるだけで、相手の精神に打撃を与える術である。

赤黒く変色しつつある文字は、皮膚に直接刻み込んだものだった。ここに来る途中で、ティアが刃の先を使って描いておいたのだ。変則的な呪文の使い方が成功するかどうかは賭けにも近かったが、ラゼール の魔力を合わせれば可能だろうという予測もあった。

レキシアがなにか言いかけ、それより早くティアは剣を振るった。胸を貫こうとした一撃は、しかしレキシアの衣服の胸を裂いただけに終わった。同時にティアが呻いたのは、レキシアの手が呪文を描いた腕をつかんだためだった。

容赦のない力で、彼は血を滴らせる傷口に指先を食い込ませる。

「く——っ！」

「やっってくれるじゃないか」

悲鳴を呑みこんだティアに、平坦な口調でレキシアは告げた。

「お前——俺がお前を殺せないとも思っているのか？ 確かに今、この身体を維持しているのはお前の魔力かもしれない。しかし、その支配力は魂までは及ばないぞ。俺の魂を支配するのは、俺自身の意志だけだ。俺にはいくらでもお前を傷つけることができる——たとえお前が死のうとも、俺はなんの痛手も受けない」

淡々と語るレキシアの顔を、痛みをこらえながらティアは睨みつける。

高温の炎を宿したようなその瞳を、眩しいものでも見やるようにレキシアは目を細めて見返した。

笑みに似た表情とは裏腹に、その声はどこまでも冷たかった。

「術者であるお前が死ねば、この身体は一時的にもとの屍に戻るだろうが——そうしたら今度は俺が、自分でこの肉体をよみがえらせれば済むだけの話だ」

その声を聞きながら、ティアは必死で次の策を考え続けていた。

彼の言葉が正しければ、自分が命を絶ったところでなんの意味もない。最悪その手段でレキシアを黄泉に送り返すつもりでいたティアのもくろみは、完全に水泡に帰したことになる。

しかし、それでもティアの瞳にあきらめの色が宿ることはなかった。

（なにか——あるはずだ）

どんな方法を使つてでも、レキシアを止めなければならなかった。それは危険を承知で、この人物をよみがえらせた責任を取るためでも、死霊術師の長として危険人物を放置しておけないという使命感ゆえのことでもなかった。

すなわち、レキシアが完全に自由になった時、まず犠牲になるのは誰かという――

イリスもファルケも、ティアがレキシアに殺されるところを黙って見ていたりはしないだろう。そしてレキシアも、自らに刃向かう者を決して許しはしない。

その結果がどうなるかは、火を見るよりも明らかだった。

（だから、絶対に……死ねない）

死ぬのであれば、レキシアも道連れにする形でなければならない。

自分の命など、もはやティアは惜しいとは思わなかった。この命は七年前、すでに失われているはずのものなのだ。母親の犠牲によって長らえることはできたが、その命に課せられた役目は終えた――はずだった。

村の襲撃を行った犯人を突き止め、しかるべき報いを受けさせることによって。

だからあとは、自分が引き起こした事態の責任を取るだけでいい。

「——っ？」

その時、ティアは身体にわずかな違和感を感じた。

身体を成長させていた術の効力が切れたとわかったのは、急激に視点が低くなったためだった。わずかばかり驚いたように、見開かれたレキシアの瞳に幼い少女の姿をした自分が映る。

いよいよ手詰まりか、という呟きは言葉にならなかった。

11-5 死者の呼ぶ名

「それが……本当の姿か」

軽く見開いた目に、レキシアは愉快そうな笑みを浮かべた。

「ずいぶんとまた、可愛らしいじゃないか」

そう言いながらも、彼はまったく手の力をゆるめようとはしなかった。

「生かしておくのも面白いかもしれんな……お前にこの身体を維持させておけば、余計な力を使わないですむ。一人で生きるのも退屈だろうしな——お前は、いい暇潰しになってくれそうだ」

軽くなったティアの身体を、荷物のように乱暴にレキシアは引きずり上げる。

その目に浮かぶのは、どこか狂おしい熱をはらんだ光だった。

「そういえば、お前の中には ラゼール もあるのだったな。返してもらおう——お前の身体ごと。その身体を不死にすれば、自害もかなうまい。 ラゼール もお前も、永遠に俺のものだ。誰にも渡しはしない」

「……お前が手に入れたいののは、私ではないはずだ」
痛みにかすれた声で、ティアは言い返した。

その目には、恐れの色はみじんものぞいてはいなかった。むしろ

哀れむような、静かな光をたたえた瞳でレキシアを見返して、ティアは言葉を続けた。

「お前が知らないことを、一つ教えておいてやろう。お前を殺して、お前の魂を　ラゼール　に封じた女性――フレアはその時すでに身ごもっていた。お前の子をな」

レキシアの目が、ごくわずかに動揺の光をのぞかせる。

「モンドステイーン一族は……いいや、そこから派生していったすべての死霊術師の一族の中に、お前の血を引いた者がいる。お前が殺したこの部屋の死霊術師の中にも」

なにか言いかけるように、レキシアの唇が動いた。

しかし、それが言葉になるよりもガットが背後から、彼に飛びかかるほうが早かった。身をひねって彼はその牙をかわすが、そこにできた隙をティアが見逃すはずもない。術が解けても手放さずにいた剣で、自分の腕をつかむレキシアの手を斬りつける。

子供の力では重い剣を十分に扱えず、刃は皮膚を浅く切り裂いただけだった。それでもティアがその手から逃れるには十分だった。

よろめきながら着地すると同時に、ティアは空中に指先を滑らせた。

「小娘が！」

怒気のこもる呻き声とともに、レキシアが剣を振り下ろす。

それを受け止めたのは、間に割って入ったガットの背中だった。

刃は漆黒の身体に深く食い込んだが、ガットは四肢を踏ん張って身じろぎもしなかった。

その間に、ティアは驚異的な速度で呪文を完成させる。

八行の呪文は『靈縛』——魂あるすべてのものの動きを封じ込める術だった。

レキシアの身体が凍りついたように動きを止めた瞬間、残った二体の魔獣がティアへと襲いかかった。

鹿に似た一体はガットが後肢で跳ね飛ばしたが、もう一体の魔獣を同時に止めることはできなかった。蜘蛛のような長い手足を生やした、円盤状の魔獣が宙高くに跳ね上がってティアを頭上から襲う。

鉤爪が脳天に振り下ろされるのをティアは察したが、動くことはできなかった。

今集中が途切れれば、かろうじて維持している状態の『靈縛』の術を解いてしまうことになる。予想はしていたがレキシアの精神力は強く、黙っていても長時間保たせることは難しそうだったが、今解放するわけにもいかない。

身動き一つしないティアの頭上に、魔獣の爪が迫り——触れることもできずに横に打ち払われた。

他ならぬ、レキシアの手にした剣によって。

「……お前の知らないことが、もう一つあったな」

全身に冷や汗をにじませたまま、ティアは微笑みを浮かべた。

「それは——レイトのしぶとさだ」

「……うるせえな」

かすれた声が、声までも封じられたはずのレキシアの喉から洩れた。

その身体を支配しているのが、レキシアでありながら別の主体を持つ人格——レイトに変わったためだった。『靈縛』は魂を目標としてかける術であるため、肉体にはいつさい影響を及ぼさない。

そして、レイトの意識は——魂の奥に封じ込められていたその人格は、レキシアの意識が肉体の支配権を失ったために、表面に出てくることができたのだった。

だが、それを喜ぶゆとりは今のレイトにはなかった。

レキシアの意識がいつ肉体を取り戻すのかわからないためでもあったが、つい先刻まで悪夢でも見ているような心境で自分の行いを眺めていたのである。

すべて、自分のこの身体によって行われたことだった。そこいらに散らばる死体に同情するつもりなどないが、この手は——ティアまでも殺そうとした。指先には、彼女の血がまだこびりついている。

「……余裕は、ねえぞ」

呻くような声を、レイトは発した。

彼は全精神力を振り絞って、束縛から逃れようと抵抗しているレキシアの存在を、同じ魂を通じて感じ取っていた。

ティアはうなずいて、手にした剣をレイトへと手渡す。

無言でそれを受け取ると、レイトは逆手に持ちかえて切っ先を自分の胸へ向けた。

その瞳には、覚悟の光が満ちていた。視線だけをティアへと向けて、彼は緊張を含んだ声音で告げた。

「失敗するなよ、ティア」

「ああ」

短いやりとりのあと、ティアは空中に手を差し伸べる。

優雅とさえ言える動きで、宙に描き始めた呪文の意味を理解できている自分にレイトは気づいていた。

それは、レキシアと自分の意識の境界線があいまいになってきている証だろう。

同時にレイトは、ティアが描くその呪文に見覚えがあることにも気づいていた。記憶を探り——どこで見たのか思い出してレイトは得心する。

魂の奥底から、レキシアが動揺する気配が伝わってきた。だとすると、ティアの狙いはあながち悪くもないのだろう。

両手で剣を支えたまま、レイトはうつすらと微笑んだ。

呪文が完成すれば、自分がどうなるのかはわかっていた。それでも、彼の胸をよぎったのは安堵にも似た思いだった。

『虚ろなる闇を抱きし無貌の王——（モーマ・サーガント・リア・エルメル・ウエリオス）』

ティアが発した真音を耳にして、イリスも彼女の意図を察したようだった。

不安に揺れる瞳が、ティアとその前に立つレイトへと向けられる。並の相手であれば、術の成功を決して疑いはしないが——相手はレキシアだ。

長い睫毛をわずかに伏せて、イリスは祈るような表情を浮かべた。ちらりとその様子に目をやってから、ファルケはティアへと視線を戻した。向かい合う形で立っている、レイトにも。

その瞳に浮かんだ信頼の色は、ティア一人へと向けられたものではなかった。

『水盤に描かれしかりそめの糸を切れ（デア・ウィクシール・デュリスト・マール・カムセル・ルーギオス）』

途切れることなく真音を紡ぎながら、ティアは内心の不安を隠しきれずにいた。

レキシアの動きは、レイトが封じてくれている。呪文を完成させること自体は、さして難しくはないだろう。

問題は、その先にあった——自分の術が、レキシアに通用するかという。

自分と彼の間にある、絶望的なまでの実力差にティアは気づいていた。ラゼールの力を借りてやっと、対等に持ち込めるくらいだ。それでも、成功する確率は五割以下——通常ならば、とても実用できるとはいえないレベルである。

（無理……なのだろうか）

弱気や疑念が術の成功率を下げると知っていてなお、ティアは内心で呟かすにはいられなかった。

かつて誰にも——先祖にも、できなかったことである。

だから『彼女』はだまし討ちも同然のやり方で、レキシアを殺しその魂を ラゼール に封じ込めたのだ。

——おそらく、身を引き裂かれんばかりに悲痛な思いで。

わずかに揺れたティアの視線が、レイトのそれと重なった。そこにはいささかばかりの迷いも、疑いものぞいてはいなかった。

ティアは軽く唇を噛みしめると、毅然とその顔を上げた。

そう——自分はこうすると決めた。たとえ自分一人の力では難しくても、レイトの力があればできると信じたのだ。

その思いを、最後まで貫くことを決めた。失敗できないからこそ、最も成功する確率が高い方法を選ぼうと思った。

『我が声に応え、我が命に従え（ミルト・ニア・モスト・ディム・エール・バストゥ）』

まっすぐにレイトの顔を見つめて、残りの言葉をティアは発した。

『——我が名は 月にかかる虹 （ミ・デア・ラクト・エールメインティア）』

その声が響き渡るのと同時に、足元に光の輪が広がった。

ほとんど部屋中の床を覆い尽くすような、巨大な輪であった。細かな紋様を形作る光の粒子が、そこに立つ人々の姿を青白く照らし出す。

一瞬たりとも迷うことなく、ティアは声をあげた。

「レイト！」

その声に応えて、レイトは思いきり自分の胸に剣を突き立てる。

力を込めた剣の先は、身体を突き抜けて背中から切っ先をのぞかせた。出血はなかったが、レイトの顔が痛みに激しく歪む。

淡い光を刀身にまとったままの剣。それは肉体のみならず、精神も傷つける力を持った武器だった。

レイトの身体から力が抜け、がくりと彼は床に膝をついた。それでも、彼は握りしめた剣の柄を離そうとはしなかった。

意識が途切れそうになるほどの痛みに耐えながら、レイトはその時を待った。

ほどなくして、それは唐突に訪れた。胸を中心に広がる痛みが、ずっと遠ざかった——そう思った直後、レイトは身体中のすべての感覚が失われていることに気づいた。自分と——レキシアの意識が身体から離れたのだ。

（やったか……！）

そう思ったのもつかの間——周囲に満ちる力が彼の意識を白く染め上げていく。

同じ力が、レキシアの精神をも分解しようとしていた。彼は意志の力をふり絞って抵抗しようとするが、精神の一部が無防備にその力を受け入れているために、分解の力は容赦なく彼の精神を蝕んでいく。

（いったい……なにが）

その原因を悟って、彼は愕然とした。

記憶を失った彼の肉体に宿った、取るにも足らぬような人格が彼の抵抗を無にしているのだとわかったのだ。

（なんだと——！）

心の奥底で、その人格が満足げに笑うのが感じられた。

激しい怒りを感じながらも、レキシアにはその人格に手出しすることはできなかった。それは完全に分離した別人格であるのと同時に、同じ魂を共有する存在でもある。無理に押さえ込もうとすれば、自分の力をも封じる結果になりかねなかった。

そうしている間にも、流れ込んでくる力がレキシアの精神を分解していく。

必死で抵抗を続けながら、レキシアは心のどこか——まぎれもない彼自身の意識の一部が、いやに静かにこの事態を受け入れようとしていることに気づいていた。

それはあきらめでもなく、達観でもなく、ようやく重い荷物を下ろすことができるといったような、安堵にも近い思いだった。

ほんの一瞬、その心を一人の女性の面影がかすめていく。

鮮やかに燃え上がる夕刻の空のような色の髪と、それよりも濃い血色の瞳をした女性。整った造作ながら気の強さをはつきりと感じさせる容貌。にもかかわらず、笑顔は子供のように無邪気だった。

その笑顔を最後に見たのは、いったいどれくらい前のことだった

ろっ。

記憶にあるのは、硬く張りつめた表情ばかりだった。なにかに必死で耐えているような無表情——そして、泣き顔。

そこまで思い出した瞬間、心の奥底に封じ込めていた記憶の蓋が開いた。

そう、自分は怒りに我を忘れてなにも見ていなかった。彼女がどれだけ必死に、自分を止めようとしていたか。自分のそばに誰もいなくなっても、彼女だけはそこに残り続けていた。

最後に見たのは——大粒の涙を流していた彼女の顔。

（——忘れていた）

不思議にすがすがしい思いで、レキシアは胸に呟いた。彼女を守りたいと願った——それが、力を得たきっかけだった。泣かせたいわけではなかった。ともにいることを望んだだけだった。自分のすぐそばで笑う彼女を見ていたかった。

ただ、それだけのことだったはずなのに。

（すまない……フレア）

意識の片隅でそう呟いた直後、レキシアの意識はかけらも残さずに砕け散った。

その寸前、心の奥底を女性の微笑みがよぎっていったようにも思

えだが――それを確認できる者は、もうこの世のどこにも存在してはいなかった。

エピソード1 絆

真っ白に染め上げられた意識が、一点に収束していくのを彼は感じていた。

それは細い一本の糸に、たぐり寄せられていくような感覚だった。拡散していた意識がゆっくりと形をなし、同時に記憶がよみがえってくる。

まるで、ばらばらに砕けた陶器のかけらをつなぎ合わせていくかのようだった。記憶のかけらが一つ一つ、心のあるべき場所に収まってくる。その中には、明らかに覚えのないものも混ざっていたが

記憶とともに、肉体の感覚もよみがえる。

最初に感じたのは、横たわった身体の重さだった。ついで背中に伝わる、石の床の冷たさと硬さ——それをはつきりと感じた瞬間、胸を中心に焼け付くような痛みが彼の全身に広がった。

「——！」

意識が一気に覚醒する。彼は低く呻いて、目を開けた。その目にまず入ったのは、大きな瞳をいっぱいに見開いた少女の

顔だった。

白く整った顔を縁取る、鮮やかな赤金色の髪。記憶の片隅をよく似た誰かの面影がよぎっていったような気がしたが、それは自分の知っている誰でもなかった。

髪よりもなお鮮やかな真紅の瞳から、涙のしずくを落としていたその女性。

重なって見えたのは、少女の目に浮かんでいた涙のせいかもしれない。大きく見開かれた目から、こぼれ落ちる寸前でぎりぎり留まっている涙。

一つでもまばたきすれば、その瞬間に流れ落ちてしまっただろう。それを恐れるように、少女は身動き一つしない。

表情さえも凍りつかせたままの、薄紫色の瞳。

それを目にした瞬間、心の中の面影は幻のようにかき消えた。同時に彼の脳裏に少女の名前がよみがえる。

何度もうくり返し、その名で呼ぶよう言われ続けてきた名前。

殴られた痛みまで記憶によみがえり、彼は知らず微笑を浮かべる。もつずいぶん昔のことのようだ。

彼の顔に浮かんだ笑みを見て、少女は軽く息を呑む。

その拍子に、大きな目の縁で留まっていた涙が一滴、こぼれ落ちた。頬を伝った涙は、彼の顎へぱたりと落ちる。

温かいしずくだった。彼は微笑を浮かべたまま、少女の顔を見上げて口を開いた。

小さく息を吸っただけで胸に激痛が走ったが、その顔に浮かぶ微笑みが消えることはなかった。

（なに……らしくねえ顔してやがんだ）
泣くなよ、という内心の思いを別の言葉で口にする。

「……どうした、ティア？」
見開かれたままの目に、みるみる別の涙が浮かぶのを、レイトは苦笑の混ざる面持ちで見つめやった。

彼が目を開けるのを、ティアはやや呆然とした表情で見つめた。
まず頭に浮かんだのは、失敗したのかという戦慄を交えた思いだった。レキシアの魂を分解することは、やはり自分には無理だったのだろうか——心臓が凍りつくような絶望とともに、そんな思いがティアの脳裏をよぎった。

しかし同時に、そこにはひとかけらの希望めいた思いも重なっていた。

もしかしたら——この肉体に宿る魂の持ち主は、自分のよく知っている男ではないか、という。

甘すぎる期待だと、自分でもよくわかっていた。
いかに望みの薄い確率か、裏切られた時に受ける精神的な痛手が

どれだけ大きいか——十分すぎるほどに承知していた。
それでも——思わずにはいられなかった。

「……！」

目を開けた男がうつすらと微笑んだ瞬間、ティアの鼓動が大きく跳ねた。

そこにあつたのは、見慣れた笑顔だった。ふてぶてしい印象と、不思議な人懐っこさが同居した——同じ魂を持つ、あの男が見せたものとはまったく異なる表情。

あるいは、あの男もかつてはこんな表情を浮かべていたのかも知れないが——

息を呑んだまま、ティアは横たわった男の顔を見つめる。頬を一滴の涙が伝い落ちるのがわかったが、拭おうという気すら起こらなかった。

深い紫色の瞳が、ティアの顔を映し出す。

そこに映る自分の顔が、見たこともないような頼りない表情を浮かべているのがティアにもわかった。

不安と、それを上回る期待を宿した子供の顔だった。

その顔を見返したまま、男は唇をゆっくりと開いた。途端、痛みを感じたのかわずかに顔が歪んだが、口元の笑みが消えることはなかった。

「……どうした、ティア？」

かすれた声を、胸がふさがる思いでティアは聞いた。

こみ上げてくる思いで、どんな言葉も口に出すことはできなかった。

緊張した面持ちでその成り行きを見守っていた、イリスとファルケの顔にも喜びの色が浮かんた。イリスは涙に濡れた頬に輝かんばかりの笑みを浮かべ、ファルケはこらえきれないように安堵のため息を吐く。

その気配を背中を感じながら、やや呆然とした声をティアは発した。

「レイト……？」

「……ああ」

答えるなり、レイトの眉がきつく寄せられる。

「っ痛え……くそ、思い切りよくやりすぎたぜ……」

愚痴めいた呟きを聞きながら、ティアは口元がゆるむのをおさえきれなかった。

その目にはさらに新しい涙が浮かびかけていたが、彼女は拳を握るとぐいと乱暴に顔を拭いやった。

「なんで生きてるんだ、お前は？ 普通なら一緒に分解されてるはずだぞ」

「知るかそんなこと」

負けず、ぶっきらぼうな声をレイトは返す。

「そんなことより、さっさと治せよこの傷。命の恩人放っておく気か？」

「その状態で人を名乗るな、おこがましい。普通の人間は、胸に剣突き刺したまま話などできんものだ」

応酬を続けながらも、ティアの顔には隠しようのない笑みが浮かんでいる。

その口調が、直後ほとほと感心したようなものへと変わった。

「にしても、お前って奴は本当にしぶといな……自分で言っておいてなんだが、ここまでだとは正直思わなかった。今度ばかりはもう駄目だと思ったんだが」

俺もだよ、という呟きをレイトは口に出さなかった。

レキシアを確実にこの世から消し去るために、むしろ自分から進んで術を受け入れたのだ。魂を共有している以上、自分が分解されればレキシアとともに消滅するだろうという——その可能性にすべてを託して。

まさか、自分一人がこの世に留まることになろうとは思ってもいなかった。

「あの程度の術で、そうそう簡単に消滅してたまるかよ」

そううそぶいたレイトだったが、ティアの目に気遣わしげな光があることに気づいて、わずかに真剣な表情で言葉を足した。

「……それに、俺はお前との契約に縛られていたからな。おそらく、そいつが俺の命綱になったんじゃないかねえのか？」

ごく軽く、ティアはその目を見開く。

それはティアが内心で考えていたことと、ほぼ同じであった。よみがえらせた使役との間に結ばれる契約——それは、その魂を保護するものでもある。

同じ魂でも、レキシアを主体とする意識は契約を結んでいなかった。そのためレイトを主体とする意識の部分だけが、契約に守られる形でこの世に残ったのだろうと推測したのだが——

（どうして……レイトがそれを？）

以前そんな話をした記憶もあったが、彼はそれを覚えていたのだろうか。

あるいは——

「……お前、もしかして」

「いいからさっさと治せ！　こんな串刺しのままいつまで放っておく気だ！？」

口にしかけた言葉を、レイトの抗議の声がさえぎった。

ティアはぴたりと口をつぐんで、レイトの顔を見返す。探るような瞳の色は、まもなく淡い微笑みに変わった。

それに応えるように、レイトも瞳の表情をわずかにやわらげる。

どちらも声に出してはなにも言わなかったが、互いの顔を見ただけで言わんとしていることは伝わった。

共犯者めいた微笑をおさめると、ティアは肩越しにファルケへと

呼びかけた。

「手伝ってくれ。まず、この剣を抜いてしまわんと」

「おい、あんまり乱暴な真似は——」

「わかった」

レイトの苦情を聞き流し、ファルケはその胸に刺さった剣の柄を持つ。

ぎゃつと悲鳴が上がったが、ティアは気にするそぶりも見せなかった。ファルケの顔を見上げて、遠慮せずにやってくれと告げる。

「一気にやったほうが、痛みは少なくて済むだろう。その程度でシヨック死するほどヤワじゃないしな、この患者は」

「冗談じゃねえ！ 少しは手加減しろ」

「あんまりやかましいと猿ぐつわかますぞ。舌でも噛んだら大事だ」

「身体に穴が開いている以上の大事があつてたまるか！」

「それもそうだな——よし今だ、やってくれファルケ」

いささかも表情を変えずにティアは言い、ファルケは同情めいた光をその瞳にのぞかせながらも、思い切り剣を引っ抜いた。

同時に響き渡ったのは、耳を覆いたくなるような盛大な悲鳴だった。

「ああもう、やかましいな。このくらい覚悟してやったことだろう！」

「してたまるか！ こんなことになるかわかってたら、他の方法を探してたぞ！」

「そんな都合の良い方法があると思っているのか！」

言い返しながら、ティアは慣れた手つきで空中に治癒の呪文を描く。その様子を見て、レイトははっとした顔つきになった。

「そういえばお前……俺には普通の治癒術は使えないとか言ってたくせに。効き目は薄かったけど、ちゃんと使えたじゃねえか」

なんだ、と返すティアの声音は平然としたものだった。

「気づいてたのか——けど、あっちのほうの手っ取り早く治せるからな」

「なんだと！」

「それに、あまりその身体を生体に近づけると、肉体の情報からレキシアの精神が再構成されそうだったし。結局、身体の防衛本能がよみがえらせてしまったようだが……本当にあの苦労はなんだったんだって気分だ」

「馬鹿野郎！ 苦労したのは俺だ！」

言い合う二人を、はらはらした様子でイリスは見守っていた。

ファルケはすでに慣れたらしく、柳に風とばかりに右から左へ聞き流している。むしろ日常的なやりとりが復活したことに安堵しているかのような表情だった。

同じ空気が、言い合いを続ける二人の間にも流れていた。

どこか嬉々として言葉をぶつけ合う二人の声は、いつまでも途切れることなく部屋の空気を震わせ続けていた。

エピローグ2 死者たちは暁の空に舞う

崖下から吹き上げる風が、ティアの髪を宙に泳がせた。

東に望む空はうつすらと白み始めている。空のあちこちで強い輝きを放つ星々も、もう半時もしないうちに太陽の輝きに負けて姿を消してしまうことだろう。

空に目をやったまま、ティアは長衣に包まれた肩を小さくすくめた。

つい先程、イリスとファルケを送り出したばかりだった。

城の前で見張りをしていたロームなどの、生き残ったわずかな死霊術師を連れて二人は城を出て行った。行き先は、近くのデイニス神殿である。

モルトが死に、ヴァーゲも無力化されたと知ると、彼らはあつさり投降した。ロームのように、さほど深い関わりを持たない人間が大半だったのだ。彼らの罪はごく軽く、連行された理由はむしろ彼らの身を守るためと、彼らがヴァーゲたちの犯罪を立証する重要な証人であるためだった。

デイニス神殿に彼らの身柄を預けることにしたのは、ここがまだラクシアの国内だったためだ。

モルトがどの程度の人脈を築いていたかはわからないが、ラクシアの王宮には彼に協力していた人物が存在する。彼らがそのことを隠すために行動した場合——あるいは、そこまで愚かではないだろ

うが、ラゼールに未練を残していた場合——彼らや、イリスの身に危険が及ぶ可能性があった。

それを考慮した上で、ティアは神殿の力を借りることを決意したのだ。神殿の中にまでは、モルトの手も及んでいないはずだった。

「おい、ティア」

その背後から、声がかけられた。

思わずぎくりとして身をすくませてから、ティアはゆっくりとふり返る。

今この城にいるのは——意識ある者に限定して言えばの話だが——自分とレイトの二人のみで、他の誰かが声などかけてくるはずがない。

予想通り、そこに立っていたのはレイトだった。

足音はおろか、気配さえほとんど感じさせない動きは彼ならではのものだ。心臓に悪い奴、と心の中で呟きながら、ティアはどこか惘然とした様子の彼の顔を見やった。

言葉が出てくるよりも先に、こらえきれないような微笑が顔に浮かんだ。

「……なんだよ」

「いや……お前、本っ当に花が似合わないと思って」

笑いをない交ぜにしながらの言葉に、レイトはむっとしたような表情を浮かべる。その表情はどこか、情けなさを漂わせたものでもあった。

その腕には、両腕で抱えても余るほどの花束があった。

城の周辺に咲いている花を、適当に集めてきたものだろう。白や薄紅といった色彩の、地味な花がほとんどだった。それでもこれだけの花を集めてくるのには、季節も考えればかなり苦労したに違いない。

ぶつくさと文句を言いながら、真剣に花を探して回るレイトの姿が目に見えよう。

「つたく、こんなもんどろする気だよ……」

口をへの字にしたレイトの手から、持てるだけの花をティアは受け取った。

その顔に浮かぶ笑みが消えないのは、そうやって文句を言いながらも両手に余るほどの花を集めてきた、レイトの不器用な優しさが心に暖かかったためだった。

（案外、集めてるうちに夢中になってこの量……って気もするが）

くすくすと笑い続けるティアを、レイトはやや複雑な顔つきで眺めやった。

沈んだ顔でいるよりは、笑顔でいたくれたほうがありがたいが――
――ここまで笑われると馬鹿にされているようで、どうにも素直には喜べない。

（第一、こいつが泣こうが笑おうが……別に俺には関係のない話じゃねえか）

そう思いながらも、なぜか口に出して抗議する気にはなれなかった。

そんなレイトに背中を向けると、ティアは露台の端へと歩み寄っていった。崖に面した露台には、ぐるりと腰の高さほどの手すりがついている。というよりも、下の部屋の壁になる部分が、そのまま露台を取り囲む格好となっていた。

そこにティアがひよいと乗ろうとするのを見て、レイトは慌てたように言った。

「おい、危ない——！」

「大丈夫だ。落ちそうになったら、捕まえてくれ」

両手のふさがった不自由な状態で、果敢に壁に挑みながらティアは言い返す。

レイトはあぜんとその様子を見ていたが、やがて小さなため息を吐くと残った花を脇に抱え直し、ティアの衣服の背中をつかんだ。

ぐいと腕に力を込めると、ティアの小さな身体はなんなく持ち上がる。

「わっ」

「ほら、落ちんじゃねえぞ。いつそのままつかんでおくか、これ」

「お前な……」

猫の子じゃあるまいし、とレイトを睨んでからティアはふっと口元をゆるませる。

「だが——ありがとう」

途端にきまり悪げな表情になって、視線を泳がせるレイトをティアは微笑を残した瞳で見つめやった。

レイトの手は、いつでも服をつかめる位置から動いてはいなかったのだ。

（素直じゃないな、こいつも……）

じわりと暖かいものが胸に広がるのを感じながら、ティアは内心で呟く。

もつとも、それは自分もいい勝負だった。その気持ちを嬉しく思う反面、面と向かって感謝の言葉を伝えるのは照れくさく感じる。せいぜい、先程のように他のことにかこつけて礼を言うのが精一杯だった。

小さく笑って、ティアは露台の外側へ腕を突き出す。半分身を乗り出すような格好になったため、レイトが慌てて長衣の背中を再びつかんだ。

ティアの手から、抱えていた花が投げ出されたのはその瞬間だった。

「あ……！」

崖下に向かつて、吸い込まれていくように落ちていく花をレイトは呆然と見やる。ティアに戻された視線には、抗議の色が含まれていた。

「おい、いったい……」

しかしその言葉は、半ばで途切れた。

深くうつむいて瞑目し、祈りを捧げているティアの顔が目に入っただけだった。同時にレイトは、花を集めてきて欲しいというティアの言葉の意味を理解した。

それは、死者へと手向けるためのもの——献花だったのだ。

言葉もなく見つめるレイトの前で、閉じた目を開くとティアは微笑して言った。

「さて、そんなに余ってしまったのなら仕方ない——地下の叔父上がたにも分けてやるとしようか。匂い消しにもなるだろうし」

レキシアに惨殺された人々の死体は、あり合わせの布をかけただけで地下の部屋に放置してある。

その言葉を聞いて、レイトはわずかに目を見張った。

ティアの顔に浮かんでいる表情から、まぎれもなく本気の言葉であるのを見て取ると、彼は露台の端につかつかと歩み寄って抱えていた花を残らず投げ落とした。

「……おい」

「別にいいだろ、そんなもん」

やや無然とした面持ちで、レイトはむっとした顔のティアに言葉を投げる。

「祈ってやるだけなら、ここからでもかまわないだろ」

小さくまばたきをしてから、ティアはため息混じりの笑みを浮かべて再び目を閉じる。その横顔を、レイトは複雑な表情で眺めた。

自分を殺そうとした相手に、花を手向けてやろうというティアの精神の有り様は正直、彼には理解できなかった。

しかもそれは、ティアの肉親の——親しい人々の命を奪った相手だ。

だが、理解はできなくとも、死者は死者として平等に敬意を表すというティアの考え方は、決して不快なものではなかった。

自分自身も本来なら、そうやって弔われる側の存在だからこそ――

「……………」

そんなレイトの内心を、その表情からティアも察していた。

地下に眠る人々を、恨んでいないと言えば嘘になる。もしも彼らが生きて目の前にいたら、自分は殺意と憎しみを押さえきることができただろうか。結果としてレキシアが手を下したが、あるいは自分がそれをやっていた可能性も否定しきれない。

しかし——すべては仮定の話だった。

彼らはもうこの世にはおらず、彼らの罪を問うこともできない。

もう二度とあのようなことが起こらないように、彼らの罪を明確にしておく必要はあったが——それはもう彼らにはなんの関係もないことだった。

死者は死者として、ただ眠り続けるのみ。

彼らはもう二度と戻ってこない——彼らが奪った命が、戻ってこないのと同じように。

息を吐いて、ティアは静かに目を開いた。その視界の中には、もう一輪の花も残ってはいなかった。

いや——たった一輪だけ、崖の縁に生えた木に引っかけた、震えている白い花の姿が見えた。

吹きつける風が目にしみたように、ほんのわずかティアは目を細めた。

彼らの罪を、一生許すことはないだろう。たとえ死んだところで、犯した罪は決して消えはしない。

だが、彼らの死を当然だと思うこともできなかった。

この世に、死ぬべき人間などただの一人もいない。なぜなら、すべての命はいつか必ず失われるのだから。

善き者も悪しき者も、誰しもが平等に死を迎える。そこに違いがあるとするば、満ち足りた思いで死を迎えられるか否か程度のことだろう。それすらも、結局は死の寸前の話であって死したあとにはなにも残らない。

死者が残せるものは、生者の中に存在する思い出のみだった。

そして同時に、生者の思いは決して死者のもとへは届かない。どれだけ祈ろうと、死霊術によってその魂を呼び出そうと——それは

ただの架空の生であって、本当の死の領域にまで声を届けることはどんな優秀な死霊術師にもできない。

（だから――）

人にできるのは、ただ祈ることのみ。

死者のためにではなく、自分自身のために――その魂が安らかであることを、祈ることしかできない。

そうやって生きていくより他に、術はないのだ。いつか自分が、死者の列に加わるその日まで。

ティアの目の前で、崖下から吹き上がってきた風が白い花を揺らした。

それは木の枝を離れ、空高く舞い上がっていく。暗い空を背景に漂う一輪の花の姿は、白い蝶が飛び立ったようにも見えた。

ティアはその姿を、まばたきもせずに見上げた。

風にもてあそばれながら、次第に遠ざかっていく白い花はまるで親しい人たちからの、別れの挨拶のようにも思えた。

上下に回転しながら、崖下へと消えていく花をティアは目で追った。

崖下に薄く漂う靄の中へ、その花が完全に消えてしまつまでティアは視線を外そうとはしなかった。

それが完全に見えなくなつて、彼女はようやく背後に立つ人物に視線を向ける。

同時に、東の空の色がずいぶん薄くなっていることにも彼女は気づいた。

山の縁には、うつすらと紅色の線。それは空へと向かって次第に、黄色、白、ごく淡い緑を経て透きとおるような水色へと変わる。

空にまたたいていた星たちも、今や数えるほどしか存在しなかった。

それらをちらりと見やっってから、ティアは肩越しにレイトを見やっ
って笑った。

「……戻ろっか」

応えたのは、肩をすくめるような――だが暖かい微笑だった。

露台に降り立とうとするティアにレイトは手を貸し、二人並んで室内へと戻っていく。誰もいなくなった露台を、夜明けの光が朱く染めたのはそれから半刻もしないうちのことだった。

エピソード2 死者たちは暁の空に舞う（後書き）

これで完結です。最後まで読み続けて下さった皆様方に、心よりお礼を申し上げます。

活動報告にあとがきめいた駄文を載せておりますので、もし興味が
おありでしたらそちらのほうもご覧下さい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9426q/>

死者たちは暁の空に舞う

2011年3月21日23時52分発行